



室蘭工業大学研究報告. 文科編 第10巻第3号 全1冊

メタデータ	<p>言語: eng</p> <p>出版者: 室蘭工業大学</p> <p>公開日: 2014-05-15</p> <p>キーワード (Ja):</p> <p>キーワード (En):</p> <p>作成者:</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	http://hdl.handle.net/10258/2953

室蘭工業大学研究報告(文科編)第十卷第三号

正 誤 表

頁	誤	正
(249)	…Achievements_ Studien… in が脱落	…Achievements <u>in</u> Studies…

室 蘭 工 業 大 学

研 究 報 告

文 科 編

第 十 卷 第 三 号

昭和五十六年十一月

MEMOIRS OF THE MURORAN INSTITUTE OF TECHNOLOGY

Cultural Science

VOL.10 NO.3
Nov., 1981

MURORAN HOKKAIDO
J A P A N

Editing Committee

M. Yoshida	President	<i>Chairman of the Committee</i>
K. Okubo	Prof.	<i>Electrical Engineering</i>
M. Morita	Prof.	<i>Industrial Chemistry</i>
K. Sato	Asst. Prof.	<i>Mineral Resources Engineering</i>
H. Kondo	Prof.	<i>Civil Engineering</i>
K. Okuda	Prof.	<i>Mechanical Engineering</i>
T. Tachikawa	Prof.	<i>Metallurgical Engineering</i>
T. Takeuchi	Prof.	<i>Chemical Engineering</i>
K. Kikuchi	Prof.	<i>Industrial Mechanical Engineering</i>
K. Izumi	Prof.	<i>Architecture and Building Engineering</i>
S. Hara	Prof.	<i>Electronic Engineering</i>
I. Seino	Prof.	<i>Literature</i>
K. Fujikawa	Prof.	<i>Science</i>
K. Suzuki	Prof.	<i>Applied Material Science</i>
M. Tsukahara	Prof.	<i>Mechanical Engineering</i> <i>(Evening Session)</i>
H. Kanoh	Prof.	<i>Chief Librarian</i>

All communications regarding the memoirs should be addressed to the chairman of the committee.

These publications are issued at irregular intervals. They consist of two parts, Science and Engineering and Cultural Science. When they amount to four numbers, they form one volume.

室蘭工業大学研究報告 第 10 卷 第 3 号

文 科 編

目 次

現代自由論の研究 (一)	白 石 正 夫	3 (1)225
that 節に先行する名詞の限定辞と名詞の形態について 東	毅	3 (29)253
Romeo と Juliet について	狐 野 利 久	3 (107)331
Blake の <i>The Gates of Paradise</i> について	狐 野 利 久	3 (139)363
学生 (室蘭工業大学) の健康に関する事象と体力及び運動能力の傾向とそれぞ れの年次経過に伴う変化についての研究	清 野 市 治 小 成 英 寿 谷 口 公 二	3 (179)403
教官学術研究発表集録 (昭55. 4 . 1 ~56. 3 . 31)		3 (247)471

現代自由論の研究(一)

白石 正 夫

A Study on Liberty

Masao Shiraishi

Abstract

Capitalism or socialism? This alternative is one of the greatest problems that we should solve today. Which can give more liberties to us? This is one of the greatest questions that we must answer, when we choose between them. When we, then, ask what liberty is, we are surprised to find too many answers to the question. Especially, the West and the East are very different from each other concerning the meaning of liberty.

This paper takes up some theories on liberty, criticizes the defects of them and tries to seek one measure of liberty with which we can measure the quantity of liberties on both sides, the West and the East.

はじめに

資本主義か社会主義か。これは現代人が否応なく選択を迫られている最大の課題の一つである。どちらが人々により多くの自由を保障しうるか。これが、その選択に際して、判断の基準とすべき最大の問いの一つである。

人類の歴史は自由拡大の歴史である、と言われる。この場合自由とは、人間にとって価値あるもの、時間と空間とを超越して、すべての人間が希求して止まぬものと看做されているのである。この所謂「大文字で書かれた自由」⁽¹⁾を保障するのは、いずれの社会かを判断すべく、人々は問う。自由とは何か。だが、その解答の余りの多様さに、人々は驚き、とまどう。

J・J・O'Rourke が言う如く、人間の自由という概念ほど、東西間で意味の異なるものはないであろう⁽²⁾。それゆえ、資本主義社会は自由社会だと主張され、また社会主義社会こそ真の自由を保障すると論じられる時、必ずしも、それらの主張は不当だと難することができないのである。なぜなら、それらの議論はいずれも、それなりの自由の定義を前提として語られているからである。しかし、これでは我々が直面している問題の解決に役立たない。我々が必要としているのは、二つのものを計る一つの秤である。資本主義社会と社会主義社会との両方に当てはめることができる、自由の一つの尺度である。そのためには、様々な自由を、それらが自由の名に値する限りにおいて、互いに関連づけつつ、一つの構成にまとめる必要がある。

小論は、若干の論者の自由論を取り上げ、その欠陥を指摘しつつ、あるべき自由論、統一的な自由の尺度を探索しようと試みる。M・Cranston の言うように、自由という語は歓喜語であり、称賛語である⁽³⁾。正に人間にとって価値あるものとしての自由を守り発展させるためには、また上述の判断を曇りなき目で見下すためには、様々な自由論の真偽を見分けることができないなければならない。Cranston は、自由の意味の分明化を目的として、言語分析からその著作を始めながら、自由主義と資本主義とを等号で結ぶような記述を行なっている⁽⁴⁾。自由が称賛語であることを利用して、自由ならざるものを人々に説得し、受容させようとする。このような不分明化から、自由を救い出すこと、これが小論の意図するところである。

(一) 消極的自由と積極的自由

I・Berlin は、政治的自由を消極的自由と積極的自由とに区分する⁽⁵⁾。消極的自由とは、他人の故意の干渉を受けないでいたいことができる自由であり、積極的自由とは、自分で考え、自分で決定し、自分で行為し、その選択には責任をとる存在でありたいという願望からくる、自己支配としての自由である、と定義づける。そして彼は、前者を「からの自由」、即ち個人の自由、後者を「へ

の自由」,即ちデモクラシーと言い換え、この間には必然的関連はなく、その相違は大変なものであって、今日のイデオロギー対立は、ここから生じてきているのだと論ずる。この二つの自由のうち、彼は、消極的自由の方を、より真実であり人間味がある理想だとして、人々に推奨する。なぜなら、積極的自由、即ちデモクラシーは消極的自由を侵害することがあるからというだけではなく、自己支配としての自由は、魔術的変換によって、強制を自由と言いくるめる点にまで行き着くからだ、というのである⁽⁶⁾。

Berlin の言う消極的自由が、より真実で人間味のある理想かどうかはともかく、他人や権力の干渉からの自由⁽⁷⁾は、どの時代どの社会でも、人々が求め続けて止まなかったし、今も求め続けている自由として、人間が人間であるために不可欠の自由として、大文字で書かれた自由の中に、しっかりと位置づけられねばならないと考える。なぜなら、奴隷制社会以来、人間は自己の生存と活動を脅かす、自己のものではない、自己と対立する権力からの解放を求めて闘ってきたのであり、人類の歴史は、この意味での自由拡大の歴史と言うこともできるからである。また近代市民社会の出発に当たって要求された、国家権力からの自由も、商品経済の発展と絶対主義国家の圧制とを背景として出てきた新興ブルジョアジーのイデオロギーであったとしても、やはりそれは、絶対王政の支配下で苦しむ被支配人民すべての要求であったのであり、現代においても、資本主義国と社会主義国とを問わず、自分の意のままにならない、自分の利益と対立する権力に対する闘いは、到る所で行なわれているのだからである⁽⁸⁾。従って、J・N・Dawydow のように、「からの自由」を抽象的・形式的なものだとし、この自由を「への自由」の問題に転化させて済ませてしまったり⁽⁹⁾、H・Steininger の如くに、資本主義国家における政治的自由を形式的なものにすぎないと、その否定的側面のみを指摘し、その「形式」自体が誰によって、どのようにして獲得されてきたのかという、その肯定的側面を一顧だにしない主張⁽¹⁰⁾は斥けられねばならない。また Kaminsky のように、このような自由は資本主義社会に特有の自由であって、社会主義社会はそういう自由を含みえないとする⁽¹¹⁾のは誤りであると言わねばならない。即ち、他人や権力から干渉されたくない、仮

にそれが真理であり、善や幸福であっても、強制はされたくないという願いは、歴史的にも日常生活の上でも経験的に確認することができ人間の普遍的願望なのであって、この意味での自由は普遍的自由としての価値を持つものと看做さなければならないのである。

Cranston も、自由を「からの自由」、即ち束縛の不在と解し、この自由を「心から愛している」⁽¹²⁾。そして彼は、この自由はイングランドの自由主義者にとっては国家の束縛からの自由を意味する、と指摘している⁽¹³⁾。なお、Berlin が自由を消極的と積極的とに区分するのに対して、Cranston はこのような区別は無意味だとする。Cranston は、積極的自由、即ち「への自由」も、結局のところ何かをするのに束縛がないということ、つまり束縛の不在、即ち束縛「からの自由」を意味するからであるとする⁽¹⁴⁾。自由についての一つの秤を求めようとする小論の目的からして、筆者は Cranston を支持したい(但し、日本語の持つ意味から言って、束縛の不在というよりは、障害の不在とするのがよいと考える。束縛は障害の一種。問題はどんな障害からの自由かという点である。この点は後に詳述したい)。なぜなら、その方が単純明快だからという理由だけではなく、人間は誰であれ、正に自分で考え、自分で決定し、自分で行いたいという願望を抱く(自由よりも強制を好む人間の問題については後述)がゆえに、他人や権力の干渉、強制、束縛からの自由を求めるのだからである。しかも、Dawydow⁽¹⁵⁾や中野徹三氏⁽¹⁶⁾、そしてまた Cranston⁽¹⁷⁾も指摘するとおり、人間は自らの内的欲求によって選択した価値を実現しようとして、その障害となるものからの自由を求めるのである。だからこそ、Berlin 自身が言うように、自由は人間にとって不可欠の価値の一つなのである⁽¹⁸⁾。Berlin は「からの自由」と不可分の関係にあるものを、積極的自由として定義し直し、これと消極的自由とは論理的には「完全に分離できない」⁽¹⁹⁾と認めながらも、積極的自由は歴史的には消極的自由と分離し、強制を自由と同一視する地点にまで墮落するからという理由で、真実味と人間味が少なく、支持しがたいと論ずる。しかもその際、彼が積極的自由として例示した、自己支配としての自由とデモクラシーとを一緒に否定してしまうのである⁽²⁰⁾。ともあれ、自由を消極的と積極的

とに区分することは、自由を人間の主体性、自律性から切り離してしまうことで、消極的自由自体をも無内容なものにしてしまう結果となり、支持しがたいのである⁽²¹⁾。

(二) 自由と実現可能性

前節で、我々は「からの自由」を人間にとって普遍的価値をもつ自由だと位置づけた。そして、それは政治的意味では、Cranston がイングランドの自由主義として指摘するように、なによりもまず国家権力からの自由だと確認できよう。ところが、これを確認するや否や、直ちに次の問題が生ずる。それは、Berlin 及び Cranston も認めざるを得ない問題である。彼等はこの問題に言及し、その扱いに苦慮しているが、結局のところこれを解決することができない。なぜ解決できないのか。それは彼等の自由論が、その問題を解決する鍵を、自由とは別のものとして切り離してしまっているからである。ではその問題とは何か。まず Berlin と Cranston 自身にその問題を語らせよう。Berlin は言う、即ち「狼にとっての自由は、羊にとってしばしば死を意味した。……無制限のレッセ・フェールの害悪は、消極的自由や基本的人権（これは抑圧者に対する壁としてつねに消極的な観念である）、表現や結社の自由を含めた基本的人権の、野蛮な侵害になってしまうのだ」⁽²²⁾。また Cranston はこう語る、即ち「雇用者は……正規の政府よりも、より以上の権力を行使し、より多くの束縛をひとびとに加え、より余すところなくひとびとを束縛し得る」、「大手雇用者は、政府の束縛を受けず、そのおかげで雇用者自身は〔労働者を〕束縛し得る」⁽²³⁾と。つまりこの問題は、突き詰めれば、第一に、飢えた人間にとって、国家権力からの自由はどんな意味があるのか、ということであり、第二に、単なる国家権力からの自由だけでは、社会的権力のほしいままの支配を結果するばかりか、(Macpherson が言うように、国家権力は社会的権力関係を維持する任務をもつ⁽²⁴⁾のだから) 国家権力の社会的弱者に対する独裁を生み出し、大多数の人々の国家権力からの自由をも侵害することになる、という問題なのである。以下

本節では第一の問題を、次節で第二の問題を論ずる。

自由とは、人間が自らの内的欲求によって選択した価値を実現しようとする、その過程に存在する様々な障害からの自由を意味する。だとするならば、人間の自由にとっての最初の障害となるものは、欠乏であろう。あるいは次のように言うべきであろうか。即ち、欠乏のため自分のやりたいことも思いつかないという状態は、自由の問題が発生する以前の問題、自由の前提の問題だと。しかし、人間が「人間」である証が、意識的に行為できるという点にあるとすれば、そのような欠乏状態は、「人間」の問題ではなく、従って未だ「人間」の自由の問題は生じないし、それゆえ自由の「前提」の問題も生じないと考えるべきだろう。自由が「人間」の問題であり、「人間」にとって一つの価値であるなら、それは「前提」として自由から切り離すべきではなかろう。即ち、欠乏のためにやりたいことも思いつかないという問題は、欠乏のためやりたいことができないという問題と、同じ問題として扱われねばならないし、欠乏は人間の自由の問題として位置づけられねばならないであろう。欠乏は人間の自由にとって障害である。欠乏という障害からの自由は、人間の自由の不可欠の一部分である。欠乏からの自由を人間の自由の不可分の一部と位置づけることの重要性は、次の事態からも指摘できる。即ち、絶対的欠乏（飢え）と相対的欠乏（その社会の生活水準からみて欠乏）とは、人々をして自由よりも強制を好ませる一因である。欠乏を恐れて、即ち「人間」ではなくなることを恐れて、人々は大樹（国家権力、社会的権力や他人）の陰に寄る。このような状態が長年にわたって続くならば、人々は自ら考え、自ら行動することが不可能となり、自律的に思考し、選択し、実行することなど思いつきもしなくなるであろう。Berlinは「からの自由」を強調しながら、この人間の自由の構造の最初に位置すると考えられる、欠乏という障害を、自由の条件の問題として、自由から切り離す。彼は言う、「自由と自由の条件とを区別すること、このことは重要である。もし、ある人があまりにも貧乏・無知・虚弱であって自分の法的権利を利用しえないとすれば、この権利によって彼に与えられる自由が彼にとっては無意味であるとしても、この自由はそのことによってなくなってしまうわけではない」⁽²⁵⁾と。

しかし、他人から強制されずに、自分で考え行動する自由が人間にとって不可欠の価値であるなら、上述したように、欠乏は自由の条件の問題ではなく、自由の問題として、即ち欠乏からの自由としてとらえねばならない。それを自由の条件として切り離すがゆえに「無意味な自由」について語らねばならないのである。欠乏のため自律的に思考したり選択したりできない人間や、自分の選択した価値を実行に移すことができず、また実現できない人間であっても、依然として彼は自由だと言う。このような自由は、単に空しく無意味だというだけでなく、自由の名に値しないと言うべきであろう。なるほど、勝田吉太郎氏の言うように、「消極的・防衛的自由の価値を貶下して専ら『…への自由』の樹立だけに努めるならば、その結果は、自由なき社会主義や全体主義的福祉国家といった事態の出現へと導くおそれがある」⁽²⁶⁾、また Berlin も論ずるように、「自由が真の価値となりうるような社会的・経済的諸条件をつくり出そうと熱中するあまり、自由それ自体が忘れ去られがちなのである」⁽²⁷⁾。確かにこのことも事実であろう。だがこの点では、全く逆の言い方も可能である。即ち、所謂「自由の条件」の価値を貶下して専ら「からの自由」の樹立だけに努めるならば、自由なき資本主義や全体主義的搾取国家の出現へと導くおそれがある、と。思うにこうしたことは、自由と「自由の条件」とを分離したり、優先順位をつけたりすることによって生ずるのではなかろうか。一方を優先すれば、他方が忘れ去られる。だがその結果は、優先された方も、無意味となるか、不十分となる。即ち「自由の条件」を優先すれば、「からの自由」が忘れられる。だが「からの自由」が忘れ去られた抑圧的社会で、「自由の条件」は満たされるであろうか。あるいはまた、それは十分な発展を遂げることができるか。否である⁽²⁸⁾。「からの自由」を優先すれば、「自由の条件」が忘れられる。「自由の条件」が忘れられた欠乏社会で、「からの自由」は保障されるであろうか。否である⁽²⁹⁾。要するに、自由と「自由の条件」とは分離できず、優先順位をつけてはならないのである。どちらを優先しても、自由は空しいものとなり、政治的には独裁を生み出そう。

ところで、欠乏からの自由は、いわば人間としての最小限であろう。人間の

自由の問題は、今始まったばかりである。それでは人間の自由の最大限は何か。人間が内的に意欲したことが、何でもできる自由である。人間が自由を求めるのは、自己の願望が何らかの障害、精神的・物質的・社会的・政治的障害によって達成できないからである。人間の欲望水準は、社会の発展とともに高くなり、様々な障害を不自由として意識し、それらからの自由を求める。このことの論理的帰結が、なんでもできる自由という、いわば全的人間の理想ということになる。もちろんこの自由の程度は、生産力の発展の程度と、配分、即ち社会的、政治的人間関係とによって、根本的に規定されている。従って全的人間の理想が実現するのは、この点での障害が一掃されるような、はるか遠い未来社会だということになる。それまでは我々は、このような自由について語ることが許されないのであろうか。そうではあるまい。一回限りの人生を生きる人間にとって、その時代その社会で可能な最大限の自由が、人生を生きるに値するものとするためには必要なのである。それが、その時その社会で除去可能なあらゆる障害から自由に、なんでもできる自由だと言うことができよう。人間の自由にとって、内的決定を実行できる、実現できるということが、この場合大切である。内的願望だけに自由を留めることは、単なる夢をみる自由にすぎないであろう。もちろんこの内面的自由自体は、他人や権力から自由に、自律的に思考する自由として必要不可欠であるが、人間の自由はこの局面に尽きるものではない。実行に移すことができ、実現することができる（前述のとおり、これは社会発展のその段階が許す最大限という制約がある）という局面が、次に存在しなければならないのである。この「できる (can)」ということが、人間の自由の全局面から抜かされてはならない。Cranston は、英語の意味分析から、「われわれ英語国民は、あれこれのことをなす自由を或るひとが持つ場合、そのことを示すには、‘may’という言葉を使い‘can’という語は使わぬ」、自由は能力がなければ、さほど意味はないが、そうだとすると、両方の表現の意味が同一だとは言えない、と論ずる⁽³⁰⁾。なるほど何かをする能力があっても、そのことが法律で禁じられていれば、自由ではない。だが Cranston も認めるように、能力がなければ自由は無意味となる。自由という語と能力という語とは、

それぞれ表現しようとする意味は異なる。だが Cranston 自身が述べたとおり、自由は主体的意欲と不可分である。主体的決定を実行し、実現しようという意欲と切り離すことができないのである。意欲はあっても、能力という点で障害があれば、人間の自由の全局面からみて、不自由だということにならざるをえない⁽³¹⁾。要するに、人間の自由にとっては、‘can’の契機を含まねば、‘may’は無意味となり、無意味な自由を人間の自由と語ることはできないのである。自由と能力とは切り離すことができない。それらを切り離すことは、意欲の実行と実現の契機を含みえないのであるから、人間の自由を主体的決定の局面だけに限定してしまうことを意味する。あるいは、主体的決定は自主的に物事を判断する精神的能力を必要とするのであるから、限定されたこの局面での自由も否定する結果となろう。Cranston は語る、即ち「束縛を受けぬとき不安であるひとびとがいかに多数いようと、それを上回るもっと多数のひとびとが、……自由を束縛の不在と解し、そのような自由を好み、それどころか、そのような自由を心から愛し、死の瞬間までそのような自由をいつくしんでいる」⁽³²⁾。だが正に所謂「自由社会」が、自由に不安をおぼえる人々を大量生産しているのは皮肉である。E・Fromm は言う、「自由は近代人に独立と合理性とを与えたが、一方個人を孤独におとし入れ、そのため個人を不安な無力なものにした」⁽³³⁾。なぜそこでの自由が不安なのか。É・Ayns el は答える、そこでの自由が「空しい形式的な自律、即ち孤立した人々にとっての単なる選択可能性と同一視」されるような自由だからだと⁽³⁴⁾。「人はこの空しい自律の下では、寄る辺なくとまどう。そして実際にそこから逃げ出そうとする。とりわけ、社会が逃走のメカニズムを組織している場合は。」⁽³⁵⁾つまり「自由社会」の自由は、主体的決定の自律性のみに限定された自由、条件や能力から切り離された自由であり、その社会は、意欲はあっても、それが実現できない人々が「自由」(なぜなら、Berlin や Cranston に言わせれば、ある人に条件や能力が欠如していても、依然としてその人は自由なのだから)に生きることができる社会なのである。意欲を実現できるのは、条件や能力(「自由社会」で、これらの最大最強のものは、資力、経済力である)のある人々だけ、それらが欠如した人々は自由に不安をおぼえ

る。日々努力して生きる人々にとって、意欲が実現できることは死活的問題である。それが実現できない不安は、生きることへの不安である。このような状態の継続は、人々に意欲自体を、そして更に意欲を抱く能力を失わせるであろう(日本で、中流意識を抱く人々が圧倒的多数であることの原因はこれか)。加えて、条件と能力のある人々による社会支配、政治支配は、一方においては、生きることへの不安を背景として、「自由」を保障しつつも人々を強制、束縛し、他方においては、真偽とりまぜての情報過多と、これを通じての情報操作、更には競争主義・能力主義教育・つめ込み教育によって、人々の自主的判断力を喪失せしめ、あるいは形成不全に至らしめる。これが、所謂他人志向型人間、現状追認主義・既存体制依存主義人間の大量生産のメカニズムである。このような人間は、自由に不安を感じて、そこから逃走するなどということは、もはや思いつきもしないであろう。これは、Ancsel が指摘する「人々が自由の欠如を意識しないような、不自由の状態」⁽³⁶⁾の一つと言えよう。なぜなら、人間の自由が始まる第一の局面、即ち意志の形成、内的意欲、主体的決定がすでに侵害されているからである。ここでは自由の問題は生じない。自由の問題が生じないところで、「自由」と「自由社会」について語り、これを愛し、人々に推奨することほど滑稽なことがあるのか。ともあれ条件や能力、即ち実現可能性から切り離された自由について語ることは、欺瞞であり、多くの人々は、その切り離された自由さえも喪失する、という結果をもたらそう。

(三) 自由と平等及び民主主義

我々は、他人や権力からの自由が、人間にとって不可欠の普遍的価値をもつ自由だと考えた。その際、自由とその条件や能力とは不可分のものだと論じた。なぜなら、条件や能力の欠如は、人間が主体的決定を実行し、実現する上で、障害となるものだからであった。これらの障害からの自由が、人間の自由には欠かすことができない。ところで、以上の如き自由が、人間が人間であるため

に必要なものなら、それが人間の尊厳にとって不可欠であるならば、それは一部の人々だけにではなく、すべての人間に保障されねばならないであろう。即ち、自由は自由という点での平等を要求する。そうだとするならば、人間にとっては自由が不可欠の価値だとする理論は、Macphersonの言う「非対立性の仮定」⁽³⁷⁾を含まなければならない。なぜなら、各人は等しく自由だと言ってみても、ある個人又は集団の自由な活動が、他の個人の自由な行動を侵害し、否定する結果をもたらすとすれば、侵害された者にとっては、自由は何の意味もなくなるからである。従って、人間にとって意味のある自由とは、他人に対して障害とならないような価値を選択し実行し実現する自由、他人の自由と対立しない自由だけだと言わねばならない。対立的な価値の選択と実行は、制限されなければならない。それは他の多くの人々にとって障害となるものだからである。勝田氏は論ずる、即ち「平等の人為的実現が自由と調和しえないことは、自明であろう。自然一つまり、人為的干渉の欠如の状態一は、決して平等ではないのである。もしも平野をいたる処に作り出そうとするならば、人間が山を崩し、谷を埋める作業をしなければならない。平等の樹立は、このように常に継続的な力の干渉を前提とする。しかしそれは、原理的に自由と矛盾するであろう。自由と平等とは、もともと本質的に対立する観念であるといわねばならない」⁽³⁸⁾。しかし、資本主義社会の政治・社会諸制度は、人為的干渉の欠如状態であろうか。所謂「自由社会」、「自由世界」の維持のために、継続的な力の干渉を必要としないであろうか。ともあれ勝田氏がここで、平等と原理的に対立すると論ずる自由は、他の人々にとって障害となるような対立的な力の自由な行使であろう。人間の自由にとって障害となる対立的力とは何だろうか。その最大のものは国家権力であろう。だからこそ、国家権力からの自由は、人間の自由に欠かすことができない。だがそれだけではない。それだけでは不十分である。なぜなら、国家権力から自由に活動する社会的権力、就中経済権力、これが近代以降現代に至るまで、人間の自由にとっての巨大な障害となってきたからである。社会的権力は、国家権力から自由に活動した結果、国家権力そのものを我がものとするこ

る。あるいは未だ国家権力からの自由を必要としているとすれば、民衆の下からの要求を反映して、民主主義的性格をもつことを余儀無くされた政策（例えば、普通選挙制度、労働諸法、社会福祉政策等）、その部分からの自由だけであろう。こうした事態、即ち国家権力と社会的権力とが結合した巨大な権力、これが圧倒的障害として、大多数の人々にのしかかっている、これが現代社会の特徴であろう。そうだとすれば現代の自由論は、単に国家権力からの自由を問題にするだけでは、明らかに不十分なのであって、社会的権力からの自由をも問題にしなければならないのである。Berlin も Cranston も、この問題に気づいている（注(22), (23)で引用した部分。勝田氏が社会的権力からの自由について語る場合、それは経済権力ではなく、「デモスの社会・経済的欲求と水平化的压力」⁽³⁹⁾である）、だが解決はしていない。ただ、それでも国家権力からの自由は大切だと言っているだけである。社会的権力からの自由や自由という点での平等を確保しようとすれば、社会的権力のほしいままの行使を制限する国家権力の民主主義的性格が必要となる。国家権力や社会的権力が自分達の自由の障害となっている人々にとっては、国家権力からの自由を確保するためにも、また国家権力によって社会的権力を統制するためにも、国家権力を我がものとせねばならないであろう。即ち民主主義が不可欠なのである。Berlin は「個人の自由とデモクラシーによる統治とのあいだにはなにも必然的な連関があるわけではない。

『だれがわたしを統治するか』との問いに対する答えは、『政府がどれほどわたしに干渉するか』という問いとは、論理的にはっきり区別される」と論じ、自由（消極的）は専制政治とも両立しうるし、デモクラシーは自由を抑圧することもありうる、と述べている⁽⁴⁰⁾。だが正に人は「統制の範囲」（Berlin の言う個人の自由）を確保するために、「統制の源泉」（Berlin の言うデモクラシー）を問うのではなからうか。デモクラシーは自由を侵害することもあるのだから、それは自由と対立する、このようにデモクラシーを拒否する場合、デモクラシーを単に形式的制度としてのみとらえているのではなからうか。勝田氏は定義づける、即ち「民主主義は、国家のなかへ人民の権力を導入しようとする政治技術である」⁽⁴¹⁾。従って、国民の多数の支持をえて権力の座に就いた A・Hitler

の全体主義体制も、民主主義的と言いうるとされる⁽⁴²⁾。しかし人々は、単なる形式的制度、政治技術を求めて、デモクラシーを闘いとしてきたのだろうか。Macpherson や宮田光雄氏が指摘するように、デモクラシーは単なる形式以上のもの、あるいはその政治制度によって達成しようとする目的・内容をもっている⁽⁴³⁾。それが基本的人権、即ち諸自由である。なるほど多数決によってファシズムを成立させうるかもしれない（その多数の形成に、どれほどのテロやデマが必要かは問わないとして）し、民主主義的政治形態の国家権力も、基本的人権を侵害しうる。これは事実である。しかしこれらは、政治制度が民主主義的であることから論理必然的に生ずることとは言えない。むしろこれらは民主主義の目的を侵害していることによって、同時に形式としての民主主義をも損っている例と言わねばならない。つまり民主主義の内容を実現しない民主主義の形式は、民主主義的とは言えないのである。ここから導き出される課題は、民主主義の実質化・徹底化ではありえても、民主主義の否定や拒絶ではありえない。

国家権力からの自由とは、自己と対立する国家権力からの自由であろう。そのためには、国家権力を自己のものとする必要があるであり、同時に自己のものとなった国家権力が常に自己と一致するとはかぎらないのであるから、国家権力からの自由は依然として必要である。そのためにも社会的権力からの自由が不可欠であろう。なぜなら、国家権力からの自由の下で、即ち政治的・市民的自由の憲法的保障の下でも、実態としてのその自由の形骸化、社会的権力による強制及びイデオロギー支配によって、容易に社会的権力は国家権力と結合し、社会的権力の政治的独裁がもたらされるからである。更に付け加えれば、国家権力からの自由の論理的帰結は、国家権力のない状態ということになる。しかし、国家権力からの自由のみを強調し、自由の消極的観念を優先させる論者は、国家権力を自明のものとし、しかも誰が国家権力を握っているかは問わず、実際には社会的権力が国家権力であることを不問に付すのである。また彼等は平等を軽視し、民主主義を蔑視し、社会的権力からの自由については僅かにしか語らない。結局彼等の強調する自由、条件や能力、即ち実現可能性から

切り離された自由を愛することができるのは、社会的権力を有する人々、条件や能力に恵まれた人々だけであろう。Macpherson は端的に指摘する、それは「強者が市場の規則にしたがうことによって弱者を打ち負かす自由」⁽⁴⁴⁾だと。

(四) 自由と個人主義

近代の思想家たちが要求した自由は、国家権力と身分制度からの個人の自由であった。個人を解放すること（手段）によって、個人の自己実現と社会の発展（目的）とが同時に達成されると信じられた。だがそれは結果としてそうなるだろうという楽観的願望にすぎなかった⁽⁴⁵⁾。それゆえに歴史的現実の中では、その手段のみが追求され、目的は完全に手段の中に解消してしまった。その結果個人の自由は、「不平等競争に基礎を置いた弊害と悲慘の連続的過程」⁽⁴⁶⁾を通じて、一方では高い生産力と豊かな富をもたらし、同時に他方では経済的強者の社会的権力、政治権力を生み出し、弱者を強者の手段の地位に陥れることで、弱者の不自由・人間性の否定を伴ったのである。正に三浦氏が言うように、「各人が文字通り利己的に解放されたこの世界では、この原理的建前としての個人の自由と自立とは裏腹に、万人が競争相手からくる不気味な圧力と脅威に怯えなければなら」ず、「個人は自立した自由な主体どころか、一敗地にまみれて、他人の営為の機能的手段の一部」⁽⁴⁷⁾となってしまうのである。個人の自由という思想から出発しながら、それが現実を生み出したものは、それとは正反対のものであった。大多数の人々は、自分の内的欲求によって選択した価値を、日々努力して生涯かけて実現するといった風ではなく、自分と家族の生活の為に、必ずしも自己の内的欲求に合致しない仕事に生涯しばりつけられる。自分が人間らしさを、従って自由を感じられる時間と領域とは、その仕事を離れた時間、仕事とは別の、例えばささやかな趣味の領域でしかない。この個人主義的自由主義の社会、言い換えると、自己の利害に従っててんでんばらばらに行動する個人の寄せ集めとしての社会、三浦氏が言うところの「全体としての世界は、目的を欠く混沌に、したがって無意味に化す……、それに意味と目的を与え

るのは、それに利用的に臨む個々の主体の主観的思い付き以外ではない⁽⁴⁸⁾」、このような社会、ここでの自由は、強者と弱者とが競争する上で何の障害も存在しない、という意味での自由である。このような自由がもたらすものは、弱肉強食の法則とその帰結でしかありえない。この自由を最大限に保障するのが、「良い」社会、「自由社会」なのである。秩序は譲歩でしかなく、従って刑罰による脅迫がなければ維持されえない。強者は巨大な組織体へと成長し、弱者はこれに身を寄せる以外に生きる術を知らない。競争するのは、もはや個人と個人ではなく、巨大な組織体同士である。巨大な組織体を動かす動機、即ち利潤追求が、すべての人々の動機となってゆく。「お金」が人生の目的、生きがいの対象となり、人間を評価する唯一の尺度となる。社会の底辺に蠢く弱者たちの間では、巨大な組織体の「おこぼれ」にありつこうとする競争が激烈に行なわれる。このような社会には、社会の仕組み自体の中に道徳を生み出すものがない。道徳、即ち法律による強制がなくとも社会に秩序をもたらす規範であって、社会的共同性から自ずと生まれてくるものは、このように編成された社会からは生じえない。従ってここでは、金銭が、またしても人間関係を律する唯一の道徳とならざるをえない。あるいはここでは道徳は、この社会体制以外のところから、といっても事実としての社会の共同性（社会体制がどうあれ、人間は社会的共同的存在）を下敷にしつつ案出され、教育として、または宗教として持ち込まれねばならない。しかし、そのような道徳と現実とのあまりの乖離のゆえに、道徳はその機能を有効に果たしえない。自由を否定ないし減少させられた人々、ばらばらにされた諸個人、その上階級権力的に編成された社会で二重に（つまり諸個人間の関係と個人と国家権力との関係とにおいて）共同性を喪失した人々には、広く深く疎外感情が浸透しないではおかない。こうしてニヒリズムが人々の心を冒しはじめる。犯罪が増加する、とりわけ少年の犯罪と暴力が日常茶飯事となる。これに対処するに、道徳が役立たない以上、刑罰による脅迫、即ち重罰化と社会の隅々まで権力が監視する体制の整備以外にないであろう。こうして個人の自由は一層切り縮められる。

(五) 自由と共同主義

前節に描かれた状況を克服するには、どうすればよいのか。このような事態をもたらした原因は何であったか。それは、社会の共同性を無視して、社会を個人主義的に編成したこと、対立的な価値（物質的富）による、あるいはこれを目差しての自由競争に人々を駆り立てたこと、そしてその結果巨大な社会的権力が生み出され、社会的権力は必然的に国家権力と結合する、こうであった。そうであるとすれば、これの克服のためには、諸個人がそれぞれ自らの内的欲求にもとづいて選択した価値を実現する、このような自由を保障しながら、しかもなお、その結果が誰か他の諸個人が同様なことを為す上での障害とならない、このような社会が必要である。人間の尊厳にとって自由が不可欠であり、それゆえ万人が自由でなければならないのなら、このような社会が是非とも樹立されねばならないであろう。そのためには、事実としての社会の共同性を、社会の仕組みとして体制化することが必要である⁽⁴⁹⁾。社会全体としての目的（例えば、全社会成員の生活向上、あるいは成員諸個人の潜在的諸能力の全面的かつ完全なる発達等）をもった社会、その意味で個人と社会の利益が一致する社会、社会の仕組み自体から道徳が生み出されるような社会、個人が社会との関係の中で生きがいを見出し、生きる意味を知ることのできる社会、このような社会でなくてはならないであろう。G・Stiehler が指摘するように、このような構想の先駆がドイツ観念論である⁽⁵⁰⁾。だがそれは、私的所有をそのままにした共同主義の主張であった。私的所有の上に築かれた階級的編成の社会、ここでの共同主義はベテンであろう。それは、広範な諸個人の自由と人間性との否定の回復を意味しないばかりか、その一層の否定をもたらすファシズム的全体主義の利用する武器となろう。そうであるなら、我々の構想すべきは、共同所有にもとづく共同主義社会⁽⁵¹⁾でなければならない。

このような社会は、喜びと悲しを感じる主体、一回限りの生を生きる個人、神の子ではなく、天皇の赤子でもなく、また高遠な理想の単なる僕でもない、人類の一員としての個人の、他人や権力によって強制されずに価値を選択する

自由、それを実現しようとして行動する自由を前提としていなければならない。即ち、歴史的現実の中で否定されてしまった近代思想の理念を、はじめて普遍的に実現するものでなければならない。そうでなければ、近代から現代に至る歴史の反省の上に、社会を一步前進させるという現代人に課せられた任務を果たすことができないであろう。更にこの社会は、これまでに獲得されてきた、政府を形成し批判するための言論、思想、結社等の政治的自由を実質的に保障するのでなければ成功しえないであろう。なぜなら共同所有といっても未だ抽象的であって、個々人が共同所有の主体としての実質を確保するためには、政策決定、その実施、生産と分配の全過程に参加する自由、それらを批判する自由が必要だからである⁽⁵²⁾。それなしに共同社会が実現されたとしても、それは一時的なものにすぎず、やがて危機をむかえよう。これを要約すれば「政治的自由・民主主義なければ、共同主義なし」ということになる。藤田氏が指摘するように、生産力の発展水準との関係で、未だ分業という不平等が、従ってまた分配の点で不平等が残存し、「真の自由の実現という観点からみて矛盾的存在」としての国家⁽⁵³⁾が必要な段階にあっては、とりわけこのような自由が必要である。

この点で、Steininger は、搾取からの自由が達成されれば、分業が存続する条件の下でも、労働する人間は自由だと論じている⁽⁵⁴⁾。これは、G・Redlow が指摘する、自由の歴史的、具体的性格⁽⁵⁵⁾とも矛盾するばかりか、藤田氏が述べている「自由の制約の深い根源である分業の諸形態」⁽⁵⁶⁾、即ち「ある者が自らの内的欲求に適合的な労働に、他の者が生活の手段としてよぎなく選択する労働に従事しつづけるという不平等」⁽⁵⁷⁾の状態を無視したものと言わねばならない。また Stiehler は、社会主義社会では「討論と批判との自由は、発展のそのつどの最上の方法を見いだすための、そして客観的に与えられた諸課題を効果的に解決するための、どうしても必要な前提である」⁽⁵⁸⁾としつつも、「このことは反革命的な帝国主義的立場からの『批判の自由』への容認をなんら意味しない」⁽⁵⁹⁾し、「この自由を、反社会主義的諸勢力のイデオロギー的立場を公然と弁護する、かれらにとっての可能性と取り違えてはならない」⁽⁶⁰⁾、「反社会主義的、

反革命的な思想にとっての自由がありえないのは、そのような『自由』などは、労働者階級とその同盟者が犠牲的な闘争のなかで獲得した自由を危険にさらすものだからである」⁽⁶¹⁾と論じている。彼も批判の自由は「諸矛盾のもとで実現される」(諸矛盾とは、彼によれば、未熟な社会主義的態度の表現であって、その批判を抑えつけ、隠そうとすることから生ずる)のであるから、批判の権利を行使する場合、「おこりうる衝突を避けてはならない」と述べている⁽⁶²⁾。だが、あらかじめ反革命的、反社会主義的思想の自由は認められないとされている上に、例えば政府に対する批判が抑えつけられる場合に、たとえそれが未熟な社会主義的態度の表現であれなんであれ、「反革命」というレッテルをはられることがしばしば現実に行なわれている。このような事態は、建設的な批判であっても、それが時の政府に向けられるものである場合には、「衝突」、即ち「反社会主義」のレッテルをはられる危険性があるということを示しており、結局はそのような批判も封じられる結果をもたらすであろう。即ち社会発展に不可欠の自由な討論、自由な批判は、窒息してしまおう。このような論理は、ソ連等既存の社会主義国の憲法規定の解釈にもみられるであろう。即ち「労働者の利益に適合し、かつ社会主義制度を堅固にする目的で」市民に言論、出版、集会等の自由を保障する⁽⁶³⁾、というのがそれである。この規定が、藤田氏の指摘するように、「社会主義のもとでの自由がもつ客観的な社会的論理として、あるいは、自由を行使する権利主体の側の内的原理としての意味をもつ」⁽⁶⁴⁾ものと解釈されるのではなく、思想、表現の自由の権力的規制の根拠として解釈されているのである。

このような既存の社会主義諸国における政治的自由の欠如、その原因としていくつかの歴史的条件があげられる⁽⁶⁵⁾。そして、これらの条件が存在しないか、または少なければ、政治的自由を通しての社会主義への移行、及び成立した社会主義社会での政治的自由確保の展望があると語られる。しかし今日の条件の下でも、自国内で社会主義者の自由な政治活動を認めず、自国が平和的に社会主義に移行するのを許さないという決意を固めている諸勢力、他国といえども、社会主義に移行しようとする場合は、武力を用いてでもこれを阻止しようとし、

既存の社会主義国をも、願わくは消滅させたいと考える諸勢力、これら諸勢力が権力を掌握している諸国家の存在と現実の行動が、自由のうちに社会主義へ移行することを困難にし、既存の社会主義諸国における政治的自由を狭くする役割を果たしている現実も忘れられてはならない。しかし上述の如き思想・表現の自由を規制する論理は、歴史的諸条件や今日の客観的諸条件だけから形成されたのであろうか。自由そのものについての考え方に問題があるのではなからうか。Redlow は、F・Engels の周知の一節を引用した後、自由を次のように定義づける。即ち「自由とは、自然および社会の合法則性の科学的認識にもとづく人間の自然および社会的諸関係にたいする支配である」⁽⁶⁶⁾。なるほど、あれこれ願望したり、選択可能性が多様というだけでは、自由の主観的前提について語っているだけであり、夢の中での自由にすぎないかもしれない。行為する人間にとって、自己の願望や選択した価値が実現できなければ、その自由は空しい。だが、盲目的法則や無知との関係だけで自由をとらえ、これを現実の社会・政治過程に適用するとどうなるであろうか。法則が一旦認識されたかぎりは、すべての者が、つまり未だその認識に達していない者も、今は未だ認識したくない者も、それを認識し、それをもって対象の支配に携わることで、これがすべての人間が自由になる道だ。それを批判したり、批判のための結社をつくったりすることは、自由とは無縁であり、自由の否定にほかならない。ゆえに真理たる法則を強制することが、人間を自由にする。勢いこういうことにならないであろうか。これでは、Berlin や Cranston の批判に到底耐え得ないであろう。もちろん人間は、人間にとって思い通りにならない盲目的な自然や社会の作用を制御しようと努力してきた。つまり法則との関係で自由を獲得しようとしてきた。だがそれだけではない。自己を否定し強制する社会的権力、国家権力から解放され、自分の目的を自分で選択し、自分で実行したいと願い、餌をあてがわれる動物ではなく、何か他のもののための道具ではなく、人間の証明、個人の尊厳を求めて闘ってきた。こうした個人の尊厳という意識は、たとえばそれが真理であり、自分にとっての幸福であるかもしれないものであっても、他人や権力から強制される時には、断固としてそれを拒絶するという事態をも

生み出すのである⁽⁶⁷⁾。人間の価値選択そのものは、その時々社会において共通した傾向、一定の方向性があるのは当然であり、それはその社会の発展方向に沿ったものであろう。問題は、その共通価値以外のものを選択しようとする人々の自由である。しかも法則を認識し適用しようとする政府、あるいは他人、何らかの団体が無謬であるとは断言できず、その認識と適用を誤る場合もある（特に個々の政策決定において）ことを考慮するなら、更にまた法則の認識自体が発展するのであり、認識の発展は自由な雰囲気、自由な討論によって始めて達成されるのだという点を考えれば、次のような自由が是非とも保障されていなければならない。即ちその時々法則の認識と適用を強制されない自由、教育も受け、自分で学習もし、体験し、やがてそれを認識し、それが自分にとって価値のあることだとわかるようになるとしても、今は認識しない自由、それを批判する自由、認識を発展させ、政府や他の誰かが間違った時には正すための政治的自由、要するに強制からの個人の自由が必要なのである。換言すれば、一般に人間にとっては教育が必要であり、体験やその他の自己教育によって人間は変わりうるものだ、ということを前提としつつ、あるがままの個人の価値選択の自由が、いかなる社会においても必要な自由として位置づけられねばならないのである。

人間は社会的存在、社会によってこそ人間たりうるのである。即ち社会は事実としては共同主義社会である。それを個人主義的に編成したことで、個人にも社会にも悲劇的状况が生み出された。この上は諸個人の共同体としての社会の再建が必要であらう。人類の生存という見地からも、個人の福祉という観点からも、全体としての社会の目的が設定されねばならないし、そうした社会の存立と発展は、必ずや個人の自由、おおらかで伸びやかな自由の存在なしにははかられないであらう。このような社会は、名付けるとするならば、共同主義的自由主義の社会と呼ばれよう。

(六) 自由の尺度と構成

問題を整理しよう。人間の自由は、彼の主観的願望、主体的意欲と結びついている。なぜなら、意欲のないところでは、自由の問題は未だ生じえないから。従って人間の自由について語るためには、人間は自ら意欲し、価値を選択し、実行に移し、実現しようとする存在だ、ととらえることを前提とする。人間をこのように理解すれば、人間的意欲がない状態をも自由の問題としてとらえる必要が生じる。即ち意欲の欠如は、何らかの障害があって、意欲が形成できない状態として、つまり自由の問題としてとらえねばならないのである。すると自由の問題は、人間が最初に意欲を形成し、最後にそれを実現するという全行程において、彼がでくわす様々な障害、これを不自由と意識し、この障害からの解放を自由として認識する、このような形で生ずることになる。従って人間の自由とは、一義的に障害の不在、障害からの自由を意味すると言うことができる。なぜ障害からの自由を求めるのか。自分が意欲し選択した価値を実現するためである。このように考えれば、「自己の意欲し選択した価値の実現」を自由の「目的」と言うことができよう。そしてその目的が「障害の不在」という「形式」を通して実現されると考えられる。この「自己の意欲し選択した価値の実現」は、Macpherson が発展的自由⁽⁶⁸⁾と呼ぶもの、O'Rourke が、K・Marx の自由概念として指摘する人間学的自由概念、即ち自律的自己実現の自由⁽⁶⁹⁾、更にまた Berlin が自己支配として特徴づける積極的自由、これらと同じものである。しかしこれらの概念において「自由」と呼ばれているものは、いずれも、「何の障害もなく」、「自分の思い通りに」、「他人に妨げられずに」といった意味をもっているのであって、結局これらは、上述の「目的」を達成する上で障害がないということを表現しているだけなのである。問題は、障害が具体的に何であって、それらが障害となる当の対象が何かということである。そこで、人間が意欲を形成し、価値を選択し、実行に移し実現する、この全行程のそれぞれの局面が、どのような障害にでくわすのかを検討すればよいことになる。意欲の形成の局面が自由（思想の自由）であるためには、どのような障害が不

在であればよい。国家権力、社会的権力あるいは他の個人によって奴隷的抑圧を被っているならば、また非科学的教育や誤った情報を与えられているならば、更にまた非人間的な生活水準という障害があれば、自律的に人間的意欲を形成することはできないであろう。価値選択の局面（選択の自由）はどうか。意欲の局面で述べた障害物によって、価値選択を強制又は抑圧されれば、あるいはそのような障害がなくても、無知のために、意欲に適合した価値選択ができないことが考えられよう。この局面においては、それゆえ二つの自由について指摘することができる。即ち無知という障害からの自由、及び強制や抑圧からの自由である。無知にもとづく価値選択は、内的意欲の実現という点で一つの障害である。従って我々は無知からの自由について語ることができる。しかし次の場合はどうであろうか。強制や抑圧からは自由であるが、無知にもとづいて価値を選択し、それを実行に移し、実現しようと努力した。だが思い通りの結果が出なかった。この場合は不自由なのか、それとも自由なのか。筆者はこれも自由の一つと言うべきだと考える。つまり、この場合は、「自分で」価値を選択したかどうかの問題なのである。客観的に正しいと思われる選択であっても、つまり無知という障害からは自由な選択であっても、他人から強制されたものであれば、人間はこれを拒絶することがありうるからである。それゆえ自律的になされた選択であれば、無知にもとづくものであっても、人間の自由の一部としてとらえねばならない。その選択を実行に移し実現しようと努力する、その結果に対して人は責任を負うのである。自らの体験が人をして正しい選択に向かわせよう。Ancsel は、自律的選択というだけでは、未だ自由ではないとし、その選択の内容が必然性に合致していなければ、それは空しい自律であると述べ、必然性と一致した選択を自律的に行なうこと、これが自由だと論じている⁽⁷⁰⁾。だが、自律的に必然性と一致した選択を行なえるのは、どのような人間だろうか。彼はどのような認識の発展過程をたどったのであろうか。高度の科学的認識に達した人々のみが自由であって、そうでない他の人々は空しい自律の段階にとどまるというのでは、万人の自由について語っている我々にとって、全く空しいではないか。認識が自らの実践を通じて発展する、そのような認識だ

けが、人の確信となって、その人の行動のエネルギーになるのだとすれば、Ancselが言うところの「空しい自律」をも自由としてとらえねばならないのではないか。さもなくば、人々をして「自律的」に選択したと感じさせるように、人々を強制することが、人々を自由にする道だということになる。ここでもやはりあるがままの個人が、「自分で」選択することが、人間の自由にとっては大切なのである。もちろん、既述のとおり、他の人々の障害となるような価値を選択することは、自由のうちに含まれてはいない。最後に、選択した価値を実行に移し実現しようと努力する。この局面（行動の自由）ではどうか。ここでは、実行し実現するために好都合な物質的諸手段、社会的、政治的諸制度や諸慣習が欠如していたり、不都合な諸制度等が存在すれば、それらは障害となろう。これらの障害があれば不自由であり、目的を達成することができない。

人間が意欲を形成し、実現するに至る過程には様々な局面がある。またこのことが行なわれる人間活動には様々な分野(精神的、文化的、社会的、経済的、政治的諸活動)がある。これらの活動分野すべての全行程に障害がなければ、人間は完全に自由だということになる。これらの各分野、各局面の自由の合計が、その社会が自由な社会かどうか判断基準となろう。即ち、その社会がそれらの障害をどれだけ除去しているかどうかが、自由の尺度になる。但し、どこかの局面に障害があれば(例えば無知という障害)、もはや人間の自由については何も語りえないというわけではない。また、どれかある活動分野の一つの局面だけの自由(例えば、国家権力からの自由のみを取り出したり、あるいはまた条件や能力だけを取り上げたり)をもって、これが人間の自由のすべてであり、この自由の多少が自由社会かどうかの基準だとするのも誤りである。どのような障害が除去できるかは、その社会の生産力の発展水準と社会的、政治的人間関係によって規定されているのであるから、我々は、その社会が除去しうる障害の程度に応じて、自由を獲得できるわけである。また一局面だけの自由を取り出して、これが自由のすべてだとすることは、そもそも自由の目的を忘れた議論であって、あくまでそれは、その局面における部分的自由としてとらえねばならない。

我々は、自由の問題を、障害の不在という形式及びその目的に区分し、且つ各活動分野及び各局面における部分的自由というように整理した。ここで最後に問題となるのが、障害の除去はどのような方法で行なわれるのか、ということである。障害を除去しなければ、それからの自由について語ることができない。目的を実現する過程とは、正に障害を次々に除去してゆく過程である。自然と社会には、人間にとって障害となるものが、いくつも存在している。筆者は、その位置づけをめぐる盛んに論争が行なわれている、例の周知の Engels の自由概念をここで取り上げることが可能となると考える。即ち、必然性の洞察にもとづいて自然や社会を支配すること、正にこのような仕方では障害が除去されるのである。必然性の洞察自体は、選択の局面における部分的自由、即ち無知や盲目的法則からの自由にとどまる。これをもって個人や集団が対象を支配すること、即ち、これまで人間にとってどうにもならなかった様々な障害を除去すること、このことによって、障害の除去の程度に応じて人間は自由になるのである。こうして Engels の自由概念は、障害を除去する手段、方法を表わしているのだと考えられよう。そして、更に付言すれば、その手段の獲得自体が一つの目的となり、その目的は自由という形式を通して実現されるのである。

こうして今や、我々の自由論の構成は明白である。即ち自由という形式とその目的及び自由獲得のための手段、このような構成によって成り立つのである。そして自由の尺度は、人間活動の全分野と全局面とにおいて、どの程度障害が除去されているかどうかということ、これである。自由な社会とは、その社会において除去可能な障害を最大限まで取り除いている社会である。

(昭和56年 5 月20日受理)

- (1) これは、栗田賢三、『マルクス主義における自由と価値』（青木書店、1975年）、85頁に紹介されている H・カミンスキーの表現。カミンスキー自身は、あらゆる社会をはかる基準となるような、大文字で書かれた自由の存在を否定している。
- (2) James J. O'Rourke, *The Problem of Freedom in Marxist Thought* (Dordrecht-Holland, 1974), p. 1.
- (3) M・克蘭ストン、『自由』、小松茂夫訳（岩波書店、1976年）、15頁以下。
- (4) 同前、83頁。

- (5) アイザイア・バーリン, 「二つの自由概念」, バーリン, 『自由論II』, 生松敬三他訳 (みすず書房, 1971年)。
- (6) これと同様の主張は, クランストンにも見出される。彼は, 自由とは理性による支配だとする理論は, 強制可能な理性的自由の理論を派生するとし, これは自由の理論ではなく, 単に人間を二分する理論だと断ずる (クランストン, 前掲訳, 31頁以下)。
- (7) バーリンがこの自由に付け加えた「故意」という要件, これに対するマクファーソンの批判は, C・B・マクファーソン, 『民主主義理論』, 西尾敬義他訳 (青木書店, 1978年), 163頁以下参照。
- (8) 韓国やチリ, ポーランドや中国の今日の事態。
- (9) ユ・エヌ・ダヴィドフ, 『自由と疎外』, 藤野渉訳 (青木書店, 1972年), 11頁以下。
- (10) ヘルバート・シュタインINGER, 「社会主義社会の自由の諸基礎」, ゴットフリート・シュティラー編著, 『マルクス主義自由論』, 岩崎允胤他訳 (汐文社, 1978年), 163-164頁。
- (11) 粟田, 前掲書, 85-86頁による。
- (12) クランストン, 前掲訳, 65頁。
- (13) 同前, 73頁以下。
- (14) 同前, 4-5頁。
- (15) ダヴィドフ, 前掲訳, 15-16頁に曰く「人間的自由の外的な諸制限は, 人間的活動にたいする関係においては, かなりの程度内的なものであることがわかる」。
- (16) 中野徹三, 『マルクス主義と人間の自由』 (青木書店, 1977年), 90-91頁。中野氏はここで「自由とは, 人間の意識から独立したある客観的な事態そのものでも, その属性でもない」とし, 自由の問題は, 人間が自己を不自由と意識することによって生じる, そしてその前提には, その人間の要求, 願望, 即ち価値選択がある, としている。
- (17) 「なにか事をなそうとする意欲がもしわれわれに全く存在せぬならば, 束縛という語の意味はわれわれにはほとんど理解不可能であろう。束縛はわれわれの欲求と対立する。自由は束縛と対立する。」 (クランストン, 前掲訳, 5頁)
- (18) バーリン, 前掲訳, 309-310頁参照。なお, 「自由と価値との間には必然的關係はない」という粟田氏の主張 (粟田, 前掲書, 9頁) に対して, 中野氏が批判している (中野, 前掲書, 21頁) が, この点では筆者は中野氏を支持したい。
- (19) バーリン, 『自由論I』, 小川晃一他訳, 65頁。
- (20) バーリンの積極的自由の概念とその展開の仕方に対する行き届いた批判は, マクファーソン, 前掲訳, 180頁以下。
- (21) マクファーソンは, バーリンの自由の区分を批判し, より有効な区分として発展的自由と反抽出的自由の区分を提起している (同前, 195頁以下参照)。筆者は, この反抽出的自由の尺度は, 資本主義社会までの諸社会には当てはめることができるが, 社会主義社会には当てはまらないと考える。なぜなら, 社会主義社会は, 定義上抽出的力を除去した上で成り立つ社会だからである。しかもなお社会主義社会は, 反抽出的自由と置き換えてしまうことのできない消極的自由, 即ち権力からの自由を必要とする社会なのである。この点は後述する。

- (22) バーリン、『自由論Ⅰ』, 68-69頁。
- (23) クランストン, 前掲訳, 82頁。
- (24) マクファーソン, 『現代世界の民主主義』, 栗田賢三訳 (岩波書店, 1977年), 94頁以下参照。
- (25) バーリン, 『自由論Ⅰ』, 81頁。
- (26) 勝田吉太郎, 『現代社会と自由の運命』 (木鐸社, 1978年), 17頁。勝田氏はここで, 政治的・市民的自由という消極的自由を, 人間的自由の全システムの不可欠の前提とし, しかも手続上, まず最初に確立すべきものとし, そののち, はじめて自由のシステムの積極的側面 (氏はこれを能力, 機会, 力としているが, これはバーリンの言葉で言えば「自由の条件」であろう) について語ることが許される, と論じている。
- (27) バーリン, 『自由論Ⅰ』, 83頁。
- (28) ポーランドや中国の今日の事態は, このことの例証であろう。
- (29) 中米, 南米の軍事独裁諸国が, それを立証していよう。
- (30) クランストン, 前掲訳, 28頁及び29頁。しかし日本語では, 自由と能力とは不可分のものとして表現される。即ち「耳が不自由」, 「お金に不自由している」等。
- (31) この点での中野氏のクランストンに対する批判は, 適切であると考え (中野, 前掲書, 51-52頁参照)。
- (32) クランストン, 前掲訳, 64-65頁。
- (33) エーリッヒ・フロム, 『自由からの逃走』, 日高六郎訳 (創元社, 1953年), 4頁。
- (34) Éva Ancsel, *The Dilemmas of Freedom* (translated by János Boris, Budapest, 1978), p. 50.
- (35) *Ibid.*
- (36) *Ibid.*, p. 52.
- (37) この点については, マクファーソン, 『民主主義理論』, 87頁以下参照。筆者は, このマクファーソンの主張は極めて説得力あるものだと考える。
- (38) 勝田, 前掲書, 151頁。
- (39) 同前, 153頁。
- (40) バーリン, 『自由論Ⅱ』, 315-317頁。
- (41) 勝田, 前掲書, 149頁。
- (42) 同前, 149-150頁。
- (43) マクファーソン, 『現代世界の民主主義』, 30-31頁, 及び宮田光雄, 『現代日本の民主主義』 (岩波書店, 1972年), 9-11頁参照。
- (44) マクファーソン, 『自由民主主義は生き残れるか』, 田口富久治訳 (岩波書店, 1978年), 2頁。
- (45) 三浦和男氏はこの点を次のように指摘している, 即ち「社会を開放し, 人間個人に対象操縦の立場を保証すれば, 個人の自由と際限のない進歩が同時に保証されると楽観的に信じられた」 (三浦和男, 「哲学的自由と社会的自由」, 日本哲学会編, 『哲学』 No28, 14頁)。

- (46) 同前, 12頁。
- (47) 同前, 10頁。
- (48) 同前, 9頁。
- (49) 三浦氏が「社会の有機体性を緊急に回復しなければならない」(同前, 16頁)と述べているのも、これと同様の意味であろう。
- (50) この点については、ゴットフリート・シュティーラー, 「マルクスとエンゲルス以前における自由問題の歴史によせて」, シュティーラー編著, 前掲訳, 54頁以下参照。
- (51) 既存の社会主義諸国における, 社会的所有と社会主義社会のイメージから自由であろうとして, 敢えてこのような語を使用する。
- (52) この点の分析は, 藤田勇, 『社会主義における国家と民主主義』(大月書店, 1976年), 232頁参照。
- (53) 同前。
- (54) シュタイニンガー, 前掲論文, シュティーラー, 前掲訳, 153頁以下。
- (55) ゲッツ・レートロウ, 「マルクス・レーニン主義の自由観」, シュティーラー, 前掲訳, 96-97頁。
- (56) 藤田, 前掲書, 227頁。
- (57) 同前, 229頁。
- (58) シュティーラー, 「社会的自由と人格的自由の弁証法」, シュティーラー, 前掲訳, 228頁。
- (59) 同前。
- (60) 同前, 227頁。
- (61) 同前, 231頁。
- (62) 同前, 227頁。
- (63) 「毎日新聞」, 1977年6月5日号の所謂ブレジネフ憲法草案に関する記事による。
- (64) 藤田, 前掲書, 240頁。
- (65) マクファーソン, 『民主主義理論』, 249-250頁, 及び栗田, 前掲書, 72頁参照。
- (66) レートロウ, 前掲論文, シュティーラー, 前掲訳, 82頁。
- (67) 今日のアフガニスタンの事態は, もし仮にソ連に一片の利己心もないとするならば, このことを説明する一例と言えよう。
- (68) マクファーソン, 『民主主義理論』, 199頁。
- (69) O'Rourke, *op. cit.*, pp. 27-30. これは中野氏が, マルクスの自由概念として挙げる人格的自由と同じものである(中野, 前掲書, 27頁以下参照)。
- (70) Ancsel, *op. cit.*, pp. 29-30.

that 節に先行する名詞の限定辞と 名詞の形態について

東 毅

On Determiners Attached to Nouns Preceding '*that*' Clauses and the Form of Those Nouns

Takeshi Higashi

Abstract

The function of appositive '*that*' clauses may be restrictive or non-restrictive. In the former function, a '*that*' clause restricts the reference of the head noun to one particular thing; the latter does not restrict the reference of the head noun, but gives further relevant information about it. This distinction is marked in writing and in print by a comma or a dash before the latter kind of clause, no such break separating a restrictive '*that*' clause from its head noun. And, in the case of restrictive examples, it will be noticed that they have the definite article before the head noun. But the head nouns of restrictive examples do not always have the definite article. When many examples are examined, it will be found that they have a various kind of determiners before the head nouns including a zero determiner. Plural head nouns are rather rare but we sometimes find them. The purpose of this paper is to investigate what kind of determiner (including a zero determiner) each head noun has and which form each head noun chooses between the singular and the plural. Here I used the same sentences that were used in my previous paper: On the Construction 'NOUN+ THAT CLAUSE'. They were collected from contemporary English materials—magazines, literary works, academic works and so on.

はじめに

「名詞+THAT CLAUSE」について¹⁾に於て用いた例²⁾の一部分を対象にし、that 節に先行する名詞ごとに、限定辞³⁾の有・無とその種類、名詞の形態(単・複のいずれかであるか)などの点から例を分類し、夫々の例数を表にして示すことによって分布状況を示し⁴⁾、夫々についてその代表例を示して、英語教育・学習等の目的でこの構文を扱う際の参考に供することを本稿の目的とした。

I 用例についての制限とその理由

同格構文として取り上げた範囲は、「名詞+THAT CLAUSE」について」の場合と同じである⁵⁾。しかし、本稿では、下に挙げるような、名詞の次に書記上コンマ等の区切りがつけられ、that 節が先行名詞(相当語句)の非限定的(non-restrictive)で叙述的な説明の機能を果していることが明らかな例は対象から除外した⁶⁾。このような場合は、that 節は先行名詞に対して限定的(restrictive)な機能を果さないから、先行名詞がどのような限定辞、形態をとっても that 節の限定によるものではない。

一方、名詞がコンマ等によって次に続く that 節と区切られておらず、限定的な機能を果すことができる that 節を従えた場合には、先行名詞は that 節によって限定されることになり、名詞の限定辞等に影響があると思われる。このような限定を表わす限定辞に定冠詞がある。下に掲げた表からわかる通り、定冠詞を伴う例は大変多く見られる。しかし、名詞と that 節の間にコンマ等の区切りがないにも拘らず、定冠詞以外の限定辞を伴ったり、何も伴わない例も見られ、名詞の中には、定冠詞以外の限定辞をむしろ好むものもあれば、何もとらない傾向のものもある。また、形態も単数形だけとは限らない。本稿はこのような例を名詞ごとに示すのが目的であるから、that 節が、先行名詞と書記上区切られていて、明かに非限定的機能を果している例は対象としなかったのである。

〈除外する場合とその例〉

i) that 節と先行名詞の間が、コンマやダッシュで区切られている場合

Unless passives are given a lexicalist interpretation, the alternation appears to contradict the conclusion attempted above, that subject/object are determinate, given the case structure. (On Case Grammar)

We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their creator with certain inalienable rights, that among these are life, and the pursuit of happiness. (1984)

ii) that 節がコンマやダッシュで囲まれている場合

The first of Velikovsky's assertions—that Venus was violently expelled from Jupiter as a huge protoplanet—was scoffed at. (Reader's Digest Jan. 1976)

The old feeling, that at bottom it did not matter whether O'Brien was a friend or enemy, had come back. (1984)

iii) that 節が先行名詞とコンマやダッシュで区切られ、更に、何らかの語句⁷⁾により that 節が先行名詞の叙述的説明であることを示している場合

Black Africa is an expression frequently to be met with nowadays in political articles, and here is a very obvious borrowing from French, where l'Afrique noire has long been used for an excellent reason, namely that for the average Frenchman Africa is likely to mean in the first place the North Africa of the Arabs rather than a continent inhabited by Negroes. (The Changing English Language)

However, as Fillmore (1965b) observed, there is an additional piece of information expressed in a sentence like (10) a, namely, that relative to the people with whom Bill and Tom might be compared for height, they are both relatively short. (Studies in Linguistic Semantics)

It did not contain a grammatical error, but it expressed a palpable untruth—i.e. that all men are of equal size, weight, or strength. (1984)

II 名詞の分類

that 節に先行する名詞に伴う限定辞の種類により、名詞を次のように分類することができる。ここでは、2 例以上もつ名詞のみを対象にした。

A. definite な意味の限定辞⁸⁾をもつ例のみの名詞。

B. definite な意味の限定辞をもつ例と、そうでない例が混在する名詞。

この名詞は、更に、definite な意味の限定辞をもたない例の中に、

i) 不定冠詞をもつ例が含まれていない場合

ii) 不定冠詞をもつ例が含まれている場合

に、分けることができる。

C. definite な意味の限定辞を伴う例をもたない名詞。

III A の名詞について

表1に例の分布を示す。名詞は、関連する動詞が that 節をとるものをI、関連する形容詞が that 節に従えるものをII、その他をIIIとして分類した。この分類は、後に掲げる表2、表3、表4に於ても同様である。()内に示された数字は、there is 構文の主語として名詞が使用された例の数を示す。これは、表2、表3、表4に於ても同様である。

表 1

	THE		所有格				THE		所有格		
I \	単	複	単	複	計	III \	単	複	単	複	計
argument	4	2	4		10	concept*	4				4
comment	1		1		2	constraint*	2				2
conclusion	31		1		32	defense [△]			2		2
discovery*	9(1)				9(1)	dictum	2		1		3
hypothesis*	10				10	effect*	9				9
intention	1		1		2	excuse*	2				2
observation	5		5		10	fact*	278(2)				278(2)
perception*	1(1)				1(1)	ground*	16	18			34
premise	4		1		5	impression*	40				40
proposition*	6				6	mind [△]			12		12
reason*	6	1			7	paradox*	2				2

I	THE		所有格		計	III	THE		所有格		計
	単	複	単	複			単	複	単	複	
saying	2		1		3	point*	6				6
signal*	3				3	position	6		2		8
supposition*	4				4	principle	2		1		3
thought	31		1		32	prospect*	2	1			3
III						result*	20				20
basis*	3				3	view	14	1	1		16

* determiner として the を伴う例のみもつ名詞である。

△ determiner として所有格を伴う例のみもつ名詞である。

- 表 1 からわかるように、ここに挙げた名詞が there is 構文の主語として用いられる場合は、極めて稀である。
- 所有格は I の名詞の場合、名詞の背後に感じられる動詞的意味の主語の機能を果していると解釈できる。一方、III の defense の所有格は、目的関係である。
- これらの中には、次のような比較的固定していると思われる表現が見られる。

conclusion	: come to the conclusion that 節	(24例)
reason	: for the reason that 節	(7 例)
supposition	: on the supposition that 節	(3 例)
basis	: on the basis that 節	(3 例)
effect	: to the effect that 節	(8 例)
ground	: on the ground(s) that 節	(34例)
mind	: make up one's mind that 節	(12例)
impression	: under the impression that 節	(8 例)
point	: to the point that 節	(3 例)
result	: with the result that 節	(20例)

- with the result that 節では、1 例を除き、他すべては with の前にコンマがある。

以下に、例を示すが、表のどの欄に相当する例であることを示す為、定冠詞は

T, 所有格は G, 単数は s, 複数は pl と略して, 更に, there is 構文の場合 there を各例のはじめに記した。尚, 例文中の下線は, 該当部分を示すために筆者が施した。

I

argument

(T-s)

Norris's warning is based on the argument that modern economic models—except for Chase's, of course—still underestimate the “multiplier” effect of national policies. (Time Feb. 16 1976)

(T-pl)

What about the arguments that the Brussels bureaucracy has too much power over British affairs? (Newsweek June 2 1975)

(G-s)

In Whitehall's view, this group is winning over the faction led by Party Boss Leonid Brezhnev by their argument that Moscow is in danger of being sucked into a potential African Viet Nam that could mean the collapse of détente.

(Time Feb. 16 1976)

comment

(T-s)

A UN spokesman made the inevitable phlegmatic comment that there was 'no change' in that body's attitude. (Good-bye)

(G-s)

With regard to your comment that the gains from the Aswan Dam have been swallowed up by Egypt's population, it should be noted that this project was not an unmitigated benefit. (Time Jan. 12 1976)

conclusion

(T-s)

They were not shy children, and they quickly came to the conclusion that Philip was not formidable. (Of Human Bondage)

(G-s)

Since the interpretation of these crucial examples is (at least) in doubt, it looks as if we should accede to Jackendoff's (1972, 217) conclusion that 'if all verbs with an optional NP behaved like *promise*, maintaining a fixed control position when the optional object is added, this would argue that grammatical relations determine control.'

(On Case Grammar)

discovery

(T-s)

It was the discovery that restriction enzymes could be used to link genes to plasmids that led to the moratorium. (Reader's Digest Jan. 1976)

(there-T-s)

There was also the discovery, made almost daily, that anyone who spelled Connecticut with more than two t's had to stay after school until he had written that teasing word 50 times. (Reader's Digest May 1976)

hypothesis

(T-s)

The circumstances support the hypothesis that the yeti is nocturnal.

(Reader's Digest April 1976)

intention

(T-s)

Warsaw was not an easy city to defend: the old and out-of-date fortifications had been pulled down in 1912 with the intention that new and stronger ones should be built, but this had remained a project only. (Zamenhof)

(G-s)

He carried out his intention that the only tie between them should be the domestic service she did in return for board and lodging. (Of Human Bondage)

observation

(T-s)

Dougherty's argument starts from the observation that within Fillmore's proposals there is one particular area in which a generalisation concerning the distribution of CFs is lost rather than gained. (On Case Grammar)

(G-s)

Having resided in England for the past eight months, I will readily attest to his observation that isolationism seems to be spreading like a wave over the entire country. (Newsweek May 19 1975)

perception

(T-s)

In Newspeak it was seldom possible to follow a heretical thought further than the perception that it *was* heretical: beyond that point the necessary words were nonexistent. (1984)

(there-T-s)

“So I am an optimist, and I think in time there will be the perception that the country has recovered from this traumatic period and that we have an excellent opportunity of making progress, whether it is domestically, internationally or otherwise.”
(Time Jan. 26 1976)

premise

(T-s)

These conversations are bottomed on the premise that the President must be the first on record to force the culprits, his lieutenants, to justice.

(Reader's Digest June 1975)

(G-s)

I do agree with his premise that householders need larger and better cleansing facilities, and I trust the masshousing producers will take note—right down to their drains.

(Time Jan. 19)

proposition

(T-s)

But their case rests on the proposition that they can neutralize Wallace in the Southern primaries and still hold Dixie for the Democrats.

(Newsweek June 2 1975)

reason

(T-s)

Yet after 1970, the Western coal began to exert a powerful new appeal for the simple reason that it has a low sulfur content.

(Time March 1 1976)

(T-pl)

People like for the sensible reasons that cycles are cheap (average cost : \$75), healthful, and do not pollute the air.

(Reader's Digest April 1976)

saying

(T-s)

The fostering of interdependent relationships through economic exchanges may appear to be a long and highly indirect route toward international security, but I believe in the old saying that the longest way round is the shortest way home.

(Newsweek May 19 1975)

(G-s)

The Russians, who had feared a chilly welcome in Galicia, had been able to confirm Montesquieu's saying that people are not like their governments.

(Zamenhof)

signal

(T-s)

A bell, the signal that the jury was returning, interrupted him.

(In Cold Blood)

supposition

(T-s)

He goes where he wants to when he wants to, on the supposition that people will say he is politicking even if he stays home in bed. (Newsweek June 2 1975)thought

(T-s)

He did not know why it was, but he could not bear the thought that she should touch him. (Of Human Bondage)

(G-s)

I recall Mother Teresa's thought that the best part of love and service in life has been given woman. (Time Jan. 19 1976)

III

basis

(T-s)

But this was done on the basis that nothing would be said publicly about the drought—a move that would have opened up a massive outpouring of international aid. (Newsweek Feb. 23 1976)concept

(T-s)

We must eliminate the parental concept that children must go to college, otherwise we'll be turning out an overtrained work force that will drive us into bankruptcy. (Time Feb. 2 1976)constraint

(T-s)

The anomalous *John smeared (on the wall)* which would correlate with the absence of both instances of abs, is ruled out by the constraint that every proposition must contain one absolutive (cf. ch. 2 below) (On Case Grammar)defense

(G-s)

During the chat with her visitor, Patty made a number of statements that undercut her basic defense that she had cooperated with the S. L. A. out of fear alone. (Time March 8 1976)

dictum

(T-s)

Certainly it is now a key-word in the vocabulary of the second half of the twentieth century and as such it admirably illustrates the truth of the dictum that it is not so much the first dating of a word that matters so much as the time when it first gained general currency, hereby showing itself to be responding to a need of a given society. (The Changing English Language)

(G-s)

In line with Jawaharlal Nehru's dictum that "it is science alone that can solve the problems of ...vast resources running to waste, of a rich country inhabited by starving people," Indian officials expect that eventually their space program will include their own communications, meteorological and earth resources satellites.

(Newsweek May 1975)

effect

(T-s)

Some years ago John Wain also made a similar statement to the effect that this use of 'around' for 'round' was an Americanism, but that it was becoming frequent in the works of Robert Graves. (The Changing English Language)

excuse

(T-s)

Besides, he argues, the excuse that she was young and sheltered rings false.

(Time March 8 1976)

fact

(T-s)

Street sweepers are out daily, and the hedge outside the Governor's Palace is clipped regularly, despite the fact that the only residents of the quaint building are seven foreign journalists. (Time Feb. 2 1976)

(there-T-s)

But quite apart from the various technical terms of radio and television programmes which pass into general currency, there is the broad linguistic fact that broadcasting churns out a tremendous number of American popular songs which painlessly imprint transatlantic words and idioms (or, on occasion, pronunciations)

on the minds of millions of young listeners. (The Changing English Language)

ground

(T-s)

But, on the ground that they were “substantial” restraints of First Amendment rights, the court eliminated the ceilings on campaign spending. (Time Feb. 9 1976)

(T-pl)

Ford vetoed 16 bills, many on the grounds that they would contribute to inflation, which he saw as the nation's main domestic problem. (Time Jan. 5 1976)

impression

(T-s)

Says DEA director Bartels: “A considerable number of people are under the impression that cocaine is a relatively harmless drug. They are dead wrong.”

(Reader's Digest June 1975)

mind

(G-s)

He had made up his mind that he would accompany her as far as the Tube station, but suddenly this process of trailing along in the cold seemed pointless and unbearable. (1984)

paradox

(T-s)

The novel, it was earnestly proposed, explored the paradox that only in slavery can one find perfect freedom. (Time Jan. 5 1976)

point

(T-s)

Over and over, this show makes the point that drawing is not a slight activity, that small scale can concentrate the presence of an image, just as large scale can expand it. (Time Jan. 12 1976)

position

(T-s)

The emotional anti-colonialists exploited this area and in their clouds of propaganda and ideological jiggery-pokery soon conditioned the UN atmosphere into the position that the colonial phenomenon was itself a threat to peace.

(Good-bye)

(G-s)

But many Third World militants refuse to budge from their position that no scientific research be conducted in the 200-mile zone without the coastal nation's explicit consent. (Reader's Digest Jan.)

principle

(T-s)

More important is the principle that the government can interfere in a publication's content. (Time March 8 1976)

(G-s)

Under his principle that shortcuts to success are joint efforts and that workers therefore should be encouraged to become stock-holders, Li five years ago helped set up a precision instrument company named Taiho, with 51% of the capital from Japanese investors and the other 49% from Chunyu employees.

(Reader's Digest June 1975)

prospect

(T-s)

And that in turn left Wilson with the unsettling prospect that the vote which will make or break his political future could be decided by a slimmer margin than almost anyone had expected. (Newsweek May 19 1975)

(T-pl)

But in the evening when it was time for brandy and cigars, any person attuned to national politics had to admit to a budding excitement over the prospects that before the new year was out, the capital might be shaken more than it had been in several decades. (Time Jan. 5 1976)

result

(T-s)

These Gullahs have hitherto lived in great isolation, with the result that their speech retains a good many African features. (The Changing English Language)

view

(T-s)

The foregoing is not a record, I submit, that justifies the view that the Soviets will refrain from adventures that strike them as potentially profitable.

(Reader's Digest Sep. 1975)

(T-pl)

Facing the jury and speaking forcefully, Lifton reinforced the views of West

and Orne that Patty was coerced into taking part in the bank robbery.

(Time March 8 1976)

(G-s)

I will make known my view that for at least the next 25 years the Japanese and New Zealand economies will be complementary.

(Time Feb. 2 1976)

IV B, i) の名詞について

表 2 に例の分布を示す。

表 2

	I	THE		所有格		A(N)	否定限定辞		その他の限定辞		限定辞なし		計
		単	複	単	複		単	複	単	複	単	複	
Id pl	allegation	2							any 1			5	8
Df	assumption	21		1								1	23
Id	condition	1									9		10
Df	contention	1		3								1	5
Df	disclosure	4										1	5
Id pl	doubt	1	1				15(4)	2	any 1		1(1)	2	23(4)
Df pl	estimate			2	1							(1)	3(1)
Df	expectation	1		1								1	3
Id pl	hint	1										3(2)	4(2)
Df	information	6									1		7
Df	insistence			7							1		8
Df	knowledge	9(1)									1		10(1)
Df	pretence	4					1						5
Id pl	revelation	2	1									3(1)	6(1)
Id	speculation	1							some 1		10(4)		12(4)
Id	testimony			1							2		3

		THE		所有格		A(N)	否定限定辞		その他の限定辞		限定辞なし		
	II	単	複	単	複		単	複	単	複	単	複	計
Id	evidence	5					2(8)		some 25) any 2 他 1 (2)		20(1)		32(26)
	III												
Df	delusion	2										1	3
	indignation			1							1		2
Df	news	8							a men- tion of 1		4		13
	story	1										1	2
Id	word	4		2							13		19

definite な限定辞（定冠詞と所有格）をもつ例が多い名詞には Df, それ以外の
場合の例が多い名詞には Id を、各名詞の左端の欄に示した。また、複数形を
複数個もつ名詞には pl を付した。

- definite な限定辞を多くもつ名詞 (Df) のうち, estimate と insistence は
すべてが所有格をもち, contention は殆どすべてが所有格をもっている。
- その他の場合の例を多くもつ名詞 (Id) のうち, allegation, condition, hint,
revelation, testimony, evidence, word は限定辞をもたない例が多い。
- 複数形の例をもつ名詞のうち, allegation, hint, revelation はその例が多
い。
- doubt は、総例72のうち66例が否定文である。
- doubt と evidence には、there is 構文の主語になっている例が多い。また、
doubt は概当例49例中48例が no や little を伴った否定文である。
- 表 2 の名詞の中には、次にあげるような比較的固定していると思われる表
現が見られる。

assumption : on the assumption that 節

(14例)

condition : on condition that 節

(9例)

pretence : on the pretence that 節 (3例)

以下に、表2の例を示す。表1にはなく、表2に於て新たに加わった‘否定限定辞’、‘その他の限定辞’、‘限定辞なし’は、夫々、順に N, D, ϕ と略して、表1の例を示したときと同様に、各例のはじめに記す。

I

allegation

(T-s)

Lastly, it was evidently impossible to prove the allegation that we, who are the ones being attacked, constitute a threat to world peace and security. (Good-bye)

(D-s)

Writing in the London *Times*, Sargent claimed that “there is not a shred of truth in any allegation that she cooperated in her kidnaping.” (Time Feb. 9 1976)

(ϕ -pl)

Last week Whitlam and his party were sent staggering again, this time by allegations that Whitlam was personally involved in an Iraqi offer of U. S. \$500,000 to replenish Labor’s depleted campaign chest. (Time March 8 1976)

assumption

(T-s)

Assistant Secretary of State Philip Habib told Congress last week the Administration was “operating on the assumption that the great majority of them will come to the United States.” (Newsweek May 5 1975)

(G-s)

(151) Mary was given a book by John

cannot be generated at all, given their assumption that passive moves only the NP nearest to the verb (in this instance a book). (On Case Grammar)

(ϕ -pl)

In theory, upside-down times should be ideal for reform, but the reform parties —such as Gough Whitlam’s Labor Party in Australia— are still tied to programs based on past assumptions that the affluent era would go on forever.

(Newsweek March 15 1976)

condition

(T-s)

Twice married, twice divorced, now twenty-eight and the father of three boys, Dick had received his parole on the condition that he reside with his parent; the family, which included a younger brother, lived on a small farm near Olathe.

(In Cold Blood)

(ϕ -s)

In that case, Pretoria could offer to withdraw its forces on condition that the Cubans and Soviets do the same.

(Time Feb. 2 1976)

contention

(T-s)

Not only has this war diverted the P. L. O.'s energies, but the spectacle of Christians and Moslems battling each other has also challenged the Palestinian contention that a secular, democratic and non-sectarian state can replace Israel.

(Time Jan. 19 1976)

(G-s)

The report seemed to bear out Richard Nixon's contention that he was only following a precedent initiated by his Democratic predecessors when he bugged his White House enemies.

(Newsweek Dec. 15 1975)

(ϕ -pl)

In Ankara, the Turkish prosecutor is checking out Lockheed contentions that it paid some \$876,000 in "gifts to third parties" to stimulate Starfighter sales there in 1973.

(Time Feb. 23 1976)

contention の例は、5 例すべてに、限定辞の有・無やその種類と関係なく、contention を持つもの(或いは、contend の主語に相当するもの)が表現されている。

disclosure

(T-s)

The disclosure that one candidate was throwing around millions on his own behalf would not be likely to endear him to voters in an antipolitician era.

(Time Feb. 9 1976)

(ϕ -pl)

For instance, disclosures that the United States has used submarines in Soviet territorial waters to monitor Russian weapons tests have greatly diminished the flow of this vital intelligence.

(Reader's Digest May)

doubt

(T-s)

I went to see a solicitor and his advice was that while he hadn't the slightest doubt that free speech was being leaned on, we could prove it only by finding some individual who had indulged in jiggery-pokerry with free speech and then suing him.

(Good-bye)

(T-pl)

But perhaps more important were the growing doubts among the Thais themselves that their leaders were up to steering the difficult course ahead.

(Newsweek May 19 1975)

(N-s)

I have no doubt that in a few years there will be a spate of stereotyped stories from visiting Western correspondents.

(Newsweek May 12 1975)

(there-N-s)

There seems to be no doubt that 'mini' is all set for a splendid career in commerce, politics and the press.

(The Changing English Language)

(N-pl)

One who has no doubts that effective means will be found to save it for future generations is the distinguished French archeologist Bernard P. Groslier.

(Reader's Digest Feb. 1976)

(D-s)

First I had to block off any lingering doubt that the melanoma had spread.

(Reader's Digest August 1975)

(ϕ -s)

Prof. John Hasted, chairman of Birkbeck's department of physics, and David Bohm, Professor of theoretical physics, stated that with future tests more instances of this kind may accumulate so that there will be "no room for reasonable doubt that some new process is involved here, which cannot be accounted for or explained in terms of the present known laws of physics."

(Reader's Digest Oct. 1975)

(there- ϕ -s)

In Washington, there was doubt that OPEC would demand \$3 more, but Administration sources seemed resigned to at least a \$1-a-barrel jump.

(Newsweek June 2 1975)

(ϕ -pl)

In a 135-page document that he wrote with Margaret Singer, a Berkeley psychologist, West raised doubts that Patty was then competent to stand trial.

(Time March 8 1976)

estimate

(G-s)

There was also general agreement with Ford's estimate that real output will expand about 6.2% this year, compared to a 2% dip last year. (Time Feb. 2 1976)
(G-pl)

Most analysts agreed with him that it would have created far fewer than 600,000 jobs—although Ford's estimates that it would produce only some 100,000 jobs at a cost of more than \$25,000 per job were exaggerations in the opposite direction.
(Time March 1 1976)

(there- ϕ -pl)

There are estimates that 300 have been killed and 1,400 wounded; at least 100 have been taken prisoner.
(Time Feb. 23 1976)

expectation

(T-s)

Second, accompanied by a K. B. I. agent, Mrs Helm had explored every room at River Valley Farm, toured the house in the expectation that she might notice something awry or absent, and she had.
(In Cold Blood)

(G-s)

Philip, stirring his punch, thought of his early friendship and his ardent expectation that Hayward would do great things; it was long since he had lost all such illusions, and he knew now that Hayward would never do anything but talk.
(Of Human Bondage)

(ϕ -pl)

The United Nations came into existence 30 years ago amid soaring expectations that it would eventually become "the parliament of man."
(Reader's Digest April 1976)

hint

(T-s)

Since the P. L. O. has not given the slightest hint that they are ready to accept the U. S. formula, they are out of the negotiations from the point of view of both Israel and the U. S.
(Time Feb. 9 1976)

(ϕ -pl)

Then suddenly—amid hints that President Ferdinand Marcos was becoming nervous about Hanoi's reaction to the huge influx of Vietnamese—the U. S. announced it was shifting the transfer point for refugees to Guam.
(Newsweek May 5 1975)

(there- ϕ -pl)

Against this backdrop, there were hints that Neto might be prepared to offer UNITA's Joseph Savimbi a share in a two-way coalition government.

(Time Jan. 19 1976)

information

(T-s)

The letter ended with the information that Mr Carey had withdrawn the notice he had given. (Of Human Bondage)

(ϕ -s)

When I was a member of the Royal Canadian Mounted Police, I received information one election day that a certain committee room in Quebec City contained contraband alcohol. (Reader's Digest Nov. 1975)

insistence

(G-s)

These dictatorships in the United Nations see nothing inconsistent or hypocritical apparently in their insistence that Rhodesia be governed by majority rule.

(Good-bye)

(ϕ -s)

Despite insistence by the U. S. Navy, the Coast Guard and the National Ocean Survey that disasters within the so-called Triangle can be explained by natural causes, cultists continue to suspect the worst. (Reader's Digest August 1975)

knowledge

(T-s)

On the other hand, the knowledge that it was there if he really needed it had much to do with giving him strength to do without it. (Cancer)

(there-T-s)

There was no reproach either in their faces or in their hearts, only the knowledge that they must die in order that he might remain alive, and that this was part of the unavoidable order of things. (1984)

(ϕ -s)

With the atomic age came knowledge that the sun is a nuclear furnace.

(Reader's Digest May 1976)

pretence

(T-s)

He could not even fall back on the pretence that he had come to borrow the dictionary, because in that case Julia's presence was impossible to explain. (1984)

(N-s)

She listened carelessly to his remarks, with her eyes on other diners, and made

no pretence that she was interested in him.

(Of Human Bondage)

revelation

(T-s)

Prompted by the revelation that the late FBI director J. Edgar Hoover had conducted a vicious vendetta to discredit King, the Justice Department is probing both the FBI's harassment of him and its investigation of his death.

(Time Jan. 26 1976)

(T-pl)

Big business in America has been hurt in past months by recession and inflation, but no wound has been more grievous than the revelations that it has used its money to influence public officials at home and abroad.

(Time Jan. 26 1976)

(ϕ -pl)

Former Prime Minister Gough Whitlam's massive defeat by Malcolm Fraser in last December's election came largely as result of revelations that Australian Labor Party ministers had covertly sought billions of Arab petrodollars to finance the nation's ambitious development projects.

(Time March 8 1976)

(there- ϕ -pl)

In the Middle East, there have been revelations that huge "agent's fees" for arms purchases have been paid to members of Saudi Arabia's large royal household.

(Time Feb. 23 1976)

speculation

(T-s)

Kennedy himself has turned down most out-of-state speaking invitations, explaining along with his regrets that to accept would be further to encourage the speculation that he is running.

(Newsweek June 2 1975)

(D-s)

The failure of the Communists to quickly install an official government to replace General Tra and his eleven-member Military Management Committee led to some speculation that the North Vietnamese and the Viet Cong might be at odds on the composition of the government—with Hanoi opposed to participation by any neutralists or "third force" South Vietnamese.

(Newsweek May 19 1975)

(ϕ -s)

I can hardly feel happy about speculation that Spain might be asked to join NATO as a replacement for Portugal, should Lisbon withdraw from the alliance (EUROPE, March 31).

(Newsweek May 12 1975)

(there- ϕ -s)

There has been speculation that some of the material was being off-loaded too,

for use in Algeria's fight with Morocco over the Spanish Sahara.

(Time March 1 1976)

testimony

(G-s)

As the trial resumed the next day, Browning got Patty to admit that her testimony that she lived in constant fear of her captors was exaggerated.

(Time March 1 1976)

(ϕ -s)

Those claims are misleading, the FTC decided, citing scientific testimony that Listerine has "no efficacy" in either preventing or helping to cure sore throats and colds (some experts said that warm water would do as well). (Time Jan. 5 1976)

II

evidence

(T-s)

The bishops were particularly disturbed by the mounting evidence that Pinochet was not living up to his Pledge. (Time Jan. 12 1976)

(N-s)

The pledge was made and ITT was allowed to keep Hartford, but Watergate Special Prosecutor Leon Jaworski later reported that he found no evidence that ITT officials had acted illegally. (Time Jan. 26 1976)

(there-N-s)

Yet there is no evidence that nitrosamines from nitrates and nitrites in the American diet are a threat. (Newsweek Jan. 26 1976)

(D-s)

Controlled tests in several medical centers provide some evidence that the technique slows down the body metabolism and reduces blood pressure.

(Reader's Digest Jan. 1976)

(there-D-s)

Can willpower force the brain's message through? There is some evidence that it can, spasmodically, at moments of great stress. (Reader's Digest Oct. 1975)

(D-s)

'Do you see any evidence that that is happening? Or any reason why it should?' (1984)

(D-s)

Also, scientists are finding more and more evidence that there may be great mineral wealth under the ice, including oil. (Time Jan. 5 1976)

(there-D-s)

Dr. Rubin says, "There's a considerable body of evidence that alcohol exerts a direct toxic action on the heart, causing a progressive weakening of the muscle itself. (Reader's Digest Sep. 1975)

(there-D-s)

There is plenty of evidence from new studies of behavior that this works.

(Reader's Digest June 1975)

(ϕ -s)

Perhaps rejection of the Concorde would be evidence the U. S. is becoming a power interested in preserving its environment. (Time Feb. 9 1976)

(there- ϕ -s)

And last week, although nothing so violent yet seemed imminent, there was ample evidence that the radical campaign that toppled Teng was shifting into high gear and that the Peking power struggle was intensifying.

(Newsweek March 15 1976)

III

delusion

(T-s)

The other side of this coin—equally ruinous to using your head—is to become a perpetual student, forever taking courses, in the delusion that someday you will know enough to begin to think on your own. (Reader's Digest Oct. 1975)

(ϕ -pl)

Friedrich succinctly retells the pathetic stories of such diverse victims of aberration as Robert Schumann, the Marquis de Sade, Edgar Allan Poe, Scott and Zelda Fitzgerald, Scott Joplin, James Forrestal and Joe Louis, who suffered from delusions that gangsters were trying to kill him. (Time Feb. 16 1976)

indignation

(G-s)

The rest of the boys, for reasons best known to themselves, though they loathed the master, took his side in the affair, and, to show their indignation that the school's business had been dealt with outside, made things as uncomfortable as they could for Walters's younger brother, who still remained. (Of Human Bondage)

(ϕ -s)

Indeed, an English couple visiting the Boston establishment were filled with indignation that their churches had allowed the original treasures to be pirated to America. (Time Jan. 12 1976)

news

(T-s)

When at last the news came that the Vicar was dying Philip, who had been thinking of other things, was taken by surprise. (Of Human Bondage)

(D-s)

In the spring of 1976 there was a cartoon in the *Daily Express* showing an ultramodern young curate being closely questioned by his ecclesiastical superior in connexion with reports of his 'psychedelic sermons', while in the U. S. A. the issue of *Newsweek* for 1 May 1976 included a mention of news that '...hippies are smoking dried banana peels to get a psychedelic kick'. (The Changing English Language)

(ϕ -s)

But when news reached the United States that Simas had been transferred to Vladimir, the joy felt by Mrs. Paegle and Mrs. Kezys turned to apprehension. They knew well the reputation of this prison. (Reader's Digest Sep. 1975)

story

(T-s)

On the day that Socialist Leader De Martino announced his party's decision to withdraw support for the government, the *New York Times* and the *Washington Post* simultaneously printed the embarrassing story that the CIA had been authorized to give \$6 million in secret aid to non-Communist Italian parties—most of it, apparently, to the ruling Christian Democrats. (Time Jan. 19 1976)

(ϕ -pl)

And on the very day last week that South Vietnam's President Thieu resigned, Philippine officials leaked stories to the local press that Manila was moving to open relations with Hanoi. (Newsweek May 5 1975)

word

(T-s)

Agency leaders were passing the word last week that they would welcome a grant of \$500 per family unit to defray costs. (Newsweek May 5 1975)

(G-s)

They are likewise largely willing to accept his word that he is not running—at any rate not now. (Newsweek June 2 1975)

(ϕ -s)

Some hours later, we are sent word that the leader is ill, suffering from a headache and has gone to bed somewhere. (Time Feb. 9 1976)

V B, ii) の名詞について

表 3 に例の分布を示す。

表 3

	I	THE		所有格		A(N)	否定限定辞		その他の限定辞		限定辞なし		計
		単	複	単	複		単	複	単	複	単	複	
	acceptance	1				(1)							1(1)
Id	admission	2				2	(1)		any 2				6(1)
Id	agreement	1				1					1(2)		3(2)
Df	announcement	3		2		3						1	9
Df	assertion			8		1			this 1				10
Id pl	assurance	3		3		2	1(1)		any 1(1) some 1		1	4	16(2)
Df	belief	30		10		10(4)							50(4)
Id pl	charge	1		1	1	1						8	12
Df pl	claim	14		4	2	5						2	27
pl	complaint	1		1		1						2	5
Df	conviction	5		6		4			some sort of(1)				15(1)
Df	declaration			2		1							3
Id pl	demand	1		2		1						5	9
Df	demonstration	1		2		2							5
Id pl	fear	11		5		6(5)					14(3)	5(4)	41(12)
Df	feeling	36(3)		2		29(10)	1		any 1 that (1)		(1)		69(15)
Id	guarantee	1	1			2	2(2)		any(1)			1	7(3)
Id pl	hope	11	1			5(1)	2(3)		any (1) some 1 much 1(1) その他(1)		4(2)	4(1)	29(10)
Df	implication	3				1							4

		THE		所有格		A(N)	否定限定辞		その他の限定辞		限定辞なし		計
		単	複	単	複		単	複	単	複	単	複	
Id pl	indication		1			5	1(2)	(1)		some 1 several 1		(3)	9(6)
	objection	1				1							2
	persuasion	1				1							2
Id pl	prediction			1		1						1(1)	3(1)
pl	promise			1	1	1			any 1			1	5
Id	proof	2				2	(3)		one more 1		10		15(3)
Df	proposal	7				2				a number of (1)			9(1)
Df	realization	8(1)				(2)							8(3)
IDf	recognition	1				4					1(1)		6(1)
	recommendation			1		1							2
Df	remark	1		2		1							4
IDf	reminder	(1)				5			another 1	plenty of (1)			6(2)
Id pl	report	1	1			1						11(6)	14(6)
IDf	request	3				4							7
Df	requirement	8	1	1		1(1)	(1)		some 1				12(2)
Df	rule	6				1							7
Id pl	rumo(u)r	4	1			2(1)						11(5)	18(6)
Df	sense	21				6			any 1				28
Id pl	sign	2	2			8	2(6)		any 1 every (1)	any 1 some (4) many (4) a few (1)	1	2(13)	19(29)
IDf	statement	1		2		5							8
Df pl	suggestion	11		7		1(1)	(1)					3	22(2)
Df Id	suspicion	5		2		2	(1)		any (1)		4	1	14(2)
Df	understanding	4				1(1)							5(1)

		THE		所有格		A(N)	否定限定辞		その他の限定辞		限定辞なし		計
		単	複	単	複		単	複	単	複	単	複	
IDf Id, pl	warning	1				4						3(1)	8(1)
Df	wish	3		1		1							5
	II												
IDf	awareness	1		1		3							5
Df	certainty	2		1		1			any(1)		1		5(1)
Id	likelihood	1				(2)	(1)		any (1) every (4)				1(8)
Df	possibility	28(2)				(8)	(2)		any 2 some (1) every (1) that 1				31(14)
	III												
IDf	chance	(1)				(9)	(3)						(13)
IDf	danger	2				(5)	(1)		some(1)		(1)		2(8)
Df	doctrine	4				1							5
	extent	1				1							2
Df	generalization	4				1							5
Df pl	idea	44	2	2		15	3		any 2 some 4 this 1			1	74
Df	illusion	2				1				any 1			4
Df	interpretation	3				1							4
Df IDf	message	1		1		2							4
Df	notion	13				1							14
Df	opinion	9				1							10
Df	risk	1(1)				(1)							1(2)
	satisfaction			1		1							2
Df	theory	11		2		1(1)							14(1)
	threat	1				1							2

definite な限定辞（定冠詞と所有格）をもつ例が多い名詞には Df, 不定冠詞をもつ例が多い名詞には IDf, その他の場合の例が多い名詞には Id を, 各名詞の左の欄に示した。また, 複数形を複数個もつ名詞には pl を付した。

- ここにあげた名詞の約半分は definite な限定辞をもつ例が多い。その中で, assertion は限定辞として所有格をもつ例が殆どすべてである。同様に, 所有格のみもつ名詞には, 例は少数だが, declaration, promise 等があり, 定冠詞をもつ例より所有格をもつ例の方が多い名詞には, conviction, demand, demonstration, remark, statement がある。他は, 定冠詞をもつ例の方が所有格をもつ例より多い。表からわかる通り, definite な限定辞として定冠詞だけをもつ名詞も多数みられる。比較的例数を多くもつ名詞の中から一部選んでみると, proposal, realization, sense, possibility, notion, opinion 等を挙げることができる。
- 不定冠詞をもつ例が多い名詞は, 夫々の名詞のもつ例数は少ないが, recognition, reminder, request, statement, warning, awareness, chance, danger が注目される。このうち, chance と danger はすべて there is 構文の主語となっている。
- 限定辞を伴わない単数形の例が目立つものとしては, proof が注目される。
- 複数形で用いられる例数の多いものとしては, charge, demand, indication, report, rumo(u)r, sign, warning を挙げることができる。これらの名詞の複数形は限定辞を持たない例がほとんど全部, 或いは, 全部である。また, charge, demand 以外は there is 構文の主語として用いられている例をもっており, 中でも, indication, sign は there is 構文の例が多い。
- guarantee, indication, proof, sign, chance は, 否定の限定辞の付加した例数が目立つ。また, there is 構文の主語に用いられた例も多い。
- there is 構文の主語として用いられる傾向の名詞として, chance, danger, likelihood, sign 等を挙げることができる。また, possibility は, 定冠詞を伴わない例の殆どは there is 構文の主語として用いられている。

- これらの中には、次のような比較的固定していると思われる表現が見られる。

fear	: for fear (that)節	(8 例)
hope	: in the hope that 節	(4 例)
sense	: in the sense that 節	(17例)
understanding	: on the understanding that 節	(2 例)
extent	: to the extent that 節	(1 例)
idea	: with the idea that 節	(6 例)
opinion	: be of the opinion that 節	(4 例)

以下に表 3 の例を示す。表 3 に於て、更に加わった不定冠詞は A と略して、表 1、表 2 のときと同様、各例のはじめに記した。

I

acceptance

(T-s)

“To Martin, cutting down the tree represented the final acceptance that the jig was up—and he was constitutionally unable to do that,” one embassy official told me. (Newsweek May 12 1975)

(A)

The[new] Minister of Overseas Development, Mr Bottomley, has been relegated from the Cabinet. Overseas aid has been cut and worse still, there is an acceptance that little more can be expected in future. (Good-bye)

admission

(T-s)

During 1891 Zamenhof wrote numerous articles for *La Esperantisto*, but in no. 52 he had to make the rueful admission that, for want of money, he would have to abandon his Esperantist activities for a time. (Zamenhof)

(A)

It is not an argument for sweet maternal submission to the household gods but for an admission that, unless society is transformed in an almost utopian way (far beyond merely providing daycare centers), women cannot free themselves totally from the destiny of raising children. (Time Jan. 5 1976)

(there-N-s)

There was, of course, no admission that any change had taken place. Merely it became known, with extreme suddenness and everywhere at once, that Eastasia

and not Eurasia was the enemy. (1984)

(D-s)

Books, also, were recalled and rewritten again and again, and were invariably reissued without any admission that any alteration had been made. (1984)

agreement

(T-s)

Perhaps Philip would have settled down but for the agreement that if he did not like the work he could leave after a year, and get back half the money paid for his articles. (Of Human Bondage)

(A)

All it may involve is a mutual—perhaps even unspoken—agreement that the hard work and sacrifice that a man and a woman contribute to a marriage get equal consideration when the going gets a little rough. (Reader's Digest June 1975)

(ϕ -s)

Moreover, when Washington finally began directly asking other nations to help, the most it could get was vague agreement from Italy, Argentina, Brazil and Chile that they "might" take some of the refugees. (Newsweek May 5 1975)

(there- ϕ -s)

But there was general agreement that children who cannot get on with people often can with pets. (Reader's Digest Jan. 1976)

announcement

(T-s)

The announcement that Bill's painting had won was followed by a national furor and one of the most extraordinary events in the history of art and equity law. (Reader's Digest April 1976)

(G-s)

Everywhere, Egyptian President Anwar Sadat's surprise announcement that the canal would reopen in June was interpreted as a silent olive branch held up in the tense Middle East. (Reader's Digest August 1975)

(A)

His decision to come to England was caused directly by an announcement from Leonard Upjohn that a publisher had consented to print the poems.

(Of Human Bondage)

(ϕ -pl)

They are fed, too, by announcements like the one last week that five new Jewish settlements will be established in the Jordan Valley by the end of the year. (Newsweek May 3 1976)

assertion

(G-s)

There was no lack of documentation for Lockheed'd assertion that it had paid about \$2 million in bribes to land a \$60 million contract for C-130s in Italy.

(Newsweek Feb. 23 1976)

(A)

He doesn't advocate absolute darkness—more of a twilight—and make an assertion, with which most other doctors agree, that a practical obstetrician can sense trouble in many ways other than by sight.

(Reader's Digest Feb. 1976)

(D-s)

Sakharov was intrigued by this assertion that the KGB withheld momentous information that might have spared the Arabs their military débâcle.

(Reader's Digest August 1975)

assurance

(T-s)

Men, for example, find it difficult to accept the assurance that a vasectomy does not hinder sexual virility.

(Time March 8 1976)

(G-s)

Under the circumstances, Henry Kissinger's assurance that Washington would stand by it friends offered a measure of relief, and the U. S. clearly retained the military power to defend Western Europe.

(Newsweek May 12 1975)

(A)

Diplomatic sources said South Africa was drawing up a plan to pull its troops out of southern Angola and recognize the Popular Movement in return for an assurance that its "interest" in Angola would be safeguarded.

(Newsweek Feb. 23 1976)

(N-s)

Noting that the Communists have so far given no direct assurance they would deal with any non-Communist politician—including Mihn—the diplomat said he believed the Viet Cong are now "too mean-spirited to ease Saigon's discomfort [in any way]

(Newsweek May 5 1975)

(there-N-s)

As many as 400 million may be in peril of starving this year in Asia, Africa and Latin America, and there is no assurance that the situation will not worsen next year.

(Reader's Digest June 1975)

(D-s)

But the smooth succession ceremony did not provide any solid assurance that Malaysia would manage to move peacefully into the post-Razak era.

(Newsweek Jan. 26 1976)

(there-D-s)

Not until all the whaling nations (IWC members and others) agree to a comprehensive and enforceable conservation program will there be any assurance that these friendly, gentle and intelligent sea mammals can survive.

(Reader's Digest Sep. 1975)

(D-s)

To justify the expense, coal men need a guaranteed market—and for that potential buyers have to have some assurance that the fuel can be burned in compliance with clean-air laws.

(Time March 1 1976)

(ϕ -s)

The Vicar, notwithstanding medical assurance that the boy was no longer infectious, received him with suspicion.

(Of Human Bondage)

(ϕ -pl)

As Moynihan put it, "For too long we have been given private assurances that public obscenities were not meant."

(Time Jan. 26 1976)

belief

(T-s)

They share the belief that our economy will continue to do well.

(Time Feb. 2 1976)

(G-s)

Central to Mao's highly personal vision of China's future is his belief that he can create a "new man," whose motives for working will be quite different from those of any Websterner.

(Reader's Digest July 1975)

(A)

That suggests a Government belief that price fixing extended not just to 70% of box sales, but also to almost the industry's total volume.

(Time March 1 1976)

(there-A)

There is a widespread belief that the death penalty was prescribed for the study of Esperanto in Hitler Germany, but this does not seem to be proved. (Zamenhof)

charge

(T-s)

What about the charge that you are damaging the image of the U.S. and endangering the survival of governments friendly to the U.S.?

(Newsweek Feb. 23 1976)

(G-s)

Whatever the South Vietnamese may have felt, however, a good many Ameri-

cans were simply exasperated by Thieu's charge that Saigon had lost out because of inadequate American aid. (Newsweek May 5 1975)

(G-pl)

Then his charges that the Organization of Economic Cooperation and Development (OECD) had projected rampant inflation for Australia in 1976 were greeted by embarrassing disclaimers from OECD officers in Paris. (Newsweek Dec. 15 1975)

(A)

At his own request, Gui was not invited to join the Cabinet pending investigation of a charge that he accepted bribes from Lockheed. (Newsweek Feb. 23 1976)

(ϕ -pl)

In Italy, policemen launched a search for Camillo Crociani, former president of a state-affiliated holding company, who is wanted to answer charges that he served as a middleman in one of Lockheed's deals in Italy. (Time March 8 1976)

claim

(T-s)

Finally, he has had specialists give Patty a polygraph test (a favorite Bailey device); the results, he says, support the claim that she believed herself always under threat. (Time Feb. 16 1976)

(G-s)

Astronomers still give little credence to his claim that Venus was expelled from Jupiter as a comet, or that Earth's axis suddenly tilted some 3500 and 2700 years ago. (Reader's Digest Jan. 1976)

(G-pl)

He declared that despite all he had heard from her he could not believe Patty's claims that she had been coerced by the S. L. A. (Time Feb. 23 1976)

(A)

Both UOB and SOB embody a claim that languages cannot differ in their base order, either because order is not relevant to base structures or because it is not a linguistic variable. (On Case Grammar)

(ϕ -pl)

Love, someone said, is the desire for knowledge of another. By this definition, claims that dogs love men are not so maudlin as they sometimes seem.

(Reader's Digest Sep. 1975)

complaint

(T-s)

He supports détente in principle but echoes the complaint of many conservatives that the Soviet Union is taking advantage of it. (Time March 8 1976)

(G-s)

More typical of Maugham was his complaint some years ago that he couldn't read modern novels without a dictionary since the authors used so much slang.

(The Changing English Language)

(A)

Last week syndicated Columnist Max Lerner, a liberal, added a complaint that the press has created an undeserved "ordeal of ridicule" for Ford that "will affect not only his personal showing against Reagan, which isn't so important for the nation, but also the Administration conduct of foreign and domestic policy, which is."

(Time Jan. 12 1976)

(φ-pl)

While his proposals prompted complaints from some experts that he would have to curtail essential government services to finance his incentives, and that they would be inflationary to boot, the speech marked an upturn in his poll showings and even touched off a stock-market rally.

(Newsweek Dec. 15 1975)

conviction

(T-s)

But when I began to work for Esperanto, I met with so many difficulties, that willy-nilly I had to let my hands fall, and reached the conviction that the world was not yet mature enough for this great idea.

(Zamenhof)

(G-s)

Then, too Dewey had become aware of several particulars that reinforced his conviction that at least one of the murderers was emotionally involved with the victims, and felt for them, even as he destroyed them, a certain twisted tenderness.

(In Cold Blood)

(A)

There was no way of knowing whose job would finally be adopted, but he felt a profound conviction that it would be his own.

(1984)

(there-D-s)

Deep down, there is some sort of inherited conviction that they have the right to be the arbiters of Ireland's destiny and that, in pursuance of that right, they can take human life.

(Reader's Digest August 1975)

declaration

(G-s)

Ford in effect acknowledged the same thing with his declaration that America's war in Vietnam was finished.

(Newsweek May 5 1975)

(A)

These consisted in a form to be filled up with the applicant's name, age, and school; a solemn declaration to be signed that he would read a set portion of Holy Scripture every night for a year; and a request for half a crown.

(Of Human Bondage)

demand

(T-s)

They particularly objected to the demand that the Communists should formalize their tacit support of the government. (Time Jan. 19 1976)

(G-s)

In doing so, Tokyo agreed to Peking's demand that the treaty include a clause opposing "hegemony"—China's current code word for Moscow's expansionist (in the Chinese view) foreign policy. (Time Jan. 26 1976)

(A)

Loosely based on Homer's *Odyssey*, with Yul Brynner playing the Greek wanderer, the show had endless problems during a yearlong eleven-city tour, including a demand by Writer Erich (Love Story) Segal that his name be removed from the credits. (Time Jan. 19 1976)

(ϕ -pl)

Unlike his predecessor, Edgar F. Shannon Jr., Hereford refused demands that he renounce his Farmington membership. (Time Feb. 9 1976)

demonstration

(T-s)

And he went on: "The demonstration that wonderful people *can* and do exist—even though in very short supply and having feet of clay—is enough to give us courage, hope, strength to fight on, faith in ourselves and in our own possibilities for growth." (Time Feb. 9 1976)

(G-s)

But once more the phenomena concerning morphology, agreement and word order are not incompatible with cycle-terminating (semi-) subject-formation, as is his demonstration that the choice of ergative *v.* subject morphology can be based on quite superficial syntactic considerations (cf. e.g. the phenomena from Chukchee noted above). (On Case Grammar)

(A)

The forecast was a dramatic demonstration that scientists are on the verge of being able to predict the time, place and even the size of earthquakes—which, along with floods, fires and landslides they have triggered during recorded history, have taken millions of lives. (Reader's Digest Feb. 1976)

fear

(T-s)

Although the pain had brought the sweat out on his forehead, the worst of all was the fear that his backbone was about to snap. (1984)

(G-s)

We talked some more, mostly of his fear that his work on Parkinson's would be incomplete if he died, hamstrung by bureaucracy, mired in "a conspiracy of second-rate minds." (Reader's Digest Oct. 1975)

(A)

The predominant reason for all the hostility and resentment seemed to be a fear that the new arrivals would quickly join the welfare rolls and perhaps even compete with out-of-work Americans scarce jobs. (Newsweek May 12 1975)

(there-A)

There was a lingering fear in Washington last week that, in the chaos of the final collapse of Saigon, even more American lives might be lost.

(Newsweek May 5 1975)

(ϕ -s)

No prudent Italian politician would think of accepting any money now, for fear that his face might appear the next day in some American newspaper.

(Time Jan. 19)

(there- ϕ -s)

Even though the U. S. was still mired in its most painful postwar recession, there was already widespread fear that too much government stimulus now might cause an even worse boom-bust in 1976 or 1977. (Newsweek May 12 1975)

(ϕ -pl)

A short time later, the crunch of another explosion triggered fears that a mortar shell had hit the embassy. (Newsweek May 12 1975)

(there- ϕ -pl)

Although most Lebanese began breathing easier for the first time in weeks, there were fears that the truce was a fragile one and could again dissolve into fighting. (Time Feb. 9 1976)

feeling

(T-s)

The worst thing was the pain in his belly. For a couple of minutes he had the feeling that he would die if he did not reach a lavatory soon. (1984)

(there-T-s)

Here the situation is a little more complicated, since it would appear that in the English of both Britain and the North American continent there has slowly arisen

the feeling that there is something vaguely improper or ill-mannered about the use of the pronoun 'me'. (The Changing English Language)

(G-s)

He was a little horrified by her feeling that her body was a commodity which she could deliver indifferently as an acknowledgement for services rendered.

(Of Human Bondage)

(A)

He had a queer feeling that by accepting every humiliation, by going out to meet it even, he was forcing the hand of fate. (Of Human Bondage)

(there-A)

Today there is a genuine feeling that he has a very good chance of being the third member of the Nehru family to become Prime Minister. (Time Feb. 2 1976)

(N-s)

The news gave him a peculiar shock. It reminded him of his own mortality, for like everyone else Philip, knowing perfectly that all men must die, had no intimate feeling that the same apply to himself; and Hayward's death, though he had long ceased to have any warm feeling for him, affected him deeply.

(Of Human Bondage)

(D-s)

The new-born child does not realize that his body is more a part of himself than surrounding objects, and will play with his toes without any feeling that they belong to him more than the rattle by his side; and it is only by degrees, through pain, that he understands the fact of the body.

(Of Human Bondage)

(there-D-s)

He was only happy while he was working and when he got into bed. And often there recurred to him then that queer feeling that his life with all its misery was nothing but a dream, and that he would awake in the morning in his own little bed in London.

(Of Human Bondage)

(there-φ-s)

Laird: I agree that the United States ought to put its economic house in order forthwith. But there is widespread feeling that we cannot be expected to solve the problems of the West all by ourselves.

(Reader's Digest Sep. 1975)

guarantee

(T-s) (T-pl)

However tightly the decision had been held, it would later become clear that the President had approved, for five days, a breach in the guarantees that the American Constitution holds for its citizens: freedom of religion, speech, press, peaceful assembly; freedom from unreasonable search and seizure; and the further guaran-

tee that no person shall “be deprived of life, liberty, or property, without due process of law.” (Reader’s Digest July 1975)

(A)

President Franjeh acted [on the Syrian initiative] when he had a guarantee that what was accepted would be implemented. (Time Feb. 2 1976)

(N-s)

The declarations by some European Communist parties of new objectives contain no guarantee that they will be kept. (Newsweek March 15 1976)

(there-N-s)

Unlike the acts of the other party are subject to public opinion, to the press and to a freely elected parliament, there is absolutely no guarantee that any agreement will not be broken overnight. (Reader’s Digest Nov. 1975)

(there-D-s)

If Hanoi’s men hang on in key positions, Vietnam’s, traditional north-south rivalry could surface again. Nor is there any guarantee that the Communists can transform southern submissiveness into the enthusiasm needed to make the new system really go. (Newsweek May 3 1976)

(ϕ -pl)

Last week Foreign Minister Khaddam, after a meeting with the Palestine Liberation Organization’s Yasser Arafat, gave guarantees to Lebanese Christians that the fedayeen would abide by prior (but mostly ignored) agreements to restrict their military activities within Lebanon. (Time Feb. 9 1976)

hope

(T-s)

People have expressed the hope that when the Maya hieroglyphics are fully deciphered, they will disclose what it was that killed the Maya culture.

(Reader’s Digest Sep. 1975)

(T-pl)

The Administration’s response to Chou’s death was a verbal sign of the importance Washington attaches to Sino-American relations and, by indirection, of the hopes it has that Teng will continue Chou’s policies. (Time Jan. 19 1976)

(A)

But others, including Britain’s Foreign Secretary, James Callaghan, expressed a hope that with Vietnam behind it, the U. S. would refocus its attention on the collective security of Western Europe. (Newsweek May 12 1975)

(there-A)

Despite its gains on the battlefield, there is still a slight hope that Agostinho Neto’s Luanda government might consider some sort of political settlement with

UNITA before long.

(Time Feb. 9 1976)

(N-s)

The White House even at this early stage held out almost no hope the Cambodians could be persuaded to release the Mayaguez voluntarily.

(Newsweek May 26 1975)

(there-N-s)

There are 30-odd major species of table-grade fish, many of which are overfished. And there is little hope that overfishing will cease.

(Reader's Digest June 1975))

(there-D-s)

He then analysed the question along the lines: was an international language needed? was it, in principle, possible? was there any hope that it might be put into practical use?

(Zamenhof)

(D-s)

The regulars hold out some faint hope that somebody can embarrass Wallace somewhere in the primaries—perhaps Lloyd Bentsen in Tennessee—or that his chancy health will force him from the field.

(Newsweek June 2 1975)

(D-s)

The trouble was that few Bostonians held out much hope that White, or anyone else, would emerge as a peacemaker.

(Newsweek May 3 1976)

(there-D-s)

And although Premier Rashid Karami announced a cease-fire late in the week, there was not much hope it would hold for long.

(Newsweek Jan. 26 1976)

(there-D-s)

But suddenly last week there was a glimmer of hope that a sensible dialogue between the industrialized and underdeveloped nations could be joined.

(Newsweek May 26 1976)

(ϕ -s)

An aristocrat by birth and a revolutionary by conviction, Vayo never lost hope that the Franco regime would be toppled.

(Newsweek May 19 1975)

(there- ϕ -s)

There is hope that the food situation will improve, but the present scarcity of quality consumer goods is already built into the new five-year plan.

(Time March 8 1976)

(ϕ -pl)

The reason for the delay is that he cherishes hopes that President Ford may tap him as his 1976 running mate.

(Newsweek May 3 1976)

(there- ϕ -pl)

Like several other informants, this source was careful to say that the intention

had been to “eliminate” Castro ; there were at least perfunctory hopes that he could be removed from power without shedding his blood. (Newsweek June 2 1975)

implication

(T-s)

Shultz had a score of charges, but underlying them all was the implication that because of community pressure, Fleming and Smith had deliberately neglected their duties. (In Cold Blood)

(A)

On a number of occasions—most recently on ABC, two days after the three London policemen were murdered, a programme for which Lord Hill apologized—the police have been shown either as a gang of bullies or as a jest with a subtle implication that they are a force for which no intelligent person would have any respect. (Good-bye)

indication

(T-pl)

The first indications that life was astir are vestiges of comparatively simple and lovely things ; the shells of small shellfish, the stems and flower-like heads of zoophytes, seaweeds, and the tracks and remains of sea-worms and crustacea. (Wells)

(A)

“This deal is a clear indication that the Soviets are still committed to cooperating with the West,” trumpeted one high-ranking West German diplomat.

(Newsweek Dec. 15 1975)

(N-s)

Smith then invited Britain to suggest possible means to a solution but gave no indication he would retreat from his frequently expressed vow that black majority rule would never occur “in my lifetime,” a position London has always rejected.

(Time March 1 1976)

(there-N-s)

The report noted prominently that there was “no indication that either of the giant banks...faces any immediate financial difficulties,” but it added that Chase had been criticized for “poor” management and “horrendous” operating conditions, while fully 9 per cent of all of Citibank’s outstanding loans fell into the questionable category. (Newsweek Jan. 26 1976)

(there-N-pl)

There were no indications, however, that a complete evacuation of American Embassy personell was in the immediate offing—nor did it seem that the Laotian

Government wanted to break off with the United States entirely.

(Newsweek June 2 1975)

(D-pl)

English is not so semi-subject-forming ((127) can be maintained); but we shall in a moment consider some indications that it is only partially subject-forming, i. e. that there are constructions in English which apparently lack subject-formation.

(On Case Grammar)

(D-pl)

By noon we arrived at a village that serves as a retreat and rest area supposedly by prearrangement, but it is only the first of several indications that internal communications carried by foot and messenger are not always perfect.

(Time Feb. 9 1976)

(there- ϕ -pl)

There were indications last week that the government of India was preparing to announce a similar program for its employees throughout the country.

(Time March 8 1976)

objection

(T-s)

Unfortunately the practical result of this state of affairs is that anyone saying that a particular word beginning with 'un-' has only just begun to appear in English lays himself open to the objection that it has probably been current for a very long time, and that the mere fact that it is not listed in a dictionary does not suffice to disprove its existence in earlier years. (The Changing English Language)

(A)

While Mr Justice H. E. Davies was presiding over the trial of these alleged terrorists he ruled on an objection by defence counsel that laws made by Mr Ian Smith's Government were illegal. (Good-bye)

persuasion

(T-s)

She completely dispelled the persuasion that Asia was in some irrevocable way hopelessly behind Europe. (Wells)

(A)

He received considerable support from the big industrialists and financiers because they had a perhaps exaggerated idea of the ability of the 'red' revolutionaries to expropriate them and a fond persuasion that after his adventurer had served his purpose as a strike-breaker they would be able to control him. (Wells)

prediction

(G-s)

Since output per man-hour is rising as production picks up, the Council of Economic Advisers regards that prospect as no threat to its prediction that the rate of inflation will slow to 6% this year, from 9.2% in 1975. (Time March 8 1976)

(A)

Despite a \$20 million advertising campaign and a company prediction that "several million" of the cameras would probably be sold in the first year, Polaroid actually managed to sell only 470,000 SX-70's in 1973. (Newsweek May 3 1976)

(ϕ -pl)

Early predictions that a massive transfer of wealth to the oil-producing states would cripple the industrial world's financial and production systems have proved unfounded. (Time Jan. 19 1976)

(there- ϕ -pl)

At week's end there were predictions that Britain and France were also considering recognition. (Time Feb. 23 1976)

promise

(G-s)

According to Soviet statistics published last month, Brezhnev's promise in 1971 that production of consumer goods would be raised by at least 44% during the five-year plan fell 11% short of its goal. (Time March 8 1976)

(G-pl)

The two branches of government clashed again over a bit of now-ancient history: Richard Nixon's secret promises to Saigon that the U. S. would respond "with full force" if North Vietnam violated the Paris accords.

(Newsweek May 12 1975)

(A)

As short a time as February, the Ministry of Plenty had issued a promise (a 'categorical pledge' were the official words) that there would be no reduction of the chocolate ration during 1984. (1984)

(D-s)

Another is the fact that despite a personal visit to Peking by President Ne Win last November, the Chinese refuse to make any promise that they will stop giving aid to Burmese insurgents. (Time Feb. 9 1976)

(ϕ -pl)

Declared the President: "The American people know that promises that the Federal Government will do more for them every year have not been kept. I make no such promises. I offer no such illusion." (Time Feb. 2 1976)

proof

(T-s)

So we come at long last to the proof that even a major unclear power can find itself by weakness with the same choice as a cornered rat.

(Reader's Digest Sep. 1975)

(A)

'With the greatest respect, Lord Mayfield, you imagined you saw him. The shadow cast by the branch of a tree deceived you. The fact that a robbery occurred naturally seemed a proof that what you had imagined was true.'

(Christie)

(there-N-s)

Concludes Parlee: "We believe that hormonal change brings certain sensory change, but there is no scientific proof that the hormones make any difference in a woman's behavior."

(Time Feb. 23 1976)

(D-s)

'You mean they usually leave a letter when it's suicide?'

'Exactly.'

'In fact, one more proof that it *isn't* suicide?'

He moved away.

(Christie)

(ϕ -s)

To Patty, the attack was proof that the FBI would not hesitate to kill her.

(Time Feb. 23 1976)

proposal

(T-s)

A number of apparent counter-examples to the proposal that subject-formation is of this character seem to depend on analyses which are inadequate on other grounds.

(On Case Grammar)

(A)

Castro also responded enthusiastically to what amounted to a Latin version of Ping Pong diplomacy: a proposal by McGovern that American baseball and basketball teams visit Cuba and a request that the parents of Boston Red Sox pitcher Luis Tiant be allowed to travel from Cuba to the U. S. to see their son play major-league ball.

(Newsweek May 19 1975)

(there-D-pl)

There have been a number of proposals that the topic of a sentence be characterised by the presence of a NP which originates outside the S which 'comments' on that NP, and is at some point sister to the S.

(On Case Grammar)

realization

(T-s)

One decisive ingredient of recovery will be the realization that international economies are now closely interwoven and becoming more so. (Time Feb. 2 1976)

(there-T-s)

There was still one final scene to be played out—the evacuation of the last Americans in Saigon—and that could yet turn ugly, and perhaps even bloody. Then, too, there was the anguished realization that it would be impossible for the U. S. to rescue all of the thousands of South Vietnamese who had staked their lives on American's commitment to their country. (Newsweek May 5 1975)

(there-A)

There was a slow realization on the part of the American people that it had been rushed into something for which it was totally unprepared. (Wells)

recognition

(T-s)

But by all accounts, Ford has earned his laurels, spending more time in detailed probing than any President since Harry Truman. “He has the simple recognition that you have to go behind the numbers,” says Lynn. (Newsweek Jan. 26 1976)

(A)

The existence of the usage is at any rate a healthy recognition that appearance and reality are not the same thing. (The Changing English Language)

(ϕ -s)

None of us wanted to destroy a country, while the P. L. O. wants to destroy our state. To the extent they are gaining recognition it is very ugly expression of appeasement. (Time Jan. 19 1976)

(there- ϕ -s)

In business college, psychology research centers and large corporations today, there is increasing recognition that the factor of motivation may be more important than many others in making such predictions. (Reader's Digest June 1975)

recommendation

(G-s)

Barry Goldwater's 1964 proposal to make Social Security voluntary and George McGovern's 1972 recommendation that the Government pay every American \$1,000 a year. (Time Jan. 19 1976)

(A)

The university had decided to adopt a recommendation of the American Medical Association that any player with only one of pair of vital organs should be

disqualified from contact sports.

(Time Jan. 12 1976)

remark

(T-s)

He recalls the remark of an associate, "made after an evening visit to my studio, that I was Hitler's unrequited love."

(Time Feb. 23 1976)

(G-s)

He quoted Sadat's remark to Congress that "there is no substitute for direct person-to-person contact" and then won applause by adding, "I wish that he would direct those words to me as well as to you."

(Time Feb. 9 1976)

(A)

"One day Diane overheard a size-16 matron remark that the dresses were too young-looking for her," recalls David Salz of Saks Fifth Avenue.

(Newsweek May 3 1976)

reminder

(there-T-s)

Yet when it has been conceded that there has been in some respects a movement away from the subjunctive there must be added the reminder that the situation is at present complicated by a current of influence flowing once again from the United States where it so happens that this verbal mood is held in high esteem.

(The Changing English Language)

(A)

This is a reminder that the term no longer denotes a mere band of precursors leading to a future stage of development, but indicates a movement in its own right.

(The Changing English Language)

(D-s)

And the possibility of a bunker—or army-backed—coup is yet another reminder that the France regime was not only bad for Spain because of its curbs on civil liberties; it was also because El Caudillo's neglect of the problems of a highly sophisticated and advanced industrial state have made it so difficult now to meet the needs of the new Spain of the '70s.

(Newsweek Feb. 23 1975)

(there-D-pl)

But there are plenty of reminders that the Arctic is on the doorstep.

(Reader's Digest Jan. 1976)

report

(T-s)

It wasn't until two hours later that the report that all 39 crewmen safely abroad the U. S. S. Wilson was relayed to the President by Defence Secretary James

Schlesinger.

(Newsweek May 26 1975)

(T-pl)

A. E. Houseman's "Epitaph on an Army of Mercenaries" has a macabre ring in Britain today, following the reports from Angola that at least twelve British mercenaries serving with the FNLA forces were lined up and shot by a firing squad of other British-hired troops, who were serving with the same army, and were compelled to carry out the killing of their comrades because they were being threatened with death themselves if they did not obey the order.

(Newsweek Feb. 23)

(A)

I recalled a recent report that the Menninger Foudation in Topeka, Kan., had "incontrovertible proof" that some of its patients could control blood circulation and body temperature with will power, literally wishing away such afflictions as migraine headaches.

(Reader's Digest August 1975)

(ϕ -pl)

The new shock came in newspaper reports that the Iraqi government had offered the money, presumably in exchange for assurances that the Australian government would adopt a strong pro-Arab position on the dispute in the Middle East.

(Time March 8 1976)

(there- ϕ -pl)

There were even reports that South Africa was preparing a plan to make peace and withdrew its troops from southern Angola before they could get into a perilous confrontation with the army of the Popular Movement. (Newsweek Feb. 23 1976)

request

(T-s)

The Introduction began with the modest request that the reader should cast aside prejudice and examine the matter 'seriously and critically'. (Zamenhof)

(A)

Ophelia recently contacted a number of militant Jews in Moscow with a request that they provide her and her companions—none of them Jewish—with invitations to join "relatives" in Israel.

(Newsweek Dec. 15 1975)

requirement

(T-s)

However it may be that the sequence-preserving constraint must be weakened to the requirement that NPs may not change their precedence relations.

(On Case Grammar)

(T-pl)

The notion 'possible transformation' is in principle further constrained in terms of the requirements that they comply with conditions of learnability and that they be relatable to some communicative function. (On Case Grammar)

(G-s)

A similar constraint is imposed by Chomsky's (1965) requirement that grammatical functions be definable in terms of immediate dominance relations, which again requires that only one instance of any category be immediately dominated by a particular node. (On Case Grammar)

(A)

What is excluded, then, is a requirement that certain rules must apply arbitrarily in a certain order in order to account for varying acceptabilities.

(On Case Grammar)

(there-A)

In addition, there is a requirement that the intonation center (see Chomsky, 1969) must occur within this constituent. (Studies in Linguistic Semantics)

(there-N-s)

Notice too, on the other hand, that the controller apparently cannot be uniquely specified on the basis of grammatical relations. There is certainly no general requirement the controller, if obligatory, always be an object, for instance.

(On Case Grammar)

(D-s)

What will be necessary here is some requirement that the scope of *even* can be a noun phrase only if some part of the noun phrase has not been extraposed.

(Studies in Linguistic Semantics)

rule

(T-s)

What is interesting is that there are grounds for thinking that it is the American pronunciation which is the older, quite apart from the useful rule that the pronunciation which is closest to the spelling is most likely to be the new-fangled one, since precisely it is a mere spelling pronunciation. (The Changing English Language)

(A)

How, for example, the school board had a rule that no high-school band could play at a political rally to be nonpartisan. (Reader's Digest July 1975)

rumo(u)r

(T-s)

The new Communist-led government began evacuating some of the 1.4 million refugees who had crowded into Phnom Penh by spreading the rumor that the U. S.

was planning to bomb the capital. (Newsweek May 5 1975)

(T-pl)

Because Wallace had come to town for the conference, his failure to take part in the candidates' forum at first produced the inevitable rumors that he was ailing.

(Newsweek Dec. 15 1975)

(A)

'Good evening, Major Riddle. I heard a rumour that Sir Gervase had shot himself, and I hurried up here. Snell tells me it's true. It's incredible! I can't believe it!'

(Christie)

(there-A)

For a time there was a rumour that he had been taken off a train and sent to a prisoner-of-war camp, but there was no foundation for this. (Zamenhof)

(ϕ -pl)

At one point during the week Alan Carter, the U. S. Embassy's public-affairs counselor, appeared on Vietnamese television in an effort to quell rumors that U. S. aid was being ended.

(Newsweek May 5 1975)

(there- ϕ -pl)

There were rumors last week that some big corporate depositors, concerned over the safety of their funds, have begun to pull money out of New York institutions and place it in regional banks untouched by the crisis.

(Newsweek Dec. 15 1975)

sense

(T-s)

The ending '-dom' was at one time thought to be 'dead' in the sense that it could no longer be used to create new words. (The Changing English Language)

(A)

The war also comes at a time when Cubans have a growing sense that their own revolution is success.

(Newsweek Jan. 26 1976)

(D-s)

If he had any sense he would stick to Norah, she would make him much happier than he would ever be with Mildred: after all she loved him, and Mildred was only grateful for his help.

(Of Human Bondage)

sign

(T-s)

The '-er' ending is simply the sign that the adjective is German in origin.

(The Changing English Language)

(T-pl)

Company evenings at home have proliferated in recent weeks—mostly, according to one family member, with “old, old friends from the past” responding to the signs that Nixon’s blue period is abating. (Newsweek May 19 1975)

(A)

Mrs. Tipps didn’t know what to say. For those long years, she had watched for a sign that her son was emerging from the shadows. (Reader’s Digest Feb. 1976)

(N-s)

She gave no sign that she had ever seen him before. (Of Human Bondage)
(there-N-s)

Significantly, diabetics have been consuming saccharin for years, yet there is no sign that they have a higher than normal cancer risk. (Newsweek Jan. 26 1976)

(D-s)

But he had trained himself not to show any sign that the reminder wounded him. (Of Human Bondage)

(there-D-s)

At the weekend, however, there was no sign that the Japanese would accept the offer—and there was every sign that Kodama himself would risk a tax-evasion charge rather than spill any secrets. (Newsweek Feb. 23 1976)

(D-pl)

Do you see any signs that the recession is ending? (Newsweek May 5 1975)

(there-D-pl)

But there are finally some signs that the moderates, led by Wilson and Chancellor of the Exchequer Denis Healey, are willing to take a stand.

(Newsweek May 26 1976)

(there-D-pl)

Throughout the twelfth century there were many signs that the European intelligence was recovering courage and leisure, and preparing to take up again the intellectual enterprises of the first Greek scientific inquiries and such speculations as those of the Italian Lucretius. (Wells)

(there-D-pl)

Still, there have been a few promising signs that the Bangkok government had begun to think more seriously about some of its internal problems.

(Newsweek May 19 1975)

(ϕ -s)

That was one sign that they had a high degree of achievement motivation.

(Reader’s Digest June 1975)

(ϕ -pl)

Both the highly visible role played by Khaddam and the participation of Syrians or the truce teams were signs that Damascus had emerged, at least for the

moment, as the most effective Arab power in the Middle East. (Time Feb. 9 1976)
(there- ϕ -pl)

Last week there were new signs that both the U. S. and South Africa were deeply involved on the rebel side. (Newsweek Dec. 15 1975)

statement

(T-s)

The same newspaper once published a letter from a reader with a hyphenated name who expressed indignation about the statement of a Cabinet minister that 'We are not suckers'. (The Changing English Language)

(G-s)

For evidence, they point to U. S. Defense Secretary James Schlesinger's recent statement that America would like to keep a "residual force" in Thailand.

(Newsweek May 19 1975)

(A)

"As you know, we have seized the ship," Nessen said, "As soon as you issue a statement that you are prepared to release the crew members that you hold, unconditionally and immediately, we will promptly cease military operations."

(Newsweek May 26 1975)

suggestion

(T-s)

Denying the suggestion that Steve's move is really an attempt to leave college, the White House pointed out that he has enrolled at California State Polytechnic University in Pomona and will attend classes there. (Time Jan. 19 1976)

(G-s)

Will gladly followed Dr. Bull's suggestion that he go home for the rest of the night. (Cancer)

(A)

A Third Programme discussion (9 June 1963) on changes in the English language included a suggestion that the expression 'You've never had it so good' had found its way to America after being invented by the then prime minister, Mr. Harold Macmillan. (The Changing English Language)

(there-A)

Indeed there is a suggestion in the article mentioned below that modern legislation has provided a large number of models for the usage.

(The Changing English Language)

(there-N-s)

Similarly in '...at least half the cardinals came from unrich families' (*Observer*,

12 Oct. 1958) there is no suggestion that 'unrich' means 'poor'.

(The Changing English Language)

(ϕ -pl)

There have been harsh words in Parliament for the whole operation, but suggestions that these men were only doing the duty the West shirked have met with little response: the mercenaries were too obviously not motivated by any desire to stop a Soviet regime being set up in Angola. (Newsweek Feb. 23 1976)

suspicion

(T-s)

He was an obstinate fellow, and the suspicion that his talent did not lie in one direction made him inclined to force circumstances and aim not with standing precisely in that direction. (Of Human Bondage)

(G-s)

Wilbur admitted that this was a crude device. Still, it did seem to confirm his suspicion that Lilienthal's tables were inaccurate and that much more wing area was required. (Reader's Digest Feb. 1976)

(A)

Say Sir Bervase suspects that Bury has deliberately fleeced him, but he doesn't want publicity because of a suspicion that his wife may be mixed up in it.

(Christie)

(there-N-s)

There must be no suspicion that you have tampered with the room. (Christie)

(there-D-s)

'As there has never been any suspicion that this is a Bad House, I must ask you all to leave.'

(The Burnt Ones)

(ϕ -s)

Studying the tapes of the conversation, language experts claimed that both women were Puerto Rican, which raised suspicion that there might be some kind of connection with the Puerto Rican terrorist group. (Time Jan. 12 1976)

(ϕ -pl)

Statements like that have raised suspicious that the menstruation issue is just one more doctrinaire attack by working feminists on women who are housewives and mothers. (Time Feb. 23 1976)

understanding

(T-s)

And during my last visit in the U. S., we've reached the understanding that the next step will be negotiations to end the state of war between the Arab states and

Israel.

(Newsweek May 3 1976)

(A)

In this episode, Moynihan sidestepped a tacit understanding that Washington and Moscow would not attack each other by name at the U. N. —an arrangement that dates back to the Nixon Administration's first experiments with *détant*.

(Time Jan. 26 1976)

(there-A)

Perhaps there was a silent understanding that rumors should be ignored.

(Cancer)

warning

(T-s)

Sentenced without trial to a fifteen-year term in a labor camp, Dolgun was granted conditional release in the general amnesty for political prisoners in 1956, with the warning that if he tried to get in touch with his embassy he would be sent back to prison for life.

(Newsweek May 19 1975)

(A)

The address was widely interpreted as an indirect warning that he would brook no delays.

(Newsweek March 15 1976)

(ϕ -pl)

My researches had led through copious quantities of conflicting opinion, ranging from Romulus-and-Remus-like tales of wolves adopting human infants to outright warnings that Bobo would eat our babes for sure.

(Reader's Digest April 1976)

(there- ϕ -pl)

In both Israel and the U. S., however, there were increased warnings that Rabin's government eventually would have to find some way of negotiating with the Palestinians.

(Newsweek Dec. 15 1975)

wish

(T-s)

Philip often discerned the wish that the child might be born dead or might die quickly.

(Of Human Bondage)

(G-s)

Litvinov's gesture conveyed nothing to the British Foreign Office, which indeed, since the Russian Revolution, never seems to have observed any occurrence in Russia that it could possibly avoid seeing. Its wish that Russia would not exist has been simple and plain.

(Wells)

(A)

He asked how long he could stay, and when Philip told him he must leave on Tuesday morning, expressed a wish that the visit might have been longer.

(Of Human Bondage)

II

awareness

(T-s)

The regislative's new fiscal conservatism stems from the spreading awareness that if it overspends in its efforts to end the recession, it will merely set the stage for an overexuberant boom followed by a worst-in-decades bust.

(Newsweek May 12 1975)

(G-s)

Had it not been for the birth of Yekaterina and their awareness that divorce would preclude them from their common goal of going overseas, they certainly would have separated.

(Reader's Digest August 1975)

(A)

Perhaps partially as a result of his work experience in Russia, the premier has a down-to-earth awareness that government money comes out of the pockets of the people, and a conviction that ostentation and high living make an unsuitable way of life for a public official.

(Reader's Digest Oct. 1975)

certainty

(T-s)

It was more natural to exist from moment to moment, accepting another ten minutes' life even with the certainty that there was torture at the end of it. (1984)

(G-s)

"I was struck by their conviction that Nixon's people were behind it and their cynical certainty that the strong would never get out." (Newsweek June 2 1975)

(A)

The basis of his fear, or so he himself seemed to believe, was a newly grown superstitious certainty that 'whatever had to happen won't happen' as long as he and Dick 'stick together'.

(In Cold Blood)

(there-D-s)

However, the EEC blueprint for the new era of extended fishery waters would not solve all the problems that such major fishing nations as Britain and West Germany now face. Nor is there any certainty that the EEC members can agree among themselves.

(Newsweek March 15 1976)

(ϕ -s)

In order that an international language may progress well and regularly and have complete certainty that it will never disintegrate and that some careless step by its future friends may not destroy the work of its past friends, one condition is above all most necessary. (Zamenhof)

likelihood

(T-s)

In addition, irradiation of men and women during their reproductive years increases the likelihood that their offspring will develop leukemia.

(Newsweek Jan. 26 1976)

(there-A)

It is an axiom of students of language that poor communications hinder linguistic change whereas ease of intercourse fosters it, and so at a time when words and phrases are carried all over the world on the magic carpet of science there must be a strong likelihood that a novelty of speech will more easily find a place for itself than before in the permanent fabric of English. (The Changing English Language)

(there-N-s)

"I do not want to go back," said one French-educated former Laotian official. "It is impossible for us to live like them." And in fact, there is little likelihood that they will have to.

(Newsweek March 15 1976)

(there-D-s)

The distinction is rather favoured by B. B. C. announcers—very conscious of the written text—but there does not at the moment appear to be any likelihood that it will soon be adopted by the public in general. (The Changing English Language)

(there-D-s)

In a technological society there is every likelihood that 'robot' has a longcareer ahead of it, in application to either people or machines.

(The Changing English Language)

possibility

(T-s)

The possibility that anything of the sort could happen had never crossed his mind.

(Of Human Bondage)

(there-T-s)

There was, of course, still the possibility that the workers would reject the Chrysler offer, although the first reaction of the strike leaders was generally favorable.

(Newsweek June 2 1975)

(there-A)

Come March 15, the world's maritime nations are scheduled to meet in New

York for a United Nations-sponsored Law of the Sea conference and there is a distinct possibility that when they do, they will endorse proposals to extend all national fishery waters to 200 miles. (Newsweek March 15 1976)

(there-N-s)

There is no possibility that any perceptible change will happen within our own lifetime. (1984)

(D-s)

The Secret Service has already ruled out any possibility that Ford will toss out the first ball of the baseball season next spring. (Time Jan. 5 1976)

(there-D-s)

There is also some possibility that whole new phrases will be modelled on it, and HALFA CROWNA LANCHA DAY has already been seen on the window of a snack-bar. (The Changing English Language)

(there-D-s)

Now, Charles, I must take you into my confidence—that is to say : I do not wish to upset your mother—but there is every possibility that I may not last so very much longer. (The Burnt Ones)

(D-s)

It is perhaps a measure of just how seriously the post-Franco government takes that possibility that Premier Carlos Arias recently barred officers on active duty with Spain's armed forces from having any contact with Girón.

(Newsweek March 15 1976)

III

chance

(there-T-s)

'Well,' Dewey had replied, 'that's all I think about. And there's the chance that just while talking the thing over, I'll hit on something I haven't thought of before

(In Cold Blood)

(there-A)

"I should take it out, but with Gene's condition I don't know how he will react to anesthesia. There is a chance that he could die or sink into a deep coma."

(Reader's Digest Feb. 1976)

(there-N-s)

They left after doctors told them that there was virtually no chance that Oscar would survive. (Reader's Digest July 1975)

danger

(T-s)

In a place like this the danger that there would be a hidden microphone was very small, and even if there was a microphone it would only pick up sounds.

(1984)

(there-A)

But clearly, if Soares succeeds too well, there is a danger that someone might try to change the rules of the match.

(Newsweek May 12 1975)

(there-N-s)

The common-room was unanimous in desiring the election of Mr. Watson, headmaster of the preparatory school; he could hardly be described as already a master of King's School, they had all known him for twenty years, and there was no danger that he would make a nuisance of himself.

(Of Human Bondage)

(there-D-s)

There is some danger that the noun may be short-lived, since in court proceedings attractive young women without visible means of support are in the habit of claiming to be professional models.

(The Changing English Language)

(there- ϕ -s)

As the hours dragged on, the cold got increasingly cruel. There was danger that the air pocket would disappear.

(Reader's Digest Jan. 1976)

doctrine

(T-s)

Thus arose the Monroe Doctrine, the doctrine that there must be no extension of extra-American government in America, which has kept the Great Power System out of America for nearly a hundred years and permitted the new states of Spanish-America to work out their destinies along their own lines.

(Wells)

(A)

The Sabellians taught that Jesus was merely an aspect of the Father, and that God was Jesus and Father at the same time, just as a man may be a father and a artificer at the same time; and the Trinitarians taught a more subtle doctrine that God was both one and three, Father, Son, and Holy Spirit.

(Wells)

extent

(T-s)

For, on the drive to Sounion, the couples were separated to the extent that Kikitsa sat with Spiro in front, Maro and Aleko were disposed of behind.

(The Burnt Ones)

(A)

They may have been exaggerated fears. Finnish guns certainly commanded

the approach to Petersburg to an extent that no other power would have tolerated.
(Wells)

generalisation

(T-s)

Indeed such a derivation expresses the generalisation that lexicalisation in the upper clause is not independent of the coreference relation holding between one of its arguments and an (already lexicalised) argument in the embedded sentence.

(On Case Grammar)

(A)

Now, we can formulate a generalisation that these various NPs, whatever their case, can occur in the *by*-phrase in a 'passive' sentence if there also exists a corresponding 'active' sentence (i. e. one otherwise identical except in lacking these characteristics) in which the NP occurs in subject position (and the 'passive' subject is in object position), as in (62):

(On Case Grammar)

idea

(T-s)

The idea that disease-carrying germs can best be fought by absolute cleanliness is revolutionary.

(Cancer)

(T-pl)

Mikva says that the time has finally arrived "to blow the whistle" on the ideas that Social Security is an insurance program and that the payroll tax is somehow different from other taxes.

(Time Feb. 16 1976)

(G-s)

Men are infinitely malleable. Or perhaps you have returned to your old idea that the proletarians or the slaves will arise and overthrow us.

(1984)

(A)

He knelt down and began picking some, partly to pass the time away, but also from a vague idea that he would like to have a bunch of flowers to offer to the girl when they met.

(1984)

(N-s)

Will had no idea that this game would be considered so big an event, and he couldn't help feeling important as the parade moved on toward its goal.

(Cancer)

(D-s)

One surmises that the growing use of 'radio' in Britain is not due to any idea that 'wireless' is a negative-sounding word but simply because it is the American choice and that is attraction enough for adolescents.

(The Changing English Language)

(D-s)

There is some small evidence from correspondence that one Esperantist had some idea that De Beaufront was suffering, and wanted to help him ; the compassionate one was Ludovic Zamenhof. (Zamenhof)

(D-s)

All that has come to light since those early chapters were drafted stresses this idea that, measured by the precisions of the Radium Clock, the duration of the early ages of the record of the rocks must undergo a quite immense reduction relative to the Cainozoic period. (Wells)

(ϕ -pl)

Other critics feel that Moynihan is so intoxicated by ideas that he is apt to skitter along from one to another. (Time Jan. 26 1976)

illusion

(T-s)

Then you carry up the ashtray—to further the illusion that two people sat up there talking—and you also take up a fragment of enamel cuff-link that is on the floor. (Christie)

(A)

Out of the manifold events of his life, his deeds, his feelings, his thoughts, he might make a design, regular, elaborate, complicated, or beautiful ; and though it might be no more than an illusion that he had the power of selection, though it might be no more than a fantastic legerdemain in which appearances were interwoven with moonbeams, that did not matter : (Of Human Bondage)

(D-pl)

Clearly, we must shed any lingering illusions we may have that détente means the Russians have abandoned their determination to undermine Western democracy and impose their system upon the world. (Reader's Digest August 1975)

interpretation

(T-s)

Nonetheless, coming in the midst of specifically anti-détente remarks by the Chinese, Nixon's statement lent itself to the interpretation that it was a slap at Ford's policy—and thus precisely fitted Peking's mood. (Time March 8 1976)

(A)

(59) a. John broke the window with the chisel

b. John broke the window with the wind

the second of which requires for a natural interpretation that there is involved some mechanically contrived 'wind'. (On Case Grammar)

message

(T-s)

Coming after the visit by Senators Jacob Javits of New York and Claiborne Pell of Rhode Island—who returned with the message that the time was “propitious” for re-examining U. S. policy toward Cuba—the McGovern visit clearly seemed to Castro to be a second stage on the slow mellowing process between the two countries. (Newsweek May 19 1975)

(G-s)

At first, the White House accepted at face value the freighter’s last message that it was being taken into Sihanoukville. (Newsweek May 26 1975)

(A)

Will felt that he had acted in the only way possible, but he was not surprised when, a few days later, he received a message that Dr. Billings wanted to see him. (Cancer)

notion

(T-s)

Many who entertain the notion that because a thing is unpleasant it must be good for them also believe that whatever is pleasant is bad.

(Reader’s Digest April 1976)

(A)

Eventually, he wondered if perhaps he had invented them (a notion that he ‘might not be normal, maybe insane’ had troubled him ‘even when I was little, and my sisters laughed because I liked moonlight. To hide in the shadows and watch the moon’). (In Cold Blood)

opinion

(T-s)

In the most recent Harris Poll, 60% of the population has expressed the opinion that there must have been a conspiracy to murder the civil rights leader.

(Time Jan. 26 1976)

(A)

Appointed by a Federal judge, and working without compensation (but motivated by a hard-held opinion that the defendants had been the victims of a ‘nightmarishly unfair trial’), Jenkins and Bingham filed numerous appeals within the framework of the Federal court system, thereby avoiding three execution dates: 25 October 1962, 8 August 1963, and 18 February 1965. (In Cold Blood)

risk

(T-s)

There was a kind of Attica strain in the attack on the gunboats and the assault on Tang—the conscious risk that the Mayaguez prisoners might be slaughtered by American fire in the first instance or by their Khmer Rouge captors in the second.

(Newsweek May 26 1975)

(there-T-s)

“With the U. S. Government thinking about elections in 1976, there is the risk it will go too far reflating,” explained de Montbrial. “The \$65 million American budget deficit is worrisome.”

(Newsweek May 19 1975)

(there-A)

But I think there is a considerable risk that it could have an inflationary impact on the long-run future.

(Newsweek May 5 1975)

satisfaction

(G-s)

His record at Charterhouse was so brilliant that when he went to Cambridge the Master of Trinity Hall went out of his way to express his satisfaction that he was going to that college.

(Of Human Bondage)

(A)

Philip listened to her enumeration of the qualities which must be possessed by the perfect lover, and he could not help feeling a certain satisfaction that she lived in Berlin.

(Of Human Bondage)

theory

(T-s)

Professor Srejovic had long doubted the theory that all civilization was invented in the Middle East and then spread little by little to the inferior populations of Europe.

(Reader's Digest April 1976)

(G-s)

Einstein was sympathetic to some of Velikovsky's fundamental concepts, but vigorously opposed his theory that space was permeated by magnetic fields, that the sun and planets are charged bodies, and that electromagnetism plays a role in celestial mechanics.

(Reader's Digest Jan. 1976)

(A)

Poppy said: ‘Aleko Philippides has a theory ocean fish are more nutritious than our Mediterranean ones because of the exercise they are forced to take. He told me at Elly Lambraki's.’

(The Burnt Ones)

(there-A)

For example, there is a theory that they exploit the countries in which they

invest and drain funds and resources from those countries without benefiting them.
(Newsweek May 5 1975)

threat

(T-s)

There will probably be many more inquiries, too, since the States Department announced on the day I saw Castro that it was lifting its ban on trade with Cuba by foreign subsidiaries of American companies and was removing the threat that foreign ships might not be able to do business in the United States if they did business with Cuba.
(Reader's Digest Feb. 1976)

(A)

They released a pregnant woman with a threat that the hostages would be slaughtered one by one unless the Dutch allowed the terrorists to escape.

(Newsweek Dec. 15 1975)

VI Cの名詞について

表 4

I \	A(N)	否定限定辞		その他の限定辞		限定辞なし		計
		単	複	単	複	単	複	
accusation				any (1)	a new flurry of 1		2	3(1)
concession	2							2
denial	1	(1)						1(1)
muttering						(1)	(1)	(2)
notice						8		8
pledge	2							2
wonder						2		2
II								
confidence						4(1)		4(1)

III A(N)	否定限定辞		その他の限定辞		限定辞なし		計
	単	複	単	複	単	複	
care					2		2
concern					2(1)		2(1)
consensus	(2)						(2)
inkling	2						2
question		(18)					(18)
talk			a lot of (1)		1(1)		1(2)
tradition	(2)						(2)

表 4 に例の分布を示す。

definite な限定辞の付加した例をもっていない名詞は、このように少数である。各名詞のもつ例も少なく、わずかに question と notice が例を多くもっている。question は、18例すべてが no, little を伴う否定文で、there is 構文の主語として用いられている。care はわずか 2 例であるが take care that 節という固定した表現である。以下に、各名詞のもつ例を示すが、示し方はこれまでと同様である。

I

accusation

(there-D-s)

The voting was, indeed, to be a sense even over-democratic, in that the vote of the most inexperienced beginner was to be worth as much as the vote of Zamenhof himself; but at least there could never again be any just accusation that Zamenhof had refused to listen to the views of others. (Zamenhof)

(D-pl)

Last week Fraser received another boost with a new flurry of press accusations

that Whitlam had in fact known far more than he had let on about efforts by several of his former Cabinet ministers to float mammoth petrodollar loans overseas without bothering to advise Parliament. (Newsweek Dec. 15 1975)

(ϕ -pl)

Elected by a landslide vote, Carter appeared to be a changed man in office—leading to accusations that he had misled the voters. (Time March 8 1976)

concession

(A)

One possible poolhole is a concession by the commission that it will allow pools and small redwood “spas” to be heated “for therapeutic purposes.”

(Time Feb. 23 1976)

denial

(A)

Warner-Lambert’s response was an angry denial that its claims for the mouthwash were inaccurate and a vow to fight the case “to the Supreme Court if we have to.”

(Time Jan. 5 1976)

(there-N-s)

There would be no denial that Patty was in the bank, he said. But he urged the jury to note that “perhaps for the first time in the history of bank robbery, a robber was directed to identify herself in the midst of the act.”

(Time Feb. 16 1976)

muttering

(there- ϕ -s)

There was private muttering that de Gaulle had been right after all in keeping Britain in 1962.

(Newsweek Dec. 15 1975)

(there- ϕ -pl)

The Sponge Rubber Products Co.’s Plant No. 4 in Shelton, Conn., had been a money-losing operation—and when the two-block-long factory exploded and burned to the ground last March 1, there were dark mutterings around the drab mill town that a desperate management had put the torch to the plant in order to collect millions in insurance money.

(Newsweek May 5 1975)

notice

(ϕ -s)

Last week, in two different actions, the press served notice that it would forcefully resist the new gags:

(Time Jan. 26)

pledge

(A)

His Executive order instructs all Government officials who receive intelligence reports to sign a pledge that even after they leave Government, they will not divulge any information about “sources and methods”—sensitive details on names and techniques of U. S. agents and their foreign contacts. (Time March 1 1976)

wonder(ϕ -s)

“I wasn’t looking at you accusingly. I was merely expressing wonder that a son of ours should show such impious tendencies.” (Cancer)

II

confidence(ϕ -s)

Confidence that moderation may prevail in China is inspired by the success of a number of policies favored by Chou and carried out by Teng.

(Time Jan. 19 1976)

(there- ϕ -s)

In Taiwan there is confidence that no such change will occur in 1976.

(Time Feb. 2 1976)

III

care(ϕ -s)

However, to enable the Congress members who are interested in one or another of these questions to discuss them among themselves in private sessions, the Committee has taken care that they shall have at their disposal rooms in which they may meet as they wish. (Zamenhof)

concern(ϕ -s)

In so doing, however, Congress stirred concern that its new assertiveness in foreign policymaking could hamstring the Executive branch. (Time Jan. 5 1976)

(there- ϕ -s)

The airlift of Americans and South Vietnamese met no interference from the Communists, but there was continuing concern in the U. S. Congress that such luck

might not last.

(Newsweek May 5 1975)

consensus

(there-A)

There was a consensus among the economists, however, that whatever is done about the budget will have little effect on the recovery this year.

(Time Feb. 2 1976)

inkling

(A)

His fine taste had given him an inkling that Andalusia was too soft and sensuous, a little vulgar even, to satisfy his ardour ;

(Of Human Bondage)

question

(there-N-s)

There was no question that Patty could handle firearms. (Time Feb. 23 1976)

talk

(there-D-s)

Still, there was a lot of talk at the summit that ASEAN does not face an external threat.

(Newsweek March 15 1976)

(ϕ -s)

"These are people who would be stung up," said AFL-CIO president George Meany, who dismissed talk that the Vietnamese would hurt American workers by competing for scarce jobs.

(Newsweek May 5 1975)

(there- ϕ -s)

There is now talk that the Israeli Arabs, who are citizens of Israel, may band together politically to win greater representation in the Knesset, where they currently have five seats.

(Time Jan. 19 1976)

tradition

(there-A)

As a young man, he studied law—and in Seville, he explains, "there was a tradition that those who obtained a higher education should dedicate their studies to the services of the workers."

(Newsweek March 15 1976)

VII 1 例のみもつ名詞について

I, II, IIIのグループ毎にアルファベット順に例を示した。

I

acknowledgment

If the British Press Government do not know these things it is because they do not wish to, for they would then have to do something about them, and this in turn would produce the humiliating acknowledgment that they have neither the courage nor the power. (Good-bye)

answer

……; but in an hour the boy came back with Philip's letter unopened and the answer that the lady had not returned from the country. (Of Human Bondage)

anticipation

I now would like to examine this lexicon in the light of the complementarity criterion, in the anticipation that such a sample should bring to light potential contrasts. (On Case Grammar)

apprehension

But with the death of Chou En-lai, there was some apprehension in Tokyo that a response may be delayed for some weeks or that the Chinese may now take a harder line toward Tokyo. (Newsweek Jan. 26 1976)

arrangement

Before parting they had made an arrangement that she should write to Charing Cross Post Office till he was able to send her an address, and when he went there he found three letters from her. (Of Human Bondage)

boast

Then, pointing to recent boasts by black nationalist groups that they have several thousand well-armed fighters ready to strike from bases in neighboring Mozambique, Smith warned:…… (Newsweek Feb. 23 1976)

caution

This flat statement evoked a strenuous objection from Bancroft and led Judge

Carter to issue his caution to the jurors that they would have to make up their own minds on that basic issue. (Time March 8 1976)

decree

The ruling is comparable to a decree by a Roman emperor that participants in orgies must be fully clothed at all times. (Time Feb. 23 1976)

desire

Most important, the Secretary of State's great desire that a new Strategic Arms Limitation treaty with the Soviets could be signed this year is in grave jeopardy. (Time Feb. 26 1976)

dread

.....: they had always looked upon him as comparatively well-to-do, and he had a dread that they would think less well of him if they knew he was penniless. (Of Human Bondage)

explanation

.....but this theory is knocked on the head by the unanimous explanation of American scholars that it comes from 'cornfed', a word going back to Washington Irving at least, and meaning 'countrified, plump'. (The Changing English Language)

forecast

Others faulted Beame on his assumptions—for instance, his earlier forecast that welfare costs and revenues from real-estate taxes would remain relatively stable. (Newsweek Feb. 23 1976)

guess

And I will make a guess that it was M. Reggie Carrington who kissed you. (Christie)

inference

The effect of *even* on the subject noun phrase *Max* in (2) permits the hearer to make the inference that the referent of *Max* must be viewed as a member of a set of similar tokens with which it (the referent) can be contrasted within the context of the remainder of the sentence. (Studies in Linguistic Semantics)

instruction

Sally appeared for a moment, with instructions from her mother that father

was to amuse the children while she got tea ready ; (Of Human Bondage)

intimation

The earliest intimations that the great Wilsonian settlement was imperfect came even before the League settled down. (Wells)

mention

I was struck by the mention in your article on Margaux Hemingway (LIFE/STYLE, March 17) that the great novelist's granddaughter enjoys not only such sports as skiing, tennis and swimming, but shooting doves as well.

(Newsweek May 12 1975)

offer

One reads with fury about the withdrawal, when she would not sign a loyalty oath, of an offer from Harry Cohn of Columbia Pictures that she write and produce four pictures, with almost unprecedented control over final cut.

(Newsweek May 3 1976)

order

Sir Gervase gave orders that dinner was to be a quarter of an hour later this evening, as he was expecting a gentleman by the late train. (Christie)

petition

Deans of 17 law schools joined in petition that Congress "consider the necessity" of impeachment. (Reader's Digest July 1975)

prayer

She uttered a little inward prayer that God would guard him, and keep him out of temptation, and give him happiness and good fortune. (Of Human Bondage)

preaching

But Congress seemed more willing to accept the Ford Administration preachings that the country will be rewarded with an economic upturn starting this summer—without the risk of exacerbating inflation—if it will just bear with the bad news for a few more months. (Newsweek May 12 1975)

presumption

The simple presumption that he will someday claim the Presidency as his inheritance brings in talented help—his staff is one of the best and brightest on the

Hill—and surrounds him with eager brain-trusters on the outside ;.....

(Newsweek June 2 1975)

proclamation

Echoing Berlinguer's proclamation that his party would be willing to cooperate with widely divergent ideologies in a "democratic system," at week's end Plissonnier declared that France's Communists would seek "a socialism of the French sort", including "the guarantee of all individual and group freedoms."

(Time March 8 1976)

provision

We have in condition (1) added to the formulation in (23) the provision that it be met at least up to shallow structure, and also that it only holds at a particular point in a derivation if condition (4) also holds.

(On Case Grammar)

ruling

The court ruling that candidates or their families may spend as much of their own money as they want also raised the possibility that wealthy politicians running for the House or Senate—none of whom are eligible for federal matching funds—might try to get up enough money around the dinner table to buy an election.

(Time Feb. 9 1976)

teaching

For some generations after the death of Gautama, these high and noble Buddhist teachings, this first plain teaching that the highest good for man is the subjugation of self, made comparatively little headway in the world.

(Wells)

vow

Smith then invited Britain to suggest possible means to a solution but gave no indication he would retreat from his frequently expressed vow that black majority rule would never occur "in my lifetime," a position London has always rejected.

(Time March 1 1976)

II

anxiety

That showed in your anxiety that no innocent person should be suspected.

(Christie)

consciousness

And during the day there was nothing in her behaviour to suggest a consciousness in her that anything had passed between them. (Of Human Bondage)

pride

If they're saying that, they are speaking with pride that they are part and parcel of a good project. (Newsweek Feb. 23 1976)

probability

Rabin is generally given high marks as a negotiator, but his recent indecisiveness combined with the probability that Syria will demand new Israeli concessions in exchange for an extension of the U. N. mandate on the Golan Heights next May has prompted speculation that he might be replaced by his rival Peres. (Newsweek Feb. 23 1976)

truth

Shaw said that *Mrs. Warren* was written for women "to draw attention to the truth that prostitution is caused, not by female depravity and male licentiousness," but by economic injustice. (Time March 1 1976)

III

ability

Jockey Denise Boudort has so impressed horse owners by her ability that she often rides eight times in a nine-race day. (Reader's Digest June 1975)

adage

At her best, Dorothy embodies the old adage that power perfected becomes grace. (Time Feb. 2 1976)

advantage

Against this is the advantage that houses do not flow away easily. (Reader's Digest Feb. 1976)

alternative

Why had he given her the alternative that she must dine with him or else never see him again? (Of Human Bondage)

amazement

Moeller made no public statements, but neighbors in Spencerville expressed amazement that he could be involved in such a scheme. (Newsweek May 5 1975)

appeal

The antitrust department will face another hard court fight with United Brands, which may well argue on appeal that market and shipping factors alone accounted for the price differences denounced by the department.

(Time Jan. 1 1976)

attitude

In October, 1964, I had in my ignorance decided to write a novel about the United Nations if Africa, and it reveals my then liberal tendencies and innocence of Africa, the Portuguese and UNO, that I took the pathetic attitude that the white man as he comes south of the Zambezi automatically becomes wicked.

(Good-bye)

axiom

His tax break for those buying stock rises from his belief in the old American axiom that everybody ought to own a piece of the country. (Time Feb. 2 1976)

bitterness

The explosion they feared never came—only a last twitch of bitterness that his lawyers hadn't been "the best in the world" and some gallows humor to the effect that Gandhi and Lenin, among others, had done some of the best political writings of the century from their prison cells.

(Newsweek May 12 1975)

chagrin

There was widespread chagrin that the ex-President chose Peking as the place to get back into the headlines.

(Time March 8 1976)

cliché

More important, a sampling of the 13-episode series finally lays to rest the cliché that only the British are capable of producing complex family sagas.

(Time Jan. 19 1976)

credo

Her credo that "I make films for the masses"—if not the socialist politics from which it springs—would go down just fine in Hollywood.

(Time Feb. 16 1976)

difficulty

In translating Shakespeare the Esperantist translator has the continual difficulty that usually not so much can be got into an Esperanto iambic pentameter as into an English one. (Zamenhof)

disappointment

There was a twinge of disappointment that he had not won; he had expected to, and in fact might have if Fred Harris had not been in the race.

(Newsweek March 15 1976)

dogma

Elsewhere the dogma that 'none' equals 'not one' leads to some curious practical results, as in a sentence from the *New Statesman* where the outcome is self-contradictory. (The Changing English Language)

gamble

In terms of specific issues, Ford took the calculated gamble that while jobs are a burning concern, most Americans are even more worried about reducing the rate of inflation. (Time Feb. 2 1976)

horror

The tone of his voice implied at once a complete admission of his guilt and a sort of incredulous horror that such a word could be applied to himself. (1984)

hunch

But his hunch that he was on the track of big game was based on several years of unflagging surveillance, of patient sifting of small, suspicious incidents.

(Reader's Digest August 1975)

instinct

He hesitated a moment, for he had an instinct that he could say something that would move her. (Of Human Bondage)

intuition

He seems to have had an intuition that something great was dead in Europe and sorely needed burial, that there was a need to write Finis, overdue. (Wells)

irony

There is a nice irony that this outburst of extraordinarily gory violence turns an

individual who was within a hair-trigger length of being a national horror into a local hero. (Time Feb. 16 1976)

irritation

He, like other U. S. physicians, also expressed irritation that Dr. Leboyer had not chosen the normal route of spreading his ideas by way of papers in medical journals and appearances at scientific meetings. (Reader's Digest Feb. 1976)

lie

Teng, said the front-page article, had refused to attend "model stage shows" and spread "lies" that tickets for theatrical productions sponsored by the Chairman's wife were not selling well. (Newsweek March 15 1976)

line

Teng also referred to Chou as "founder of the Chinese Red Army," which contradicted the usual line that the army's founder was Mao. (Newsweek Jan. 26 1976)

manifesto

During the play, Allott has issued a kind of quasi-Warhol manifesto that the plastic arts are exhausted and that the truly contemporary artist must orchestrate an "event" out of the materials immediately at hand. (Time Jan. 5 1976)

memory

Why should one feel it to be intolerable unless one had some kind of ancestral memory that things had once been different? (1984)

mistake

In accordance with China's political style, Teng was not officially denounced by name, but there was no mistake that he was the man accused of being "the No. 2 party person [after still-disgraced Liu Shao-chi] taking the capitalist road." (Time Jan. 19 1976)

motion

The popular motion that abstinence somehow stores strength has no scientific foundation. (Reader's Digest June 1975)

off-chance

On the off-chance that your picture editor has not noticed it, all women don't

look like Playboy bunnies when they awaken, nor do Playboy bunnies ;.....

(Time Feb. 23 1976)

outcry

Naturally there was an outcry from Europeans that this was barbarism and the pleasurable victimization of these girls. (Bood-bye)

portent

The city's Indian merchants have already begun a mass exodus from Saigon—a sure portent that business-wise expatriates have concluded that Saigon is lost.

(Newsweek May 5 1975)

precept

For example, there is a precept that protection of life is a religious duty which transcends Sabbath observance. (Reader's Digest Nov. 1975)

property

Notice in the present instance however that even the analysis involving a complex derivation must incorporate the property that the conditions governing insertion of *open* etc. involve one constant element and some optional.

(On Case Grammar)

proverb

"Let's leave miracles to the Bible, Dr. Bull," Will replied, "and go back to the old proverb that necessity is the mother of invention. My sister was about to die. I had to do something." (Cancer)

qualification

In a 28-page pamphlet, Muller accused the industry of encouraging mothers to give up breast feeding, but added the qualification that other factors, such as working at a job, influence women to switch to bottle feeding.

(Time Feb. 16 1976)

reading

This fear was heightened by a faulty first intelligence reading that the Communists had in fact forced the Mayaguez to the mainland.

(Newsweek May 26 1975)

record

……; and there is no record that he ever faltered from his purpose. (Wells)

regulation

Village swingers, meanwhile, gripe about an 11 p.m. curfew and the strictly enforced regulation that men cannot enter women's residences.

(Time Feb. 16 1976)

relief

One year after the Communist take-over, the dominant mood in the south does not appear to be fear about the future, but relief that a bitter, bloody chapter in the nation's past has at long last been closed.

(Newsweek May 3 1976)

resentment

I thought back to the day he had told me he was slowly going blind, and my resentment that he seemed to be equating his affliction with mine.

(Reader's Digest Oct. 1975)

respect

Linguistic influence is rather like advertising in this respect that it is greatly helped to become operative by sheer endless repetition.

(The Changing English Language)

secret

He was very poor and made no secret that the lessons he was giving Philip meant the difference between meat for his dinner and bread and cheese.

(Of Human Bondage)

subject

I remember when first I went to Paris, Clutton, I think it was, gave a long discourse on the subject that beauty is put into things by painters and poets.

(Of Human Bondage)

surprise

Drinking scotch with him one evening in 1969, Sakharov expressed surprise that the KGB had not detected Israeli preparations for their lightning attack of June 1976.

(Reader's Digest August 1975)

tension

She vividly re-created the tension that she claimed she lived under the all-

consuming fear that if she did not cooperate with her captors, "I'd be dead."

(Time March 1 1976)

thesis

Six books have explored the thesis that by remaining silent he became an accomplice to genocide.

(Time Feb. 9 1976)

witness

Now you are a witness that I place this silver of looking glass (to which, remember, I have already called Mr. Trent's attention) into a little envelope—so.

(Christie)

VIII おわりに

「英語の構造」によると、動詞派生、或いは、形容詞派生の名詞に that 節が続く場合と、派生すべきもとの動詞や形容詞をもたない fact, news 等の名詞に that 節が続く場合とは、構造が異なるのである⁹⁾。この区別は、筆者の I・II をまとめたグループと III のグループの区別に相当する。しかし、本文中に見る如く、この2つのグループの構造の違いによって、名詞に付加される限定辞の種類や名詞の形態に違いがあるようには思われない。

A Grammar of Contemporary English に次のような記述がみられる¹⁰⁾。

It will be noticed that these restrictive examples have the definite article before the head noun: this is normal but by no means invariable (except with a few nouns referring to certainty, especially fact):

A message *that he would be late* arrived by special delivery

Any proposals *that John should be dismissed* must be resisted

Stories *that the house was haunted* angered the owner

Plural heads, as in the latter examples, are also rare with appositive post-modification and are regarded as unacceptable with *belief, fact, possibility*, etc.

ここでの対象の範囲は筆者のよりも狭い。しかし、筆者の例にそのままあてはまるように思われる。

筆者のこのような方法での調査には限界がある。たとえば、表3の generalisation

の5例はすべて同一著者の同一作品中に見出されたものである。もし、この作品を用例採取の対象に選ばなかったら、この例は1例も見出されなかったことになる。このように、用例採取対象によって名詞の種類や例数は異ってくるのである。言語使用の場面には際限がない。使用者も多種多様で際限がない。その中からすべての該当例を集めることは不可能である。筆者は、その際限のないものの中から、ほんの一部分を抜き出して、謂わば、サンプルの調査をした訳であり、この結果が英語の native speaker の直感にどのように映るかは不明である。しかし、どの1例も確かに一度は native speaker によって用いられたものである。

(昭和56年5月18日受理)

(註)

- 1) 東 毅: '名詞+THAT CLAUSE'について 室蘭工業大学研究報告 第10巻第1号 (1980)
- 2) 「Newsweek や Time, Reader's Digest 等の雑誌の他, 20世紀になってから出版された小説, 論文, 歴史, 伝記等の中から残らず集めた224種の名詞と, それらのもつ1956例である。」 *Ibid.*, p. 57
「Newsweek: May 5~Jun. 2 1975, Dec. 15 1975, Jan. 26 1976, Feb. 23 1976, Mar. 15 1976, May 3 1976
Time: Jan. 5~Mar. 8 1976
Reader's Digest: Jun. ~Nov. 1975, Jan. ~May 1976
John Anderson: On Case Grammar Humanities Press (1977)
H. G. Wells: A Short History of the World A Pelican Book (1922) (Wells と略す)
P. White: The Burnt Ones Penguin Books
G. Orwell: Nineteen Eighty-Four a Penguin Book (1984と略して示した)
S. Maugham: Of Human Bondage a Penguin Book
B. Foster: The Changing English Language a Pelican Book
A. Christie: Murder in the Mews and Other Stories Penguin Crime (Christie と略す)
T. Capote: In Cold Blood Penguin Book
M. Bouton: Zamenhof Routledge and Kegan Paul London (1960)
J. Barlow: Good-bye England Hamish Hamilton (1969) (Good-bye と略す)
Beckard and Crane: Cancer, Cocaine and Courage Washington Square Press (1960)

(Cancer と略す)

Bruce Fraser: An Analysis of "Even" in English Studies in Linguistic Semantics
Holt, Rinehart and Winston, Inc. (1971) *Ibid.*, p. 106

- 3) 冠詞, 所有格, 指示詞, 数量詞で冠詞と両立不可能なものを, 独断的かも知れないが, 限定辞 (determiner) と呼ぶことにする。
- 4) 本稿で対象にした例を, 1 例しかもたない名詞もあれば, fact のように280も持つ名詞もある。わずかに1つの例であっても, native speaker の直感によればきわめて自然な表現であって, その表現が必要とされる状況さえあれば何度でも用いられる可能性をもつものであるかも知れない。その意味では1例と言えども無視できない重みを持つと言える。数多くの例をもつ名詞の中には, 少数の例外をもちながらも, 或る傾向を明確にあらわすようなものもある。そのような場合に於ける少数例についても同様なことが言えるであろう。言語を扱う際には, 同一の表現が多いか少ないかだけでは処理し切れない面がある。表に示された例数を見ていくときにも, このことは忘れるべきではなからう。
- 5) 「名詞+that clause」であっても, that clause が関係詞節と解釈できるものは, 勿論, 除いた。in case のように歴史的には case と clause の間に同格関係があったと言っても, 現在は単一の接続詞としか感じられないもの, また, in order that~のように, order 単独で the end の意味に用いられず, in order that~ではじめて to the end that~の意味となるようなものは, 分離不可能として除いた。There is no doubt that~のような, 意味上, doubt と that clause の間に前置詞の省略が感じられる, 石橋幸太郎氏の言われる Asyndetic clause は含めた。つまり, 氏の言われる Contact clause をとりあげた訳である。本稿では, これを指して同格構文と呼ぶことにする。」東, *op. cit.*, p. 58
- 6) Quirk, Greenbaum, Leech, Svartvik: A Grammar of Contemporary English (Longman 1972) p. 875 13, 17
- 7) *Ibid.*, p. 627 9, 183
- 8) definite な意味の限定辞の中には, 定冠詞, 所有格, 指示詞が含まれる。
- 9) 中島文雄: 英語の構造 岩波新書 (1980) XXV 名詞化 pp. 129—130
- 10) Quirk *et. al.* *op. cit.* p. 874 13, 16

Romeo と Juliet について

狐 野 利 久

A Study of *Romeo and Juliet*

By Rikyu Kono

Abstract

Generally speaking, *Romeo and Juliet* by Shakespeare is regarded as a tragedy on “the predestined victims of a malicious Fate” as George Ian Duthie says in the Introduction of *Romeo and Juliet*, one of the series of the *New Shakespeare* published by Cambridge University Press. Middleton Murry also says in his *Shakespeare* (pp. 186-7) that “it is only the tempest of circumstance which wrecks the life of Romeo and Juliet....They are the victims not of their passion but of crass casualty; they are fortune’s fools, not their own.” I cannot assent to them: I prefer to say that Romeo and Juliet are silly lovers. Both of them are too much passionate, too much impatient, and moreover, too much “doting for loving” each other to accept the amicable and warmhearted advice by Friar Lawrence. Indeed Friar Lawrence gives his considerate advice to them:

“Wisely and slow. They stumble that run fast (II, iv, 193)” or

“These violent delights have violent ends,

And in their triumph die, like fire and powder,

Which, as they kiss, consume. (II, vi, 11.9-11)”

I rather agree with Prof. P. Milward who says in his book to the effect that every human beings has his own will, by which he goes beyond the activities of the stars, or Fate, or Destiny, or Fortune etc. In the case of the star-crossed lovers, there were so many chances that they would change the activities of the stars, or Fate, or Destiny, or Fortune, etc. But, according to Prof. Milward, it is by Romeo, not by Fortune, that the disastrous end was caused: by his own will he impatiently decided that the revenge against Tybalt was his only means. Then what is “his own will”? Prof. Milward does not explain plainly. But if I try to explain the meaning of “his own will” by using Friar Lawrence’s words, I assure you that it is “grace will” and “rude will” (II, iii, 1.28). Romeo’s will is, of course,

“rude will”.

Shakespeare adapted this tragedy to the mediaeval view of the Destiny on the surface, but the play itself shows us that he could not dissemble his susceptibility to the “humanity-centered” movement of Renaissance.

序

Shakespeare の Romeo と Juliet の悲劇は運命悲劇と一般に言われている。Cambridge 大学の *The New Shakespeare* の *Romeo and Juliet* を見ても、Introduction のところで、George Ian Duthie は

Romeo and Juliet are ‘star-crossed’. Again and again the dialogue brings out the theme of the malignant influence of the stars on human beings. From quite early in the play we have the expression of premonitions of unhappy doom. The lovers are the predestined victims of a malicious Fate. Fortune is against them. The stars, or Fate, or Destiny, or Fortune, or whatever other specific name may be applied to the cosmic force with which we are concerned, brings the lovers together, gives them supreme happiness and self-fulfillment for a short time, and then casts them down to destruction.⁽¹⁾

と解説をしている。又、ピーター・ミルワード教授も「シェイクスピア入門」の中で、

ロミオとジュリエットは、はじめから終りまで「悲運の星に魅入られた」恋人たちとして描かれている。⁽²⁾

とのべている。だが Romeo と Juliet は the predestined victims of a malicious Fate であるという理由で、この芝居を運命悲劇と言い切るには問題が残ると思う。なぜなら二人は何も運命にあやつられていた、いわば、あやつり人形の如き者ではなかったからである。又 star-cross'd lovers であるという理由で、この芝居を運命悲劇とするには無理があるようにも思う。

Romeo と Juliet のこの芝居が、運命悲劇であるということについて、もっと適切な説明がないであろうか。富原芳彰教授は「ロミオとジュリエットの悲劇性」と題して、小津次郎教授還暦記念論文集（1980年刊）に論文を発表してい

る。⁽³⁾その中で富原教授は、

『ロミオとジュリエット』はシェイクスピアの悲劇のうちで、「運命悲劇」と呼ばれるにもっともふさわしいものであろう。しかし、いかなる悲劇にとっても、運命は不可欠の要素であり、運命がそれに本質的なかわりを持たない悲劇は存在しない。『ロミオとジュリエット』は、たしかに、シェイクスピアの悲劇の中では運命の果している役割が通常以上に大きく、結果的に見れば、それはシェイクスピアが彼の悲劇探究の道程において一度は通る必要のあった、ひとつの極端な場合を示しているとも言える。

とのべ、「Romeo と Juliet の悲劇」が運命悲劇である理由として、

悲劇とは人間の尊厳のために運命に抗議し、これと最後まで戦って倒れた人間の物語でなければならない。『ロミオとジュリエット』という劇が悲劇をなすのは、題名の二人が単純に不運 ('star-cross'd')であったからではない。かれらはかれらの力の限りをつくして運命に抵抗し、これと戦い、これを克服しようと努めたのである。それにもかかわらず、二人はやはり運命に勝つことはできず(それが悲劇の論理である)、結局再び'star-cross'd lovers'であらざるを得なかったところにこの悲劇の核心がある。

と言っている。そうして更にギリシア悲劇や Shakespeare の四大悲劇に論拠をおいて論をすすめる、悲劇の主人公は、

精神的にも肉体的にも苦悩に耐え、結局は精神的とも肉体的とも区別のつかなくなる苦悩に耐えつづけ、普通の人間の耐え得る限度を超えて耐えつづけた果てについに大木が倒れるようにして倒れる「英雄」でなくてはならない。ロミオもジュリエットもそういう英雄になるためにはあらゆる意味で弱小であった。……悲劇の主人公は泣かないものである。ロミオとジュリエットはかれらの不運を泣いているところがある。かれらの物語は本来悲劇よりは悲話となるにふさわしいものだったとさえ思われる。

とのべ、そのような悲話にならないために、

泣いているロミオとジュリエット、自殺を急ごうとするロミオとジュリエットを叱咤し、かれらに運命とたたかうことを教え、そのことにおいてか

れらを助けるのは僧ロレンスであり、かれらは彼の後楯をえてはじめて運命と立ち向う人物になる。

と言っている。教授の言う運命とは、

神あるいは神々の意志、遍在する意志、宇宙のメカニズム、あるいは歴史的必然など、さまざまに呼び分けられているものを、ここではこの一語で代表させる。

と註で説明しているので、要するに、人間の意志ないし力ではどうすることも出来ないところの、人間以上のものということになるらしい。具体的には、運命とは、例えば、Romeo が Tybalt を刺し殺した後、我に返って言うセリフ、即ち、

O, I am fortune's fool!

の fortune であり、又、例えば Juliet が死んだという知らせを Mantua で受け取った時、さけぶ

Is it even so? then I defy you, stars!

の stars であるようである。従って富原教授は、Romeo も Juliet も単に運命にあやつられた恋人達の悲劇ということで運命悲劇というのではなくて、僧 Lawrence の後楯によって、運命に逆らい、運命と戦って結局破れたということで運命悲劇と見ているのである。しかし私は富原教授の説に賛成出来ない。それは、第一に、僧 Lawrence の助けや後楯によるにしても、Romeo と Juliet は、教授の言うように、「かれらの力の限りをつくして運命に抵抗し、これと戦い、これを克服しようと努めた」であつたろうかということである。本論で私は Plot に従って詳細に見て行くつもりであるが、私にはそのようには思えないのである。なる程、Shakespeare は中世の人々が考えていた如何とも仕方のない運命の持つ力、そして、それに対する人間の無力さという考え方を受け継いではいたけれど、やはり、Renaissance の人間性を強調する時代精神を感じ取っていたと言ったら良いのか、Romeo にも Juliet にも悲劇の責任の一端は負わせているよう

に私には思えるのである。そうして、Romeo や Juliet にも責任の一端を負わせている以上、彼らの人物をあらわす性格が、不十分ながらも Shakespeare によってあらわされているのであって、菅泰男教授が「二人の性格は書きこんでなくて、ただ典型的な若い恋人たちである」と申される点に、私は不満なのである。すなわち、菅教授は、1964年シェイクスピア生誕四百年を記念して、日本シェイクスピア協会が出版した「シェイクスピア案内」⁽⁴⁾の中で、

『ロミオとジュリエット』はギリシヤ悲劇と同じ意味で運命悲劇と言うわけにはいかないが、二人の主人公は不幸な星のめぐりあわせのもとに生れた恋人たち (star-crossed lovers) でふしあわせな事件の連続が二人を死へ追いやる。二人の性格は書きこんでなくて、ただ典型的な若い恋人たちである。この悲劇は性格の悲劇ではなくて、境遇の悲劇である。そして作品の特色から言うと「抒情悲劇」と呼ぶのがもっともふさわしい。

と言っている。「作品の特色から言うと抒情悲劇と呼ぶのがもっともふさわしい」と言うのは、おそらく Granville-Barker の説に賛成しての発言であろうし、又「ギリシヤ悲劇と同じ意味で運命悲劇と言うわけにはいらない」という言葉も、前述の富原教授の説によってかなりよくわかるのであるが、「典型的な若い恋人たち」というのはどういう恋人たちなのかかわからないのである。おそらく「どこにでもいる恋し合い、愛し合っている若い男女」ということなのだろうと思う。それにしても、「この悲劇は性格の悲劇ではなくて、境遇の悲劇である」は、おそらく、例えば、Middleton Murry が彼の *Shakespeare* の中で言っている言葉

It is only the tempest of circumstance which wreacks the life of Romeo and Juliet.
 ...They are the victims not of their passion but of crass casualty ; they are fortune's fools, not their own. (pp. 186-7)

と通ずるのであるが、私は、本論で述べるように、Romeo にも Juliet にも衝動的で、無分別で、かつ性急な行為に走りやすい性格があつて、そういう性格が彼らの悲劇を招いたとさえ言えると思うのである。従つて、運命に逆らい、勇敢に立ちむかつて、無惨に破れたということで運命悲劇というには、私を納

得させるのに不十分であるし、性格の悲劇ではないという説には、二人のあまりにも無分別で、性急すぎる行動や衝動的行為に走りやすい点をあげて、反論したいのである。

兎に角、Plot の展開に従って、Romeo と Juliet の二人の人物に焦点をあてながら、この物語を見て行くことにする。

1

一幕一場で Romeo は Rosaline への恋に悩む若者として登場する。Romeo が友人の Benvolio に話すところによると、

Why then, O brawling love, O loving fate,
O anything, of nothing first created!
O heavy lightness, serious vanity,
Misshapen chaos of well-seeming forms,
Feather of lead, bright smoke, cold fire, sick health,
Still-waking sleep, that is not what it is!
This love feel I, that feel no love in this. (I, i, 11. 178-184)

つまり、Romeo は彼の恋心が Rosaline に受け入れてもらえないがために悩んでいるのである。Romeo によると、Rosaline は、

She will not stay the siege of loving terms,
Nor bide th' encounter of assailing eyes,
Nor ope her lap to saint-seducing gold. (*Ibid.*, 11. 214-216)

そして、あまつさえ、

She hath forsworn to love,...(*Ibid.*, 1. 225)

であった。それで Romeo は、

...and in that vow
Do I live dead that live to tell it now. (*Ibid.*, 11. 225-226)

という有様であった。全く生ける屍同然であるから、

Tut! I have lost myself; I am not here;
This is not Remeo, he's some other where. (*Ibid.*, 11. 199-200)

というように、自分自身をすっかりなくしてしまっている己れの姿を Romeo は告白しているのである。

若い時には、だれしも一度や二度

...She'll not be hit
With Cupid's arrow. (*Ibid.*, 11. 210-211)

といって嘆くことはあるものであるが、Romeo の父の Montague が心配のあまり、息子のことを Benvolio に語る言葉、即ち、

Many a morning hath he there been seen,
With tears augmenting the fresh morning's dew,
Adding to clouds more clouds with his deep sighs;
But all so soon as the all-cheering sun
Should in the farthest East begin to draw
The shady curtains from Aurora's bed,
Away from light steals home my heavy son
And private in his chamber pens himself,
Shuts up his windows, locks fair daylight out,
And makes himself an artificial night.
Black and portentous must this humor prove
Unless good counsel may the cause remove. (*Ibid.*, 11. 133-144)

からすると、Romeo の恋心は異状というより外はない。暗い夜を涙しながらさまよい歩き、昼間は部屋に閉じこもって太陽をしめ出し、自分の手で人工の夜を作り出しているということは、父親の言うごとく portentous である。Benvolio の言うように、

Blind is his love and best befits the dark. (II, i, 1. 32)

従って Romeo の心は暗闇なのである。心が暗闇であるから自分自身を見失なう (I have lost myself.) ことになり、又、恋は盲目であるが故に、

He that is stricken blind cannot forget
The precious treasure of his eyesight lost. (I, i, 11, 234-235)

ということになるのであろう。そこでどうしても理性という視力を回復し、その結果、暗闇の中から Romeo 自身を救い出すのには、Benvolio の言うように、

By giving liberty unto thine eyes. (*Ibid.*, 1. 229)

しなければならない。具体的には、

Examine other beauties. (*Ibid.*, 1. 230)

ということしかないのである。他の女の人達を見くらべている中に、容姿ばかりではなく、心も、考え方も、わかるようになるから、自然と正気を失わない、本来の Romeo 自身に立ちかえることが出来ると Benvolio は思うのであった。

2

どうやら Romeo の恋はひと目ぼれの類いのものであるようである。なぜならあれ程までに恋いこがれていた Rosaline に対する思も, Juliet をひと目見るや、

It seems she hangs upon the cheek of night
As a rich jewel in an Ethiop's ear--
Beauty too rich for use, for earth too dear!
So shows a snowy dove trooping with crows
As yonder lady o'er her fellows shows.
The measure done, I'll watch her place of stand
And, touching hers, make blessed my rude hand.
Did my heart love till now? Forswear it, sight!
For I ne'er saw true beauty till this night. (I, v, 11, 46-54)

と変ってしまうからだ。Romeo が Benvolio に

Show me a mistress that is passing fair:
What doth her beauty serve but as a note

Where I may read who passed that passing fair? (I, i, 11. 236-238)

と言った時の、あの Romeo はどこへ行ってしまったのかとおどろく程である。事実、我々読者（又は観客）にとっても、Rosaline に対する恋心が、彼女に受け入れてもらえなくて、歎き悲しんでいた Romeo が、今度は Juliet をひと目見たとたん、手のひらをかえすように、新しい恋の炎を Juliet に対してもやすということが、現実果してあり得ることなのだろうかと思わしく思えて、何か不自然な気がするのだが、話がそういうことになっているので、僧 Lawrence が言うように、

Holy Saint Francis, what a change in here!
Is Rosaline, whom thou didst love so dear,
So soon forsaken? young men's love then lies
Not truly in their hearts, but in their eyes. (II, iii, 11. 65-68)

と、吾々も思わなければならない。ところが Benvolio はそういう Romeo の恋心というものを、すでに見抜いていたので、この芝居の 1 幕 2 場ではっきりと、

Take thou some new infection to thy eye,
And the rank poison of the old will die. (I, ii, 11. 50-51)

と言っているのである。否、Benvolio ばかりではない。Romeo が帰依している僧 Lawrence も、Romeo の恋をすでに doting (II, iii, 1. 82) と思っていたのであった。だから僧 Lawrence は、そんな恋は埋めてしまえ (II, iii, 1. 83) とさえ、Romeo に言っていたということである。それで僧 Lawrence も Benvolio とは別な言い方で、一目ぼれの恋にのめりこんで行く (doting) Romeo を何とか本来の Romeo 自身に立ちかえらせようと心をくぐっていたのであった。

ところで Rosaline はどうして Romeo の恋を受け入れなかったのであろうか。Rosaline は Dramatis Personae として登上していないので、直接彼女の口から聞くことは出来ないが、僧 Lawrence の言うところによると、

...O, she knew well
Thy love did read by rote, that could not spell. (II, iii, 11. 87-88)

ということであるらしい。Romeo の恋は「空で読んでいるようなもので、文字には綴れない」ものだとは、真実心のないうわづったものだということであろう。別な言葉で言えば、Romeo の恋心とはひと目ぼれ the charm of looks (Act II, chorus, l. 6), 別な美しい女性があらわれるとそちらにのり移ってしまうような、真実味のない一時的なものだということを Rosaline はすでに見抜いて承知していたのであろう。

3

2 幕 1 場で Mercutio が、

If love be blind, love cannot hit the mark. (II, i, l. 33)

と言っているが、Romeo の恋を言いあてているようで面白い。すなわち、盲目の恋は、暗闇の中で物事がはっきり識別出来ないのと同じく、互に相手を理解し合うこともないから、所詮成就しないものだということである。ところが Romeo は、

Alas that love, whose view is muffled still,
Should without eyes see pathways to his will. (I. i. 11. 173-174)

と言っている。すなわち、盲目の恋は己れの意志 (his will) のおもむくままに、突っ走ることを告白しているのである。his will とは何であろうか。人間には神的なものと獣的なものとがあって常に争っているということを西洋の賢人は教えているが、僧 Lawrence も、同じように

Within the infant rind of this weak flower
Poison hath residence, and medicine power;
For this being smelt with that part cheers each part;
Being tasted, stays all senses with the heart.
Two such opposed kings encamp them still
In man as well as herbs--grace and rude will;

And where the worser is predominant,
Full soon the canker death eats up that plant. (II, iii, 11. 23-30)

と言っておるので、Romeo のいう his will とは、神的なものに対する獣的なもの、僧 Lawrence の言葉で言えば、rude will のことであって、具体的には、はげしい性欲を指すことになるであろう。従って Romeo の恋は彼の性欲が求める恋であるとも言えるのであって、Mercutio は、はっきり、

Now will he sit under a medlar tree
And wish his mistress were that kind of fruit
As maids call medlars when they laugh alone. (II, i, 11. 34-36)

と言い切っているのである。そういう恋は Mercutio の言うように成就するはずがない。

以上のように、Benvolio、僧 Lawrence そして Mercutio の言葉から、Romeo の恋を色々考えてきたのであるが、結局のところ、Romeo の恋は性欲の対象として、或は性欲の満足のために求める恋の類であるということを知るのである。そういう恋であるから、Rosaline は受け入れなかったのである。しかし Romeo は Capulet が言うように、

Verona brags of him
To be a virtuous and well-governed youth. (I, v, 11. 68-69)

であるから、当然、性欲からくる罪の意識も強くあったはずであり、又あるからこそ、暗闇の夜が彼にはふさわしいのでもある。

性欲からくる罪の意識は Juliet とはじめて交わす言葉にも出ている。

Romeo. ... Thus from my lips, by thine my sin is purged.
(Kisses her.)

Juliet. Then have my lips the sin that they have took.

Romeo. Sin from my lips? O trespass sweetly urged!
Give me my sin again. (Kisses her.) (I, v, 11. 108-111)

かくして Romeo は Juliet と唇を重ねることが出来たのであるが、唇を重ねるということは肉体的接触を求める性欲の、一つのあらわれである。a virtuous and

well-governed youth である Romeo は、手をふれるだけでも holy-shrine である Juliet の手を汚す (profane) ことになる (I, v, ll. 95-96) とさえ思う程、罪の意識をもっていたのに、Juliet と唇を重ねた結果、本当に罪の意識はぬぐいとられる (purged) ことになってしまっ、以後 Romeo は性欲の虜になってしまい、rude will の命ずるままになって行くのである。

4

一方 Juliet の方はどうであろうか。彼女はやがて14歳になろうとしている娘で、父親の Capulet によると、

My child is yet a stranger in the world. (I, ii, 1. 8)

ということなので、いわば世間知らずの、うぶな娘である。Paris からの求婚のことで、Lady Capulet が、

Speak briefly, can you like of Paris'love? (I, iii, 1. 96)

ときかれた時、Juldet ははっきりと、

I'll look to like, if looking like move;

But no more deep will I endart mine eye...

(*Ibid.*, 11. 97-98)

と答えるだけの分別を持っている。若い年頃の恋というものは、僧 Lawrence も言うように、

Young men's love then lies

Not truly in their hearts, but in their eyes. (II, iii, 11. 67-68)

だれでも、ひと目ぼれから始まる。だが僧 Lawrence が Romeo をさとして

Wisely and slow. They stumble that run fast. (*Ibid.*, 1. 94)

と言っているように、分別を持って、ゆっくりと事をすすめてゆく心がなけれ

ばならない。ところが Juliet も Ball の時、Romeo とはじめて逢って、たちまち Romeo にひと目ぼれしてしまった。そのため有名な二幕二場では、Juliet はバルコニーに出て、

O Romeo, Romeo! Wherefore art thou Romeo? (II, iii, 1. 33)

と物思いにふけるのである。そこでは恋の手引によって、Capulet 家の高い塀をのりこえて庭にしるのびこんでいた Romeo が聞いていたのであったが、盗み聞きされたと知って Juliet は恋の喜びに頬を赤くするのである。でも彼女は、

But trust me, gentleman, I'll prove more true
Than those that have more cunning to be strange.
I should have been more strange, I must confess,
But that thou overheard'st, ere I was ware,
My true love passion. (*Ibid.*, II. 100-104)

と言って、決して浮わついた心 (*Ibid.*, II. 105) でいるのではないと言う。しかも Juliet には、Romeo とは違って、分別をもって愛の心を育ててゆこうとする心がこの時にはあるようで、

Although I joy in thee,
I have no joy of this contract tonight.
It is too rash, too unadvised, too sudden;
Too like the lightning, which doth cease to be
Ere one can say it lightens. Sweet, good night!
This bud of love, by summer's ripening breath,
May prove a beauteous flow'r when next we meet. (*Ibid.*, II. 115-122)

と言っている。そういう心は、恋にめざめた女性なら皆いなく、女性の本能的な心かも知れないが、この場では Romeo とは全く対象的であると言えよう。即ち、性欲の衝動に駆られている Romeo が、

What shall I swear by? (*Ibid.*, II. 112)

と言うのに対し、Juliet は、

Do not swear at all;
 Or if thou wilt, swear by thy gracious self,
 Which is the god of my idolatry,
 And I'll believe thee. (*Ibid.*, 11. 112-115)

と冷静さを失わない。ところが Romeo の方は rude will によって肉体的接触を求めているから、性欲そのものである。

Romeo. O, wilt thou leave me so unsatisfied?
Juliet. What satisfaction canst thou have tonight?

そうして、そういう Romeo に対して、なだめるように、はっきりと、

If that thy bent of love be honorable,
 Thy purpose marriage, send me word tomorrow,
 By one that I'll procure to come to thee,
 Where and what time thou wilt perform the rite;
 And all my fortunes at thy foot I'll lay
 And follow thee my lord throughout the world. (*Ibid.*, 11. 143-148)

と言うのである。これは、rude will になっている時の Romeo ではなく、grace will である Romeo、即ち Capulet の言葉で言えば、“virtuous and well-governed youth”である Romeo を信じての Juliet の乙女心であると言うべきであろう。

ところが、性欲の虜になり、そのために物狂おしくなっている Romeo は、性欲の満足を得るために結婚を考えているだけであって、Romeo の足許に一切を投げ出して、世界のどこにでもついて行くという Juliet の願を考えるだけの心がなかった。僧 Lawrence をせかして Juliet との結婚式をあげるのも、性欲の虜になっていたがためである。結婚式をあげてからの二人は、どうしたらよいかという計画がない。ただ二人を包む夜のおとずれを心待ちに待つだけである。ここにも、二人の悲劇の原因があると考えてもよからう。

5

Romeo の以上のような姿は、性欲の虜になってしまっている姿であるがために Mercutio は、

Alas, poor Romeo, he is already dead :
stabbed with a white wench's black eye ; run through
the ear with a love song ; the very pin of his heart
cleft with the blind bow-boy's butt-shaft ;……(II. iv, 11. 14-17)

といている。つまり精神的な意味において Romeo はも早死んでしまっている——分別のある人間ではなくなっている——と見抜いているのである。そして、又、Mercutio は、

Without his roe, like a dried herring. (*Ibid.*, 1. 40)

といい、いつもの卑猥な言葉で、

For this driveling love is like a great
natural that runs lolling up and down to hide his
bauble in a hole. (*Ibid.*, 11. 97-99)

といて、Romeo は性欲の炎に狂っていることをのべている。

一方、Nurseはどうかという Juliet の使として、Romeo に逢って帰るのであるが、吉報を待ちこがれている Juliet に中々話をしたがない。それどころか、しびれをきらして、

Let me be satisfied, is't good or bad? (II, v, 1. 37)

とせかす Juliet に、

Well, you have made a simple choice ; you
know not how to choose a man. Romeo? No, not
he. Though his face be better than any man's, yet
his leg excels all men's ; and for a hand and a foot,
and a body, though they be not to be talked on,

yet they are past compare. He is not the flower of
 courtesy, but, I'll warrant him, as gentle as a lamb
 Go thy ways, wench; serve Good. (*Ibid.*, 11. 38-45)

といっているが、この言葉は Juliet をじらして面白がる中年女性の一寸した悪ふざけと受け取るべきであろうか。私にはそうは思えないのである。Nurse は卑猥な話を好む女性であるから、Romeo をはじめて見た時、Benvolio や Mercutio と同じように、性欲の虜になり、狂っている Romeo を本能的に、しかも直感的に感じ取ったのではなかったか。つまり、a fool's paradise (II, IV, 1. 174) へ連れこもうとしている Romeo だということを本能的に読み取ったと思うのだ。だから、中々話したがらず、「つまらぬ撰択をした (You have made a simple choice.)」とか、「男を見る目がない (You knows not how to choose a man.)」と Juliet に言う言葉は、案外 Nurse の本心であったと思うのである。しかし Nurse にとって Juliet は14歳になるかならぬかの年であっても、自分自身の主人であることは間違いないことであるので、これ以上忠告めいた言葉は言わず、ただ Go thy ways というより外はなかったのである。そして一切のことは神様がよく御存知、だから“Serve God”という言葉もつけ加えたのであろう。

こういう Nurse の態度は、Juliet の使いとして Romeo のところに行った時、Romeo に対する言葉にも感ぜられる。すなわち、はじめて逢った Romeo になぜ Paris が Juliet に求婚しているという話をしなければならなかったのかということが疑問になるのだが、やはり性欲の虜になっている Romeo を見抜いたからではなかったか。Nurse の Romeo に言った言葉をみてみると、

Well, sir, my mistress is the sweetest lady. Lord,
 Lord! When 'twas a little prating thing--O, there is
 a nobleman in town, one Paris, that would fain lay
 knife aboard; but she, good soul, had as lief see
 a toad, a very toad, as see him. I anger her sometimes,
 and tell her that Paris is the properer man;
 but I'll warrant you, when I say so, she looks as
 pale as any clout in the versal world. (II, iv, 11. 207-214)

となっている。ここで注目されるのは Juliet が *sweetest lady* であるというのは自分の主人であるから当然としても、Juliet に求婚している Paris が *the properer man* だとはっきり比較級を使って言っていることである。Romeo が Capulet の言うように、*a virtuous and well-governed youth* (I, v, l. 69) であるなら、卑猥な話の好きな Nurse といえども、このような言葉、すなわち *Paris is the properer man* といって Juliet を怒らしているとは言わなかったと思うのである。

それから、もうひとつ、Nurse のこの言葉の中で注目されるのは、彼女が Paris の話をすると、Juliet は Paris の顔を見るよりヒキガエルの顔を見る方がましだと言い、あまり言うとは Juliet の顔色が変わると言っていることである。つまり、この Nurse の言葉から、今や Juliet も恋の激流に流される程までになってしまったことがわかるのである。だから僧 Lawrence でさえも、Romeo の手はず通り僧 Lawrence の庵室へ一人でやって来た Juliet をひと目見て、次のように言っている。

Here comes the lady. O, so light a foot
Will ne'er wear out the everlasting flint.
A lover may bestride the gossamers
That idles in the wanton summer air,
And yet not fall; so light is vanity. (II, vi, 11. 16-20)

Juliet の軽やかな足どりは、彼女の心の状態をあらわしているのであろう。Juliet の告白によれば、

But my true love is grown to such excess
I cannot sum up sum of half my wealth. (*Ibid.*, 11. 33-34)

と彼女の恋心は大きくなる一方であるというのである。もうすでに Juliet の分別はなくなってしまうと、Romeo と同じように、恋の情欲の中にのめり込んでいることは確かになってしまっている。だから僧 Lawrence によって Romeo との秘密の結婚式を終えてしまうと、Juliet は黒いマントの夜をひとしお待ちこがれ、Romeo と同じように、

...if love be blind,
It best agrees with night. (III, ii, 11. 9-10)

と言う有様である。彼女にとって、夜は、

love-performing night. (*Ibid.*, 1. 5)

だからである。恋を成就するためには、野生の鷹に目かくしして飼いなすように、分別を捨てて大胆にならなければならない。大胆に振舞うことによって、いつのまにか、誠の恋と思うようになるためにも、黒いマントの夜が Juliet に必要だったのである。兎に角、

So tedious is this day
As is the night before some festival
To an impatient child that hath new robes
And may not wear them. (III, ii, 11. 28-31)

というような Juliet であるから、彼女も恋の暗闇の中に落ち込んでしまって、Romeo と同様、自己自身を見失なってしまっているのである。

6

このように Romeo も Juliet も、今や完全に恋の虜になってしまったため、秘密の結婚式をすませてからの二人の生き方について、とことん話し合うということが見られない。二人はただ求め合い恋し合うだけであるから、はげしい恋の情欲に流されて行く行き先は、僧 Lawrence も言うように、

These violent delights have violent ends
And in their triumph die, like fire and powder,
Which, as they kiss, consume. (II, vi, 11. 9-11)

なのである。そうして、事実、彼らのはげしい喜びが、はげしい破滅となり、勝利の喜びの中に死の影が入り込む時が、秘密の結婚式後、Romeo の場合は一

時間あと、Juliet の場合は三時間 (thy three-hours wife III, ii, 1. 99) たって
くるのであった。それは Romeo による Tybalt 殺害という出来ごとと、Romeo
の追放という処分である。

もともと Romeo が Tybalt を殺害するに至った理由は、Romeo の友人である
Mercutio が Tybalt によって殺されたためであった。Verona の街で殺害事件を
起した者は死刑に処せられることを Romeo は十分承知していたはずである。そ
れ故、Juliet との恋に生きるためには Tybalt による Mercutio 殺害の件を Prince
of Verona にまかせるだけの、冷静な分別が Romeo にあってしかるべきであっ
た。そういう冷静さがなく、

Away to heaven respective lenity,
And fire-eyed fury be my conduct now! (III, i, 11. 127-128)

と言って、Mercutio のかたきとばかり剣を抜いて Tybalt にむかって行った Romeo
なのであるから、Romeo 自身が自分の悲劇的結末を、自分で選んだと言っても
良いであろう。

どうやら Romeo には激情に流されやすく、そのため自分を見失ってしまう
性格的欠点があるようだ。Rosaline や Juliet への恋に悩む姿もそうであるし、
Tybalt 殺害の時の Romeo もそうであった。又 Tybalt 殺害後、僧 Lawrence の
庵室に身をかくしている Romeo に、追放処分の宣告があったことを僧 Lawrence
が伝えた時も、やはりそうであった。即ち、

There is no world without Verona walls,
But purgatory, torture, hell itself.
Hence banished is banished from the world,
And world's exile is death. Then "banished"
Is death misterm'd. Calling death "banished,"
Thou cut'st my head off with a golden ax
And smilest upon the stroke that murders me. (III, iii, 11. 17-23)

といって泣きわめく Romeo であった。僧 Lawrence は、

O deadly sin! O rude unthankfulness! (*Ibid.*, 1. 24)

としかりつけ、又、色々さとしても聞かず泣きわめく Romeo に、

Thou fond mad man, hear me a little speak. (*Ibid.*, 1. 52)

といい、それでもなお、短剣でひと思いに自分を突いて死のうとする Romeo に、

Art thou a man? Thy form cries out thou art;

Thy tears are womanish, thy wild acts denote

The unreasonable fury of a beast. (*Ibid.*, 11. 108-110)

とまで言っている。吾々が Romeo について今まで見てきた通りのことが、僧 Lawrence によって、はっきり要約されて述べられたという感がする。

一方、Tybalt が Romeo によって殺されたという予期せぬ悲報に接した Juliet は、どういう態度をとったであろうか。Juliet も又、前述のように、一切の分別を盲目にする夜を呼びよせて、愛の虜になることを激しく願っていたのであるが、Romeo が Tybalt を殺したということを知らされて、

O serpent heart, hid with a flow'ring face! (III, ii, 1. 73)

といて驚き、次のように言う。

Did ever dragon keep so fair a cave?

Beautiful tyrant! Fiend angelical!

Dove-feathered raven! Wolvish-ravening lamb!

Despised substance of divinest show!

Just opposite to what thou justly seem'st--

A damned saint, an honorable villain!

O nature, what hadst thou to do in hell

When thou didst bower the spirit of a fiend

In mortal paradise of such sweet flesh?

Was ever book containing such vile matter

So fairly bound? O, that deceit should dwell

In such a gorgeous palace! (*Ibid.*, 11. 74-85)

Juliet のこの言葉は、Romeo に対する愛と憎しみとはげしくゆれ動く Juliet の心を簡潔に表現していると言えよう。だが、それをつかの間、やがて Romeo に対する愛の心が勝利を得て、

My husband lives, that Tybalt would have slain;
 And Tybalt's dead, that would have slain my husband.
 All this is comfort; wherefore weep I then? (*Ibid.*, 11. 105-107)

といい、何のためにそれでは泣くのかと考えた時に、「追放」という言葉が Tybalt の死よりもずっと悲しいと言い、その上、

Or, if sour woe delights in fellowship
 And needly will be ranked with other griefs,
 Why followed not, when she said "Tybalt's dead,"
 Thy father, or thy mother, nay, or both,(*Ibid.*, 11. 116-119)

と、彼女の父や母がたとえ死んだとしても、Romeo の追放の方が、それにもまして、ずっと悲しいことだと考えるようになる。こうして、Juliet は、

I'll to my wedding bed;
 And death, not Romeo, take my maidenhead! (*Ibid.*, 11. 146-147)

と、はやくも死を覚悟するのである。

このように、互にはげしく求め合う恋が成就しなければ死ぬばかりだというような Romeo と Juliet の考えは、二人共、盲目の恋をしているからである。特に Romeo の場合は、バルコニー・シーンのところで Juliet が、

And all my fortunes at thy foot I'll lay
 And follow thee my lord throughout the world. (II, ii, 11. 147-148)

とまで言ったのだから、そういう Juliet を引っぱって行かねばならぬ立場にあるのである。だから Juliet が盲目の恋をしていても、Romeo は盲目の恋からはつきり目覚めて、未来のことまで見通す分別が必要なはずである。分別があれば僧 Lawrence が、

Thy Juliet is alive,
 For whose dear sake thou wast but lately dead.
 There art thou happy. Tybalt would kill thee,
 But thou slewest Tybalt. There art thou happy.
 The law, that threat'ned death, becomes thy friend

And turns it to exile. There art thou happy.
 A pack of blessings light upon thy back ;
 Happiness courts thee in her best array,…… (III, iii, 11. 134-141)

と言っているように、Romeo には全く幸運であることがわかるはずなのである。
 従って、

O, I am fortune's fool ! (III, i, 1. 140)

と歎く必要は少しもないはずである。事態を冷静に考えてみれば、僧 Lawrence
 が言うように、

A pack of blessings light upon thy back,…… (III, iii, 1. 140)

なのである。ところが「理性を失なった獣同然の興奮 (the unreasonable fury
 of a beast) (III, iii, 1. 110)」状態にある Romeo には幸運には思えないのであ
 る。そういう Romeo に対して僧 Lawrence は、それ故、

Take heed, take heed, for such die miserable. (*Ibid.*, 1. 144)

と忠告するのである。

しかし僧 Lawrence の予想通り、盲目の恋の Romeo も Juliet も, such die
 miserable へと一直線にむかって行くのである。

7

後朝の別れの後でも、Romeo と Juliet が僧 Lawrence の骨折を信頼し、近い
 将来二人は晴れていっしょになれるということを楽しみに、一時の別離の悲し
 みに耐えることが出来れば、この物語は別な展開や発展を遂げたであろう。と
 ころが、Juliet は Romeo との別離を悲しみ歎くものだから、Romeo との関係
 を全く知らない Juliet の両親は、てっきり Tybalt の死を悲しんでいるものと考え
 えて、娘の悲しみを和らげるためにもと、Paris との結婚を現実させよう取り

計らう。Juliet は必死の思いで Paris との縁談をことわろうとするが、父親の逆鱗に触れ、

And you be mine, I'll give you to my friend ;
And you be not, hang, beg, starve, die in the streets,
For, by my soul, I'll ne'er acknowledge thee,
Nor what is mine shall never do thee good.
Trust to't. Bethink you. I'll not be forsworn. (III, v, 11. 192-196)

と申し渡される。母親にも取りなしを求めて、

Delay this marriage for a month, a week ;
Or if you do not, make the bridal bed
In that dim monument where Tybalt lies. (*Ibid.*, 11. 200-202)

と言うのであるが、

Talk not to me, for I'll not speak a word.
Do as thou wilt, for I have done with thee. (*Ibid.*, 11. 203-204)

と相手にされない。そこで nurse に助けを求めるが、Romeo をあきらめて、Paris と結婚するようにと次のように言う。

Romeo's a dishclout to him. An eagle, madam,
Hath not so green, so quick, so fair an eye
As Paris hath. Beshrew my very heart,
I think you are happy in this second match,
For it excels your first ; (*Ibid.*, 11. 220-224)

これは nurse の本心であろう。Juliet が、

Speak'st thou from thy heart? (*Ibid.*, 1. 227)

と尋ねたのに対し、

And from my soul too ; else beshrew them both. (*Ibid.*, 1. 228)

と答えていることからわかる。なぜなら、前述の如く、nurse は卑猥な話が好

きな女だけあって、男を見る目があり、Romeo を一目みただけで Romeo の愛を性的なものに見抜いていたからである。

ところで、父の Capulet から「首をくくるなり、乞食をするなり、飢えるなり、往来で死ぬなり勝手にしろ。お前を私の子だとはみとめまい」と言われた時、そして母親からも「お前の勝手にするがいい (Do as thou wilt.)」と言われた時、「なぜ Juliet は Romeo の後を追って Mantua へ行こうとしなかったのだろうか。Juliet が本当に Romeo との恋に生きる覚悟があるのなら、そういう決心をしてもいいではないか」という不満が私にはあるのであるが、そういう考えはあまりにも現代的すぎるであろうか。確かに、当時の風潮として、父親にいわば生殺与奪の権があったし、又 Shakespeare の他の作品を見ても、父親に反抗する娘は (*The Merchant of Venice* の Shylock の娘 Jessica を除いて)、皆不幸に終わっている。死ななければならぬのである。だから Juliet も父親の意向に従えないということで、ひそかに死を考えるのは当然の事なのである。この結婚を一ヵ月の間、一週間でもいい、のばして下さい。もしもそれができないのなら、「make the bridal bed in that dim monument where Tybalt lies.」という Juliet の言葉がそれである。しかし母親の Lady Capulet は、怒り心頭に達している夫の Capulet に、

You are too hot. (III, v, 1.175)

と言いながらも、自分自身も too hot になっていたし、又自分自身も、

I would the fool were married to her grave. (*Ibid.*, 1.140)

という言葉を口にしていたので、Juliet の本心を読めなかったようである。かくして Juliet は死を決意しながらも、Romeo のためにも何とか生きる道はないものだろうかと、僧 Lawrence を訪ねるのであるが、僧 Lawrence と二人きりになると、張り詰めた心もゆるみ、

Come weep with me-- past hope, past care, past help! (IV, i, 1.45)

と言わざるを得なかったのであった。そこで僧 Lawrence は、死を覚悟している Juliet に42時間仮死状態になるという薬を与え、家に帰って両親に Paris との結婚を承諾したように言うこと、眠る前にこの薬を飲むと仮死状態になって、翌日の結婚式が葬式になること、この Verona の習慣として Capulet 家の墓所へ柩車で送られてくるからその間に Romeo に連絡して、こちらに来るように知らせておくこと、Juliet が目を覚ましたら Mantua へ一しょに出発させてやること等々話して、Juliet を帰らすのであるが、ここでも私は僧 Lawrence のやり方に不満なのである。即ち、何故にこんな手のこんだことをしなければ、Juliet を Romeo のいる Mantua へ逃してやれないのかということである。Juliet が *past hope, past care, past help!* といって助けを求めて来た時、すぐさま、Juliet を変相させるとか何とかして、Romeo のいる Mantua へ逃がしてそれから後のことを考えるべきであったと思うのだが、これも又、現代的すぎるのであろうか。

一方 Mantua に追放されてきている Romeo は、Mantua に来た翌日 Balthasar から Juliet の死をきかされて、

Then I defy you, stars!

Thou knowest my lodging. Get me ink and paper
And hire post horses. I will hence tonight. (V, i, 11. 24-26)

というのであるが、このところの

Then I defy you, stars!

の stars は何であろうか。最初の序文のところで引用した George Ian Duthie の Introduction の中にある言葉、即ち、

the malignant influence of the stars on human beings

のことであろうか。私はそうは思わない。私は Happiness つまり、幸運の女神にとりたい。つまり、Romeo が Mantua に追放という処分をきかされた時、僧 Lawrence から「幸運の女神がお前に味方しているではないか、お前をしたっている Juliet が生きているということは幸運なことである。お前が Tybalt を殺さ

なければ逆に Tybalt によって殺されたかも知れないのに、お前が Tybalt を殺してお前が生きているということも仕合せ。又当然死刑であるのにお慈悲によって追放ということになったのも仕合せというべきである。Happiness courts thee in her best array. (III, iii, 1. 141)」とさとされて、Romeo はおそらく納得して Mantua に来たはずである。ところが Juliet が死んだと聞いたとたん、僧 Lawrence の説諭も吹きとんでしまって、「何が幸運だ、何が仕合せだ、そんなものくそくらえ！」といった気持ちが Then, I defy you, stars! の言葉であろうと思う。(僧 Lawrence の数えあげた仕合せを stars と複数にしたのであろう。) だから Balthasar は心配して、

I do beseech you, sir, have patience.
Your looks are pale and wild and do import.
Some misadventure. (V, i, 11. 27-29)

と言わざるを得なかったのである。Balthasar の言うように patience を持って、僧 Lawrence からの連絡を待つべきであった。それなのに Romeo は、

Well, Juliet, I will lie with thee tonight. (*Ibid.*, 1. 34)

といって、死ぬことを考え、その手段を思考する。そうして僧 Lawrence からの連絡も待たずに、

O mischief, thou art swift
To enter in the thoughts of desperate men! (*Ibid.*, 11. 35-36)

といって、自分自身を a desperate man に仕立ててしまった Romeo は毒薬を買い求める。

Let me have
A dram of poison, such soon-speeding gear
As will disperse itself through all the veins
That the life-weary taker may fall dead,
And that the trunk may be discharged of breath
As violently as hasty powder fired
Doth hurry from the fatal cannon's womb. (*Ibid.*, 11. 59-65)

ここで the life-weary taker と自分のことを言っているが、Juliet との恋が成就出来ないから life-weary だと言うのであれば、patience の心を持たざる男と言う外はなく、当然のこととして hasty powder に火をつけて violent end にむかって突進せざるを得ないのである。

僧 Lawrence からの連絡のことであるが、5 幕 2 場では僧 Lawrence の使いの僧 John が Romeo のところに使わされているのであるけれど、途中で疫病事件に巻きこまれたため、目的を果さず帰ってくるという happening が起る。このことは Romeo にとっても、又 Juliet にとっても不運な、予期せざることであったと考えられるのであるが、僧 Lawrence が、

But I will write again to Mantua,
And keep her at my cell till Romeo come-- (V, ii, 11. 27-28)

と言っていることではあるし、やはり Romeo に僧 Lawrence からの連絡を待つだけの patience の心があったら、Romeo と Juliet の悲劇は防げたかも知れない。

兎に角、patience の心がなく、hasty powder に火がついた如く死にむかって突進する Romeo であるから、心も savage-wild (V, iii, l. 37) になり、empty tigers も roaring sea も及ばぬ程、兇暴になってしまい、Juliet の墓に花を供えに来た Paris を殺してしまう。そうして Juliet のかたわらで Romeo は毒薬を飲んで死ぬのである。僧 Lawrence は、一瞬おくれて、かけつけてきたが、Romeo も Paris も死んでいるのを見て、計画がすべて破れたことを知る。僧 Lawrence は、

A greater power than we can contradict
Hath thwarted our intents. (V, III, 11. 153-154)

と言っているが、この場合の power を必ずしも運命の力とする必要はないと私は思うのだが、こういう考え方も現代的であろうか。Shakespeare でさえ、王子 Hamlet に

There are more things in heaven and earth, Horatio,
Than are dreamt of in your philosophy. (*Hamlet*, I, v, 11. 166-167)

と言わせているのである。何事も本人の計算通りにはならないのが世の中の常である。たとえ僧 Lawrence が Prince of Verona の言う如く a holy man (V, III, 1. 269) であったとしても、世の中のことは、彼の思い通りには必ずしもならないのである。

僧 Lawrence は目を覚ました Juliet を連れ出そうとするが、夜警の人の気配にあわてて、そこからとび出してしまふ。Juliet はいとしい Romeo が自分のかたわらで冷たくなっているのを見て、Romeo の短剣を胸に当てて、Romeo の後を追うのであった。

なぜ Romeo も Juliet も死なけりなかつたのか。これはだれしもこの劇を見た人（或は読んだ人）は考える問題である。吾々は、以上の如く詳細にみてきたので、整理して言えば、Romeo も Juliet もひと目ぼれの恋に陥って思慮分別をなくし、ひたすら情欲のおもむくままに突っ走ったということに、悲劇の原因の一つがある。二つには Romeo も Juliet も結果的にはこの世で結ばれなかつたから star-cross'd lovers ではあるが、運命の力の前には人間の力というもののは如何にか弱きものであるかということを教える中世の思考形態をうけつぎながらも、

Thou desperate pilot, now at once run on
The dashing rocks thy seasick weary bark! (V, III, 11. 117-118)

と Romeo に言わせているように、自分で求めた必然的な破滅であり、自分自身に悲劇の責任があると Shakespeare は考えたように思えるのである。従って、Romeo も Juliet も運命にあやつられたあやつり人形の如き、性格のない人物ではなく、思慮分別をもって行動することの出来ない、情緒不安定な、patience がない、そういう性格の若者であったと言えるであろう。逆に言って、二人に思慮分別があり、patience をもって行動したら、両家の永年にわたる family-feud は、僧 Lawrence のアドバイスの許で、解決したであろう。

Shakespeare がこの悲劇において言わんとしたことは、僧 Lawrence の言葉、即ち、

In man as well as herbs--grace and rude will;
 And where the worser is predominant,
 Full soon the canker death eats up that plant. (II, iii, 11. 28-30)

に要約されるであろう。

結 び

P・ミルワード教授は「シェイクスピア研究入門」の中で次のように言っている。

だがシェイクスピアは人間の根本的な自由の余地まで否定してはいない。人間は自由意志をはたらかせて、運命を超える力をもっているのだ。喜劇になるか悲劇に終るか、不幸になるか幸福に終わるかを決めるのは、まさにこの自由意志のはたらしきなのである。これは復讐か和解かを決断するという形をとってあらわれる。「ロミオとジュリエット」が悲劇に終わるのはロミオが復讐の道をとるからにほかならない。親友マーキュシオをジュリエットのいとこのテイボルトに殺されたと知ったときロミオはこう叫ぶ。

慈悲の心なぞどうともなれ。これからは焰の目をした怒り

こそ俺の道しるべだ⁽⁵⁾

私は P・ミルワード教授の「人間は自由意志を働らかして、運命を超える力をもっている」という言葉に大いに共感を覚えるものである。人間は運命を超えようとしても結局は超えることが出来ないのだと考えれば、これは中世の人々の考え方にもとづく運命論になり、Romeo と Juliet の場合も、運命に最後まで支配された不幸な恋人たちになってしまうであろう。ところが P・ミルワード教授のように「人間は自由意志を働らかして、運命を超える力をもっている」と考えるならば、Romeo と Juliet の物語は近代的となる。西洋には特定の星の運行が人の運命を支配するという考えがある。Romeo も一幕四場で Capulet 家の Ball にのりこむ時、Benvolio のおそくなったぞというのに対し、

I fear, too early; for my mind misgives

Some consequence, yet hanging in the stars,
 Shall bitterly begin his fearful date
 With this night's revels, and expire the term
 Of a despised life closed in my breast,
 By some vile forfeit of untimely death.
 But he that hath the steerage of my course
 Direct my sail. On lusty gentlemen. (I, iv, 11. 106-113)

と言っている。Capulet 家の Ball にのりこんで行こうとする Romeo にとっては、いわば、敵地にのりこんで行くことと同じであるから、胸の鼓動がドキドキと打つのが聞こえるほどであったろうということが、Romeo のこの言葉から察せられるのであるが、それでもなお、自分の運命を超えて行こうとする Romeo の意志を知ることが出来る。

Romeo には運命の星の働きをかえるチャンスが幾度かあった。P・ミルワード教授のいわれるように、Mercutio が Tybalt に殺された時、Romeo に復讐の道をえらばずにこの件の処置を Prince of Verona である Escalus にまかせるだけの冷静な分別があったら、悲劇的結末への道に入りこまずにすんだであろう。又 Mantua へ追放された Romeo が Mantua に来た翌日 Juliet の死をきかされた時も僧 Lawrence からの連絡を待つだけの patience があれば、悲劇への道を直進せずにすんだであろう。こういった点を色々取り出して見てみると、要するに Romeo は、己れの自由意志をあまりにも性急に、無分別に、かつ衝動的に働かせすぎているのである。

ところで P・ミルワード教授の「人間は自由意志を働かせて、運命を超える力をもっている」という時の、その自由意志とは何であろうか。教授は別に説明はしていないが、僧 Lawrence の言葉で、私が説明するとすれば、おそらく二幕三場二十八行目の grace will のことになるであろう。Romeo も Juliet も grace will でもって行動すべきであった。Capulet 家の Ball にのりこむ時 Romeo は、

But he that hath the steerage of my course
 Direct my sail. (*Ibid.*, 11. 112-113)

と *grace will* にまかせることをはっきり言っていたのであった。*grace will* でもって行動したら Romeo も Juliet も長いことつづく両家の宿怨を取り除くことさえ出来たであろう。いや何よりも二人は、運命の星の働きを変えて、結ばれたことであろう。残念ながら二人は、僧 Lawrence の言葉でいえば、*rude will* でもって、ただ本能的に、衝動的に、行動したのだから、直線的に破滅へと進んで行くより外なかったのであって、結果的には運命の星の働きを変えることが出来なかったということになるのであった。

それ故、Romeo も Juliet も *rude will* にもとずいて、無分別に、性急に、本能的に行動したために、運命によるよりも自分達自身が悲劇の原因をつくり出し、自分達自身がその結果を背負ったのだとさえ言えるように思うのである。

(昭和56年5月18日受理)

(註)

- (1) *The New Shakespeare : Romeo and Juliet*, Cambridge Univ. Press, Pp. xvii (1972)
- (2) P・ミルワード著、安西徹雄訳：シェイクスピア研究入門，中央新書，昭52，71頁
- (3) イギリス・ルネサンス——詩と演劇，小津次郎教授還暦記念論集，紀伊国屋書店，1980，1頁～20頁
- (4) 日本シェイクスピア協会編：シェイクスピア案内，研究社，昭39，81頁～104頁
- (5) P・ミルワード著：シェイクスピア研究入門，72頁

Blake の *The Gates of Paradise* について

狐 野 利 久

A Study of Blake's *The Gates of Paradise*

By Rikyu Kono

Abstract

When *The Gates of Paradise* was engraved in 1793, the title was *For Children/The Gate of Paradise*. But in 1818 the title of this emblem-book was changed into *For the Sexes/The Gates of Paradise*. Why did Blake change the title?

In 1789 Blake issued *Songs of Innocence*, whose publication, I think, was due to the issue of the *Divine Songs for Children* by Issac Watts in 1788, because his *Divine Songs* was written for great purpose of the education for children in his age. Blake was, I suppose, so much repulsive against this *Divine Songs* that he was driven to publish *Songs of Innocence* in next year. By 1794 another type of songs, which was later called *Songs of Experience*, had been engraved. Blake had been caught by a new idea that this *Songs of Experience* should be bound in one volume with the *Songs of Innocence* under "Shewing the Two Contrary States of the Human Soul". Then necessarily he was, I believe, compelled to publish a certain book for children in succession to the *Songs of Innocence*, which was an emblem-book named *For Children/The Gates of Paradise*.

The *Songs of Innocence and of Experience* in one volume was not so much ignored that he might abruptly think that it would be better to make another emblem-book opposed to *The Gates of Paradise* and to get them bound in one volume. Geoffrey Keynes shows us a sheet of picture in the Introductory volume of the facsimile edition of Blake's *The Gates of Paradise*, which tells us that Blake tried to engrave *The Gates of Hell*. But this idea was, of course, not fulfilled, because, I think he might notice that Paradise and Hell are not contrary each other just like the Innocence and the Experience of the Human Soul, and that they are in the interpenetration each other: Paradise is in Hell and Hell in Paradise.

These two editions, in spite of the same emblem-book, make it possible to give the different interpretation: whereas *For Children/The Gates of Paradise* in 1793

teaches us the awakening our mind-eye to the Eternal World (Paradise), *For the Sexes/The Gates of Paradise* in 1818 expresses, I think, the interpenetration between Paradise and Hell, by adding *The Keys*, *Prologue*, and *Epilogue* to the emblem-book.

Therefore, when *The Gates of Paradise* was reissued in 1818 it was necessary for him to change the title.

序

The Gates of Paradise は Emblem book で、1793年初めて彫版された時は題が *For Children/The Gates of Paradise* となっていた。ところが1818年に出されたものでは *For the Sexes/The Gates of Paradise* となっているのである。*For Children* をどうして *For the Sexes* に変えたのかということについては、Blake のみぞ知ることであって、とうてい吾々にはその理由を解くことは至難なのであるが、以下私見をのべてみたいと思う。

Blake は1789年に *Songs of Innocence* を世に出したが、この本が出るについては Isaac Watts の *Divine Songs for Children* が1788年に出版されたということと大いなる関係があるように思う。なぜなら学校教育というものをきらった Blake が、子供の適切な教育を願って出した Watts の *Divine Songs* に強い反感を持ったことであろうし、それ故に Swedenborg の影響をうけて書いた子供の *Innocence* に関する詩を発表してみようという気になって、*Songs of Innocence* を世に出したということが、当然のこととして考えられるからである。ところが1789年のフランス革命が Blake の予期せざる方向にむけて進んで行ったということとも関連して、*Songs of Innocence* を書いた時とは異なった心境の詩、*Songs of Experience* が書かれて行ったが、やがて1794年に *Songs of Experience* の title-page が出来上る頃までには、*Songs of Experience* を *Songs of Innocence* と合本することによって、‘the two Contrary States of the Human Soul’をうたった詩として、世に問う構想が Blake の胸の中に、すでに出来上っていたものと考えられる。そうすると Isaac Watts の *Divine Songs of Children*

に反対する意図のもとで出版された *Songs of Innocence* が *Songs of Experience* と合本してしまうと、当然のことながら、*Songs of Innocence* を発表した当初の目的がなくなってしまうので、いわば、*Songs of Innocence* に代るべきものとして、*The Gates of Paradise* が彫版され、*For Children* という題がつけられて、一足早く1793年に発表されたのではなかろうかと考えるのである。

一方 Blake は *Songs of Innocence* を *Songs of Experience* と合本して *Songs of Innocence and of Experience* と題して1794年に出してみると、まんざらでもなかったもので、今度はすでに出版した *The Gates of Paradise* に相対する形の、*The Gates of Hell* を彫版してみようと Blake は考えたらしい。*The Gates of Hell* は結局のところ、製作されず、Blake の頭の中だけで終わってしまったのであるが、Geoffrey Keynes は1968年複製出版した Blake の *The Gates of Paradise* の Introductory volume で、*The Gates of Hell* と書いた Blake の、いわば、筆蹟を写真で紹介し、証拠としているので、考えたことは確かである。

ではなぜ *The Gates of Hell* は製作されず、Blake の頭の中だけで終わったのであろうか。この理由は推察しか出来ないものであるが、おそらく次のような理由からであろう。すなわち、*Songs of Innocence* と *Songs of Experience* の場合のように、Paradise と Hell とは相対立し、対応関係にあるというものではなく、むしろ、相即相入 (interpenetration) の関係にあるということに、Blake は気がついたからでなかろうか。つまり Paradise の中に Hell があり、Hell の中に Paradise があるのであって、両者は別々に、対立してあるものではないということである。そういうことで、*The Gates of Hell* の製作はしなかったのであろう。それから又 Paradise と Hell とは相即相入の関係にあるということによって、1818年に *For the Sexes/The Gates of Paradise* と題を変えて出すことによって、表現しようとしたのだと私は考える。そのために、1793年と同じ Emblem book でありながら、*The Keys* や *Prologue* それに *Epilogue* をつけ加えたのではなかったらうか。兎に角、*For Children/The Gates of Paradise* よりも *For the Sexes/The Gates of Paradise* の方が、思想的面においても深みがあるように思えるのである。

何はともあれ、*For the Sexes/The Gates of Paradise* の *The Keys* を手がかりに各 Plate を見、又 *Prologue* や *Epilogue* を考えて行くこととする。

(1) Frontispiece



Blake は木の葉の上で眠っているサナギの姿の人間と、木の葉をたべている毛虫とを描き、人間とは何かと問うている。S. Foster Damon によると、

Here Blake uses the old Greek symbol of the body as a cocoon from which the soul (psyche) will be reborn as the butterfly.⁽¹⁾

といっているの、サナギの姿の人間は、古代ギリシャ人の考え方をそのまま借用したのであろう。そばで木の葉をたべている毛虫は、人間の顔をしているサナギの、やがて蝶になる前の段階の姿であるが、Geoffrey Keynes は、

The 'Catterpillar on the Leaf' in the illustration symbolizes man as a worm feeding on the vegetable life of the material world, that is, on error.⁽²⁾

といっている。サナギや毛虫というような、worm の姿で象徴される人間は、vegetater とか Human Vegetated Form 等と Blake によって言われているのであるが、要するに、物質的なものに幻惑されて真実を見る器官を眠らせてしまい、一切のことを二元的に分別して考え、そして毎日毎日を無為にすごしている人のことで、具体的に言えば、当時の聖職者である priests のことであった。*The Marriage of Heaven and Hell* (circa 1790—93) の *Proverb of Hell* で Blake は、

As the caterpillar chooses the fairest leaves to lay her egg on, so the priest lays his curse on the fairest joys.⁽³⁾

といっている。つまり聖職者は宗教を信ずる喜びというものを人々の心から啄んでたべてしまい、ただ一切のものを善悪とか、白黒というように、二元的に分別していく「まなこ」だけを、人々の心に植えつけているということであろう。Blake は又 *Auguries of Innocence* の終りの方で次のように言っている。

We are led to Believe a Lie
When we see not through the Eye
Which was Born in a night to perish in a Night
When the Soul Slept in Beams of Light.⁽⁴⁾

一切のものを「眼でもって (with the Eye)」見る限り、うわべだけの判断しか出来ない。うわべだけの判断はたいてい二元的であって、吾々の魂 (Soul) をゆさぶるような結果は生じない。ところが「眼を通して (through the Eye)」一切を見る時、一切のものすべてが吾々の魂と共鳴するのを感じ取ることが出来るのである。そういうことを Blake は次のように説明している。

When the Sun rises, do you not see a round disk of fire somewhat like a Guinea?
O no, no. I see an Innumerable company of the Heavenly host crying 'Holy, Holy is the Lord God Almighty'.⁽⁵⁾

彼は日の出の時を単に写實的に客觀的に「眼でもって」とらえるのではなくして、彼の「眼を通して」見るから、彼の魂と直接共鳴する何ものかを感じ取る

ことが出来るのである。その彼の魂と共鳴する何ものかを、Blake は、「神をたたえてうたう天子の群」と表現したのである。今日一日がこれから始まろうとする早朝の、すがすがしい一瞬が、彼の「眼を通して」適格に表現されているというべきであろう。仏教で言うところの「一切のものに仏性あり」ということも、眼でもって見る習性のある人には理解出来ないのである。Blake は「眼でもって」見ることしか出来ない人のことを、「眠れる子供の顔をしたサナギ」だとか、青虫にたとえているのであるが仕方がないであろう。Blake は又 *The Marriage of Heaven and Hell* の中で次のように言っている。

If the door of perception were cleansed everything would appear to man as it is, infinite. For man has closed himself up, till he sees all things thro' narrow chinks of his cavern.⁽¹⁾

「知覚の扉を清める」ということは「眼を通して見る」ということであろう。その時すべてのものが、あるがままに見えるし、あるがままに見えれば魂にふれあうものを感じとることが出来るのである。従って Blake はこの Frontispiece の下に、「人間とは何か (What is Man?)」と書いているが、その答は人間というものは「眼でもって」しか物ごとを見る事が出来ない worm の如きものであるというのであろう。しかし、それに次いで

The Sun's Light when he unfolds it
Depends on the Organ that beholds it.

とも言っているので、今までのべてきたように、太陽がギニー硬貨に見えるか、それとも神をたたえる天子の群に見えるかということは、各人の知覚の扉である器官 (Organ) によるのであって、その器官が開かれない場合は「眼でもって」見ることになるから、ギニー硬貨にしか見えないであろうが、開かれる (unfold) と神をたたえる天子の群とか、或は神は光なり (God is Light) で、神そのものに見えるのであると、Blake は教えているのである。

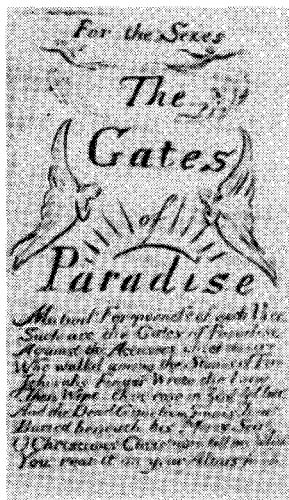
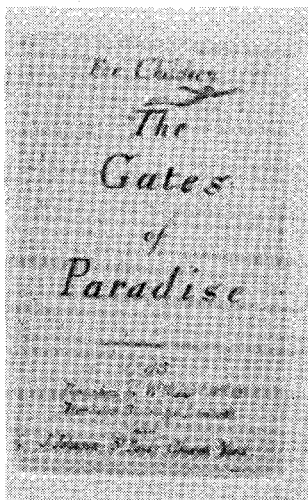
ところで、1818年版においては、Frontispiece の意味を解く Key がついていて、次のようになっている。

The Catterpillar on the Leaf
Reminds thee of thy Mother's Grief.

この lines はそのまま *Auguries of Innocence* の中に出ているのであるが、Geoffrey Keynes によると、Mother's Grief というのは Creation and birth の時の苦痛ということであるという。Creation も birth も共に物をつくり出すということで同じことなのだが、一切はもともと永遠なものであるのに、分析し、分別して行こうとする働きがおこる時に、人間の過失 (Error) が始まったのであった。過失 (Error) は Blake にあっては Creation と同意語である。従って一切を分析し、分別することをやめない限り、人間は Creation を続け、永遠を見失なって Vegetable world をさまよい続けなければならない。そういう意味で、木の葉の上にいる worm の姿は、知覚の扉を清めずに、自己中心的立場で、一切を二元的に分別し、分析して、可としている批判的理性にめざめた、吾等現代人の姿そのものであるということを知らされるのである。ただ Catterpillar を木の葉の上に見ると母親の悲哀を思い出させるというこの Key が 1818 年のにつけられたために、1793 年の時のよりも、この絵に対する解釈がいちぢるしく変わってしまったことを感ずるのである。即ち、この Key がつかない 1793 年の場合は、*For Children* という題がこの emblem book についてただけに、*Paradise Lost* の可能性をもって人間界に生れてきていることを Blake は子供達にさとしながらも、それとなく神を見失なわないで生きて行くようにという Blake の思いやりというものを感じさせるものであった。ところがこの Key がつけられることによって、この絵からうける感じは一変し、いかにも *For the Sexes* という題にふさわしくなるのである。即ち Vegetable world をさまよい続けている人間の、Creation という過失を限りなく続けて行かなければならない悲しみというものを強調しているように思えるのである。そうして又、この Key をつけることによって Plate 16 と関係し、人間の輪廻転生ということが言われているようにも思えるので、後程又 Plate 16 のところでのべることにするが、私は、1818 年のにつけられたこの Key の言葉が、おそらく *The Gates of Hell* が彫版されたら、その絵につけられた言葉であり、又、この言葉の意味するような絵

が彫版されたのではなかったらと思うのである。しかし、この *Key* の言葉が意味するような絵は、*The Gates of Paradise* の、この Frontispiece の絵以外には、Blake の *Imagination* には浮かんで来なかったので、*The Gates of Hell* は遂に製作されずじまいに終わったということも出来るであろう。

(2) Prologue



Frontispieceに続いて Blake は Prologue を書いている。この Prologue は1818年版の方にだけ Epilogue と一しょにつけられていて、内容的にも Epilogue に続くものだと考える。

Mutual Forgiveness of each Vice,
Such are the Gates of Paradise
Against the Accuser's chief desire,
Who walk'd among the Stones of Fire

「互いの欠点を赦しあう」ということが「楽園の門」に通ずる道なのであるが、
「互いの欠点を赦しあう」ということは worm のように「自らを閉ざす人」と

か「眼でもって」見る人には出来ないことである。一切を分別し、分析する働きが心にある限り、いつも自己中心的で、自分だけが正しいとする思いがあるから、吾々は *Accuser* となるばかりであって、他人を「赦す」ということは、とうてい出来得ないことである。「火の岩の間を歩く *Accuser*」とはだれのことかと言うと、それは *Covering Cherub* (守護のケルビム・智天使) のことであって、エゼキエル28：16に

I will destroy thee, O covering Cherub, from the midst of the stones of fire.

とあることから明らかである。ケルビムは人間の顔をしながら獣のような体をし、かつ翼を持っているものとされ、楽園の番人(創世記3：24)、神の玉座のにない手(エゼキエル1)、聖櫃の守護者(列王記1：6)とされている。いづれも、罪を背負った、汚れた人間が聖なる神のおわしますところに近づけないことを示しているのであろう。従って「お互の罪を赦しあうこれぞ楽園の門(*Mutual Forgiveness of each Vice, / Such are the Gates of Paradise*)」という Blake の考えと、罪人を近づけないようにケルビムを番させている楽園の門とは、真正面から対立することとなる。しかもケルビムは、又、十誡を刻んだ2枚の石板が収められているといわれている箱(民10：33)の守護者でもある。そもそも Blake にとって十誡は、

No individual can keep these Laws, for they are death to every energy of man and forbid the springs of life.⁽⁷⁾

であって、そういう十誡を守護するケルビムは、Blake にとっては、究極的には *Selfhood* そのものなのである。

Thus was the Covering Cherub reveal'd, majestic image
Of Selfhood, Body put off, the Antichrist accursed,
Cover'd with precious stones: ...⁽⁸⁾

Prologue は更に続いている。

Jehovah's fingers Wrote the Law:

Then Wept! then rose in Zeal & Awe,
 And in the midst of Sinai's heat
 Hid it beneath his Mercy Seat.
 O Christians, Christinas! tell me Why
 You rear it on your Altars high.

なぜキリスト教徒は十誡を聖壇の上高く掲げるのであるか。十誡の掟は人の行為を善悪に分別し、人に処罪と悔蔑を加えるものでしかないから、イエス・キリストはそういう十誡を認めなかったではなかったか。

I tell you, no virtue can exist without breaking these ten commandments. Jesus was all virtue, and acted from impulse, not from rules.⁽⁹⁾

それなのに、世のキリスト教徒はやたらと「～すべからず」と、十誡の掟にも等しい rule や law を作って、人々を規制し、人々の慈悲心や愛の心をつみとってしまっている。そういうことこそ、The Gates of Hell ではないのか。Blake は以上のように、この Prologue で当時の宗教界を批判するのであった。

(3) Plate 1



この絵には

I found him beneath a tree in the Garden.

という言葉がついている。a tree in the Garden といえば、もちろん聖書に記されてある楽園の智慧の木のことなのだが、この絵を見ると善悪を知る智慧の木ではなくて長い葉の繁っている mandrake の木のことであるようである。

mandrake (マンダラゲ) はヨーロッパの暖かい地方に野生する植物で、根はふたまたにわかれていて、地面から引き抜く時には、変な scream を発する。それから aphrodisiac があると想像されている、等々のことから、magical speculation を持ったものとされている。聖書の創世記30:14~16によると、Reuben が野で mandrake を見つけ、それを母親の Lea にわたしたところ、Lea の妹の Rachel が子供がなかったためにとてもそれを慾しがったということであるから、Fertility をうながすものとも考えられる。その Fertility をもってくる mandrake の赤子を、一人の女性が地面から引き抜きながら歩いているというのがこの絵なのである。一体この女性は何者なのであろうか。

Key には

My Eternal Man set in Repose,
The Female from his darkness rose.

とある。Eternal Man とは Blake の神話では Albion のことである。Albion が「座して休む」とは深い眠りにつくことである。そうして Albion が眠る時、Creation がはじまり、一切が分別の眼でもって見られるようになる。又二行目の The Female とは Jerusalem のことで、Blake の神話によると、Liberty をあらわす女性で、Albion の emanation なのである。A *Vision of the Last Judgment* で Blake は

In Eternity Woman is the Emanation of Man: she has No Will of her own.
There is no such thing in Eternity as a Female Will.⁽¹⁰⁾

といている。ところが、この Jerusalem は、Albion が眠りについて Creation

がはじまると、自分の意志をもって行動すべく、「彼の暗黒から立ち上る」のである。Plate 1 に描かれている女性は、正しく、自分の意志をもって立ち上った女性なのである。そうしてこの女性は、mandrake の赤子を次ぎ次ぎに引き抜いているので、おそらく不妊の女性であろう。Key では更に

And She found me beneath a Tree,
A Mandrake, & in her Veil bid me.

と説明している。S. F. Damon によるとヴェールは the film of matter which covers all reality⁽¹¹⁾ のこととっている。つまり、女性としては己れの不妊という悲しい事実をおおいかくして、何とか子供を生める体になりたいという意志のものに mandrake を採集しているわけである。この不妊の女性にとっては mandrake の赤子は fertile の力があると思われているのである。

かくして、この女性によって地面から引き抜かれて、彼女のヴェールに包み込まれた mandrake の赤子たちは、Albion の深いねむりの中に成長し、物質的なものに幻惑された人間になってゆくのである。

(4) Plate 2



第2図のタイトルは「水」である。そして、

Thou Waterest him with Tears.

とある。Thou というのは第1図で見た女性のことであろう。彼女の自由意志によって mandrake の赤子は大地からむりやり引き抜かれ、物質的なものに幻惑されながら、一切を二元的に分別し、思考するような人間に育てられたのである。その結果いつも絶えざる対立抗争を作り出し、しかもその対立抗争は Satan-Urizen を人間の上に君臨する絶対者なる神としたことから生じたものであるから、彼はいつも、Los や Luvah や Tharmas の突き上げを受けて、悩み苦しみ、即ち涙 (water) が絶えないのである。それ故 Blake はこの絵の Key として、次のように記している。

Doubt Self Jealous, Wat'ry folly,

「疑は自己を嫉妬する」とは Satan の如き Urizen が神にとってかわって、一切を支配することから生ずるのである。まことに「水のような愚かさ」であるのだ。

この図のタイトルである「水」は material world をあらわす。material world に生れると、ここは Satan-Urizen の支配するところであるから、doubt が対立抗争の原因となり、吾々の自我 (self) は少しも満足されず、吾々は苦痛 (又は苦悩) の涙にぬれていなければならない。そういう在り方は全く愚かしいことであると Blake は言うのである。

(5) Plate 3



第3図のタイトルは「地」である。そして第2図においては、河岸（又は海岸）の岩にすわって涙していた若者は、この第3図では、大地の中に閉じ込められて、生きるためにもがき苦しんでいる有様の人として描かれている。ここでは、

He struggles into Life

と書いている。Keyを見ると、

Struggling thro' Earth's Melancholy.

と説明している。BlakeではEarthはBodyであって、あらゆるenergyはBodyより生ずる⁽¹²⁾という。ところが一切を二元的に分別して、例えば、人間は精神と肉体から成り立ち、しかも理性は精神から生ずるが故に善であるのに対し、エナジーは肉体から生ずるが故に悪であると考えるならば、だれでもSatan-Urizenの指図によって、悪とされたBodyと戦わねばならず、しかもBodyの中に精神が閉じ込められて、Melancholyにならなければならない。Blakeはそういうように一切を二元的に分別して、一方を善とし、他方を悪とするような考え方に

反対したのであった。

この絵では、material world に生れた人間の姿を示しているわけである。

(6) Plate 4



第4図は「空気」である。これには

On Cloudy Doubts & Reasoning Cares

とある。この場合の雲という言葉の意味は clouds of reason (The Voice of Ancient Bard 4), clouds of learning (*Jerusalem* 52: 7) 等の使い方があるので、reason を表わすと考えられる。それ故若者は、今度は広大無辺なる宇宙の中であって、理性をあらわす雲にのり、深刻な表情をしているところである。なぜそのような深刻な顔をしているのかというと、己れと宇宙のすべてのものとの関係を分別し、理知的に、合理的に解こうとして苦悩しているわけである。この絵の Key を見てみると、この絵の解釈は更に深いものになる。すなわち、Key は

Naked in Air, in Shame & Fear,

とある。理性にめざめ、理性をもって行動する年齢になると、人はだれでも、蛇の誘いに負けて智慧の木の実をたべた Adam と Eve のように、裸でいることは恥かしいし、不安でもある。裸でいることが恥かしく、不安を感じるということは、すでに *eternity* を失った姿でもある。そうして、一切のことを理性的に分別して行こうとするから、そういう人の心というものはいつも不安で暗く、顔の表情も苦悩をおびている。

(7) Plate 5



第5図のタイトルは「火」である。この絵は、Luciferである Satan が神と戦うため槍と盾を持って火の中に立ち現われたところを描いたものである。この絵に Blake は

That end in endless Strife.

という言葉をつけている。S. F. Damon は

As a state of mind in the fallen man, Fire is flind warfare.⁽¹²⁾

といっている。神にむかって槍と盾をもって戦っても、それは道理をわきまえぬ振舞であり、盲目的戦という外はない。青年時代の行動というものは、恐れを知らぬ、盲目的、衝動的行為であることが多い。後で Blake が Key の中で、

Blind in Fire with shield & spear.

といっているのは、そういうことであろう。そのためかどうか知らぬが、1793年の中では火の中に立つ Lucifer の目は開いていたが、1818年の中では盲目になっている。Key は更に、

Two Horn'd Reasoning, Cloven Fiction,
In Doubt, which is Self contradiction,
A dark Hermaphrodite I stood,
Rational Truth, Root of Evil & Good.

1818年の絵では又、ちぢれた髪の毛は二つの角を suggestion するようにつくられているが、この角はおそらく理性をあらわすものであろう。理性は一切のことを二元的に分析し、分別し、その結果一方を立てて他方を切り捨てるのであるが、そのように一方を立てて、他方を切り捨てることが出来ず、両方を真実と認め、両方を立てて行こうとすれば、両性動物にならざるを得ない。両性動物とは、Damon によると

a sterile state of unreconciled and warry opposites

のことであるというから、「自己の内部で相争い、相対立して何ものも生み出せない姿」、即ち自己矛盾の状態をあらわすのである。兎に角、Lucifer は批判的理性にめざめ、自己矛盾に落入りながらも、限りなき分別の戦いを続けて行かねばならないのである。Key は更に続く。

Round me flew the Flaming Sword ;
Round her snowy Whirlwinds roar'd,
Freezing her Veil, the Mundane Shell.
I rent the Veil where the Dead dwell.

the Flaming Sword とは冷たい理性の働きのことであろう。理性が分別的に働くと「雪の旋風 (snowy Whirlwinds) がほえる」という。つまり理性は本来一切を割り切って見るから、理性の力 (the Flaming Sword) にかかると、生きるものも死んでしまうのである。Mundane Shell (現世の殻) とは、吾々の物質欲が作り出した世界のことであり、心のかよわぬ死の世界である。理性である Satan は物質界に吾々人間を閉じ込めておこうとする。Veil もやはり Mundane Shell と同じで、吾々を閉じ込めておこうとするものである。本来の自己とも言うべき吾々の命は、しかしながら、そういう世界に閉じ込められることをきらい、反抗し、引きさこうとするものである。

Plate 5 の絵は、吾々の批判的理性が本来の自己 (即ち、神) を死の世界に閉じ込めておこうとするのに対し、本来の自己自身は一切の殻を破り、ペールを引きさいて、一切無限の世界に出ようとするものであるから、兎角、青年時代は理性的分別と自己自身との戦いがはてしなく続くものであるということを示しているのであろう。

(8) Plate 6



翼のある天子のような子供が、今まさに卵の殻を破って出ようとしている絵が書かれてある。顔は子供というよりも (すでに性的満足を求めることが出来る程) 成熟した大人——男もしくは女——の顔である。Blake は、

At length for hatching ripe he breaks the shell.

と題をつけている。穀は、前にのべた Mundaneshell や Veil と同じく, materialism をあらわしている。日本語にも「自分の穀の中に閉じ込もっている」という言葉があるが、自分の穀に閉じ込もっている人の顔は暗く、とげとげしい表情をしているものである。そういう自分の穀を破らなければ吾々は生きて行くことが出来ないのである。吾々はどうしたら自分の穀から出て来れるのであろうか。Key をみしてみると、先づ、

I rent the Veil wher the Dead dwell :
When weary Man enters his Cave
He meets his Saviour in the Grave

と説かれてある。洞穴というのは、Platon の哲学に似ているのであるが、人間 (Man, 若しくは True Man ; 即ち本来の自分自身のこと) を閉じ込めておく肉体そのもののことである。肉体なしには人間は存在し得ないが、それだからといって、肉体の中にのみ閉じ込もっているのでは、本来の自分自身——人間——が活動出来ないから、生ける屍同然である。そうして生ける屍同然の人、洞穴や墓或は Veil に閉じ込める人、そういう人の言葉は暗く、人生に疲れた顔をしている。どうしてそういう顔になるかという、いつも批判的理性に基づいて行動し、終りなき戦をくり返しているからである。そのたびに自我の穀 (Mundaneshell) は厚くなる。そういう Veil であり、Cave であり Grave であるとされる穀にとじこもって生ける屍になっている人を救わんとする救済者 (Saviour) に会おう時、穀は破れるのである。

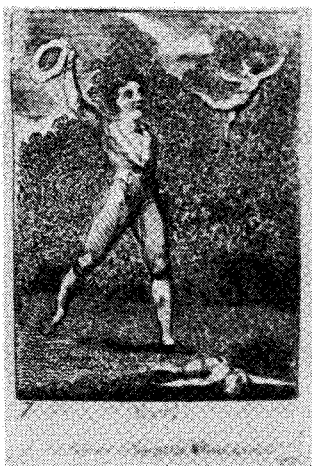
次ぎに Key は続けて言う。

Some find a Female Garment there,
And some a Male, woven with care,
Lest the Sexual Garments sweet
Should grow a devouring Winding sheet,

Garment は衣がかくし、おおっている性を suggestion する。吾々は肉体の中に

閉じ込める限り、男性は女性を、又女性も男性を性の対象として意識する。そうすると女性は、物質欲に目がくらみ、金銭を得るための手段として、性の交わりを行ない、男性は性の交わりによって金銭を取られ、そのたびにやつれて行く。「欲ふかい曲りくねったシーツ」とは互に相手を性的に意識し合った男女の交わりを表わすのであろうが、男女の在り方が、楽園の Adam と Eve のようであることを願うためにも、Mundaneshell を打ち破り、Grave や Cave の中に住むことのないよう、Saviour の御心にそって行くことが大切であると Blake は言うのであろう。

(9) Plate 7



この絵のテーマは、

What are these? Alas! the Female Martyr,
Is She also the Divine Image?

である。絵には飛び去りつつある fairy と、これを帽子でたたき落そうと追いかけている青年、それに帽子でたたき落されて、地上にのびて倒されている fairy が描かれている。S. F. Damon はこの fairy を a natural joy と解している。⁽¹³⁾

そうすると、この絵は男性の果てしない欲望に、愛のもつ自然の喜びが、いつも犠牲にされているということをあらわすのであろう。いつも愛の犠牲者になるのは女性なのである。Blake は、女性がいつも愛の犠牲の側に立たされ、いわば愛の殉教者となる時、神にも等しい姿となって復活するのであると言っているのである。

Key には

One Dies! Alas! the Living & Dead,
One is slain & One is fled.

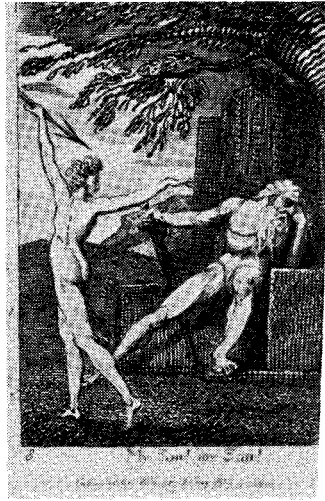
と説明してある。人はこの世において真の生を全うするためには、愛の殉教者となる女性のように、いつも自我を殺し、自己犠牲の心でなければならない。

生きながら死人になりてなりはてて

心のままにするわざぞよき

である。ところが多くの人は自我を主張して対立し、自我の争いの中で殺され、又、自我の主張が通らぬと逃げ出してしまうというようなことで、自分の一生を終えているのである。

(10) Plate 8



大樹の下で老人が、建物を背に腰をおろしている。彼は大刀を右手に杖のようにつきながら、左手を顔にあてて、疲れ切った表情をしてすわっているのである。一方裸体の若者は、この老人を突きさそうと、槍を持った左手と、空を握る右手を高くあげ、開いた両足の右足の方に体重をのせて、少し体をねじって身がまえている。第8図はそういう絵である。この絵には、ただ

My Son! my Son!

とあるから、父と子のいさかいを描いたものであろう。Key には

In Vain-glory hatcht & nurst,
By double Spectres Self Accurst,
My Son! my Son! thou treatest me
But as I have instructed thee.

とある。Spectre というのは、Blake の場合は、自我中心の心、即ち自我そのもののことである。

The Negation is the Spectre, the Reasoning Power in Man : this is a false Body, an incrustation over my Immortal Spirit, a Selfhood which must be put off & annihilated away.⁽¹⁴⁾

とか、又、

The spectre is the Reasoning Power in Man, & when separated from Imagination and closing itself as in steel in a Ratio of the things of Memory, It thence frames Laws & Moralities to destroy Imagination, the Divine Body, by Martyrdoms & Wars.⁽¹⁵⁾

と Blake は言っているので、Spectre は、一切を規則だとか、基準だとか、割合だとかというものをつくり出して行く理性のことなのである。学校等による教育によって、吾々の子供達は理性的に分別し、合理的・科学的に思考して行くように育てられるのであるが、やがて自我に目覚めるようになると、親や教師の教えに従わず理性的に分別し、合理的・科学的に思考するようになって、遂には教えてくれた親や教師に反抗し、暴力をふるうようになる。

この絵に描かれている老人は、Blake が好んで描く Urizen の姿であるが、Urizen が我が子を Spectre になるように育てたのであるから、むしろ親と対等になり、親と争い、はてまた親に槍をかまえて殺そうとする程までに成長した我が子を見て、親の期待通りに成長してくれたと喜ぶべきなのに、Urizen は苦悩の表情をして、深刻な顔になっている。Blake は、学校教育にはこのような矛盾があるので、強く反対し、嫌ったのであった。現代日本の、校内暴力や家庭内暴力という問題も、Blake のこの絵から、考えさせられるところである。

(11) Plate 9



月に梯子をかけて登ろうとする若者と、それをそばで笑って見ている男女とが描かれている。月は Blake の神話では Beulah をあらわしている。Beulah とは、S. F. Damon によると、

In Blake's system, Beulah is the realm of the Subconscious. It is the source of poetic inspiration and of dreams (*FZi*: 20, 99, 246; *Mil* 2: 1; *J* 17: 27; 36: 22; 63: 37; 79: 74). In Beulah, "Contraries are equally True" (*Mil* 30: 1; *J* 48: 14); and it is now well known that in the Subconscious, love and hate coexist without affecting each other, also tenderness and cruelty, prudishness and lust, cleanliness and filth, and other such split impulse. Here too the sexes are separate.⁽¹⁶⁾

ということである。又、Beulah は永遠の世界と、Ulro の世界との中間に位置しているともいわれている。Ulro の世界とは、

Such is the nature of the Ulro that whatever enters becomes Sexual & is Created and Vegetated and Born.⁽¹⁷⁾

であるから Material world である。一方永遠の世界は

In Eternity, the Individual contains his feminine portion within him ; consequently marriage does not exist there. "Humanity is far above sexual organization & the Visions of the Night of Beulah where Sexes wander in dreams of bliss among the Emanations" (*J* 79 : 73).⁽¹⁸⁾

なのである。この絵には、

I want ! I want !

という言葉がついており、又、Key は、

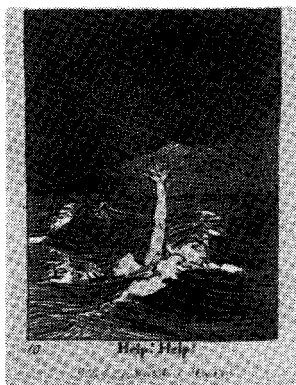
On the shadows of the Moon
Climbing thro' Night's highest noon.

とあるから、要するにこの絵は、若者が理性の支配する Material World を脱出して、月の世界、即ち Beulah の世界にあこがれていることを示しているのであろう。G. Keynes は1968年に出版した Blake の *The Gates of Paradise* の複製本の Commentary の中で

...the moon is the symbol of 'Beulah' or ideal marriage, in Blake's system.⁽¹⁹⁾

と言っているので、この若者は性的に男性と女性と区別されながらも、互に共存していくという ideal marriage を求め、あこがれているのである。ところがこの若者は左足から登ろうと梯子に足をかけているので、左足は material means をあらわす⁽²⁰⁾から、若者のあこがれ、求める結婚は実現されないことを吾々読者は知る。いやすでに、この絵の中では、若者の行為が実現不可能なこととして、笑いながら見ている一組の男女がいる。

(12) Plate 10



まっくらな夜の海に、おぼれて、助けてくれと叫んでいる人の絵である。

Help! Help!

という言葉がついている。Key をみると、

In Time's Ocean falling down'd

ということである。従ってこの絵は、時間という海に落ちて、潮流に流されながら助けを求める人の絵である。Blake の場合、時間は空間と共に Material World をあらわしている。時間にもとづいて、理知的に空間における自分の行動を判断している人は、いつも「忙しい」「忙しい」といつて動きまわっている。「忙しい」という字は「心を亡ぼす」ということをあらわしていると言われているように、時間に追われて行動している人は、時間の海に落ち、おぼれている人なのである。時間に追いかけられもせず、時間に対して超然としていることが必要なのであって、そのためには、

For all are Men in Eternity, Rivers, Mountains, Cities, Villages,
All are Human, & when you enter into their Bosoms you walk
In Heavens & Earths, as in your own Bosom you hear your Heaven

And Earth & all you behold; tho' it appears Without, it is Within,
In your Imagination, of which this World of Mortality is but a Shadow.⁽²¹⁾

という自覚が必要である。そういう自覚のある人、そういう境地を体得した人を Blake は Poetic Geneus (詩的天才) とか、True man 又は Man (真人) と呼んでいる。それ故 Blake はこの絵を書くことによって、時間に追われて毎日生活しているような生き方は、いつもおぼれて助けを求めている人のようなもので、自分の心を滅ぼしてしまうことになるから、すぐさま、Poetic Geneus とか True Man と呼ばれるような生き方を見つけなければならないと教えているのである。

(13) Plate 11



老人が木の下にすわって、幼ない天子の翼を大きな鋏で切っている絵である。これには、

Aged Ignorance
Perceptive Organs closed, their Objects close.

という言葉がついている。老人は Blake が好んで描がく Urizen と全く同じ容姿であるので理性でもって一切を判断し、理性による尺度で一切を分別して行こ

うとする行き方の人である。しかもその上、自分自身を神と同格に見ているから、自分の考えや思想を絶対視し、新しい考えやみずみずしい思想を受け入れることを拒否しがちである。結局、そのような人は自らの知覚の扉を閉ざし、自分の殻の中に閉じこもることになるから、正にがんこな表情をした孤独の老人として Blake は描くから、Urizen のような容姿にならざるを得ないのであろう。そういうような人を Blake は Key の中で

In Aged Ignorance profound,
Holy & cold, I clip'd the Wings
Of all Sublunary Things,

と言っているのである。又、この絵には、老人のすわっているところに繁った木がかいてあるが、老人にふさわしい Vegetable Life をあらわしているのであろう。この絵では、又、太陽が正に沈まんとしている。Material World において Vegetable Life を送る人にとっては、Imagination は必要がないわけであるから、Imagination をあらわす太陽は、姿をかくすべく沈まんとしているのである。若々しい思想や新しい考え方等をあらわす天子は、自分の思想や考えを絶対視する老人に羽を切られ、自由に飛びまわれないようにされ、沈まんとする太陽に別れの手をふっている。若い人の持つ新らしい思想や考えは、いつも老人や年長者の考えや思想に押さえ込まれ、切り取られて、形骸化されていくのが、この世の姿である。

(14) Plate 12



息子や孫と一しょに牢獄の中に入れられた Count Ugolino の絵である。Ugolino della Gherardesca (1200?—1289) はイタリアの Pisa の貴族であるが、裏切者の司祭のために政治的陰謀の罪で捕えられ、2人の子と2人の孫と共に投獄され、牢の中で餓死したのであった。この絵には、

Does thy God, O Priest, take such vengeance as this?

という言葉がある。人には誰れにでも執着心というものがあって、社会的地位とか名譽、財産等に対しては、特に執着心が強い。聖職者である司祭といえども、保身のためには神を利用し、神の名において反対者を取り除こうとするのである。Key には、

And in depths of my Dungeons
Closed the Father & the Sons.

とある。歴史の語るところによれば、Count Ugolino は Pisa の主権を手に入れようとしたことが、司祭の裏切りにあつて、果さず、捕えられて投獄されたということである。それ故 Count Ugolino 一族の不幸は、もとはといえば、彼の野心が作り出したのであり、彼の野心が彼等を投獄し、彼等を苦しめている

といえるのである。そういうわけで Count Ugolino 一族のこの姿は、裏切りにあったために負わされた苦悩ではなくて、自分達一族が招いた苦悩なのであって、いわば、自業自得なのである。Key で my Dangeons と言っているのはそういうことであろう。真の神は決して復讐はしない。野心という神が復讐をするのである。

(15) Plate 13



一人の男が妻と二人の子供と共に、臨終の父（か、兄弟か、又は友人か）のそばにいる。彼らはその臨終の人がこの世に肉体だけ置いて、天を指さしながら今正に昇らんとしているのを見て、おどろいているという絵である。この絵には、

Fear & Hope are—Vision.

とあり、Key には、

But when once I did descry
The Immortal Man that cannot Die,

とある。Immortal Man とは、Blake の場合は、Poetic Genius とか True Man のことになるのだが、そういう人が、Material World の中で時間に追いまわされて生き、しかも自分自身を dangeon の中に閉じ込めて一喜一憂の生活をしている吾々に対して、Imagination の世界を指し示してくれているのである。そうして吾々が指し示された Imagination の世界に吾々の五官の扉が開かれると、山川草木すべて仏性ありで、山も川も木も町も村も、一切のものが皆人間 (Human Form) であり、又、

Man is All Imagination. God is Man & exists in us & we in him.⁽²²⁾

という永遠の世界を覚えることが出来るのである。今この絵では、肉体を置いて天に昇ろうとする Immortal Man によって、教えられた永遠の世界である Imagination の世界を、今、彼等の Vision によって感得することが出来ると、希望が湧いてくるやら、あまりのすばらしさに恐れてしまうやら、というようなことを表わしているのであろう。

(16) Plate 14



この絵を見ると、一日の労働を終えた人が杖を手に帰宅をいそいでいるよう

に見えるのであるが、この絵には、

The Traveller hasteth in the Evening.

という言葉がついているので、労働を終えた人ではなくて旅人が、夕暮れ時の道をいそいでいるということがわかる。旅人はもちろん人生街道を歩く吾々一人一人のことである。画中の人は、今、自分の人生が暮れかかっているのに、早く目的地である永遠の世界に到着しようと急いでいるのである。Key には、

Thro' evening shades I haste away
To close the Labours of my Day.

とある。吾々は日々人生の終着地へ向け近づいているのであるが、若い中は中々そのようなことがわからない。まして自分の人生が夕暮れになっているのにもかかわらず、己れの終着地をはっきりさせないで平然としている人が多い。自分の人生の一日が終わったらどうなるのかということを急いではっきりさせねばならない。吾々は夕暮れの道を急いで歩いているのだ。

(17) Plate 15



老人が杖をついて洞窟の中に入ろうとしている絵である。この絵には

Death's Door

という言葉がつけてあるので、各自一人一人が己れの終着駅をはっきりさせないで、ただ自分の人生を歩み続けるだけならば、たどりつくところは「死の扉」が開いている洞窟、即ち墓地でしかないということを示しているのであろう。この絵の解釈はこれだけのものでしかないのだが、Blake はこの絵に Key をつけることによって Plate 16 とつなげようとした。Key は、

The Door of Death I open found
And the Worm Weaving in the Ground:

とある。この絵では、老人が「死の扉」が開きかけているこの洞窟の入口で、右足を先にして入るまでは、「地面の中で機を織っている虫」に逢うなどとは、決して考えていなかったはずである。Weaving は元来女性の仕事とされてきているものであるが、Blake の神話では、女性の仕事の外に、生殖を意味する言葉である。それ故、人生の旅を終えた人がたどりつく墓地は、又肉体の衣をまとった生命を生み出す子宮でもある。そうして、今死におもむく「私」は、機を織っている虫 (Worm) の餌になることになるのだ。

(18) Plate 16



この絵は前の15図から続くものである。即ち、人生の旅をひたすら旅した人は、当然の帰結として死に迎えられ、その結果、杖をもち、きょうかたびらを着せられて木の根の下に埋葬されるのである。この絵ではすでに埋葬されている人の頭が二つ見える。洞窟の死の扉をくぐった時、機を織っている虫(Worm)を見たのであったが、今その虫は埋葬された「私」のまわりに、大きなヘビのようにまといつているのである。絵には

I have said to the Worm:
Thou art my mother & my sister.

という言葉がついている。この言葉はおそらく「ヨブ記」のXVII:14の

I have said to corruption thou art my father, to the worm thou art my mother and my sister.

から来ていると思われる。Plate 15 で見たように、洞窟は死者を埋葬する墓であるばかりでなく、新らたに生命をこの世に生み出す子宮でもある。墓地に埋葬された体は corruption され、虫の餌になり、虫はその結果、育てられ、新しい肉体をもった存在になってゆく。永遠の生に生きる人は己れの肉体がどのよ

うに corruption され、そうしてどのように虫の餌になっても、かまわないのである。むしろ虫の餌になることによって、虫が育ってゆけば、虫に対して、「My mother」とか「my sister」とかという親近感がわくというものであろう。

1793年版では、ここで終わっているのであるが、1818年のには Key として、次のような言葉がついている。

Thou'rt my Mother from the Womb,
Wife, Sister, Daughter, to the Tomb,
Weaving to Dreams the Sexual strife
And weeping over the Web of Life.

S. F. Damen によると、Blake の神話では、

Vala is first a worm, then becomes a serpent and a dragon, before she is born as an infant (*FZ* 11: 83-92)). Orc also is first a worm in the womb, then a serpent, then "many forms of fish, bird & beast" before he is born as a baby (*Ur*. 19: 20-36).⁽²³⁾

なのである。「Vala は infant として生れる前 serpent であり dragon であった」とか、「Orc は baby として生れる前、worm であり、それから serpent であり、そして fish や bird や beast の姿をしていた」ということはどういうことかという、生物学の方でいう「個体発生は系統発生をくり返す」ということを Blake なりに言ったものであろう。だが Blake の神話によると、自然界の女神である Vala は Luvah の Emanation であり、しかも Albion の墮落の主たる因が彼女にあるとされているし、又 Orc は Luvah の a lower form であるところの repressed love、即ち物質界における Revolution をあらわすとされているので、これらが worm として子宮の中に宿ると、母であろうと妻であろうと、妹であろうと娘であろうと、世の女性は皆女性本能にめざめ sexual strife が旺盛になり、又物質欲にめざめて Web of Life をひろげて男性を誘惑するようになるというのが、Key の意味であらう。

Blake によれば、永遠の世界においては、男性も女性もないのであるから、

In Eternity they neither marry nor are given in marriage.⁽²⁴⁾

であり、又

Sexes must vanish & cease to be when Albion arises from his dread repose.⁽²⁵⁾

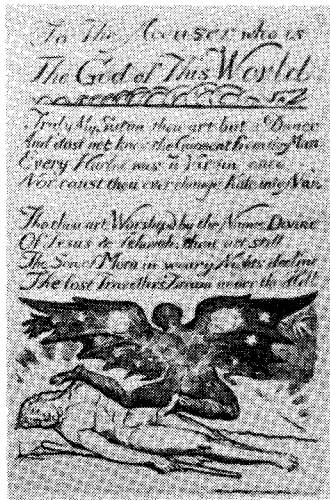
であるから、Humanityということにおいては男も女も同じである。Blakeの神話で言えば、4つのZoaであるLos, Urizen, LuvahそれにTharmasがそれぞれ分相応に方位を守る等、それぞれの役目を果しておれば、Sexual Strifeもおこらないし、Web of Lifeを張る必要もないのである。従ってSexual Strifeを夢見、又、Web of Lifeを張りめぐらしている「私の母、妻、妹、娘」は、永遠の世界からFallした状態にあるのであって、彼女等がこの世に生れる前の、墓地の中のwormの状態にある時に、もうすでにSexual Strifeを夢見、又Web of Lifeを張りめぐらしているというのであるから、女人性というか、女の魔性というか、ものすごいものである。

かくの如く、我々の肉体は生れる時から死ぬ時まで、否、この世に生れる前の子宮の中にいた時から、死んで埋葬されてwormの餌になる時まで、wormと親しい関係があるのである。死んで虫の餌になることによって、wormの一部となり、wormに生れ変ると考えれば、吾々は迷いの姿で輪廻転生をくり返えしているということが出来よう。

1793年版のでは、吾々の人生の旅は死でもって終りとなるということで、「子供達のために」はそれでよかったろうし、思想的にみても取りたてて考える程のこともなかった。しかし1818年版のには、Keyがつけられたおかげで、Plate 16がFrontispieceと続くことになり、吾々の流転・転生の姿が示されたことになる。

もちろんBlakeの本心は迷いの旅路をさまようことをやめて、一日も早く輪廻転生に終止符を打ち、肉体はwormに残して、The Gates of Paradiseに入り、永遠の生に生きることを薦めることにあったのである。

(19) Epilogue



更に1818年版にはEpilogueがついている。このEpilogueは内容的に言ってPrologueとかかわりがあると思う。Epilogueは次のようになっている。

To The Accuser who is
The God of This World

Truly, My Satan, thou art but a Dunce,
And dost not know the Garment from the Man.
Every Harlot was a Virgin once,
Nor can'st thou ever change Kate into Nan.

Tho' thou art Worship'd by the Names Divine
Of Jesus & Jehovah, thou art still
The Son of Morn in weary Night's decline,
The lost Traveller's Dream under the Hill.

このEpilogueにおけるAccuserは、PrologueのところのAccuserとはちがって、「この世の神であるところのAccuser」のことである。「この世の神」とは、も

もちろん、キリスト者達によってJesusとかJehovahとかとしてあがめられているところの神なのであるが、「この世の神であるところのAccuser」とBlakeが特に言う場合は、JesusとかJehovahとかという神の衣服 (Garment) を着たSatanに外ならないのである。Blakeは*Divine Image*の中で言っているように、神というのは

Where Mercy, Love & Pity dwell
There God is dewelling too.

なのである。BlakeはPrologueのところでも述べていたようにJesusは決して十誠を認めなかったのに、世のキリスト者達は、JesusやJehovahが「～すべからず」と吾々に言ったかの如くに教えていると批難し、このような「～すべからず」という教にはMercyも、Loveも、Pityもないから、「真人」(Man又はTrue Man)である神は存在せず、代りに神の衣服 (Garment) を着たSatanが神の如く君臨して、例えば、売春婦をきびしく問責している有様であると言うのである。Blakeは社会問題に対して強い関心を持ち、*Songs of Innocence*や、*Songs of Experience*等をはじめとする色々な詩等で、exploitersに対するはげしい攻撃や非難をしているし、又、売春婦やChimmy-sweeperの子供達、hapless soldiers等に涙を流していることは周知の事である。従ってこのEpilogueにおいても、神の衣服を着て売春婦を非難する問責者に対して、「彼女だってかつてはMaryと同じく、mercy, love, pityの心を持っていたのだ。それなのに、～すべからずと彼女を問責してみたところで、Kateの名をNanに変えるように簡単に彼女の生活を変えさせることは出来ないのだ。それよりもMercy, Love, Pityの心でもって彼女に接した方が、どれ程彼女にとって救いになるか知れぬ程である。それなのに、お前達はただ～すべからずと言うだけで、か弱い彼女を泣かせているだけではないか」というのがBlakeの主張であろう。真のJesusもJehovahも人を罰したり、人を罰に落とし入れようとしたりはしなかったのである。

従って、真のJesus、真のJehovahが、朝の太陽のように、この世にあらわれる時、神の衣服を着て問責していたSatanは、さまよえる旅人の悪夢のように、

たちまちその存在の影を失ってしまって、天国 (Paradise) がまばゆいばかりに、眼前に開かれてくるのだといってBlakeはEpilogueを結んでいる。

結 び

以上の如く1818年版の *The Gates of Paradise* を中心に見てきたのであるが、1793年版のでは、Blakeの人生観にもとづいて、子供達のために、人間の一生というものが説かれたという感じがするのに対し、1818年版のでは、Keyがつけられているだけ各emblemに対する解釈が深いものになり、大人の男女を対象に説かれているという感じがする。内容的に見てみると、1793年版のでは、生れながらにして原罪を背負っている吾々人間は、理性にもとづく悩み苦しみの人生を送りながらも、五体が健康で満足な中に、永遠の世界 (Paradise) に心の眼が開かれなければ、吾々は死の待っている墓場にどんどん進んでいくだけであると言っているのに対し、1818年のではKeyをよりどころにして読むと、永遠の世界 (Paradise) に対する心の眼が開かれなければ、吾々は原罪を背負ったまま、輪廻転生の迷いの生をくり返すだけであることを言い、更にPrologueとEpilogueをつけ加えて読むと、永遠の世界 (Paradise) に対する心の眼をどうやったら開くことが出来るかと言えば、それは吾々人間は生れながらにして原罪を背負っているため、地獄 (Hell) の苦しみの人生を生きているのであるが、Mercy, Love, Pityの心を持って、お互許し合いながら生きて行くことが出来るならば、永遠の世界をみる心の眼が自然に、開かれてくる、否、地獄の中にいると思いながら、その実天国の光の中に生きている自分がわかるようになる」とBlakeは言うのである。

ParadiseとHellは相対立して存在するものではなく、相即相入の関係においてあるものだということにBlakeは気がついたから、*The Gates of Hell*の彫版はしなかったのであるが、その代りに、1818年の版では、1793年のと同じEmblem bookを使用しながら、*The Keys*やPrologueそれにEpilogueをつけ加えて、ParadiseとHellとが相即相入の関係にあることをBlakeは明らかにしたというこ

と言えるのであろう。それ故*The Gates of Paradise*に対するものとして*The Gates of Hell*を作ろうとしたとて、作れないのは当然なのである。

(昭和56年5月18日受理)

(註)

- (1) S. Foster Damon : *William Blake, his Philosophy and Symbols*, Peter Smith, 1958, p. 83
- (2) Geoffrey Keynes : *William Blake's The Gates of Paradise, Introductory volume*, 1968, p. 9
- (3) Geoffrey Keynes : *The Complete Writings of William Blake*, the Nonesuch Press, London, 1957, p. 152
- (4) *Ibid.*, pp. 433-434
- (5) *Ibid.*, p. 617
- (6) *Ibid.*, p. 154
- (7) *Ibid.*, p. 662
- (8) *Ibid.*, p. 734
- (9) *Ibid.*, p. 158
- (10) *Ibid.*, p. 613
- (11) S. F. Damon : *A Blake Dictionary*, Brown Univ. Press, 1965, p. 432.
- (12) *Ibid.*, p.
- (13) S. F. Damon : *William Blake, his Philosophy and Symbols*, p. 85.
- (14) Geoffrey Keynes : *The Complete Writings of William Blake*, p. 533
- (15) *Ibid.*, p. 714.
- (16) S. F. Damon : *A Blake Dictionary*, pp. 42-43.
- (17) Geoffrey Keynes : *The Complete Writings of William Blake*, p. 674
- (18) S. F. Damon : *A Blake Dictionary*, p. 43
- (19) Geoffrey Keynes : *William Blake's The Gates of Paradise, Introductory volume*, p. 16
- (20) *Ibid.*, p. 16
- (21) Geoffrey Keynes : *The Complete Writings of William Blake*, p. 709
- (22) *Ibid.*, p. 775
- (23) S. F. Damon : *A Blake Dictionary*, p. 452
- (24) Geoffrey Keynes : *The Complete Writings of William Blake*, p. 660
- (25) *Ibid.*, p. 739

学生(室蘭工業大学)の健康に関する事象
と体力及び運動能力の傾向とそれぞれの
年次経過に伴う変化についての研究

清 野 市 治・小 成 英 寿・谷 口 公 二

A Study of Relation between Matters Connected with
Health and Physical Strength or Athletic Ability
Including Changes according to Yearly Process
—With Special Reference to the Students of
Muroran Institute of Technology—

Ichiji Seino, Hidetoshi Konari, and Koji Taniguchi

Abstract

The word Health, of course, means a good condition in both mind and body. This is the truth with human beings who lead social life and not exceptional with students. We cannot live a sound and creative life without health. To the students as well, a matter of health is of much importance in order to lead the fruitful campus life. Surrounded by such natural or social circumstances as the present day, they have to get more informations of their own health independently and concretely.

In this paper, we try to get some facts, through investigations, concerning the matters connected with health of our students. Next we represent the profile of their physical strength and athletic ability compared with those standards, and finally we aim to secure some guides to improve the curriculum in the field of our physical education.

I 緒 言

健康とは肉体的、精神的に良好な状態であるということに他ならない。これは又社会生活を営む人間全てに適用されるが学生も又例外ではない。健全で創造的な社会生活を営むために、もっとも基盤となるのは健康であろう。年齢及び体力が労働にどのような関係をもっているかということが重要な問題である。と同様に学生についても勉学はもとより学校生活の実質的效果を高めるといううえで健康や体力は重要である。一般に学生の大半は寮、下宿、間借り等の家庭の保護下から離れた自主管理の心要性がうまれる。健康を維持増進させるためには健康に関する情報が必要であり何等かの指標が必要であると同時に、その標準値に対する自己の位置づけが必要である。これらのことから学生の健康に関する理解とそれに伴う管理、体力、運動能力等の現状を把握し更に標準体力に対する位置づけを行い個々の学生の改善の資料とする一方この領域にかかわる教育の課題の方向づけを得ようとするものである。

II 測定、調査と方法

(1) 調査測定期間 昭和55年5月～7月

(2) 調査測定対象 本学学生1, 2, 3, 4年次

内訳

○調査書 1年次413名, 2年次420名, 3年次49名, 4年次29名

○測定 1年次469名, 2年次455名, 3年次67名, 4年次30名

調査書合計 911名 測定合計 1021名

(3) 調査書 学生の健康に関する周辺領域の基礎調査(アンケート, 別紙)

調査の主要な項目は次のとおりである。

- 1) 健康についての一般的な考えかた及び自己の健康についての把握の程度。
- 2) 自己の体力への関心や認識と自己評価について。
- 3) 学生生活のなかでの身体運動についての認識と運動への参加の実態。

- 4) 体育(正課)についての認識と評価について。
- 5) 課外活動(体育系)についての考えかたと活動への参加の実態について。
- 6) 学生の日常生活での食事、嗜好品、喫煙等についての実態。

以上の6項目についての概要把握を試みたものである。

- (4) 測定 文部省体力診断テスト及び運動能力テストを実施し、全国大学テスト結果(文部省体育局報告書53年度, 54年度)を照合し本学学生の体力、運動能力のプロフィールを検討した。又アンケートの回答結果の一部と測定結果を対応させどのように関連しているかを検討した。次に学年移行に伴う各測定値の変異についても検討したものである。その他肺機能測定(A. S-800) 血圧測定(H. E. M-3 自動血圧計) ローレル指数等を計測した。

III 結果と考察

本学の学生が健康についてどのように考えどのような生活をしているかは、その生活環境に左右されることが多いが、資料を考察する前提となる居住に関する調査が、表—1—aから表—1—fである。本学学生の特徴として自宅通学生が各年次とも全体の10%強で下宿、間借、寮生とほぼ同一を示しているが新入生が寮生活を若干敬遠気味でプライバシー尊重の風潮とともにグループ規制を嫌う傾向が認められる。

1 年生資料数(54年度)

Tab-1-a

() 内女子学生

学科	電気	電子	工化	化工	開発	金属	土木	建築	機械	産機	応物	総計
在籍数 昭和54.5.1	42(1)	40	42(1)	41(1)	49	39(1)	51	49(2)	39	42(1)	39(1)	473(8)
資料数	37	34	38	32	34	29	49	40	36	34	29	392
内訳	自宅生	4	2	3	3	11	6	4	5	6	7	55
	下宿生	13	7	15	15	9	9	14	11	15	12	138
	寮生	8	16	7	7	11	8	13	7	12	10	106
	間借生	12	9	13	7	3	6	18	10	7	2	93

2 年生資料数 (54 年度)

Tab-1-b

() 内女子学生

学科		電気	電子	工化	化工	開発	金属	土木	建築	機械	産業	総計
在籍数	昭和54.5.1	37	40	38(3)	41(3)	44(1)	39	52	46	42	39	418 (7)
資料数		37	37	33	33	37	31	43	37	39	37	364
内訳	自宅生	4	3	1	6	5	8	4	4	5	7	47
	下宿生	15	13	13	16	15	10	16	13	19	11	141
	寮生	9	11	7	8	10	5	9	9	8	12	89
	間借生	9	10	2	3	7	7	14	11	7	7	87

1 年生資料数 (55 年度)

Tab-1-c

() 内女子学生

学科		電気	電子	工化	化工	開発	金属	土木	建築	機械	産業	応物	総計
在籍数	昭和55.10.1	40	40	41(2)	41(2)	51	43	51	46(1)	40	42	39	474 (5)
資料数		39	36	37	30	48	42	47	42	27	30	35	413
内訳	自宅生	2	1	5	6	5	10	9	4	2	4	4	52
	下宿生	14	14	19	9	17	8	18	16	8	17	9	149
	寮生	7	9	4	4	14	9	4	8	8	3	10	80
	間借生	16	12	9	11	12	15	16	14	9	6	12	132

2 年生資料数 (55 年度)

Tab-1-d

() 内女子学生

学科		電気	電子	工化	化工	開発	金属	土木	建築	機械	産業	応物	総計
在籍数	昭和55.1.1	41(1)	40	42(2)	39(2)	49	39(1)	49	47(2)	39	42(1)	38(1)	465 (7)
資料数		39	38	29	34	45	31	47	43	39	41	34	420
内訳	自宅生	5	2	2	3	10	6	4	5	4	5	4	49
	下宿生	10	11	10	7	12	10	16	18	10	10	10	124
	寮生	3	16	7	10	11	7	11	10	14	13	9	111
	間借生	21	9	11	14	12	8	16	10	11	13	11	136

3 年生資料数 (55 年度)

Tab-1-e

学科		電気	電子	開発	総計
在籍数	昭和55.10.1	37	40	45(1)	122 (1)
資料数		17	18	14	49
内訳	自宅生	1	0	3	4
	下宿生	4	6	3	13
	寮生	3	8	1	12
	間借生	9	4	7	20

4 年生資料数 (55 年度)

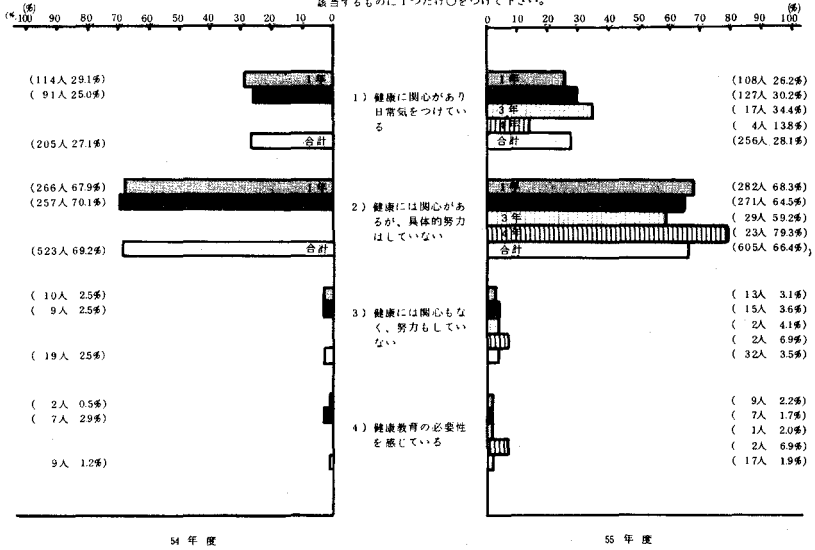
Tab-1-f

学科		開発
在籍数	昭和55.10.1	4 8
資料数		2 9
内訳	自宅生	3
	下宿生	1 3
	寮生	6
	間借生	7

1) 健康の認識について

Fig. 1 健康についての考えかたの調査 I - (I)

(I) 健康についてどのように考えていますか。
該当するものに1つだけ○をつけて下さい。



★ 以下のグラフは同様の区分になる

1年 2年 合計

★ 以下のグラフは同様の区分となる。

1年 2年 3年 4年 合計

Fig-2 健康状態の判断についての調査1-②

② 自分の健康状態の評価はどのようなことで判断していますか。該当するものに○をつけて下さい。(重複回答可)

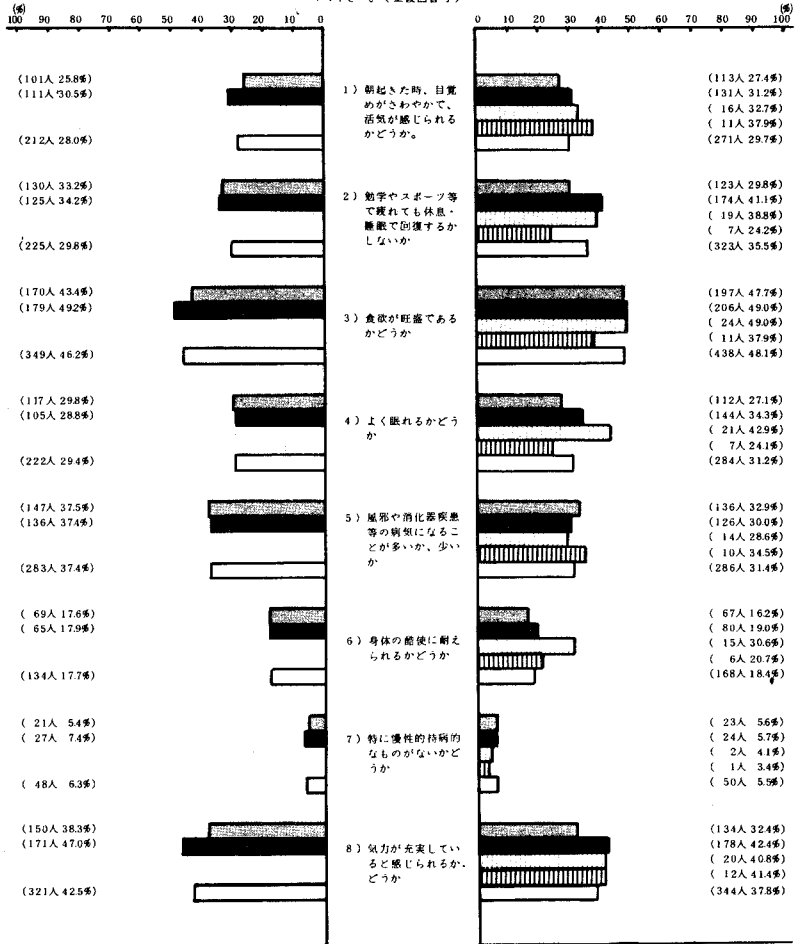
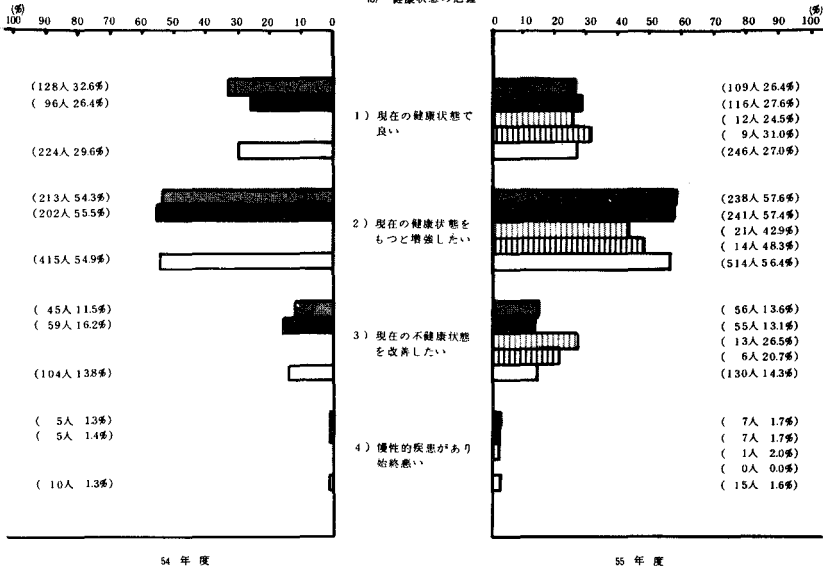


Fig-3 健康状態の把握についての調査1-(3)

(3) 自分の健康状態をどう考えていますか。該当するものに1つだけ○をつけて下さい。

(3) 健康状態の把握



具体的疾患名

1年 腰痛
胃潰瘍
習慣性アレルギー性鼻炎
アレルギー性鼻炎
喘息

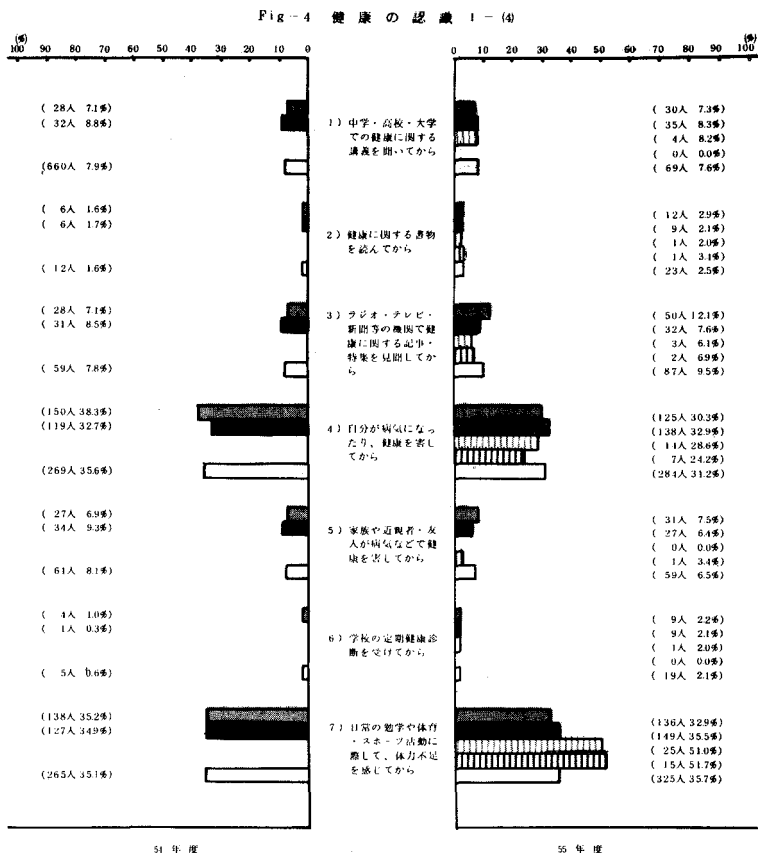
2年 慢性十二指腸炎
歯痛
風邪
歯痛症
不明

具体的疾患名

1年 虫歯
偏頭痛
鼻づまり
慢性鼻炎

2年 貧血
アレルギー性鼻炎
鼻炎
心臓肥大
風邪
歯痛症

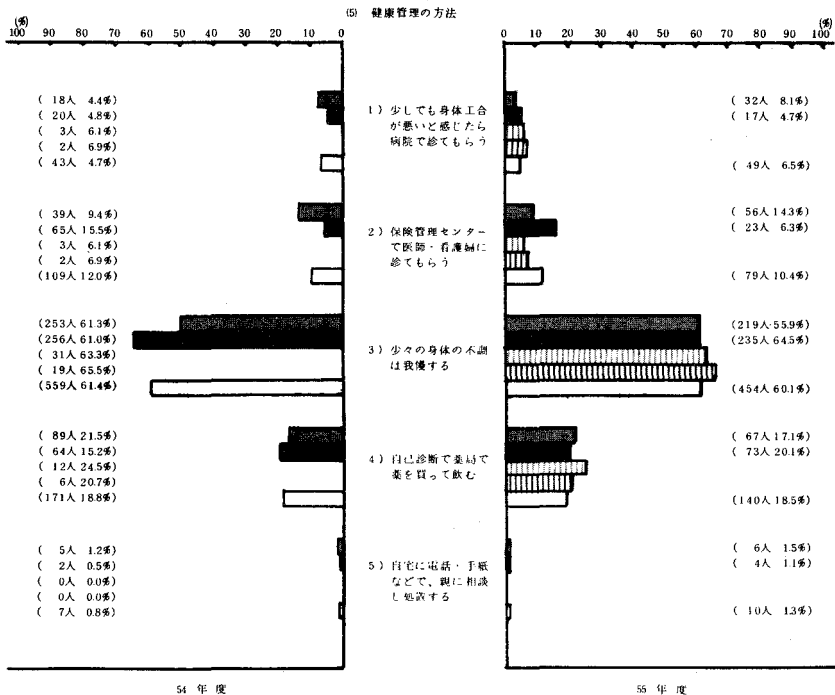
3年 クロニク氏病



図一1から図一5によると健康について関心はもっているが具体的な努力をしていないというのが70%近くを占めて自己の健康状態の判断は食欲があるか、ないか、気力が充実しているか、どうかなので推し計っている。現在の健康状態でよいと考えているものは全体で30%に満たず過半数のものがより健康状態を改善したいと希望しており、不健康状態にあると自覚しているものが20~25%にも達している。又健康について特に関心をもった動機は健康を害したり、日常の勉学やスポーツ活動に際して体力不足を感じてからというものも多く、

Fig-5 健康管理についての調査1-(5)

(5) 身体不調のとき自分の健康管理はどうしていますか。該当するものに1つだけ○をつけて下さい。



アンケート1-10について、54年度学生が回答した内容と、55年度になって回答した内容の変化

T a b - 2 - イ

54年度1年生(全科)	55年度回答内容
1-11-1)に回答した者 107人	1) - 6人、5.98% 2) - 42人、39.8% 3) - 0人、0% 4) - 1人、0.9%
1-11-2)に回答した者 232人	1) - 39人、16.8% 2) - 184人、79.8% 3) - 6人、2.6% 4) - 3人、1.3%
1-11-3)に回答した者 8人	1) - 1人、12.5% 2) - 3人、37.5% 3) - 4人、50.0% 4) - 0人、0%
1-11-4)に回答した者 2人	1) - 0人、0% 2) - 2人、100% 3) - 0人、0% 4) - 0人、0%

T a b - 2 - ロ

54年度2年生(電気、電子、開発)	55年度回答内容
1-11-1)に回答した者 12人	1) - 6人、50.0% 2) - 5人、41.7% 3) - 1人、8.3% 4) - 0人、0%
1-11-2)に回答した者 29人	1) - 7人、24.2% 2) - 20人、69.0% 3) - 1人、3.4% 4) - 1人、3.4%
1-11-3)に回答した者 2人	1) - 0人、0% 2) - 2人、100% 3) - 0人、0% 4) - 0人、0%
1-11-4)に回答した者 2人	1) - 1人、50.0% 2) - 1人、50.0% 3) - 0人、0% 4) - 0人、0%

健康管理という面では60%が少々の不調は我慢し売薬に頼るというものが20%近くにのぼり保健センター利用者は10%程度である。これらのことは健康は大切であると意識していながら究極に直面しないと真剣に考えないことを示し安易な姿勢を示しているものが大半であるといえよう。

これらの意識は年次移行しても同じような傾向を示していることから今後の健康に関する一層の啓蒙が必要であろう。

II) 体力の現状について

現在の自己の体力を自主的に判断させた資料が図23—図28である。

Fig-23 自己体力の認識についての調査Ⅰ—(1)

(1) あなたは現在の体力の状態をどう考えていますか。

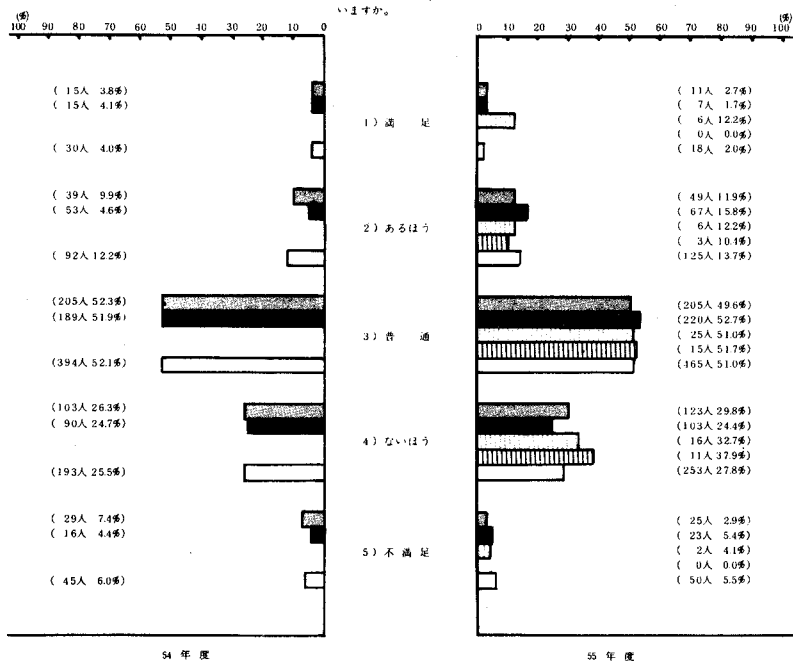


Fig-24 大学生生活のなかでの体力の認識についての調査Ⅰ-②

② あなたは現在の勉学や学校生活が今の体力でやっているといますか。

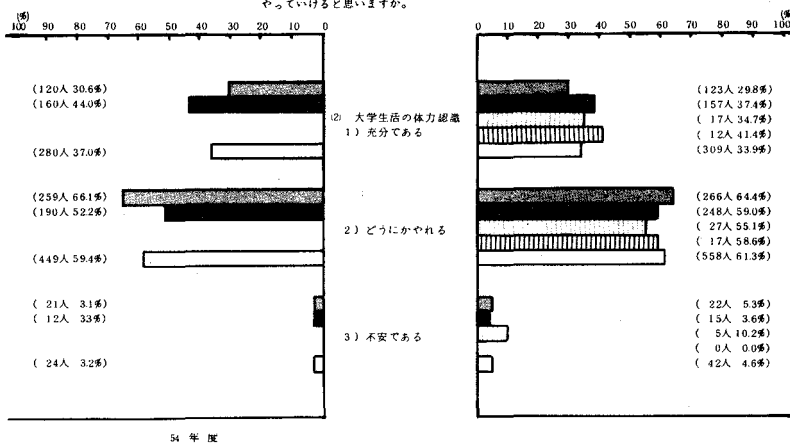


Fig-25 社会生活の体力認識Ⅰ ③

③ 社会に出て現在の体力でやっていけるといますか。

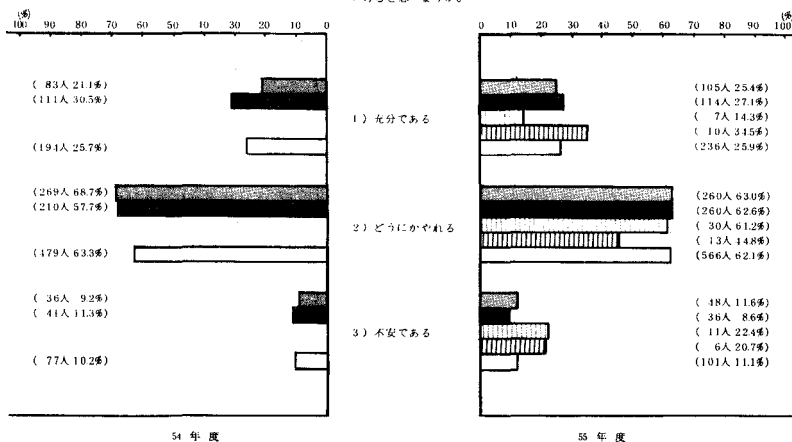


Fig-26 自己の体格・体力の認知についての調査

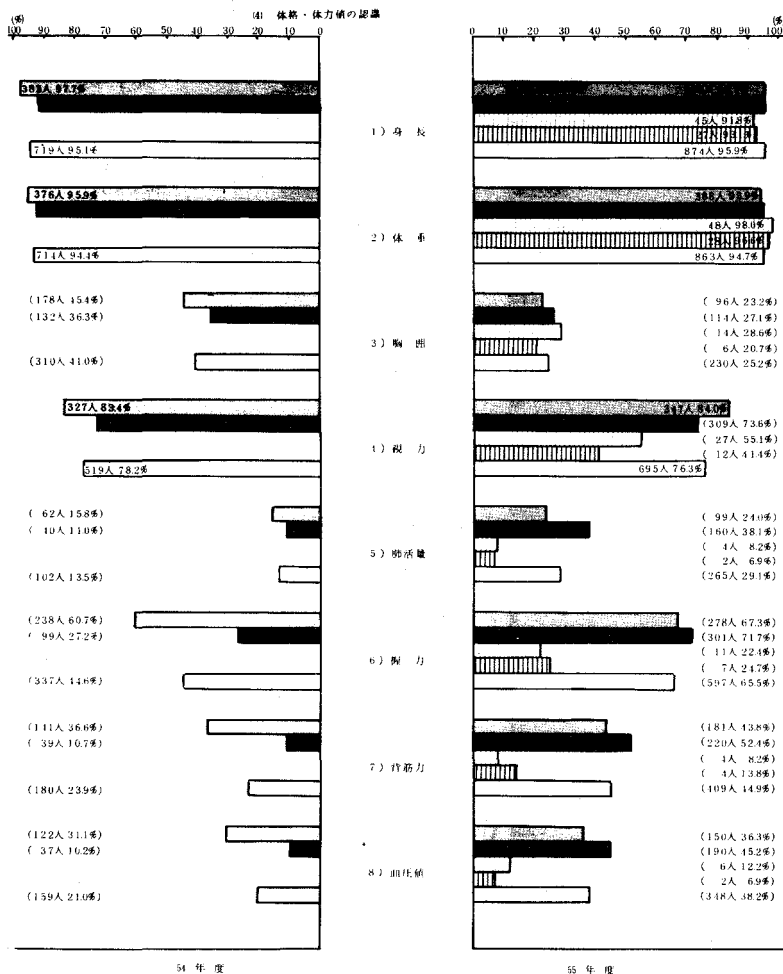


Fig. 27 自己体力の評価についての調査 I - (5)

(5) 体力の評価法

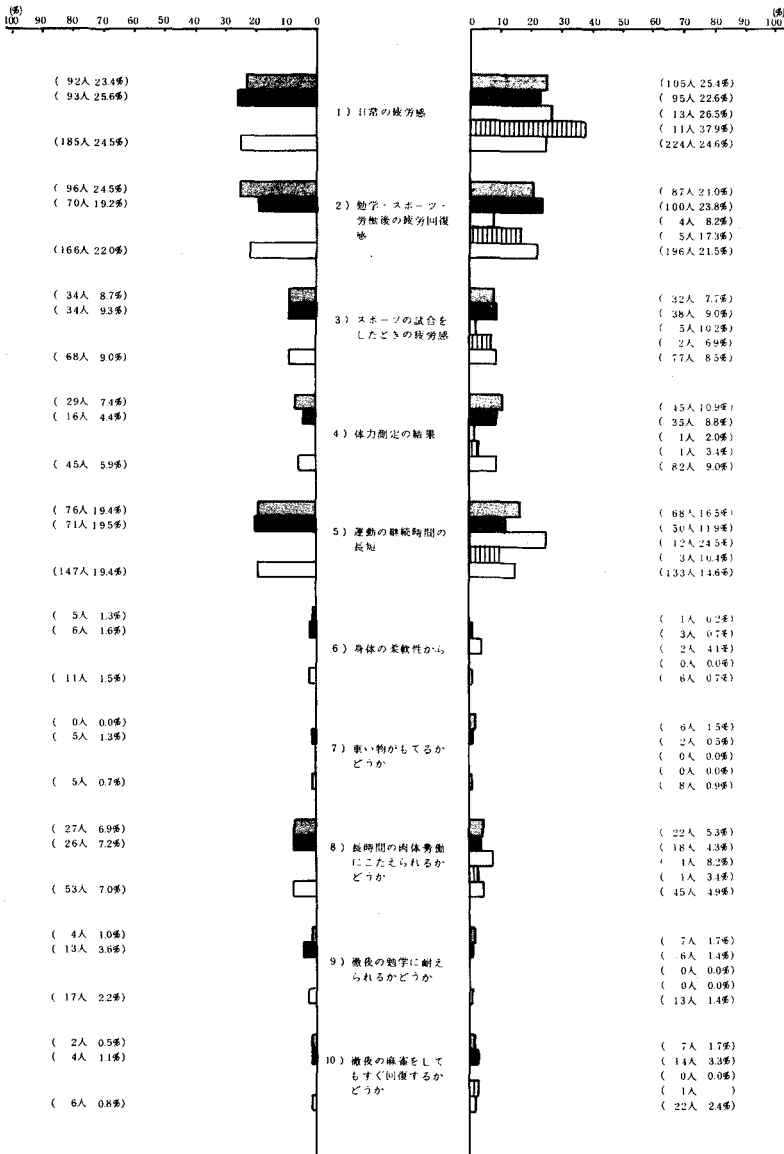
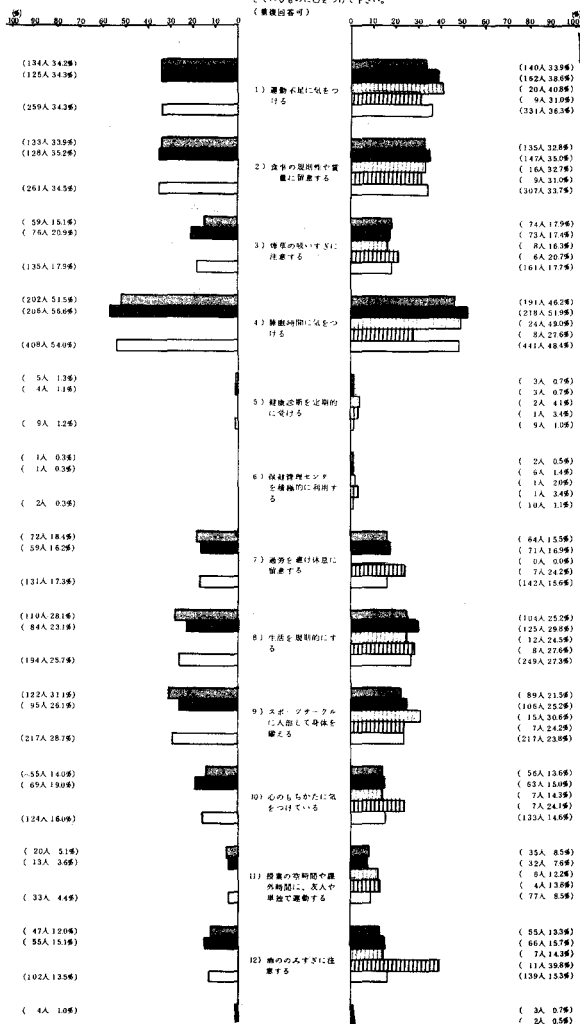


Fig-28 健康維持についての調査(一)個

市) あなたが健康・体力増進のために現在実行
しているものに○をつけて下さい。

(複数回答可)



図一23によれば自分の体力に(満足)しているものは僅かに2~3%で3年次学生で10%を若干超えるに過ぎない。体力に(不満足)(ないほう)とするものは30%にものぼる。しかし学生生活の場では(どうかやれる)と(充分である)とするものが大半で不安とするものは4~5%にすぎない。(図一24)将来卒業後の社会生活では(不安)であるとするものが10%になり3年, 4年次になると段々増大し20%にも達する。このことは学生生活の安易さを示すとともに社会生活は厳しいものという判断をもっている学生もいることを示している。健康維持のための注意事項としては睡眠, 運動不足, 食事の規則性等をあげ4年次学生になると酒の飲みすぎと注意するというものが40%にもなる。(図一28)この中でスポーツをすることで健康維持を図るというものは5番目に漸くランクづけされるが運動意欲の盛り上りに今一つ欠けるといえよう。54年度55年度の比較ではほぼ同じ傾向を示し特に意識の変遷はみられない。

次に調査紙による自己体力の現状についての考え方の裏付資料として体力診断テスト及び運動能力テストを実施し, 更に文部省体育局の53, 54年度全国大

Tab-3 年令別、性別、体力診断テスト及び運動能力テスト各種目と合計点(全国大学対比)

	1 8			1 9			2 0			2 1			2 2		
	標本数	平均値	標準偏差	標本数	平均値	標準偏差	標本数	平均値	標準偏差	標本数	平均値	標準偏差	標本数	平均値	標準偏差
身長 (cm)	275 6939 199	169.29 170.99 170.36	5.66 5.52 4.87	318 7710 343	169.80 170.70 169.69	5.34 5.46 4.86	183 4623 180	170.14 169.40 170.47	4.08 5.27 5.94	35 67 69	170.39 170.25 170.25	4.22 5.29 5.29	22 169.62	4.96	
体重 (kg)	276 6922 199	61.71 62.70 61.14	7.65 7.33 7.88	319 7733 343	62.43 62.80 61.82	7.40 7.48 6.73	182 4476 180	62.05 62.56 61.86	7.13 6.89 6.56	35 67 69	62.53 62.76 62.76	8.80 7.40 7.40	22 60.91	5.62	
50 m 走 (秒)	255 761 223	7.64 7.60 7.61	0.40 0.39 0.39	289 7477 377	7.59 7.57 7.55	0.43 0.43 0.43	168 4375 193	7.60 7.57 7.53	0.39 0.39 0.40	29 74 74	7.62 7.54 7.54	0.56 0.50 0.50	24 74.4	6.37	
走 歩 と ビ (m)	252 6929 233	338.62 368.9 358.09	65.5 66.70 67.10	281 7456 376	335.20 361.3 333.07	66.6 66.86 66.11	165 4279 193	336.00 364.14 336.40	65.6 66.14 66.40	29 73 73	334.00 364.06 364.06	65.35 66.04 66.04	24 445.38	33.04	
ハンドボール 投 げ (m)	255 6919 232	26.48 28.3 28.65	4.20 4.31 4.74	291 7459 378	26.86 28.3 28.67	3.85 4.33 4.22	165 4377 193	26.70 28.47 29.46	3.86 4.40 4.86	29 73 73	26.65 28.01 28.01	4.96 4.50 4.50	24 28.63	3.59	
投 擲 砲 (m)	264 6927 237	6.94 6.18 6.40	3.22 3.12 2.97	299 7459 378	6.77 6.13 6.05	2.97 3.38 3.18	179 4376 197	6.84 6.19 6.40	3.15 3.36 3.27	32 65 65	6.86 6.51 6.51	3.66 2.65 2.65	18 7.56	3.73	
1000 m 走 (分、秒)	245 6950 231	67.9 69.75 69.75	8.85 9.75 9.17	279 7459 368	67.4 69.75 67.7	8.45 9.75 8.93	143 4279 187	67.25 69.75 67.25	8.45 9.75 8.45	26 67 67	67.8 69.75 67.8	56.74 69.75 69.75	22 67.7	33.71	
運動能力テスト 合 計 点 (分)	239 6959 245	32.96 34.9 36.25	6.86 7.29 8.00	279 7459 368	32.99 34.9 36.65	6.86 7.29 8.00	140 4279 187	32.96 34.9 36.65	6.86 7.29 8.00	26 67 67	32.96 34.9 36.65	6.86 7.29 8.00	22 32.21	8.16	
伏 倒 砲 と ビ (分)	267 6199 242	49.61 49.9 50.76	6.46 6.46 6.87	325 7459 392	49.61 49.9 50.76	6.46 6.46 6.87	189 4279 202	49.61 49.9 50.76	6.46 6.46 6.87	31 67 67	49.61 49.9 50.76	6.46 6.46 6.87	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	31 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	274 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	323 7459 392	49.70 50.76 50.76	6.75 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	326 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	190 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	276 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	327 7459 392	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	189 4279 202	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	32 67 67	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86	19 46.63	3.90	
走 歩 と ビ (分)	275 6940 243	50.76 50.76 50.76	6.86 6.86 6.86												

学測定値平均を引用し比較検討した。表一3は本学学生の年齢別の体力診断テストと運動能力テストの各種目点と合計点を全国大学の平均点と比較したものである。項目別についてみると各年齢とも、握力、背筋力が全国より優り18歳では垂直とびも優っている。反面反復横とびと54年度の踏み台昇降が劣っているが55年度との比較では差は認められなくなる。

体力診断テストの合計点では表一4に示すように本学学生が優っているが55年度との比較でもその差は明かである。21歳、22歳については全国の資料がないが経過から推量すると全国より優っているものと考えられる。

表一6は体力診断テスト総合判定表であるが54年度学生ではピークがC段階に多く全国学生のランク区別とほぼ同じパターンを示しているが55年度学生では19歳、21歳にみられるように、ピークはBランクとCランクの中間に移動しA段階にランクされる本学学生の%テージも全国と比較して優位にある。このことから54年度では全国を下廻り55年度では僅かに上廻ったといえる。

年令別体力診断テスト項目別判定表

Tab-7											(上段:人数 下段:%)												
	5	4	3	2	1		5	4	3	2	1		5	4	3	2	1		5	4	3	2	1
18	56	16	59	5	3	251	28	122	115	11	0	274	40	171	53	3	0	725	11	51	12	271	
	31.4	9.5	27.0	1.9	1.2	100%	9.5	46.4	45.0	4.0	0	250%	17	77.4	22.2	1.1	0	100%	4.1	21.0	5.4	3.7	100%
	107	42	24	0	0	261	8	136	102	8	0	246	17	66	26	0	0	246	7	31.8	12.5	3.7	1.2
19	14	17	61	1	0	105	31	141	141	6	0	320	20	194	59	3	0	320	11	66	19	7	26
	2.4	2.9	10.9	0.2	0	100%	5.2	24.1	24.1	1.0	0	100%	3.5	26.5	8.1	0.5	0	100%	1.9	20.5	4.4	1.0	0.3
	102	126	26	2	0	350	34	162	175	19	2	390	55	262	73	2	0	390	17	112	36	6	8
20	50	39	33	4	0	196	28	132	113	3	0	196	37	131	22	0	0	196	6	41	36	3	0
	8.3	6.5	5.5	0.7	0	100%	4.7	22.2	18.9	0.5	0	100%	6.2	22.2	3.7	0	0	100%	1.0	21.0	18.0	0.5	0
	146	136	18	2	1	367	19	122	121	5	0	317	45	121	38	1	0	318	8	66	16	2	0
21	7	19	5	0	0	31	3	19	12	1	0	32	3	17	6	0	0	32	2	10	4	0	0
	1.1	3.1	0.8	0	0	100%	0.5	3.2	2.0	0.2	0	100%	0.5	2.2	1.0	0	0	100%	0.3	2.7	0.6	0	0
	22	61	16	0	0	100	3	9.4	26.9	3.3	0	100	11	33	16.8	0	0	100	4	12.6	6.2	0	0
22	1	11	0	0	0	69	1	4.3	12.2	2.9	0	69	1	11	10.2	1.4	0	100	0	4.4	4.0	0.3	0
	0.2	1.8	0	0	0	100%	0.2	0.8	2.0	0.5	0	100%	0.2	2.2	2.1	0.3	0	100	0	0.6	0.6	0.1	0
	8	19	1	0	0	70	3	16.8	47.4	0	0	69	0	16	16.8	0	0	19	0	5.6	23.3	3	1
23	14	14	5	0	0	274	6	28	109	10	1	240	14	126	100	12	1	241	8	14	5	0	0
	2.4	2.4	0.9	0	0	100%	1.0	5.0	18.9	1.7	0.2	100%	2.4	21.4	17.2	2.0	0.4	241	1.4	2.2	0.9	0	0
	30	10	23	4	0	261	2	15	112	104	6	263	14	126	104	14	4	271	8	14	5	0	0
24	13	16	69	1	0	320	10	19	174	104	7	266	14	126	104	14	4	271	8	14	5	0	0
	2.2	2.7	11.5	0.2	0	100%	1.7	2.5	24.1	18.0	1.2	100%	2.4	21.4	17.2	2.4	0.7	271	1.4	2.2	0.9	0	0
	131	167	49	6	4	320	10	19	174	104	7	266	14	126	104	14	4	271	8	14	5	0	0
25	34	37	18	1	0	196	20	9	161	99	0	189	11	73	61	22	0	189	11	73	61	22	0
	5.7	6.2	3.0	0.2	0	100%	3.4	1.5	25.1	16.5	0	100%	1.9	26.5	10.5	3.7	0	189	1.9	26.5	10.5	3.7	0
	103	45	20	0	0	216	3	1.4	16.7	50.3	0.5	193	20	26	37	19	1.9	216	17	22	12	0	0
26	21	47	20	0	0	100	2	11	32	27	0	72	15	26	26	4	0	70	2	11	12	0	0
	3.5	7.8	3.4	0	0	100%	0.3	1.8	5.3	4.6	0	100%	2.5	4.4	4.4	0.7	0	70	0.5	3.7	2.0	0	0
	25	42	63	16	0	9	2	11	32	27	0	72	15	26	26	4	0	70	2	11	12	0	0
27	1	11	5	0	0	10	2	11	32	27	0	72	15	26	26	4	0	70	2	11	12	0	0
	0.2	1.8	0.8	0	0	100%	0.3	1.8	5.3	4.6	0	100%	2.5	4.4	4.4	0.7	0	70	0.5	3.7	2.0	0	0
	11	11	5	0	0	10	2	11	32	27	0	72	15	26	26	4	0	70	2	11	12	0	0
28	1	11	5	0	0	10	2	11	32	27	0	72	15	26	26	4	0	70	2	11	12	0	0
	0.2	1.8	0.8	0	0	100%	0.3	1.8	5.3	4.6	0	100%	2.5	4.4	4.4	0.7	0	70	0.5	3.7	2.0	0	0
	11	11	5	0	0	10	2	11	32	27	0	72	15	26	26	4	0	70	2	11	12	0	0

Tab-8					(単位:点)	
学年	n	平均	S.D.	111 ± 0.06 = 平均	標準	標準
18	254	24.20	2.49	24.20	標準	標準
	241	25.17	2.43	25.17	標準	標準
	244	24.52	2.55			
19	299	24.62	2.63	24.62	標準	標準
	262	24.84	2.65	24.84	標準	標準
	280	25.52	2.72			
20	157	24.82	2.84	24.82	標準	標準
	199	25.80	2.79	25.80	標準	標準
	226	24.35	2.40			

年令別体力診断テスト合計点

Tab-4							(単位:点)	
年令	n	平均	S.D.	(t) ± 0.05 = 95%			54年度	55年度
18	254	24.30	2.49				優	優
	241	25.17	2.43				優	優
19	290	24.52	2.55				優	優
	452	24.7	2.20				優	優
20	157	24.02	2.34				優	優
	420	24.8	2.62				優	優
21	70	25.83	2.73				優	優
22	19	25.74	1.67				優	優

上段:54年度本学学生
中段:全国平均
下段:55年度本学学生

Tab 6

年令別体力診断テスト総合判定表

(上段:人数、下段:%)

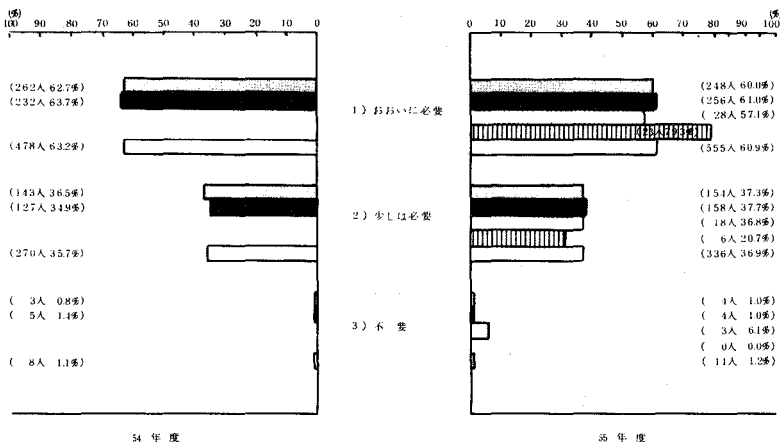
年令	A		B		C		D		E		計	%
18才	52 11.6	16 6.3	168 37.5	72 25.3	213 47.6	135 53.2	5 1.1	24 9.4	10 2.2	7 2.8	448 100%	254 100%
		18 7.6		95 40.0		111 46.6		12 5.0		2 0.8		238 100%
19才	64 11.9	21 7.2	181 33.6	82 28.3	248 46.1	160 55.2	37 6.9	21 7.2	8 1.5	6 2.1	538 100%	290 100%
		53 13.5		162 41.3		147 37.5		22 5.6		8 2.1		332 100%
20才	44 9.0	7 4.5	191 39.0	64 30.8	204 41.6	76 38.4	41 8.4	9 5.7	10 2.0	1 0.6	490 100%	157 100%
		35 16.9		77 37.2		84 40.6		9 4.3		2 1.0		207 100%
21才		4 14.3		7 25.0		14 50.0		3 10.7		0 0		28 100%
		13 17.8		30 41.1		23 31.5		6 8.2		1 1.4		73 100%
22才		1 5.6		8 44.4		9 50.0		0 0		0 0		18 100%

注: 左欄全同学生、右欄上段54年度本学学生、下段55年度本学学生

III) 運動について

Fig. 29 学生生活の中で運動継続の必要性についての認識 (1)

(1) あなたは現在の学生生活の中で運動を継続する必要があると思いますか。

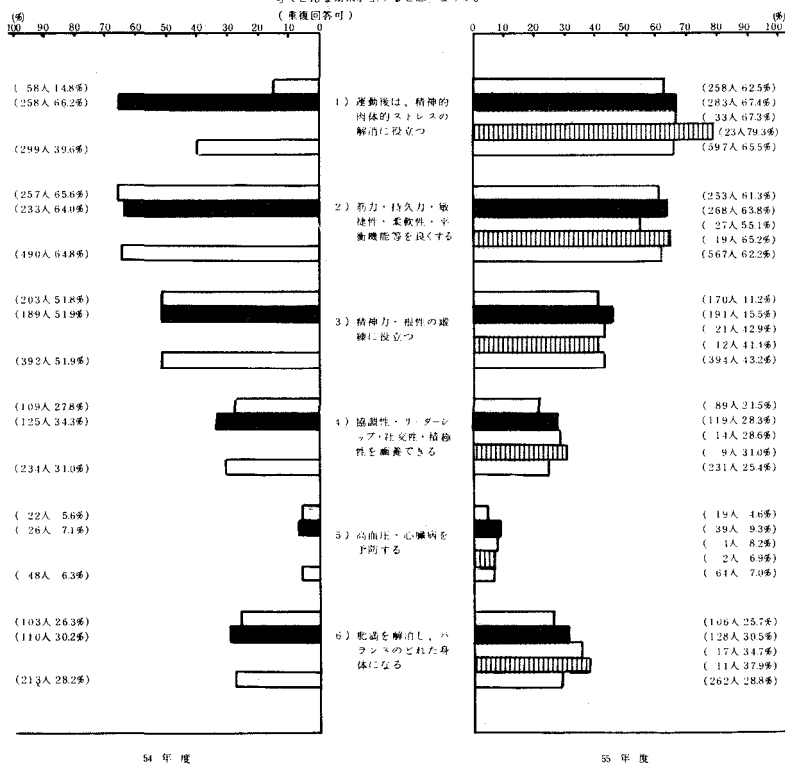


注) 不要と答えた者の理由
1年 2), 3), 5)
2年 2), 3), 5) 不明2人

注) 不要と答えた者の理由
1年 3) - 3人 5) - 1人
2年 1) - 1人 2) - 2人 3) - 1人
3年 2) - 1人 3) - 1人 不明1人

Fig. 30 運動・スポーツの効果についての認識の調査Ⅱ (2)

(2) あなたは、運動・スポーツをすることによってどんな効果が生ずると思いますか。



54年度

55年度

Fig. 31 体力・運動機能測定値の認識についての調査 ■・□

(3) あなたは自分の運動機能や体力測定値について知っていますか。

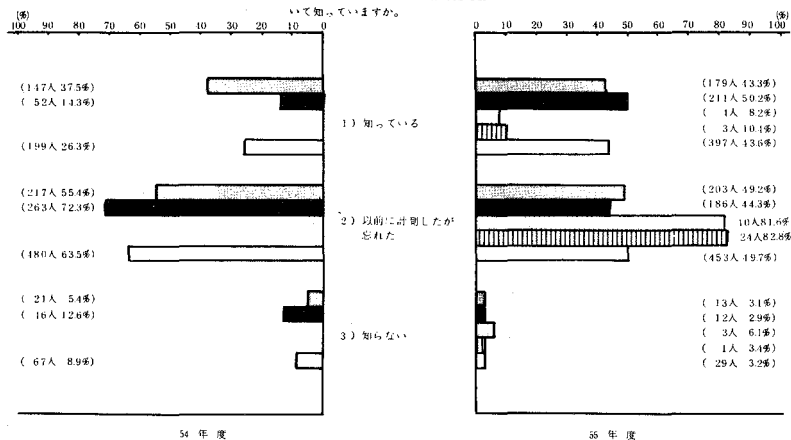


Fig. 32 体力測定値・運動機能測定値についての調査 ■・□

(4) 運動機能・体力測定値の考え

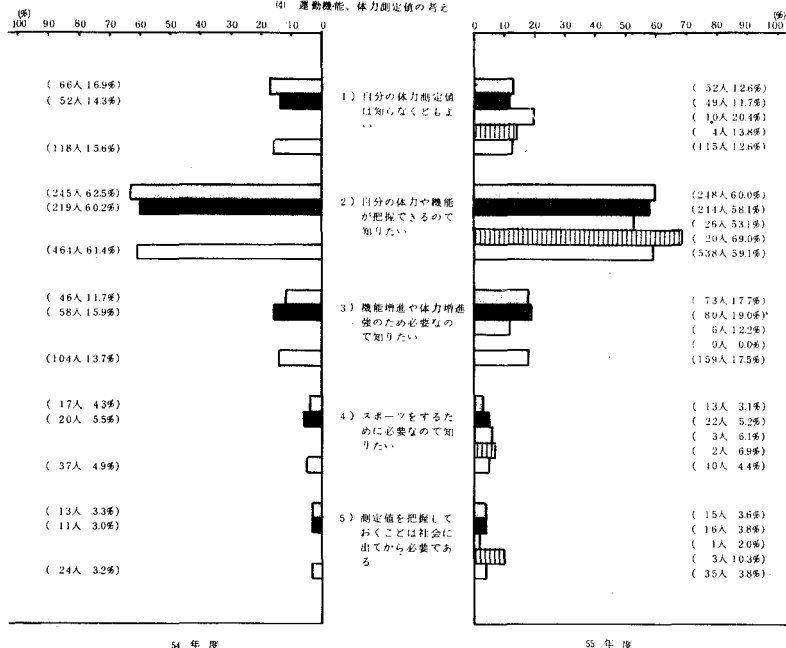


Fig-33 自発的運動実施についての調査 ■ - (5)

(5) あなたは現在運動(正課体育を除く)をしていますか。

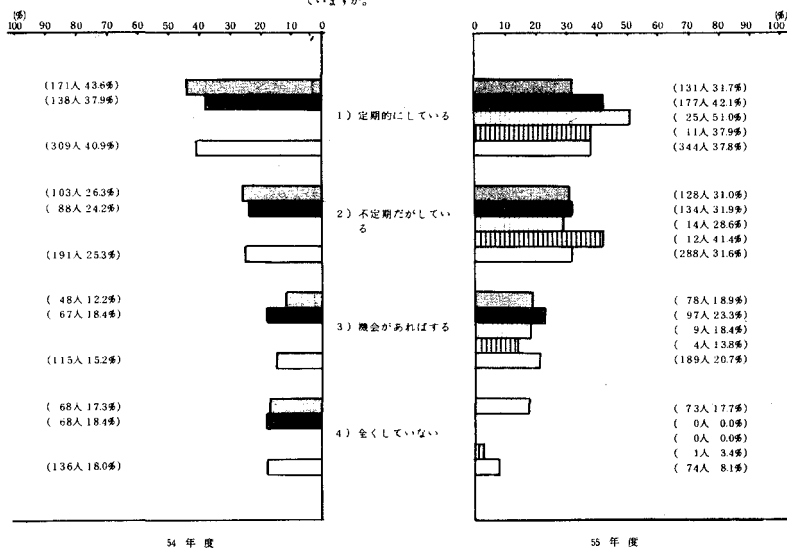
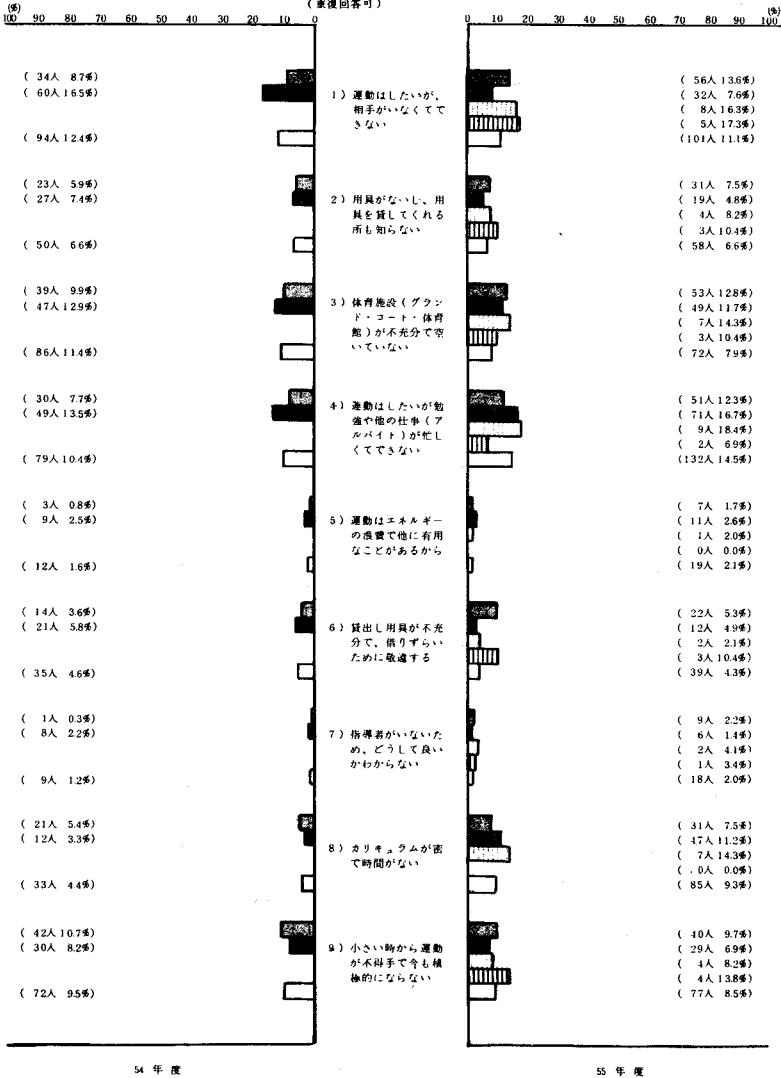


Fig-34 運動・スポーツをしない理由の調査 ■ (6)

(6) 運動をあまりやらない方や全くしていない方は次の次項から選んで○をつけて下さい。
(※複数回答可)



54年度

55年度

調査紙に関する図29～34によると、学生生活の中で運動は（おおいに必要）とするものは60%にもものぼり4年次になると一層強く意識するようになる。運動は精神的、身体的ストレス解消に役立ち体力維持増強に必要であるとしている。自己の運動機能測定値については、1，2年次で50%自分の体力、機能を把握する必要を認め計測を希望するものが60%を示す。運動実施についてみると定期的に行っているものは30%～50%で不定期だが行っているものは30%～40%で機会があれば実施したいとするものは20%になっている。この傾向は年度別では変わらず、正課体育がなくなった3，4年次に運動を実施するものが増えているのは運動に対する自然欲求の現れと、運動をしないと体力が落ちるのではないかという不安感の現れではないかと考えられる。運動をしない理由は図一34のように種々であるが、3年次になる勉学に時間をとられるという反面アルバイトに相当な時間をとられたりして運動できないというのも見逃せない一面である。

表一3は運動能力テストの各種目点とその合計点の本学学生と全国学生の年齢別に比較したもので表一10は各種目別得点表であり、表一8に総合判定級別判定表を示し、又表一5には年齢別運動能力テスト合計点を表示した。

年齢別運動能力テスト合計点

学年	n	\bar{x}	S.D.	100 0.01 0.05
18	239 352 195	32.36 44.0 36.25	10.88 12.87 9.99	◆◆◆ ◆◆◆ ◆◆◆
19	279 395 317	32.59 43.1 38.65	11.57 13.42 10.84	◆◆◆ ◆◆◆ ◆◆◆
20	146 372 147	34.41 42.5 38.65	10.61 13.68 11.58	◆◆◆ ◆◆◆ ◆◆◆
21	28 44	31.52 37.61	12.74 11.11	
22	13	39.23	8.16	

上段：54年度本学学生
中段：全 国 学 生
下段：55年度本学学生

年齢別運動能力テスト総合判定級別表

(上段：人数、下段：%)												
学年	1	2	3	4	5	計						
18才	3 0.7	0 0	41 9.6	2 0.8	161 37.7	48 20.1	157 36.8	101 42.3	65 15.2	88 36.8	427 100%	239 100%
19才	1 0.2	0 0	36 8.4	5 1.8	186 43.5	50 21.2	149 34.8	103 36.9	56 13.1	112 40.1	428 100%	279 100%
20才	2 0.5	0 0	35 8.7	3 2.1	176 43.5	34 24.7	139 34.4	61 43.6	52 12.8	42 30.0	404 100%	146 100%
21才	1 0.7	0 0	7 5.0	43 30.5	55 39.0	24 17.8	35 24.8	55 39.0	35 24.8	141 100%	141 100%	
22才	0 0	0 0	0 0	9 32.2	6 21.4	13 46.7	28 100%	9 20.5	44 100%	44 100%	44 100%	
	0 0	1 7.7	3 23.1	6 46.1	3 23.1	13 100%	13 100%	13 100%	13 100%	13 100%	13 100%	

注：左欄全国学生、右欄上段54年度本学学生、下段55年度本学学生

学生(室蘭工業大学)の健康に関する事象と体力及び運動能力の傾向とそれぞれの年次経過に伴う変化についての研究

425

年令別、運動能力種目別得点表

(上段：人数、下段：%)

Tab-10		(上段:人数、下段:点)																				
		20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	合計
50	18	0	2	1	1	5	7	21	8	15	25	20	26	21	32	38	15	8	0	1	2	250
		0	0.8	0.1	1.6	2.0	2.8	8.4	3.2	6.5	10.0	16.9	10.1	8.1	12.8	18	6.0	3.2	0	0.1	100%	
		0	1	0	0	0	4	9	12	13	21	22	21	26	27	11.8	4.8	3.9	1.7	0	0	770
19	0	0	0	0	0	1.7	3.9	5.3	5.7	9.2	10.5	9.6	10.5	10	11.8	4.8	3.9	1.7	0	0	100%	
	0	2	1	3	10	10	20	12	30	25	27	31	31	35	33	9	6	1	0	0	280	
	0.5	0.8	0.3	0	1.6	3.2	3.2	5.1	7.3	9.1	9.1	13.1	12.1	13.1	12.6	4.8	2.2	0.8	0.5	0.3	100%	
20	0	0	2	1	3	13	9	13	20	9	13	11	25	24	13	1	6	2	1	0	188	
	0	0	1.2	0.6	1.8	7.7	5.1	7.7	11.9	5.1	7.7	6.5	11.9	15.7	7.7	1	3.6	2	1	0.6	0	100%
	1	0	0	1	4	2	6	8	25	15	22	21	18	17	9	4	1	0	1	0	192	
21	0.5	0	0	0.5	2.0	1.0	1.9	12.6	7.3	11.6	12.1	9.9	20.1	18.6	4.5	2.0	0.5	0	0.5	0	100%	
	1	0	0	1	3	6	9	2	2	2	10	23	14	14	34	29	16	5	0	0	232	
	3.5	0	0	3.5	6.9	0	6.9	6.9	3.5	10.2	3.5	13.7	13.7	6.9	6.9	6.9	3.5	3.5	0	0	100%	
22	0	0	0	0	3	6	2	9	7	11	8	8	15	6.9	3	1	1	1	0	0	73	
	0	0	0	0	4.1	9	8.2	2.7	12.3	9.6	13.7	10.9	5.9	15.1	6.9	3	1	1	0	0	100%	
	0	0	0	0	0	0	0	1	2	6	1	2	3	3	7	1	1	1	0	0	24	
30	0	0	0	0	0	0	1	0	3	6	8	25	26	25	21	21	19	10	8	4	252	
	0	0	0	0	0	0.1	0	6.1	1.2	2.1	8	9.9	11.1	11.8	19.0	14.3	10.7	4.7	1.6	6.8	100%	
	0	0	0	0	0	0	0	0.9	0.9	0.9	0.9	9.9	18.9	9.9	17.2	12.5	12.5	6.9	2.2	0	232	
40	0	0	0	0	0	0	2	1	2	2	10	23	14	14	34	29	16	5	0	0	291	
	0	0	0	0	0.7	0.3	1.0	0	2.1	11	38	46	46	13.1	7.6	5.2	3.1	0.7	0	0	100%	
	0	0	0	0	0	0	1	5	5	8	21	28	14	76	80	34	33	14	4	1	375	
50	0	0	0	0	0	0	0	1	3	1	7.5	16.9	16.9	17.1	17.1	17.1	6.8	3.1	1	0.3	100%	
	0	0	0	0	0	0	2	1	1	1	13	12	13	30	37	17	13	6	0	0	169	
	0	0	0	0	0	0	1.2	0.6	0.6	1	7.8	19.3	18.1	22.3	16.3	7.8	3.6	0	0	0	100%	
60	0	0	1	0	0	0	1	2	2	3	6	17	20	38	38	41	35	15	8	2	191	
	0	0	0.5	0	0	0.5	1.0	1.6	1.6	3.2	8.9	10.5	19.9	17.5	18.3	17.3	4.2	1.0	0	0	100%	
	0	0	0	0	0	3.4	0	0	0	0	0	3.4	20.7	13.8	13.8	20.7	17.3	6.9	0	0	29	
70	0	0	0	0	0	0	0	1	3	5	7	18	13	13	13	6	5	1	0	0	71	
	0	0	0	0	0	0	1.4	0	1.4	4.2	7.0	9.9	25.4	18.3	18.3	8.5	1.4	4.2	0	0	100%	
	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	7	5	2	0	1	0	0	19	
80	0	0	0	0	0	0	5.3	0	0	5.3	5.3	5.3	5.3	36.8	26.2	10.5	0	5.3	0	0	100%	
	0	0	0	2	2	8	2	8	11	15	19	19	26	18	20	11.2	17.6	6.8	3	2	250	
	0.9	0.9	0.9	0.9	2.6	3.4	6.5	5.6	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	6.9	3	4.0	100%	
90	0	0	0	1	3	6	14	15	20	20	19	19	16	14	14	14	14	12	3	2	291	
	0	0	0	0.3	0.3	1.0	2.1	4.8	5.2	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	4.2	1.0	100%	
	0	6	1	6	6	14	17	24	25	33	36	29	29	29	36	36	19	5	2	0	379	
100	0	1.6	0.2	1.6	1.6	3.7	4.5	5.3	6.9	8.7	9.5	7.7	7.7	10.3	7.9	9.5	5.3	1.3	0.5	0	100%	
	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	13	12	13	30	37	17	13	6	0	169	
	0	0	0	0	0	0	1.2	0.6	0.6	1	7.8	19.3	18.1	22.3	16.3	7.8	3.6	0	0	0	100%	
110	1	4	3	3	7	6	13	9	14	15	21	16	9	19	19	9	4	2	1	0	191	
	0.5	2.1	1.6	1.6	3.7	3.1	6.8	4.7	7.3	7.9	11.0	8.4	4.7	16.9	16.9	9.9	3.1	1.6	2.1	0	100%	
	1	0	0	0	0	2	7	0	1	1	0	3	3	3	3	3	4	2	0	0	29	
120	3.4	0	0	0	0	7.0	0	3.4	3.4	0	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	10.3	13.9	7.0	0	0	100%	
	0	1	1	2	2	3	4	5	8	3	4	8	3	4	9	9	5	1	1	2	74	
	0	1.4	1.4	2.7	2.7	4.0	5.4	8.8	4.0	5.4	10.8	4.0	4.0	12.2	12.2	6.7	1.4	1.4	2.7	2.7	100%	
130	0	0	0	0	0	0	3	1	0	2	3	0	3	6	2	2	2	0	0	0	24	
	0	0	0	4.2	0	0	12.5	4.2	0	8.3	1.2	12.5	0	12.5	26.0	8.3	8.3	0	0	0	100%	
	0	1	1	0	2	0	0	3	5	13	12	12	12	21	21	11.5	16.2	31	24	24	235	
140	0	0	0	0	0	0	0.4	0	2.1	2.1	5.6	9.4	12.1	12.1	12.1	11.5	16.2	31	24	24	100%	
	0	1	0	0	0	0	0.7	0	1.3	1.0	3	1.7	6.0	4.7	7.7	13.7	13.1	17.7	17.7	12.0	7.0	100%
	0	2	0	0	1	0	2	4	8	19	19	44	21	36	48	48	50	37	27	27	375	
150	0	0.5	0	0	0.3	0	0.5	1.1	2.1	2.7	5.1	11.7	5.6	9.6	12.8	12.8	13.3	9.9	7.2	4.8	100%	
	1	0	0	0	0	2	1	1	2	6	9	8	4	14	22	25	33	26	20	19	175	
	0.6	0	0	0	0	1.1	0.6	0	0.6	1	3.3	5.0	4.5	7.8	12.3	14.0	18.4	15.5	11.2	5.0	100%	
160	1	0	0	0	0	1	1	2	6	8	17	10	19	19	24	24	24	20	19	13	186	
	0.5	0.5	0	0	0	0.5	0.5	1.0	3.1	4.1	8.7	5.1	8.7	12.7	12.7	14.8	19.2	9.7	6.7	6.7	100%	
	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3	0	3	3	7	7	7	3	2	2	20	
170	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3	0	3	6	7	13	13	13	16.6	10.0	6.7	100%
	0	0	0	0	0	0	0	0	3.3	3.3	0	3.3	3.3	6.7	13.3	13.3	13.3	16.6	10.0	6.7	100%	
	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1	6	5	5	9	9	10	7	6	2	83	
180	0	0	0	0	0	0	1.6	0	0	2.2	1.6	9.5	7.9	7.9	14.3	14.3	15.9	11.1	9.5	3.2	100%	
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	1	1	2	2	2	3	3	3	18	
	0	0	0	0	0	0	5.6	0	5.6	0	5.6	5.6	5.6	0	11.1	0	5	27.6	3	5.6	0	100%

54年度入学者の2年次移行に伴う体力診断・運動能力テスト成績推移表

Tab-11-イ (単位:人数)

		記録上昇	記録下降	記録に変化	変化の幅 (max-min)	
		した者	した者	のなかった者	上昇	下降
50 m 走	15.7	144	57	2.5秒	1.9秒	
走 巾 と び	15.8	172	24	126 cm	120 cm	
ハンドボール投げ	25.6	76	25	18 m	10 m	
懸 垂	22.0	104	87	7 回	8 回	
1500 m 走	23.7	95	4	141 秒	138 秒	
運動能力合計点	22.7	64	18	29 点	16 点	
反復横とび	30.7	63	42	19 回	12 回	
垂直とび	20.5	178	29	18 cm	26 cm	
背 筋 力	16.4	223	20	55 kg	66 kg	
握 力	22.5	157	32	23 kg	17 kg	
伏臥上体そらし	22.5	158	28	31 cm	20 cm	
立位体前屈	20.3	156	53	12 cm	12 cm	
踏台昇降運動	27.5	118	4	42.5	37.2	
体力診断合計点	23.9	85	68	8 点	4 点	

54年度2年生(66名)の3年次移行に伴う体力診断・運動能力テスト成績推移表

Tab-11-ロ (単位:人数)

	記録上昇 した者	記録下降 した者	記録に変化 のなかった者	変化の幅 (max-min)	
				上昇	下降
50 m 走	2.6	10	6	0.8 秒	0.9 秒
走 巾 と び	2.1	18	2	64 cm	48 cm
ハンドボール投げ	2.1	12	3	10 m	7 m
懸 垂	2.6	6	6	7 回	7 回
1500 m 走	1.6	10	1	70 秒	170 秒
運動能力合計点	1.0	4	0	21 点	14 点
反復横とび	3.2	6	7	12 回	7 回
垂直とび	2.5	19	1	16 cm	7 cm
背 筋 力	3.3	9	2	46 kg	27 kg
握 力	1.4	27	4	10 kg	11 kg
伏臥上体そらし	2.8	13	2	16 cm	7 cm
立位体前屈	1.8	23	4	7 cm	6 cm
踏台昇降運動	2.9	13	0	30.8	12.66
体力診断合計点	3.1	5	6	4 点	3 点

体格・運動能力テスト、体力診断テストについて2年次から3年次に移行した学生(66名)の比較

Tab-10 次から3年次に移行した学生(66名)の比較

	54年度2年生			55年度3年生		
	n	\bar{x}	S.D	n	\bar{x}	S.D
身長 (cm)	60	169.90	4.74	50	169.71	4.76
体重 (kg)	60	63.66	9.00	49	62.59	6.08
50 m 走 (秒)	55	7.51	0.48	47	7.47	0.42
走巾とび (cm)	55	432.16	43.38	46	430.09	39.63
ハンドボール投げ (m)	55	27.15	3.98	46	29.46	3.88
懸垂 (回)	63	5.30	2.51	40	6.70	2.85
1500 m 走 (分、秒)	55	6:22*	35.90	34	6:20*	64.59
運動能力テスト合計点 (点)	47	35.68	9.58	14	40.71	12.27
反復横とび (回)	64	44.97	3.85	47	47.04	4.23
垂直とび (cm)	64	59.61	5.52	47	60.75	6.33
背筋力 (kg)	64	141.86	20.78	47	150.85	21.02
握力 (kg)	64	51.00	7.02	47	49.49	5.05
伏臥上体そらし (cm)	64	55.41	6.74	47	57.38	7.68
立位体前屈 (cm)	64	15.80	4.68	47	15.51	4.70
踏台昇降運動 (点)	62	57.40	7.56	47	65.01	13.05
体力診断テスト合計点 (点)	62	25.10	2.49	47	26.11	2.66

図-17より図-21と別表-1から別表-3までは本学学生と全国学生の体格、体力、運動能力をZスコア点によって比較したものであり、年齢別に1年間経過したものの変化をみるため本年度記録と前年度の記録を対比したものが別表

— 1 から別表— 4 に掲げてある。18歳の本学生と全国学生との比較では、全国学生は長育のわりには 50 m 走、筋力が劣り循環機能に優れている。54年度本学学生は全体的にバランスが良い。55年度本学学生では長育のわりに握力が劣り、運動能力、体力ともに劣っている低調なレベルにあるといえる。19歳では全国学生は長育のわりに幅育、懸垂、握力に劣り循環機能に優れており、本学学生は54年度55年度学生とも全体のバランスは良いが、54年より55年度学生のほうが全般的に向上が認められ長育のわりに運動能力合計点に優れているといえる。20歳の比較では、全国学生で長育のわりに懸垂と筋力が劣っているのが特徴で、本学生では54年度学生は全体のバランスがとれているが、55年度学生では 50 m 走と伏臥上体そらしが劣って、握力に向上がみられる。全国学生では18歳、19歳、20歳と加齢に伴って全体のバランスがとれてくる傾向がみられるに反して本学学生は18歳～20歳までバランスはよいが特に優れているものが少ない反面特段に劣っている種目もないのが特徴的である。別表による本学学生の学年移行（加齢）に伴う各種目の記録の推移では、18歳～19歳への移行に伴って反復横とびと握力が向上し傾向は類似しており、全体のバランスの改善がみられる。19歳～20歳に移行して 50 m 走の落ちこみがみられるが、長育のわりに走幅とび、ハンドボール投げ、握力等に向上がみられる。20歳～21歳に移行したものの傾向は長育のわりに幅育がすすみ幅育のわりには全般的に低調でのバランスを保っているといえよう。

Fig-17 体格・体力・運動能力の
本学学生のプロフィール(乙スコアによる)(18, 19, 20, 21才

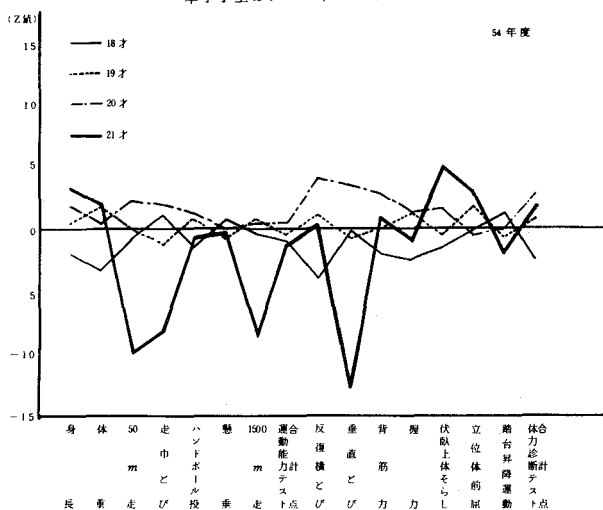


Fig-18 体格・体力・運動能力の
本学学生のプロフィール(乙スコアによる)(18, 19, 20, 21才)

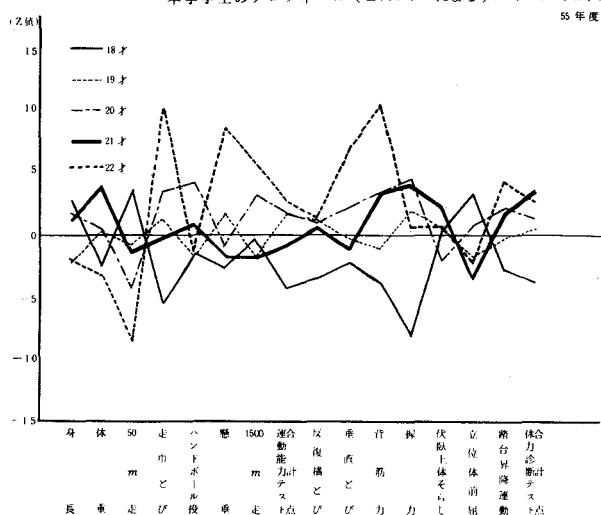


Fig-19 体格・体力・運動能力の

本学学生と全国大学生のプロフィール(乙スコアによる)

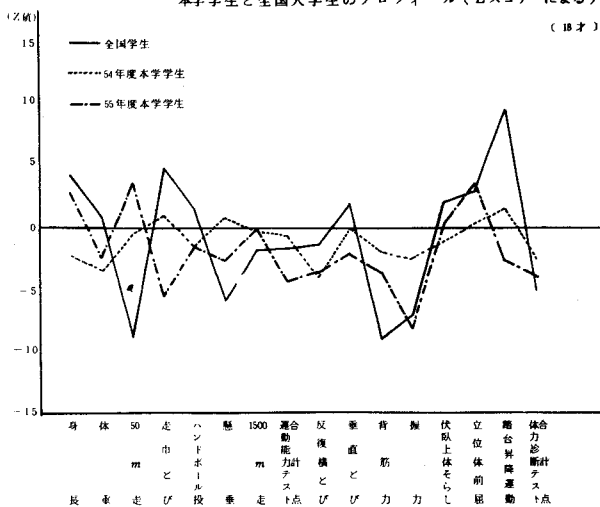


Fig-20 体格・体力・運動能力の

本学学生と全国大学生のプロフィール(乙スコアによる)

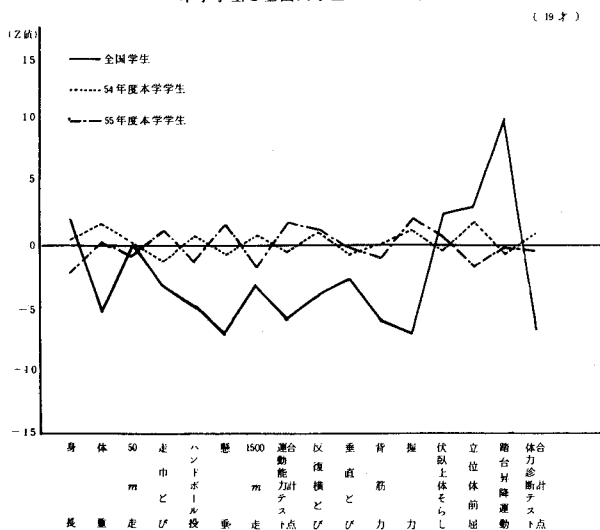
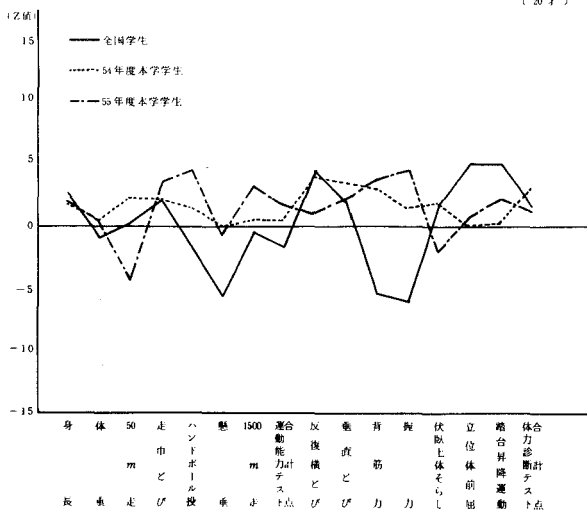
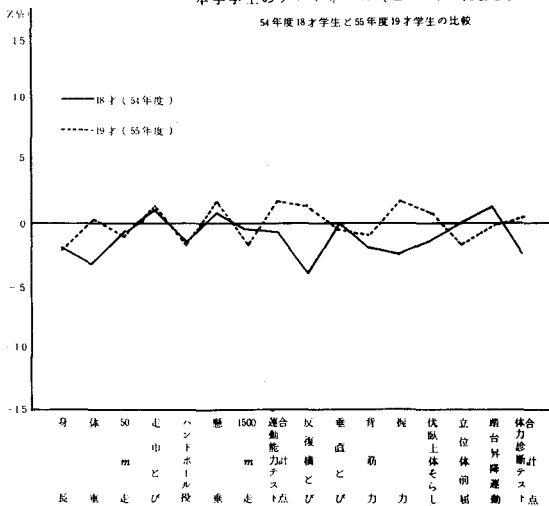


Fig-21 体格・体力・運動能力の
本学学生と全国大学生のプロフィール(Zスコアによる)
(20才)



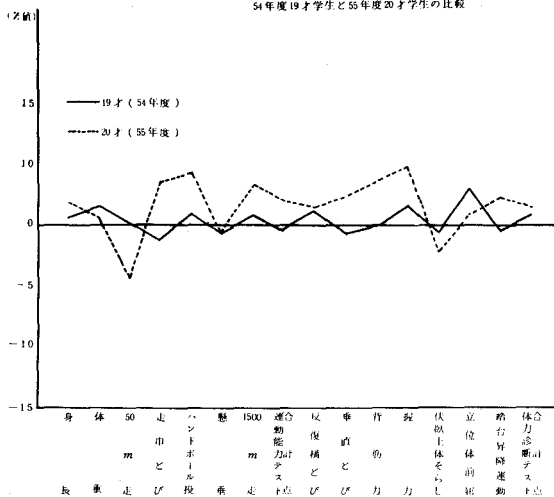
別表 1 体格・体力・運動能力の
本学学生のプロフィール(Zスコアによる)
54年度18才学生と55年度19才学生の比較



別表-2 体格・体力・運動能力の

本学学生のプロフィール(％スコアによる)

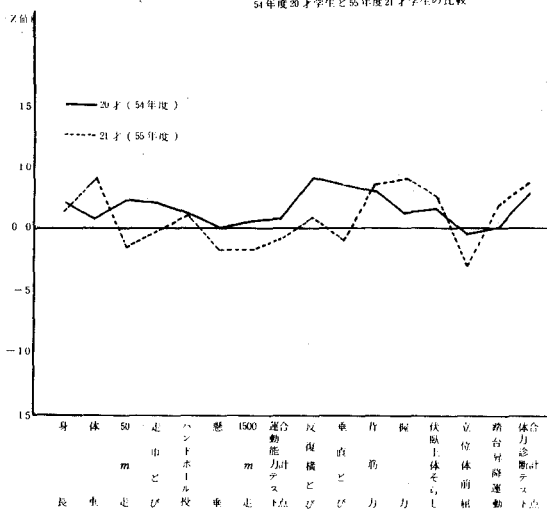
54年度19才学生と55年度20才学生の比較



別表-3 体格・体力・運動能力の

本学学生のプロフィール(％スコアによる)

54年度20才学生と55年度21才学生の比較



表—14, 15は肺機能検査をオートスパイロメーターを使って調べたものであるが、各種測定のなかから年齢別に努力性肺活量と%肺活量から肺機能の良否を測定した。努力性肺活量は加齢が進むにつれ量が減少し各年齢、各学年間にも有意な差を認めた。%肺活量に認められるように予測肺活量($27.63 - 0.112 \times \text{年齢}$) \times 身長に対する実測肺活量はいづれも100%を超え標準をオーバーしていると考えられるが、加齢に伴って肺容量が減少することから肺機能に負担のかかる運動強度のトレーニングを継続しない限り肺機能はこの年齢段階では劣えてくるものと推測できる。

年令別、学年別努力性肺活量

Tab-14 (単位: ℓ/min)

年令	18		19		20		21		22	
年 度	54	55	54	55	54	55	54	55	54	55
標 本 数	257	241	285	391	177	208	25	71	19	
平 均 値	4.52	4.25	4.58	4.01	4.54	4.03	4.74	4.19		
標準偏差	0.57	0.45	0.59	0.49	0.54	0.48	0.42	0.57		
学 年	1 学年		2 学年		3 学年		4 学年			
標 本 数	433	437	336	437	47		12			
平 均 値	4.52	4.11	4.60	4.07						
標準偏差	0.56	0.40	0.58	0.47						

0.01=***
0.05=**
55年度 18-19*** 1年-4年**
18-20***
18-22***
19-21**
20-21**
21-22**

年令別、学年別%肺活量

Tab-15 (単位: %)

年令	18		19		20		21		22	
年 度	55	55	54	55	54	55	54	55	54	55
標 本 数	257	240	285	390	177	208	25	71	19	
平 均 値	107.61	104.68	106.11	102.73	106.23	104.22	110.20	109.83		
標準偏差	15.30	14.72	18.02	11.78	12.83	13.47	11.22	15.58		
学 年	1 学年		2 学年		3 学年		4 学年			
標 本 数	431	435	336	437	47		12			
平 均 値	107.91	103.64	105.20	103.33						
標準偏差	15.43	14.06	17.13	11.22						

*0.01=***
0.05=**
55年度 18-21* 1年-3年***
19-21*** 2年-3年***
20-21** 3年-4年**
21-21**

年令別、学年別ローレル指数

年令	n	\bar{x}	S.D
18	272 230	125.30 125.14	20.63 15.27
19	312 376	126.35 126.07	13.63 14.26
20	179 192	127.67 126.26	13.71 12.23
21	34 76	125.67 126.72	12.91 13.39
22	22	126.36	11.17
学年	n	\bar{x}	S.D
1年	440 416	125.36 125.95	16.44 14.75
2年	368 410	127.85 127.61	13.51 13.86
3年	55	129.30	9.64
4年	22	127.36	10.62

(上段54年度、下段55年度)

年令別、学年別血圧値

54年度				55年度				(単位: mmHg)	
年令	n	\bar{x}	S.D	年令	n	\bar{x}	S.D	最高	最低
18	267	117.53	12.18	18-19	241	123.88	16.79	18-19	18-19
	267	72.86	14.41	18-20	241	79.83	63.96	18-20	18-20
19	286	120.92	13.24	19-20	396	124.31	16.64	18-21	18-21
	284	70.75	14.06	19-21	396	74.31	15.20	18-22	18-22
20	156	124.93	13.34		290	125.99	18.10	19-20	19-20
	156	70.73	14.30		201	76.80	18.84	19-21	19-21
21	36	126.48	14.76		70	129.06	14.31	20-21	20-21
	76	69.30	9.21		69	75.39	11.81	20-22	20-22
22					15	119.87	17.63	21-22	21-22
					15	73.80	11.19		
学年	n	\bar{x}	S.D	学年	n	\bar{x}	S.D	最高	最低
1年	430	118.18	12.42	1-2	439	125.01	17.31	1-2	1-2
	429	72.37	14.13		440	77.94	41.60	1-3	1-3
2年	323	123.48	12.93		437	124.08	16.71	1-4	1-4
	324	67.36	13.99		438	74.77	15.07	2-3	2-3
3年					35	131.17	12.96	2-4	2-4
					35	71.57	19.89	3-4	3-4
4年					13	124.99	16.50		
					12	69.63	11.56		

上段: 最高血圧値 0.01
下段: 最低血圧値 0.05

表-17は循環機能検査の一つとして本学学生の年齢別と学年別に分類した血圧を測定した表である。測定結果から54年度では加齢に伴って最高血圧値の上昇が認められ55年度でも一部を除いて同様な傾向を示す。

54年度、年令別ローレル指数表

年 令	年 令																					總				
	95	100	105	110	115	120	125	130	135	140	145	150	155	160	165	170	175	180	185	190	195					
f	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1					
%	94	99	104	109	114	119	%	124	129	134	139	144	149	%	154	159	164	169	174	179	184	189	194	%	199	200
18	2	3	9	15	37	26	$\frac{89}{24}$	28	33	29	26	16	6	$\frac{134}{97}$	2	1	2	0	1	1	1	1	0	0	$\frac{9}{3}$	232
19	1	0	6	19	29	51	$\frac{105}{284}$	54	52	51	39	26	16	$\frac{238}{638}$	20	3	2	1	1	1	0	0	0	1	$\frac{29}{18}$	373
20	0	2	2	9	16	28	$\frac{57}{763}$	40	27	24	23	11	4	$\frac{129}{855}$	6	2	2	1	0	0	0	0	0	0	$\frac{11}{58}$	197
21	0	0	1	3	4	6	$\frac{16}{218}$	12	16	13	6	1	2	$\frac{52}{703}$	3	1	0	0	0	1	1	0	0	0	$\frac{6}{81}$	74
22	0	0	0	1	2	1	$\frac{4}{150}$	6	5	1	3	2	0	$\frac{17}{810}$	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	$\frac{0}{0}$	21
23	1	5	18	47	83	116	272	140	135	118	93	58	30	570	31	7	6	2	2	3	2	1	0	1	35	897
%	93	96	20	52	93	129	303	156	148	132	104	62	34	636	35	08	67	02	02	03	02	01	0	0	61	

54年度、年齢別ローレル指数表

Tab-18-イ																													
角 度 分	95	100	105	110	115	小 計	120	125	130	135	140	145	大 計	150	155	160	165	170	175	180	185	190	195	大 計	角 度 分				
角 分	94	99	104	109	114	119	%	124	129	134	139	144	149	%	154	159	164	169	174	179	184	189	194	%	計				
18	2	4	1	13	32	29	$\frac{81}{198}$	49	28	38	27	15	11	$\frac{168}{934}$	4	4	2	0	1	1	0	0	1	1	$\frac{16}{66}$	265			
19	0	1	2	15	33	4	$\frac{53}{213}$	54	34	34	24	23	9	$\frac{126}{720}$	5	2	3	2	1	0	0	0	0	1	$\frac{14}{53}$	247			
20	0	1	5	8	10	22	$\frac{45}{237}$	20	29	22	14	9	6	$\frac{100}{645}$	2	2	3	6	1	1	0	0	0	0	$\frac{9}{58}$	155			
21	0	0	1	1	3	4	$\frac{6}{300}$	7	4	4	2	7	5	$\frac{19}{633}$	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	$\frac{2}{67}$	30			
計	2	6	9	37	78	59	191	130	95	98	67	48	27	465	13	8	8	4	3	2	0	0	1	2	41	697			
%	0.3	0.9	1.3	5.3	11.2	8.5	27.5	18.6	13.6	14.1	9.6	6.9	3.9	66.7	1.9	1.1	1.1	0.6	0.4	0.3	0	0	0.1	0.3	5.6				

Tab-19-a

55年度 年齢別、最高血圧値——ローレル指数

ローレル指数 = Hg	140 → 139				130 → 129				120 → 119				110 → 109				計	%														
150 ~	4	3	2			9	1	3	3	1		7	1	1	2											0	2.8	3.4				
155 ~ 159	1	2	1			4	1	3				4	1	2				3	1	3	1				5	1		1	1.7	2.0		
150 ~ 154	1	4	3			8	2		2	1	1	6	2	3	1	1		7	1		1				2	2	3	5	2.8	3.4		
145 ~ 149	2	4	1			7	3	3	3			9	2	2	1	3		8	1	2	2	1			6			0	3.0	3.6		
140 ~ 144	2	2	1			5	1	7	4			12	5	2	2	4		14	2	5	2	1			10		4	1	5	4.6	5.5	
135 ~ 139	2	8	1			11	5	12	1	6		24	4	9	3	2	1	19	2	4	2	1			9	2		1	3	6.6	7.9	
130 ~ 134	1	3	1	4		9	1	11	8		1	21	5	12	9	5		31	6	5	2	1			14	1	2	4	7	8.2	9.9	
125 ~ 129	7	10	5	3		25	12	5	2	3		22	5	13	3	2	1	24	9	10	4				23	1	1	1	3	9.7	11.7	
120 ~ 124	2	13	3			18	4	6	3	4		17	9	5	9	2	3	28	8	9	8	3			26	3	5	1	9	10.0	12.0	
115 ~ 119	4	10	2			16	7	15	4	1		27	5	11	10	1	1	28	3	11	5	1			20	1	3	1	1	8	9.7	11.7
110 ~ 114	2	5	2			9	6	9	7	1		23	7	16	3	2	1	29	7	11	5	2	1		26	4	2	1	7	9.4	11.3	
105 ~ 109	2	2	1			5	1	9	2			12	9	9	5	1	1	25	10	6	1	1			18	5	2	2	9	6.9	8.3	
100 ~ 104	1	2	1			4	1	3	1	1	1	7	6	4	1			11	4	7	1				12	3	2	1	6	4.0	4.8	
95 ~ 99	1					1						1	2	7	1	1	1	12	3	3	1				1	8	1		1	2.3	2.8	
90 ~ 94	1					1	1					1	1	2				3	1	2					3	2	1	2	1	6	1.4	1.7
最高血圧計	33	68	23	8	0	130	46	86	41	18	3	182	57	102	54	26	10	228	58	78	39	10	3	182	26	25	13	4	68	83.1	100%	
平均	18	19	20	21	22	小計	18	19	20	21	22	小計	18	19	20	21	22	小計	18	19	20	21	22	小計	18	19	20	21	22	小計		

自己体力認識別の体力診断テスト種目別表

Tab-17

調査Ⅱ-(1)

		反復横とび回		垂直とび (cm)		背筋力 (kg)		握 力 (kg)		伏臥上体持ち上げ (cm)		立位体前屈 (cm)		踏台昇降 (回)	
		54年度	55年度	54年度	55年度	54年度	55年度	54年度	55年度	54年度	55年度	54年度	55年度	54年度	55年度
(1) 満 足	n	29	17	29	17	29	17	29	17	29	17	29	17	29	17
	\bar{x}	46.10	49.88	62.90	63.94	159.17	163.24	49.38	51.35	56.10	56.35	15.55	14.47	61.89	67.55
(2) あるほう	n	91	110	91	111	89	110	91	112	91	111	91	111	87	112
	\bar{x}	45.83	48.45	60.97	62.69	155.33	153.54	51.39	50.88	55.77	57.49	15.43	17.49	61.83	64.79
(3) 普 通	n	382	425	383	424	381	428	384	431	383	426	384	427	351	424
	\bar{x}	44.53	46.38	60.87	59.98	148.61	144.79	49.95	48.70	52.93	55.92	15.85	16.13	55.06	60.45
(4) な い ほう	n	173	229	174	228	174	231	175	234	175	230	175	229	159	232
	\bar{x}	42.09	45.66	59.29	58.00	134.87	137.30	46.16	46.67	53.06	55.22	14.65	15.20	54.90	57.96
(5) 不 満 足	n	45	43	45	43	44	43	45	43	45	43	45	43	41	43
	\bar{x}	43.11	45.23	57.89	55.51	144.49	134.07	48.80	46.07	55.52	56.58	14.83	15.44	55.62	54.66
111	n	3.95	4.66	7.72	8.21	26.10	25.87	6.49	7.03	6.33	8.86	5.70	5.69	8.13	10.98
	S.D.														

	1-3	1-2	1-4	1-2	1-3	1-2	1-3	1-2	1-3	1-2	1-3	1-2	1-3	1-2	1-3
	1-4	1-5	2-5	1-4	1-5	2-5	1-4	1-5	2-5	1-4	1-5	2-5	1-4	1-5	2-5
	1-5	2-6	3-6	1-5	2-6	3-6	1-5	2-6	3-6	1-5	2-6	3-6	1-5	2-6	3-6
0.01 =	2-3	3-4	4-5	2-3	3-4	4-5	2-3	3-4	4-5	2-3	3-4	4-5	2-3	3-4	4-5
	2-4	3-5	4-6	2-4	3-5	4-6	2-4	3-5	4-6	2-4	3-5	4-6	2-4	3-5	4-6
	2-5	3-6	4-7	2-5	3-6	4-7	2-5	3-6	4-7	2-5	3-6	4-7	2-5	3-6	4-7
0.05 =	2-6	3-7	4-8	2-6	3-7	4-8	2-6	3-7	4-8	2-6	3-7	4-8	2-6	3-7	4-8
	2-7	3-8	4-9	2-7	3-8	4-9	2-7	3-8	4-9	2-7	3-8	4-9	2-7	3-8	4-9
	2-8	3-9	4-10	2-8	3-9	4-10	2-8	3-9	4-10	2-8	3-9	4-10	2-8	3-9	4-10
	2-9	3-10	4-11	2-9	3-10	4-11	2-9	3-10	4-11	2-9	3-10	4-11	2-9	3-10	4-11
	2-10	3-11	4-12	2-10	3-11	4-12	2-10	3-11	4-12	2-10	3-11	4-12	2-10	3-11	4-12
	2-11	3-12	4-13	2-11	3-12	4-13	2-11	3-12	4-13	2-11	3-12	4-13	2-11	3-12	4-13
	2-12	3-13	4-14	2-12	3-13	4-14	2-12	3-13	4-14	2-12	3-13	4-14	2-12	3-13	4-14
	2-13	3-14	4-15	2-13	3-14	4-15	2-13	3-14	4-15	2-13	3-14	4-15	2-13	3-14	4-15
	2-14	3-15	4-16	2-14	3-15	4-16	2-14	3-15	4-16	2-14	3-15	4-16	2-14	3-15	4-16
	2-15	3-16	4-17	2-15	3-16	4-17	2-15	3-16	4-17	2-15	3-16	4-17	2-15	3-16	4-17
	2-16	3-17	4-18	2-16	3-17	4-18	2-16	3-17	4-18	2-16	3-17	4-18	2-16	3-17	4-18
	2-17	3-18	4-19	2-17	3-18	4-19	2-17	3-18	4-19	2-17	3-18	4-19	2-17	3-18	4-19
	2-18	3-19	4-20	2-18	3-19	4-20	2-18	3-19	4-20	2-18	3-19	4-20	2-18	3-19	4-20
	2-19	3-20	4-21	2-19	3-20	4-21	2-19	3-20	4-21	2-19	3-20	4-21	2-19	3-20	4-21
	2-20	3-21	4-22	2-20	3-21	4-22	2-20	3-21	4-22	2-20	3-21	4-22	2-20	3-21	4-22
	2-21	3-22	4-23	2-21	3-22	4-23	2-21	3-22	4-23	2-21	3-22	4-23	2-21	3-22	4-23
	2-22	3-23	4-24	2-22	3-23	4-24	2-22	3-23	4-24	2-22	3-23	4-24	2-22	3-23	4-24
	2-23	3-24	4-25	2-23	3-24	4-25	2-23	3-24	4-25	2-23	3-24	4-25	2-23	3-24	4-25
	2-24	3-25	4-26	2-24	3-25	4-26	2-24	3-25	4-26	2-24	3-25	4-26	2-24	3-25	4-26
	2-25	3-26	4-27	2-25	3-26	4-27	2-25	3-26	4-27	2-25	3-26	4-27	2-25	3-26	4-27
	2-26	3-27	4-28	2-26	3-27	4-28	2-26	3-27	4-28	2-26	3-27	4-28	2-26	3-27	4-28
	2-27	3-28	4-29	2-27	3-28	4-29	2-27	3-28	4-29	2-27	3-28	4-29	2-27	3-28	4-29
	2-28	3-29	4-30	2-28	3-29	4-30	2-28	3-29	4-30	2-28	3-29	4-30	2-28	3-29	4-30
	2-29	3-30	4-31	2-29	3-30	4-31	2-29	3-30	4-31	2-29	3-30	4-31	2-29	3-30	4-31
	2-30	3-31	4-32	2-30	3-31	4-32	2-30	3-31	4-32	2-30	3-31	4-32	2-30	3-31	4-32
	2-31	3-32	4-33	2-31	3-32	4-33	2-31	3-32	4-33	2-31	3-32	4-33	2-31	3-32	4-33
	2-32	3-33	4-34	2-32	3-33	4-34	2-32	3-33	4-34	2-32	3-33	4-34	2-32	3-33	4-34
	2-33	3-34	4-35	2-33	3-34	4-35	2-33	3-34	4-35	2-33	3-34	4-35	2-33	3-34	4-35
	2-34	3-35	4-36	2-34	3-35	4-36	2-34	3-35	4-36	2-34	3-35	4-36	2-34	3-35	4-36
	2-35	3-36	4-37	2-35	3-36	4-37	2-35	3-36	4-37	2-35	3-36	4-37	2-35	3-36	4-37
	2-36	3-37	4-38	2-36	3-37	4-38	2-36	3-37	4-38	2-36	3-37	4-38	2-36	3-37	4-38
	2-37	3-38	4-39	2-37	3-38	4-39	2-37	3-38	4-39	2-37	3-38	4-39	2-37	3-38	4-39
	2-38	3-39	4-40	2-38	3-39	4-40	2-38	3-39	4-40	2-38	3-39	4-40	2-38	3-39	4-40
	2-39	3-40	4-41	2-39	3-40	4-41	2-39	3-40	4-41	2-39	3-40	4-41	2-39	3-40	4-41
	2-40	3-41	4-42	2-40	3-41	4-42	2-40	3-41	4-42	2-40	3-41	4-42	2-40	3-41	4-42
	2-41	3-42	4-43	2-41	3-42	4-43	2-41	3-42	4-43	2-41	3-42	4-43	2-41	3-42	4-43
	2-42	3-43	4-44	2-42	3-43	4-44	2-42	3-43	4-44	2-42	3-43	4-44	2-42	3-43	4-44
	2-43	3-44	4-45	2-43	3-44	4-45	2-43	3-44	4-45	2-43	3-44	4-45	2-43	3-44	4-45
	2-44	3-45	4-46	2-44	3-45	4-46	2-44	3-45	4-46	2-44	3-45	4-46	2-44	3-45	4-46
	2-45	3-46	4-47	2-45	3-46	4-47	2-45	3-46	4-47	2-45	3-46	4-47	2-45	3-46	4-47
	2-46	3-47	4-48	2-46	3-47	4-48	2-46	3-47	4-48	2-46	3-47	4-48	2-46	3-47	4-48
	2-47	3-48	4-49	2-47	3-48	4-49	2-47	3-48	4-49	2-47	3-48	4-49	2-47	3-48	4-49
	2-48	3-49	4-50	2-48	3-49	4-50	2-48	3-49	4-50	2-48	3-49	4-50	2-48	3-49	4-50
	2-49	3-50	4-51	2-49	3-50	4-51	2-49	3-50	4-51	2-49	3-50	4-51	2-49	3-50	4-51
	2-50	3-51	4-52	2-50	3-51	4-52	2-50	3-51	4-52	2-50	3-51	4-52	2-50	3-51	4-52
	2-51	3-52	4-53	2-51	3-52	4-53	2-51	3-52	4-53	2-51	3-52	4-53	2-51	3-52	4-53
	2-52	3-53	4-54	2-52	3-53	4-54	2-52	3-53	4-54	2-52	3-53	4-54	2-52	3-53	4-54
	2-53	3-54	4-55	2-53	3-54	4-55	2-53	3-54	4-55	2-53	3-54	4-55	2-53	3-54	4-55
	2-54	3-55	4-56	2-54	3-55	4-56	2-54	3-55	4-56	2-54	3-55	4-56	2-54	3-55	4-56
	2-55	3-56	4-57	2-55	3-56	4-57	2-55	3-56	4-57	2-55	3-56	4-57	2-55	3-56	4-57
	2-56	3-57	4-58	2-56	3-57	4-58	2-56	3-57	4-58	2-56	3-57	4-58	2-56	3-57	4-58
	2-57	3-58	4-59	2-57	3-58	4-59	2-57	3-58	4-59	2-57	3-58	4-59	2-57	3-58	4-59
	2-58	3-59	4-60	2-58	3-59	4-60	2-58	3-59	4-60	2-58	3-59	4-60	2-58	3-59	4-60
	2-59	3-60	4-61	2-59	3-60	4-61	2-59	3-60	4-61	2-59	3-60	4-61	2-59	3-60	4-61
	2-60	3-61	4-62	2-60	3-61	4-62	2-60	3-61	4-62	2-60	3-61	4-62	2-60	3-61	4-62
	2-61	3-62	4-63	2-61	3-62	4-63	2-61	3-62	4-63	2-61	3-62	4-63	2-61	3-62	4-63
	2-62	3-63	4-64	2-62	3-63	4-64	2-62	3-63	4-64	2-62	3-63	4-64	2-62	3-63	4-64
	2-63	3-64	4-65	2-63	3-64	4-65	2-63	3-64	4-65	2-63	3-64	4-65	2-63	3-64	4-65
	2-64	3-65	4-66	2-64	3-65	4-66	2-64	3-65	4-66	2-64	3-65	4-66	2-64	3-65	4-66
	2-65	3-66	4-67	2-65	3-66	4-67	2-65	3-66	4-67	2-65	3-66	4-67	2-65	3-66	4-67
	2-66	3-67	4-68	2-66	3-67	4-68	2-66	3-67	4-68	2-66	3-67	4-68	2-66	3-67	4-68
	2-67	3-68	4-69	2-67	3-68	4-69	2-67	3-68	4-69	2-67	3-68	4-69	2-67	3-68	4-69
	2-68	3-69	4-70	2-68	3-69	4-70	2-68	3-69	4-70	2-68	3-69	4-70	2-68	3-69	4-70
	2-69	3-70	4-71	2-69	3-70	4-71	2-69	3-70	4-71	2-69	3-70	4-71	2-69	3-70	4-71
	2-70	3-71	4-72	2-70	3-71	4-72	2-70	3-71	4-72	2-70	3-71	4-72	2-70	3-71	4-72
	2-71	3-72	4-73	2-71	3-72	4-73	2-71	3-72	4-73	2-71	3-72	4-73	2-71	3-72	4-73
	2-72	3-73	4-74	2-72	3-73	4-74	2-72	3-73	4-74	2-72	3-73	4-74	2-72	3-73	4-74
	2-73	3-74	4-75	2-73	3-74	4-75	2-73	3-74	4-75	2-73	3-74	4-75	2-73	3-74	4-75
	2-74	3-75	4-76	2-74	3-75	4-76	2-74	3-75	4-76	2-74	3-75	4-76	2-74	3-75	4-76
	2-75	3-76	4-77	2-75	3-76	4-77	2-75	3-76	4-77	2-75	3-76	4-77	2-75	3-76	4-77
	2-76	3-77	4-78	2-76	3-77	4-78	2-76	3-77	4-78	2-76	3-77	4-78	2-76	3-77	4-78
	2-77	3-78	4-79	2-77	3-78	4-79	2-77	3-78	4-79	2-77	3-78	4-79	2-77	3-78	4-79
	2-78	3-79	4-80	2-78	3-79	4-80	2-78	3-79	4-80	2-78	3-79	4-80	2-78	3-79	4-80
	2-79	3-80	4-81	2-79	3-80	4-81	2-79	3-80	4-81	2-79	3-80	4-81	2-79	3-80	4-81
	2-80	3-81	4-82	2-80	3-81	4-82	2-80	3-81	4-82	2-80	3-81	4-82	2-80	3-81	4-82
	2-81	3-82	4-83	2-81	3-82	4-83	2-81	3-82	4-83	2-81	3-82	4-83	2-81	3-82	4-83
	2-82	3-83	4-84	2-82	3-83	4-84	2-82	3-83	4-84	2-82	3-83	4-84	2-82	3-83	4-84
	2-83	3-84	4-85	2-83	3-84	4-85	2-83	3-84	4-85	2-83	3-84	4-85	2-83	3-84	4-85
	2-84	3-85	4-86	2-84	3-85	4-86	2-84	3-85	4-86	2-84	3-85	4-86	2-84	3-85	4-86
	2-85	3-86	4-87	2-85	3-86	4-87	2-85	3-86	4-87	2-85	3-86	4-87	2-85	3-86	4-87
	2-86	3-87	4-88	2-86	3-87	4-88	2-86	3-87	4-88	2-86	3-87	4-88	2-86	3-87	4-88
	2-87	3-88	4-89	2-87	3-88	4-89	2-								

自己体力認識別の体力診断テスト合計点

(調査Ⅱ-(1))

Tab-13

(単位:点)

		54年度	55年度
(1) 満 足	n	27	17
	\bar{x}	26.19	26.94
	S、D	2.45	2.13
(2) あるほう	n	84	109
	\bar{x}	26.0	27.58
	S、D	2.26	2.17
(3) 普 通	n	340	424
	\bar{x}	24.78	25.51
	S、D	2.39	2.38
(4) ないほう	n	166	228
	\bar{x}	23.66	24.51
	S、D	2.43	2.64
(5) 不 満 足	n	39	43
	\bar{x}	24.1	23.95
	S、D	2.82	3.25

t	≥0.01=※※ 0.05=※	1-3※※	1-2※
		1-4※※※	1-3※※※
		1-5※※※	1-4※※※
		2-3※※※	1-5※※※
		2-4※※※	2-3※※※
			2-4※※※
			2-5※※※
			3-4※※※
			3-5※※※
			4-5※

表一12は自己の体力認識別の体力診断テスト種目別表である。前述のⅡ)のアンケート体力について述べたような自己体力の認識と実際の自己の体力診断計測値とどのような関係にあるかを年度別に比較したものである。54年度では、自己の体力(満足)及び(あるほう)と答えたものの測定値は(普通)(ないほう)(不満足)と答えたものとの間に伏臥上体そらし、立位体前屈を除いて前2者が優れ(満足)とするものと(不満足)とするグループ間では著しい差が認められる。55年度には(1)及び(2)と他のグループ間の全ての項目に明かな差があり54年度より55年度のほうがより差が大きいいといえる。合計点の比較(表一13)でも、(1)及び(2)(3)(4)(5)のとの間の(1)及び(2)の優位は動かず(3)と(5)の間でも(3)の優位が認められる。このことから自己の認識と実際の計測値は一致しており認識は正しいものといえる。

アンケートⅡ-(1)について、54年度学生が回答した内容と、55年度になって回答した内容の変化

T a b - 20 - イ

54年度1年生(全科)	55年度回答内容
Ⅱ-(1)-1)に回答した者 15人	1) - 4人、26.7% 2) - 4人、26.7% 3) - 7人、46.6% 4) - 0人、0% 5) - 0人、0%
Ⅱ-(1)-2)に回答した者 38人	1) - 1人、2.6% 2) - 27人、71.1% 3) - 9人、23.7% 4) - 1人、2.6% 5) - 0人、0%
Ⅱ-(1)-3)に回答した者 179人	1) - 0人、0% 2) - 21人、11.7% 3) - 128人、71.5% 4) - 26人、14.5% 5) - 4人、2.3%
Ⅱ-(1)-4)に回答した者 94人	1) - 1人、1.1% 2) - 2人、2.1% 3) - 37人、39.3% 4) - 48人、51.1% 5) - 6人、6.4%
Ⅱ-(1)-5)に回答した者 23人	1) - 0人、0% 2) - 1人、4.3% 3) - 7人、30.4% 4) - 8人、34.8% 5) - 7人、30.4%

T a b - 20 - ロ

54年度2年生(電気、電子、開発)	55年度回答内容
Ⅱ-(1)-1)に回答した者 2人	1) - 0人、0% 2) - 2人、100% 3) - 0人、0% 4) - 0人、0% 5) - 0人、0%
Ⅱ-(1)-2)に回答した者 4人	1) - 0人、0% 2) - 2人、50.0% 3) - 2人、50.0% 4) - 0人、0% 5) - 0人、0%
Ⅱ-(1)-3)に回答した者 22人	1) - 0人、0% 2) - 0人、0% 3) - 18人、81.8% 4) - 4人、18.2% 5) - 0人、0%
Ⅱ-(1)-4)に回答した者 14人	1) - 0人、0% 2) - 1人、7.1% 3) - 3人、21.4% 4) - 8人、57.2% 5) - 2人、14.3%
Ⅱ-(1)-5)に回答した者 3人	1) - 0人、0% 2) - 0人、0% 3) - 0人、0% 4) - 3人、100% 5) - 0人、0%

表一20イ、ロでは、アンケートⅡの(1)について学年移行に伴って同じ質問に変化があったかどうか即ち1年経過して意識の変化をみたものである。1年次から2年次に移行したものでは、(満足)(あるほう)と答えたもののうち20%～30%強のものが(あるほう)(普通)と1ランク反省的に意識の下降があり(4)と(5)に答えたもののうち30%～40%が上昇の意識変化をもたらしたことになる。このことは前年度体力を普通以上と思ったものは実際活動を経験し反省的になり、ないほうと考えたものはそれなりの向上を目指して活動の結果自らの成果を認めたものであろうと考える。

表一26のイ、ロ、ハ、ニの4表は、スポーツ運動実施状況別の体力診断テスト及び運動能力テストの各種目別表と合計点を、運動を定期的に実施しているもの、不定期に実施しているもの、実施していないものに分け年齢別に同様な区別けによる全国大学の評価と比較したものである。又図一35、36、37はテスト別合計点をグラフに表したものである。

運動スポーツ実施状況別の体力診断テスト及び運動能力テストの各種目点と合計点 18才
(全国大学と対比)

Tab-26-1

調査III-(5)

	定 期 (1)			不 定 期 (2)			し な い (3)			0.01 = 4★ = 3★ 0.05 = 2★
	n	\bar{x}	S.D	n	\bar{x}	S.D	n	\bar{x}	S.D	
身長 (cm)	105	169.77	5.62	54	168.49	5.59	65	169.19	5.75	
	54	170.95	5.74	57	170.33	5.84	71	169.23	8.32	1-2★ 1-3★ 2-3★
体 重 (kg)	104	61.13	6.25	54	60.75	6.79	65	61.69	10.64	
	54	61.30	6.21	57	61.70	8.13	71	60.39	8.32	1-2★ 1-3★ 2-3★
50 m 走 (秒)	100	7.44	0.35★	49	7.44	0.44	58	7.70	0.54★	1-3★
	66	(7.23) 7.62	(0.45) 0.39	(77) 67	(7.39) 7.54	(0.50) 0.38★	(73) 72	(7.39) 7.66	(0.45) 0.40	1-2★ 1-3★ 2-3★
走 巾 と び (m)	100	444.26	36.20★	49	439.14	38.54	58	428.45	46.32★	1-3★
	(118) 67	(470.39) 427.69	(47.49) 37.97	(77) 67	(452.45) 432.24	(59.15) 37.93★	(26) 74	(465.00) 415.64	(48.95) 34.44	1-2★ 1-3★ 2-3★
ハンドボール 投 げ (m)	100	27.22	4.28★	49	26.15	3.61	58	25.47	4.57★	1-3★
	(118) 67	(30.72) 28.81	(5.17) 4.37★	(77) 67	(27.69) 29.57	(3.87) 4.11★	(26) 73	(28.54) 27.63	(4.73) 4.31★	1-2★ 1-3★ 2-3★
懸 垂 (回)	115	6.34	3.34★	55	6.22	3.14★	65	5.25	3.23	1-2★
	(118) 71	(8.43) 7.01	(4.07) 2.90★	(76) 68	(7.69) 6.29	(3.55) 3.15	(26) 75	(6.69) 5.79	(3.32) 2.69★	1-2★ 1-3★ 2-3★
1500 m 走 (分、秒)	100	6'12"	32.47★	49	6'32"	42.82★	65	6'44"	45.56★	1-2★ 2-3★
	(118) 66	(5'43") 6'06"	(29.61) 28.78	(77) 67	(6'10") 6'25"	(29.01) 32.97★	(26) 73	(6'01") 6'27"	(30.73) 26.72	2-3★
運動能力テスト 合 計 点 (点)	98	36.74	10.70★	46	34.94	10.82★	57	28.54	11.42★	1-2★ 2-3★
	(116) 59	(50.99) 37.85	(13.40) 9.32	(73) 55	(40.94) 38.80	(9.95) 9.83★	(25) 60	(43.16) 31.68	(13.16) 8.72	2-3★
反 復 横 と び (回)	106	44.21	3.82★	55	44.23	3.43★	62	42.68	4.44★	1-2★ 2-3★
	(134) 71	(46.30) 46.17	(4.17) 3.37★	(99) 68	(46.27) 46.35	(4.59) 3.88★	(34) 80	(46.91) 45.25	(5.06) 3.95★	1-2★ 1-3★ 2-3★
垂 直 と び (cm)	106	60.89	7.05★	56	60.14	6.65★	63	57.52	6.75	1-3★ 2-3★
	(134) 71	(61.39) 59.05	(7.39) 7.54★	(99) 67	(60.59) 59.75	(6.94) 7.04★	(34) 80	(59.12) 58.81	(8.39) 6.98★	1-2★ 1-3★ 2-3★
背 筋 力 (kg)	104	148.99	21.92★	56	144.70	22.07★	63	142.71	23.26★	1-2★ 2-3★
	(133) 72	(138.53) 143.13	(28.55) 19.26★	(99) 69	(130.06) 141.57	(28.65) 19.55★	(34) 81	(128.19) 138.68	(28.22) 23.49★	1-2★ 1-3★ 2-3★
握 力 (kg)	106	48.82	6.33	56	48.82	6.25	63	48.0	6.94	
	(134) 74	(47.19) 46.35	(6.1) 5.77★	(98) 70	(47.28) 47.29	(6.03) 5.67★	(34) 81	(46.89) 46.30	(6.55) 5.22★	1-2★ 1-3★ 2-3★
伏臥上体そらし (回)	106	54.61	6.77★	56	52.43	7.36★	63	54.13	7.25	1-2★
	(134) 71	(59.84) 56.31	(8.9) 6.54★	(99) 68	(58.26) 56.49	(8.50) 6.25★	(34) 81	(65.05) 56.57	(11.19) 7.78★	1-2★ 1-3★ 2-3★
立 位 体 前 屈 (cm)	106	15.94	5.19★	56	16.21	5.29★	63	14.13	5.14★	1-2★ 2-3★
	(134) 72	(15.89) 17.10	(5.51) 5.27★	(99) 68	(16.24) 16.71	(5.36) 5.20★	(33) 81	(14.62) 16.11	(6.19) 5.59★	1-2★ 1-3★ 2-3★
階 台 昇 降 運 動 (回)	99	60.26	11.64★	55	55.97	7.54	64	52.88	8.24★	1-3★
	(134) 70	(65.82) 60.28	(12.29) 10.57★	(99) 69	(55.11) 57.03	(8.85) 9.65★	(34) 80	(60.90) 59.42	(12.33) 9.92★	1-2★ 1-3★ 2-3★
体力診断テスト 合 計 点 (点)	99	26.07	2.24★	55	24.50	2.41★	61	23.30	2.58★	1-2★ 1-3★
	(110) 70	(26.25) 25.46	(2.81) 2.10★	(74) 68	(24.78) 24.99	(2.75) 2.61★	(24) 80	(24.67) 24.95	(3.10) 2.46★	1-2★ 1-3★ 2-3★

上段:54年度値

中段:全 国 値

下段:55年度値

運動スポーツ実施状況別の体力診断テスト及び運動能力テストの各種目点と合計点 19才
(全国大学と対比)

Tab-26-0

調査Ⅲ-(5)

	n	定 期 (1)			不 定 期 (2)			し な い (3)			0.01 → 0.05 →
		\bar{x}	S.D		\bar{x}	S.D		\bar{x}	S.D		
身 長 (cm)	117	170.62	5.52	73	169.15	5.01	90	167.27	5.38		
	276	170.53	5.60	244	169.98	5.55	214	169.54	6.63		
体 重 (kg)	117	63.27	7.07	73	61.37	7.32	91	62.20	9.15		
	276	62.44	6.59	244	61.66	7.50	213	61.20	8.55		
50 m 走 (秒)	108	7.45	0.49	65	7.57	0.37	89	7.52	0.41		
	(119)	(7.26)	(0.43)	(80)	(7.32)	(0.33)	(37)	(7.32)	(0.45)	1-3 → 2-3 →	
走 巾 と び (cm)	108	440.42	41.10	65	434.11	38.94	90	425.72	41.4		
	(110)	(464.18)	(43.78)	(80)	(450.50)	(41.21)	(37)	(447.68)	(42.65)	1-3 → 2-3 →	
ハン ド ボール 投 げ (m)	109	27.94	3.59	65	25.77	4.29	89	26.03	3.81		
	(119)	(29.83)	(4.50)	(80)	(28.75)	(3.99)	(37)	(28.32)	(4.79)	1-3 → 2-3 →	
懸 垂 (秒)	108	6.29	3.27	74	4.95	2.47	94	5.19	2.71		
	(119)	(9.03)	(3.89)	(80)	(6.95)	(3.16)	(36)	(7.11)	(2.41)	1-2 → 1-3 →	
1500 m 走 (分、秒)	108	6'06"	35.46	64	6'33"	32.25	87	6'40"	41.14		
	(119)	(6'46")	(32.97)	(80)	(6'18")	(35.69)	(37)	(6'33")	(31.76)	1-2 → 1-3 → 2-3 →	
運動能力テスト 合 計 点	101	38.40	11.62	63	30.49	9.75	86	30.42	11.78		
	(114)	(49.25)	(12.49)	(74)	(40.47)	(10.56)	(30)	(39.97)	(10.77)	1-2 → 1-3 → 2-3 →	
反 び (度)	120	44.79	3.41	74	43.93	3.16	96	43.90	3.62		
	(131)	(46.86)	(4.34)	(108)	(45.53)	(4.22)	(52)	(44.86)	(4.34)	1-3 → 2-3 →	
垂 直 と び (cm)	120	60.69	7.63	74	59.78	6.96	96	58.83	6.03		
	(131)	(60.87)	(7.35)	(108)	(60.39)	(7.16)	(52)	(59.12)	(8.03)	1-3 → 2-3 →	
背 筋 力 (kg)	118	151.75	23.16	74	143.45	19.75	96	144.79	22.44		
	(131)	(136.02)	(25.43)	(108)	(136.74)	(27.96)	(52)	(133.27)	(25.34)	1-2 → 1-3 →	
握 力 (kg)	121	50.43	7.02	74	48.43	6.20	97	49.54	6.54		
	(129)	(47.18)	(6.16)	(108)	(49.61)	(7.25)	(52)	(47.96)	(7.44)	1-2 → 1-3 → 2-3 →	
伏臥上体そらし (cm)	121	55.07	7.34	74	53.39	7.60	97	53.85	8.16		
	(131)	(59.21)	(9.09)	(108)	(57.89)	(7.81)	(52)	(69.15)	(6.50)	1-3 → 2-3 →	
立 位 体 前 屈 (cm)	121	15.65	5.31	74	15.57	5.29	97	16.32	5.57		
	(131)	(16.88)	(5.50)	(108)	(15.34)	(5.12)	(52)	(14.77)	(5.36)	1-2 → 1-3 →	
踏 台 昇 降 運 動 (秒)	108	59.17	9.04	68	54.06	7.24	89	54.64	9.03		
	(131)	(64.17)	(12.87)	(108)	(54.82)	(7.61)	(52)	(55.60)	(7.31)	1-2 → 1-3 →	
体力診断テスト 合 計 点	99	25.23	2.76	63	24.10	2.47	86	24.43	2.53		
	(117)	(25.79)	(2.74)	(79)	(24.39)	(2.38)	(30)	(24.71)	(2.36)	1-2 → 1-3 → 2-3 →	

運動スポーツ実施状況別の体力診断テスト

及び運動能力テストの各種目点と合計点(全国大学と対比) 20才 調査Ⅰ-(5)

Tab-26--

種別 項目	定期(1)			不定期(2)			しない(3)			II 0.01→ 0.05→
	n	Σ	S.D	n	Σ	S.D	n	Σ	S.D	
身長(cm)	54	17002	556	42	16983	469	50	17046	480	
	63	17134	539	51	17038	644	47	16926	609	1-2→ 1-3→ 2-3→
体重(kg)	54	6268	669	42	6099	1045	50	6219	521	
	63	6303	551	51	6087	608	46	6154	833	1-2→ 1-3→ 2-3→
50m走(秒)	52	747	039→	37	737	036	60	751	043→	1-3→
	(114)	(718)	(037)	(72)	(736)	(038)	(47)	(733)	(043)	
	67	740	033	58	752	033→	50	771	048	1-2→ 2-3→
走巾とび(cm)	52	43769	3536→	37	44857	4152→	59	43008	3212	1-2→
	(114)	(46371)	(4127)	(72)	(45168)	(3996)	(47)	(44153)	(3316)	
	68	44796	4175	59	43142	3809→	50	42964	4037→	1-2→ 1-3→ 2-3→
ハンドボール投げ(m)	53	2721	335→	37	2827	437	59	2600	374→	1-3→
	(114)	(2938)	(436)	(72)	(2847)	(451)	(47)	(2823)	(528)	
	66	3056	423→	59	2863	417→	50	2914	469→	1-2→ 1-3→ 2-3→
懸垂(回)	58	629	368→	39	605	282→	65	531	289→	1-2→ 1-3→
	(114)	(994)	(399)	(72)	(814)	(491)	(47)	(782)	(346)	
	67	799	383	57	577	279→	49	600	249→	1-3→ 2-3→
1500m走(分・秒)	50	6' 10"	3162→	34	6' 27"	3779→	56	6' 38"	3154→	1-2→ 1-3→
	(114)	(5' 43")	(2566)	(72)	(6' 16")	(3044)	(47)	(6' 23")	(3579)	
	65	5' 58"	966→	56	6' 28"	3817→	50	6' 50"	5173→	2-3→
運動能力テスト合計点(点)	48	3592	1033→	27	3604	1005	51	3120	965→	1-3→
	(114)	(5069)	(1177)	(72)	(4014)	(1111)	(42)	(4107)	(1124)	
	54	4502	1233→	47	3477	873→	35	3534	994→	2-3→
反復横とび(回)	57	4481	436→	40	4498	267	65	445	362→	1-3→
	(128)	(4736)	(437)	(89)	(4555)	(462)	(72)	(4522)	(428)	
	69	4738	389→	57	4747	393→	50	4488	493→	1-2→ 1-3→ 2-3→
垂直とび	58	6114	739	40	6053	719	65	6042	619	
	(127)	(6138)	(729)	(88)	(6047)	(789)	(72)	(6031)	(787)	
	70	6217	739→	56	5975	563→	50	5814	675→	1-2→ 1-3→ 2-3→
背筋力(kg)	58	14767	2231	40	15265	2680→	65	14942	2157→	2-3→
	(128)	(14234)	(2514)	(89)	(12948)	(2522)	(72)	(13519)	(2749)	
	69	15051	2313→	58	14338	1957	50	14306	2434→	1-2→ 1-3→ 2-3→
腕力(kg)	58	4959	652	40	4665	651→	65	5074	566→	2-3→
	(123)	(4826)	(538)	(85)	(4641)	(785)	(71)	(4819)	(822)	
	70	5016	666→	58	4878	505→	51	4847	569→	1-2→ 1-3→ 2-3→
10kg以上持ち上げ(回)	57	5486	765→	40	5503	806→	65	5471	831→	1-2→ 2-3→
	(128)	(6013)	(687)	(89)	(6027)	(728)	(71)	(5906)	(719)	
	70	5529	803	58	5683	777→	50	5344	840	1-2→ 1-3→ 2-3→
立位体前屈(cm)	58	1603	512	40	1493	435	65	1522	493	
	(128)	(1577)	(502)	(89)	(1658)	(622)	(71)	(1448)	(573)	
	70	1657	500→	58	1614	536→	50	1542	558→	1-2→ 1-3→ 2-3→
踏台昇降運動(分)	50	5996	801→	36	5650	742→	59	5382	641→	1-3→ 1-2→ 2-3→
	(127)	(6372)	(1177)	(89)	(5516)	(893)	(71)	(5696)	(1050)	
	71	6466	1028	57	5871	823→	50	5786	758→	2-3→
体力診断テスト合計点(点)	42	2493	214→	30	2543	251→	57	2472	215	1-2→
	(106)	(2622)	(231)	(66)	(2486)	(287)	(40)	(2483)	(255)	
	68	2647	259→	56	2536	245→	50	2458	292→	1-2→ 2-3→

運動スポーツ実施状況の体力診断テスト及び運動能力テストの各種目点と合計点 21才

Tab-26-ニ

調査田--(5)

	n	定 期 (1)		n	不 定 期 (2)		n	し な い (3)		(1)
		\bar{x}	S.D.		\bar{x}	S.D.		\bar{x}	S.D.	
(m)	9	170.28	4.25	12	170.88	3.74	8	169.78	4.92	
	22	171.13	5.75	22	170.44	3.69	14	169.99	4.87	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
体 重 (kg)	9	63.60	9.52	12	62.8	9.27	8	60.91	7.24	
	22	62.46	6.57	22	61.90	5.98	14	63.30	7.65	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
50 m 走 (秒)	7	7.60	0.60	10	7.60	0.48	6	7.87	0.68	
	24	7.39	0.41	25	7.45	0.25	16	7.86	0.75	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
走 出 と び (m)	7	435.00	30.74	10	426.50	40.34	6	407.00	32.42	
	24	437.17	35.38	25	442.00	34.68	16	408.50	54.07	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
ハンドボール	7	27.29	5.18	10	27.70	5.03	6	24.17	4.62	
投 げ (m)	24	28.71	4.64	25	29.32	3.81	16	27.25	4.68	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
懸 垂 (秒)	9	6.33	3.24	10	6.91	3.20 \clubsuit	9	4.11	2.71 \clubsuit	2-3 \clubsuit
	18	7.11	2.85	21	6.10	2.67	13	5.69	2.20	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
1500 m 走 (分、秒)	7	6'10"	41.76 \clubsuit	10	6'46"	33.75 \clubsuit	6	6'30"	36.90	1-2 \clubsuit
	22	5'54"	35.27	23	6'29"	35.23	15	6'32"	40.68	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
運動能力テスト	5	37.60	14.04	9	34.89	13.35	5	30.86	16.13	
合 計 点	13	41.92	10.96	18	35.50	10.15	8	30.00	8.52	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
反 復 横 と び (秒)	9	45.00	3.64 \clubsuit	12	44.50	4.03	9	42.11	1.96 \clubsuit	1-3 \clubsuit
	19	48.11	4.13	21	47.19	6.06	14	44.14	5.79	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
垂 直 び (m)	9	61.11	7.55 \clubsuit	13	55.08	14.33	9	53.44	5.74 \clubsuit	1-3 \clubsuit
	19	58.79	5.77	21	62.24	7.18	14	55.64	6.31	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
背 筋 力 (kg)	9	151.11	16.28	13	150.77	25.25	9	140.00	25.07	
	19	149.47	22.58	21	145.52	20.44	14	142.57	19.40	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
握 力 (kg)	9	52.00	9.15	13	48.31	6.61	9	47.11	7.52	
	19	50.42	6.58	21	50.29	4.39	14	46.86	6.70	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
伏臥上体そらし (m)	9	61.78	6.45 \clubsuit	13	54.54	9.14 \clubsuit	9	52.67	8.70 \clubsuit	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit
	19	58.32	6.78	21	56.67	6.88	14	53.07	7.98	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
立 位 体 前 屈 (m)	9	17.33	4.06 \clubsuit	13	16.92	5.57	9	13.44	4.30 \clubsuit	1-3 \clubsuit
	19	16.96	5.85	21	15.05	3.27	14	12.86	6.28	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
踏 台 昇 降 運 動 (秒)	8	59.33	7.17 \clubsuit	10	58.03	5.23 \clubsuit	8	48.99	5.14 \clubsuit	1-3 \clubsuit 2-3 \clubsuit
	19	62.15	11.90	21	62.42	7.53	14	53.06	5.96	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit
体力診断テスト	8	22.14	1.86	9	25.00	2.39	8	22.38	1.84	
合 計 点	19	26.42	2.52	21	26.43	1.99	14	23.21	3.14	1-2 \clubsuit 1-3 \clubsuit

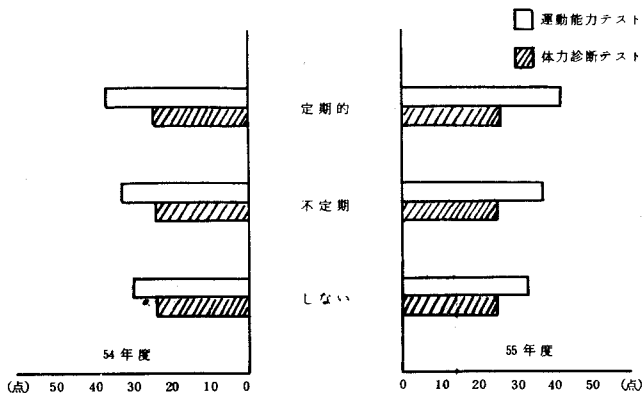
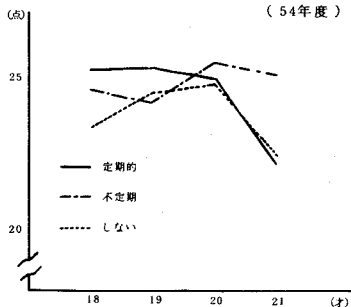
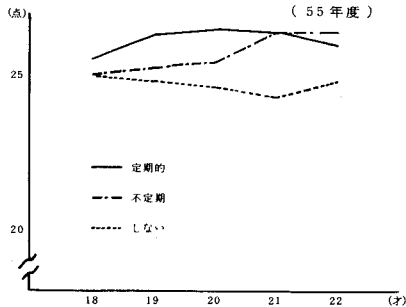
運動スポーツ実施状況の体力診断テスト及び運動能力の各種目点と合計点 22才

Tab-26-ホ

調査Ⅲ-(5)

	定 期 (1)			不 定 期 (2)			し な い (3)			t 検定 0.01-*** 0.01-*
	n	\bar{x}	S. D	n	\bar{x}	S. D	n	\bar{x}	S. D	
身 長 (cm)	3	170.17	3.06	10	168.41	3.80	7	170.43	6.66	
体 重 (kg)	3	61.67	4.78	10	59.65	5.65	7	59.36	5.77	
50 m 走 (秒)	4	7.40	0.25	13	7.51	0.44	7	7.33	0.22	
走 山 と び (cm)	4	448.75	26.55	13	449.00	38.50	7	436.71	21.91	
ハンドボール 投 げ (m)	4	28.50	3.50	13	28.31	3.71	7	29.29	3.33	
懸 垂 (秒)	3	9.33	2.06	8	7.38	4.12	5	7.80	3.97	
1500 m 走 (分・秒)	4	6'19"	32.61	11	6'25"	27.69	7	6'34"	40.82	
運動能力テスト 合 計 点 (点)	2	45.50	14.5	7	37.43	5.58	4	39.25	5.63	
反 復 横 と び (秒)	3	48.67	1.70	9	48.22	4.37	5	43.60	1.63	1-3* 2-3*
垂 直 と び (cm)	3	62.67	6.02	9	61.33	4.00	5	58.60	4.18	
背 筋 力 (kg)	3	140.00	15.58	9	156.44	26.18	5	136.80	18.49	
握 力 (kg)	3	45.33	5.31	9	48.78	3.97	5	49.00	2.45	
伏臥上体をそらし (cm)	3	51.00	1.41	9	59.89	5.57	5	52.40	6.97	1-2* 2-3*
立 位 体 前 屈 (cm)	3	14.00	3.56	9	16.11	5.99	5	17.20	4.67	
踏 台 昇 降 運 動 (秒)	3	72.67	12.33	9	60.17	9.39	5	54.18	4.87	1-3*
体力診断テスト 合 計 点 (点)	3	26.00	1.41	9	26.44	1.71	5	23.80	1.60	1-3*

Fig-35 運動・スポーツ実施状況別体力診断運動能力テスト合計点

Fig-36 運動・スポーツ実施状況の
年令別体力診断テスト合計点
(54年度)Fig-37 運動・スポーツ実施状況の
年令別体力診断テスト合計点
(55年度)

運動、スポーツ実施状況の年令別体力診断テスト合計点 (調査Ⅴ)

Tab-27

Tab-27										(単位:点)	
状況	年令	定期的 (1)			不定期 (2)			しない (3)			11:0.05→ 0.01→
		n	\bar{x}	S.D	n	\bar{x}	S.D	n	\bar{x}	S.D	
18	99	2507	224	55	2450	241	61	2330	258	1-2→2-3→	
	70	2546	210	68	2499	261	80	2496	246		
19	99	2523	276	63	2410	247	86	2443	253	1-2→	
	151	2632	257	110	2515	249	90	2483	309	1-2→1-3→	
20	42	2493	214	30	2543	251	57	2472	215		
	68	2647	259	56	2536	245	50	2458	292	1-2→1-3→	
21	8	2514	186	9	2500	239	8	2238	184	2-3→	
	19	2642	252	21	2643	199	14	2321	314	1-3→2-3→	
22	3	2600	141	9	2644	171	5	2380	160	2-3→	
11:0.05→	19-20→										18-20→
											19-21→
											20-21→
											20-21→
11:0.01→	18-19→										18-21→
	18-20→										
	19-21→										

(上段 54年度 下段 55年度)

運動、スポーツ実施状況の年令別運動能力テスト合計点 (調査III-(5))

Tab-31 (単位: 点)

年 令	定 期 的 (1)			不 定 期 (2)			し ない (3)			t
	n	\bar{x}	S.D	n	\bar{x}	S.D	n	\bar{x}	S.D	
18	98	367.4	107.0	48	34.94	108.2	57	28.54	114.2	2-3
	59	378.5	93.2	55	38.80	98.3	60	31.68	87.2	2-3
19	101	384.0	116.2	63	30.49	97.5	86	30.42	117.8	1-2
	129	41.97	107.3	92	38.48	105.1	64	33.16	103.3	1-2
20	48	35.92	103.3	27	36.04	101.5	51	31.20	96.5	2-3
	54	45.02	123.3	47	34.77	87.3	35	35.34	99.4	2-3
21	5	37.60	140.4	9	34.89	133.5	6	30.86	161.3	1-3
	13	41.92	109.6	18	35.50	101.5	8	30.00	85.2	2-3
22	2	45.50	145.0	7	37.43	55.8	4	39.25	5.63	1-3
				18-19						
t : 0.05				19-20						
t : 0.01	18-19			18-20						
	18-20			19-20						

(上段54年度 下段55年度)

54年度18歳では全国と比較して体格で差はなく55年度でグループ間に差がある。54年度の種目別では(1)と(3)のグループ間に握力を除いて全部の項目に差が認められ(1)の優位は動かしがたい。全国比では(2)の 50 m 走, 走幅とび, 握力, 踏み台昇降(1)の握力(3)の上体そらし等を除いて殆んどに差があり全国学生が優っている。55年度でも筋力の一部に本学学生が優るほかはどのグループでも全国が優位である。19歳では54年度の学生はグループ間に差はなく55年度では各グループ間に差が認められる。全国比では55年度の(1)のグループに 8 項目に互に差があり背筋力を除いて本学学生の劣位が認められ(2)との間には 7 項目に差があり背筋力と反復横とびに優っているほかは劣っている。(3)のグループとの間には 4 項目に劣位を認めたが18歳と比較して全国比において劣る項目が半減していることがわかる。20歳では54年度のグループ間の差は垂直とびと立位体前屈に差がないだけで55年度の全項目とともに特に(1)を中心にグループ間に差があり(1)の優位はここでも認められる。全国比較では筋力を中心にハンドボール投げの55年度(2)と(3)に体力診断テスト合計点の(1)グループと立位体前屈の(1)と(3)のグループに本学学生の優位を認めた。21歳では54年度のグループ間の差は懸垂の(2)と(3) 1500 m 走の(1)と(2)垂直とびの(1)と(3)立位体前屈の(1)と(3)踏み台昇降の(1)と(3)(2)と(3)55年度では全項目間に(1)との差を中心に優劣の関係がある。54年度と55年度の比較では(1)のグループとでは 3 項目に(2)のグループで 3 項目

(3)のBグループで3項目に55年度のほうが優っている。22歳では、グループ間の差は著しく減少し僅か4項目に差が認められるにすぎない。21歳22歳では各グループ共に記録の上昇傾向がみられ特に定期的に運動しているグループは全国と比較して差がなくなり上廻る項目もでてくる。

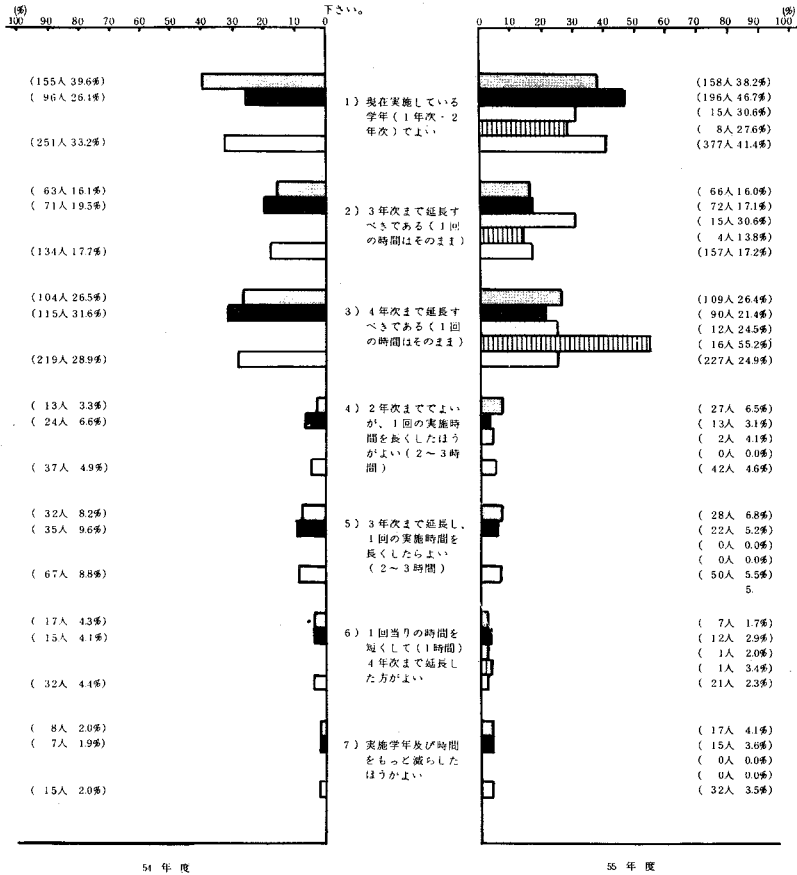
表—27はアンケートⅢの(5)と対照した表であるが各年齢とも（定期的に運動を実施しているもの）と、（しない）ものとの体力診断テストの合計点の差は大きい。特に（しない）もののグループでの年齢間の差でも明らかのように、（しない）もののグループ間では内容はバラツキが認められる。表—31はアンケートⅢの(5)と対照した運動能力テスト合計点の表である。各年齢とも(1)の優位は明らかで(2)と(3)の比較でも(2)のグループの優位は明らかである。

IV) 正課体育について

この項では本学学生の正課体育についての考え方と各々の考え方をするものの体力はどのような現状を示しているかを調査したものである。図—38は調査紙IV—(1)についての回答の内容である。

Fig-38 必修体育(実技)についての調査Ⅱ-(1)

(1) 体育実技に関して実施学年と単位(時間)について次の項目に1つだけ選んで答えて下さい。



全般的には正課体育は現在のままでよいとするものは30%～40%になるが3年次まで延長すべきであるとするものが54, 55年度とも17%にも達し4年次まで延長すべきというものが25%～29%もいることは現行の2年次打ち切りに不満足で在学中は正課体育を継続したいという学生がかなりの数を示している。

図一29イ、ロは体育授業を延長派と維持減少派にわけて、それらの学生の考え方と実際の体力との関係を調べたものである。54年55年とも両者には有意な

差は認められなかった。図-30は調査Ⅱ-(1)とⅣ-(1)とを対比したものであるがこれによると、体力があるほうに属するものが延長派に多いという傾向がある。

正課体育を延長すべきと答えた者(2,3,4,5,6)、現状維持、減少と答えた者(7)の体力診断テスト合計点比較(調査Ⅵ-(1))

Tab-29-イ (単位:点)

		延長すべきと答えた者	現状維持、減少させた方がよいと答えた者
1	標 本 数	218	145
学	平 均 値	247.1	240.9
年	標 準 偏 差	25.3	24.0
2	標 本 数	212	89
学	平 均 値	250.6	243.5
年	標 準 偏 差	25.1	23.4

(54年度)

正課体育を延長すべきと答えた者(2,3,4,5,6)、現状維持、減少と答えた者(1,7)の体力診断テスト合計点比較(調査Ⅳ-(1))

Tab-29-ロ (単位:点)

		延長すべきと答えた者	現状維持、減少させた方がよいと答えた者
1	標 本 数	225	164
学	平 均 値	254.4	248.8
年	標 準 偏 差	25.4	27.5
2	標 本 数	195	196
学	平 均 値	259.2	254.2
年	標 準 偏 差	27.4	26.0
3	標 本 数	21	8
学	平 均 値	260.0	243.8
年	標 準 偏 差	22.5	39.0
4	標 本 数	9	4
学	平 均 値	266.8	255.0
年	標 準 偏 差	14.9	11.2

(55年度)

調査Ⅱ(1)と調査Ⅳ(1)との対比

Tab-30

(単位:人)

調査の(1)番り	正課体育延長すべきと答えた者					正課体育現状維持、減少と答えた者				
	1学年	2学年	3学年	4学年	合 計	1学年	2学年	3学年	4学年	合 計
(1) 満 足	12	10			22 (4.5%)	3	5			8 (3.0%)
	5	3	0	0	8 (2.0%)	6	3	0	0	9 (1.8%)
(2) あるほう	27	44			71 (14.5%)	12	9			21 (8.0%)
	15	30	2	0	47 (11.8%)	34	37	4	3	78 (15.6%)
(3) 普 通	110	139			249 (50.8%)	95	50			145 (54.9%)
	81	113	6	5	205 (51.6%)	119	106	18	10	253 (50.5%)
(4) ないほう	60	59			119 (24.3%)	43	31			74 (28.0%)
	53	51	6	3	113 (28.5%)	70	51	10	8	139 (27.7%)
(5) 不 満 足	19	10			29 (5.9%)	10	6			16 (6.1%)
	14	9	1	0	24 (6.1%)	11	11	0	0	22 (4.4%)

(上段54年度、下段55年度)

正課体育の実施面について、どのような方式や内容を設定したらよいか、又学生がどのような意識をもって正課の体育にのぞんでいるかを調査したものが図一39, 40, 41である。この調査から授業は選択(種目)制でシーズンに見合った種目の設定を望み設定種目の多様化を希望している。反面実施種目の基礎技術の習得には消極的であり、少グループ制によって実活動時間の延長を図りたいと考えているようである。又学生の80~90%が正課体育としての実施を望み課外活動だけでよいとするものは10~12%に過ぎない。その必修とすべき理由は、強制的に最低限の運動を確保してくれ、ある程度の運動欲求を満たしてくれるという消極的ともいえる考え方が支配的で、今後運動に対する積極的な考え方をさせるための強力な指導が必要であろう。

Fig. 39 体育実技の内容についての調査Ⅱ-②

② 体育実技の内容(質的)について答えて下さい。(事後回答可)

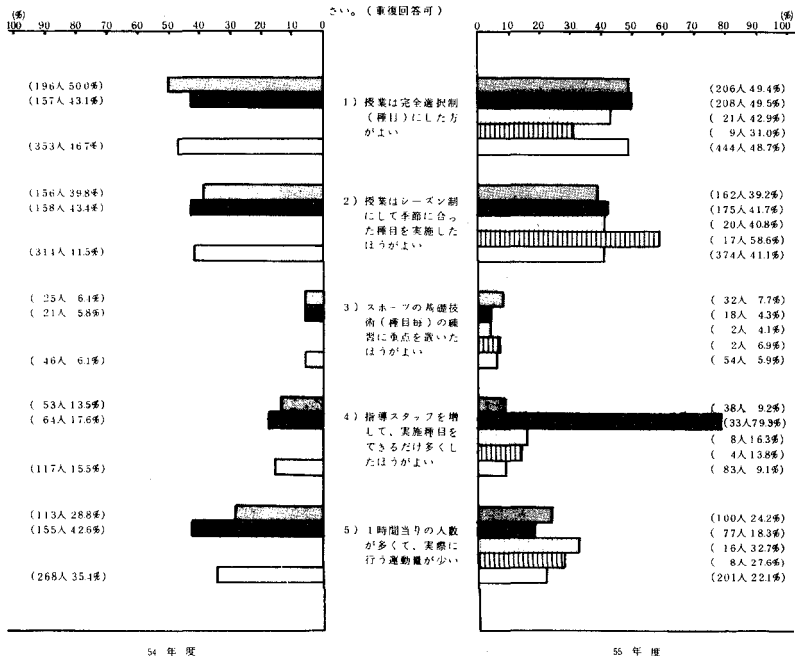


Fig. 40 体育実技についての調査Ⅱ～③

③ 体育実技の実施について答えて下さい。

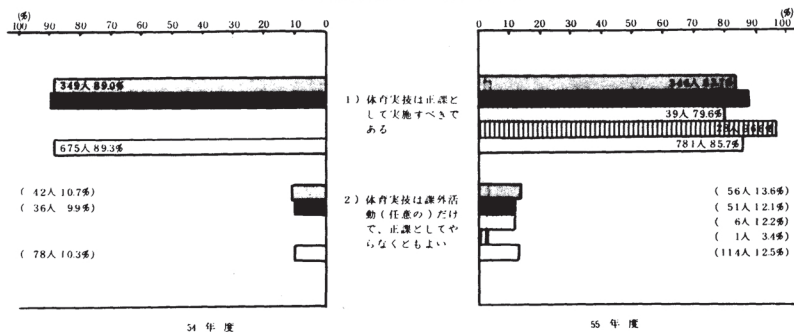
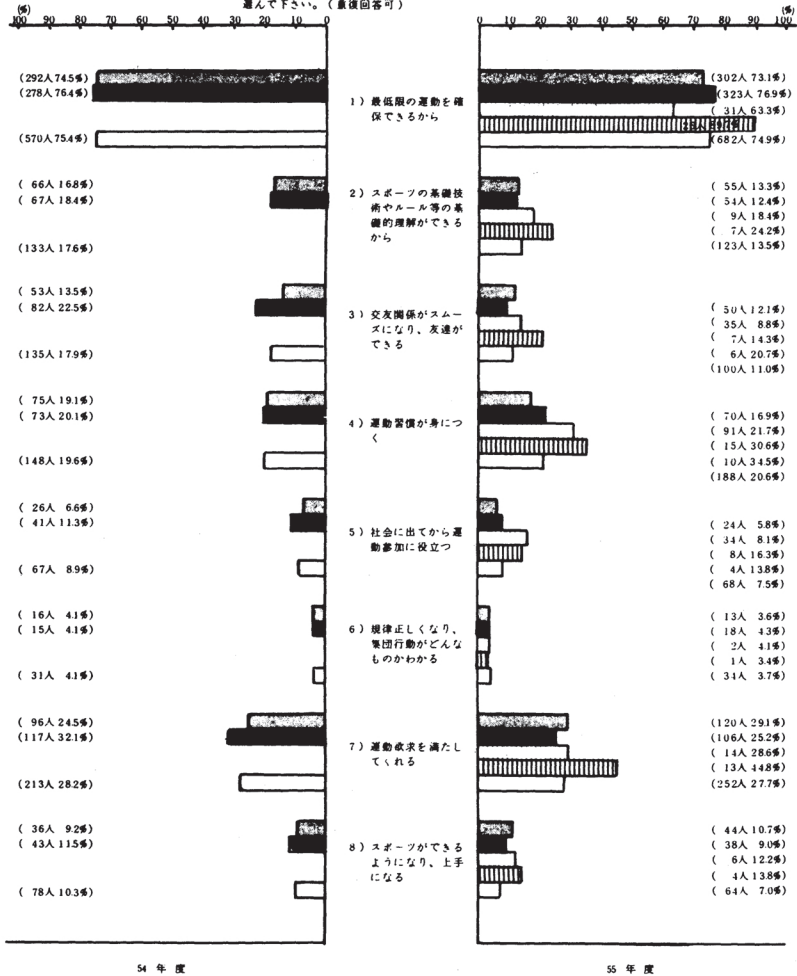


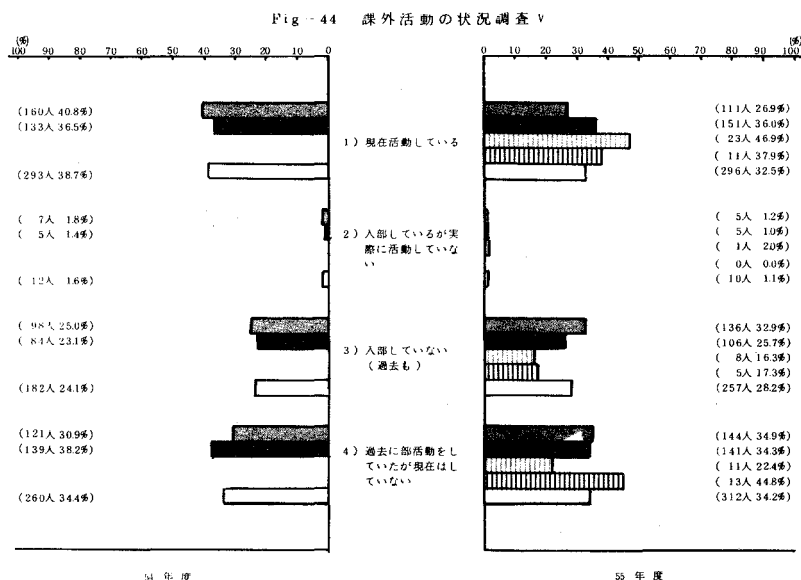
Fig-41 体育実技を必修すべきとするものの理由についての調査Ⅱ-(4)

(4) 体育実技を必修正課として実施すべきであると考えた方は、その理由を次の項目から選んで下さい。(重複回答可)



V 課外活動について

図一44は課外活動についての調査Vに基づくものである。体育系のクラブ加入者はここ数年除々に減少の傾向があり54年～55年度についても同様に即ち38.7%から32.5%に減少し特に1年目の入部率が悪い、又過去（中学，高校）に課外活動をしていたものが大学に入学して活動継続しないものが両年度とも34%台を記録するなど一般に体育系クラブに消極的で趣味の多様化とともに意欲の欠除がこのような傾向を示すものといえよう。表一32, 33, 34は調査紙Vの対する回答をまとめたもので以上のことを裏付けている。



V-(1)-(a)現在部活動をしている者の理由
Tab-32

学年 項目	1学年	2学年	3学年	4学年	合 計
(1)	32 27	22 30	3	3	54 63
(2)	20 13	12 23	7	2	32 45
(3)	40 19	26 30	8	3	66 60
(4)	9 3	8 15	1	0	17 19
(5)	17 13	21 25	2	2	38 42
(6)	0 1	2 0	0	0	2 1
(7)	25 16	27 25	2	1	52 44

(上段54年度、下段55年度)

V-(2)-(b)入部しているが実際にしていないものの理由

Tab-33

学年 項目	1学年	2学年	3学年	4学年	合 計
(1)	1 0	0 2	0	0	1 2
(2)	1 1	1 2	0	0	2 3
(3)	1 2	0 0	0	0	1 2
(4)	0 1	0 0	0	0	0 1
(5)	0 0	0 0	0	0	0 0
(6)	1 0	0 0	0	0	1 0
(7)	4 1	2 1	0	0	6 2

V-(3)、(4)-(C)過去に部活動していたかやめてしまっ
た理由及び、入部していない者の理由

Tab-34

学年 項目	1学年	2学年	3学年	4学年	合 計
(1)	38 38	25 44	2	3	63 87
(2)	20 8	11 15	0	1	31 24
(3)	63 73	65 87	8	10	128 178
(4)	7 15	14 10	0	1	21 26
(5)	17 12	22 35	1	0	39 48
(6)	6 6	2 4	2	0	8 12
(7)	18 41	22 26	5	1	40 73

(上段54年度、下段55年度)

年令別クラブ加入者、非加入者の体力診断テスト
及び運動能力テスト種目別記録と合計点

18才

Tab-35-イ

項 目	ク ラ ブ 加 入			ク ラ ブ 非 加 入			I II	0.01=◆◆ 0.05=◆
	n	ア	S.D	n	ア	S.D		
身 長 (cm)	90	169.45	5.85	185	168.90	5.35		
	50	170.63	9.47	149	170.13	5.73		
体 重 (kg)	90	61.23	6.61	186	61.41	6.89		
	50	62.17	6.43	149	60.79	8.03		
50m 走 (秒)	88	7.46	0.63	162	7.52	0.44		
	60	7.58	0.41	169	7.62	0.39		
走巾とび (cm)	89	445.39	40.37	163	435.78	40.77		
	61	428.13	36.56	172	424.01	37.24		
ハンドボール 投げ (m)	89	27.68	3.33	161	26.60	4.20		
	61	29.30	4.51	171	28.42	4.21		
懸 垂 (回)	90	6.95	3.31	170	5.80	3.15	◆◆	
	57	7.22	2.97	170	6.07	2.82	◆	
1500m 走 (分、秒)	88	6' 08"	29.65	157	6' 42"	41.04	◆◆	
	61	6' 04"	28.09	170	6' 24"	30.65	◆◆	
運動能力テスト 合計点 (点)	84	38.79	13.05	155	32.98	10.86		◆
	54	39.28	10.00	141	35.09	9.74		
反復横とび (点)	90	44.53	3.92	177	43.43	4.14	◆	
	66	46.44	3.30	176	45.81	3.79		
垂直とび (cm)	91	61.41	7.44	184	58.75	5.78	◆	
	67	59.69	7.44	176	58.97	7.12		
背 筋 力 (kg)	90	149.72	26.33	184	144.02	25.15		
	68	141.49	19.20	179	140.66	20.67		
握 力 (kg)	91	48.41	6.39	184	48.54	6.50		
	70	46.90	5.72	180	46.67	5.47		
伏臥上体持ち (cm)	91	53.33	7.59	185	53.42	7.24		
	67	56.60	7.00	178	55.84	7.12		
立 位 体 前 屈 (点)	90	15.71	5.47	181	15.80	5.54		
	68	17.24	5.05	178	16.34	5.37		
踏台昇降運動 (点)	82	62.65	11.89	180	54.56	7.85	◆◆	
	66	63.71	10.23	176	57.91	9.89	◆◆	
体力診断テスト 合計点 (点)	81	25.33	2.48	173	24.20	2.49		◆
	66	25.82	2.30	175	24.93	2.43		

上段54年度

下段55年度

学生(室蘭工業大学)の健康に関する事象と体力及び運動能力の傾向とそれぞれの年次経過に伴う変化についての研究

455

年令別クラブ加入者、非加入者の体力診断テスト及び運動能力テスト種目別記録と合計点

Tab-35-a

19才

項目	ク ラ ブ 加 入			ク ラ ブ 非 加 入			t(1) : 0.01 = ●● 0.05 = ●
	n	\bar{x}	S.D	n	\bar{x}	S.D	
身 長 (cm)	99	170.07	5.16	219	169.73	5.87	
	111	169.51	5.49	232	169.65	5.47	
体 重 (kg)	99	62.76	7.17	220	61.17	7.23	
	111	62.15	6.74	232	61.66	8.16	
50m 走 (秒)	93	7.43	0.37	196	7.53	0.47	
	124	7.47	0.42	253	7.59	0.43	●
走 山 と び (cm)	93	438.67	40.93	198	432.28	38.49	
	124	438.91	34.68	254	431.41	39.44	
ハンドボール 投 (m)	93	27.61	3.41	198	26.21	4.91	●
	125	29.44	4.16	254	28.29	4.20	●
懸 垂 (回)	99	6.08	2.57	200	5.31	2.65	●
	128	7.61	3.46	261	6.47	2.96	●●
1500m 走 (分、秒)	91	6' 01"	33.45	188	6' 34"	39.31	●●
	124	5' 58"	38.63	244	6' 26"	38.72	●●
運動能力テスト 合 計 点 (点)	89	39.45	11.22	190	30.63	9.75	
	110	42.62	10.78	207	36.54	10.26	●●
反復横とび (点)	98	45.39	3.18	227	43.94	3.63	●
	130	47.66	3.26	262	46.09	3.94	●●
垂直とび (cm)	98	59.84	7.62	228	59.20	6.37	
	130	59.77	6.50	262	59.56	7.16	
背 筋 力 (kg)	97	151.88	19.69	226	143.35	21.14	●●
	130	147.23	20.67	263	140.65	22.60	●
握 力 (kg)	99	50.09	6.80	227	49.59	6.30	
	132	48.69	5.35	264	48.61	6.13	
伏臥上体そらし (cm)	99	55.13	6.34	228	53.44	7.95	
	130	56.94	7.90	262	55.75	7.06	
立位体前屈 (cm)	99	15.75	5.27	229	15.81	6.14	
	130	17.19	5.17	261	14.96	5.19	●●
踏台昇降運動 (点)	88	60.67	9.16	205	53.81	7.30	●●
	130	65.10	10.05	264	58.07	10.78	●●
体力診断テスト 合 計 点 (点)	87	25.24	2.63	203	24.27	2.48	
	130	26.47	2.39	261	25.05	2.76	●●

上段54年度

下段55年度

年令別クラブ加入者、非加入者の体力診断テスト
及び運動能力テスト種目別記録と合計点

Tab-35-

20才

項目	クラブ加入			クラブ非加入			11) ≥ 0.01 \rightarrow \bullet ≥ 0.05 \rightarrow $\bullet\bullet$
	n	\bar{x}	S.D.	n	\bar{x}	S.D.	
身長 (cm)	42	170.94	4.64	141	169.93	5.69	
	53	171.25	6.10	127	170.07	5.70	
体重 (kg)	42	63.22	7.11	140	62.17	7.53	
	53	62.74	5.48	126	61.47	6.91	
50m 走 (秒)	38	7.42	0.40	130	7.41	0.37	
	56	7.40	0.31	137	7.59	0.41	\bullet
走巾とび (cm)	38	437.09	31.77	128	442.40	37.02	
	57	449.67	43.69	138	431.49	37.70	\bullet
ハンドボール 投げ (m)	38	26.91	3.65	128	27.09	3.96	
	55	30.64	3.88	138	29.02	4.46	\bullet
懸垂 (回)	42	6.36	3.79	137	5.67	2.78	
	60	7.73	3.42	137	6.11	3.08	\bullet
1500m 走 (分、秒)	38	6' 05"	33.16	105	6' 31"	36.89	
	54	5' 55"	38.38	133	6' 35"	46.63	$\bullet\bullet$
運動能力テスト 合計点 (点)	35	36.23	9.16	105	34.40	10.34	
	44	45.18	12.27	103	35.86	10.06	$\bullet\bullet$
反復横とび (回)	42	45.46	3.95	147	45.09	3.34	
	62	47.79	3.59	140	46.06	4.44	\bullet
垂直とび (cm)	42	61.85	7.24	148	60.41	6.04	
	63	62.25	7.24	139	59.19	6.63	\bullet
背筋力 (kg)	42	148.17	21.37	147	151.06	23.26	
	62	149.82	21.66	141	144.50	23.05	
握力 (kg)	42	49.17	7.54	148	50.36	5.96	
	63	49.35	6.11	142	49.94	5.77	
伏臥上体そらし (cm)	42	54.34	7.63	147	54.84	7.68	
	63	56.25	8.74	141	55.20	7.79	
立位体前屈 (cm)	42	16.09	4.48	148	15.54	4.93	
	63	16.18	4.89	141	16.06	5.48	
踏台昇降運動 (点)	39	60.52	8.41	130	55.18	64.9	
	64	66.41	10.11	139	58.74	84.8	$\bullet\bullet$
体力診断テスト 合計点 (点)	38	25.06	2.01	119	25.12	2.26	
	61	26.64	2.76	138	25.15	2.68	$\bullet\bullet$

上段54年度

下段55年度

学生(室蘭工業大学)の健康に関する事象と体力及び運動能力の傾向とそれぞれの年次経過に伴う変化についての研究

457

年令別クラブ加入者、非加入者の体力診断テスト
及び運動能力テスト種目別記録と合計点

21才

Tab-35--ニ

項 目	ク ラ ブ 加 入			ク ラ ブ 非 加 入			11) ≥ 0.01 \Rightarrow \Leftarrow 0.05 \Rightarrow \Leftarrow
	n	\bar{x}	S.D.	n	\bar{x}	S.D.	
身 長 (cm)	10	170.21	4.02	25	170.87	5.25	
	24	170.12	5.04	45	170.32	5.42	
体 重 (kg)	10	64.77	8.85	25	62.33	8.99	
	24	62.05	5.92	45	63.14	8.06	
50m 走 (秒)	7	7.61	0.72	22	7.60	0.47	
	25	7.45	0.42	49	7.59	0.53	
走巾とび (cm)	7	428.97	34.26	22	432.86	44.68	
	25	438.04	38.54	48	428.94	46.38	
ハンドボール 投 げ (m)	7	28.43	4.85	22	26.98	5.45	
	25	28.92	4.36	48	28.94	4.58	
懸 垂 (回)	10	6.10	3.14	22	6.14	3.10	
	16	6.75	2.44	49	6.43	2.71	
1500m 走 (分、秒)	7	6' 08"	41.17	21	6' 44"	48.35	
	24	6' 03"	46.38	43	6' 25"	37.35	*
運動能力テスト 合 計 点 (点)	7	365.7	164.8	21	318.1	126.0	
	11	428.2	110.8	33	358.8	105.7	
反復横とび (点)	10	44.00	3.33	21	44.12	3.52	
	18	47.06	3.41	52	46.35	5.74	
垂直とび (cm)	10	59.30	7.57	21	55.92	11.26	
	18	57.67	5.65	52	60.04	6.77	
背 筋 力 (kg)	10	154.50	26.61	22	144.85	19.91	
	18	139.00	21.01	52	148.42	20.13	
握 力 (kg)	10	51.90	8.55	22	49.59	7.76	
	18	48.44	5.79	52	49.33	5.86	
伏臥上体そらし (cm)	10	60.45	6.71	22	53.05	10.68	*
	18	56.78	6.92	52	56.50	7.98	
立位体前屈 (cm)	10	16.59	4.42	22	15.28	4.94	
	18	15.50	4.73	52	15.37	5.45	
踏台昇降運動 (点)	9	60.37	5.83	19	52.77	6.40	
	18	64.98	12.73	52	59.57	9.42	* *
体力診断テスト 合 計 点 (点)	9	26.89	3.14	19	24.26	2.49	
	18	26.06	2.09	52	25.75	2.92	

上段54年度

下段55年度

年令別クラブ加入者、非加入者の体力診断テスト
及び運動能力テスト種目別記録と合計点

22才

Tab-35-ホ

項 目	ク ラ ブ 加 入			ク ラ ブ 非 加 入			0.01=◆ 0.05=◆
	n	\bar{x}	S.D	n	\bar{x}	S.D	
身 長 (cm)	5	170.12	4.45	17	169.47	5.12	
体 重 (kg)	5	62.76	9.46	17	60.37	5.39	
50m 走 (秒)	4	7.35	0.17	20	7.46	0.39	
走巾とび (cm)	4	446.50	20.43	20	445.15	35.01	
ハンドボール 投 (m)	4	30.25	5.36	20	28.30	3.02	
懸 垂 (回)	6	7.00	2.77	12	7.83	4.10	
1500m 走 (分、秒)	4	6' 20"	34.04	18	6' 29"	33.42	
運動能力テスト 合 計 点 (点)	4	40.50	11.54	9	38.67	6.00	
反復横とび (点)	6	48.33	2.63	13	45.85	4.13	
垂直とび (cm)	6	64.33	7.36	13	59.85	4.20	
背 筋 力 (kg)	6	163.83	29.75	13	145.15	21.10	
握 力 (kg)	6	47.00	5.07	13	49.08	3.05	
伏臥上体をそらし (cm)	6	54.00	3.32	13	57.23	7.33	
立位体前屈 (cm)	6	14.17	4.06	13	16.39	5.77	
踏台昇降運動 (点)	6	68.97	15.72	13	58.66	8.53	
体力診断テスト 合 計 点 (点)	6	26.50	1.50	13	25.39	2.06	

(55年度)

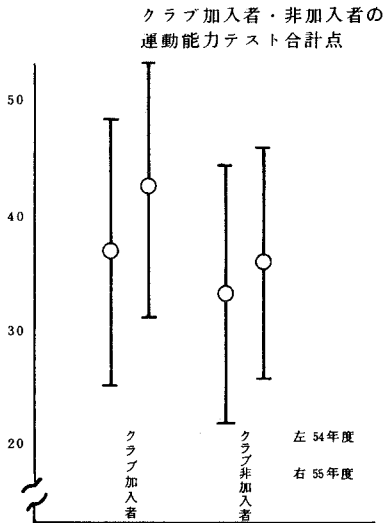
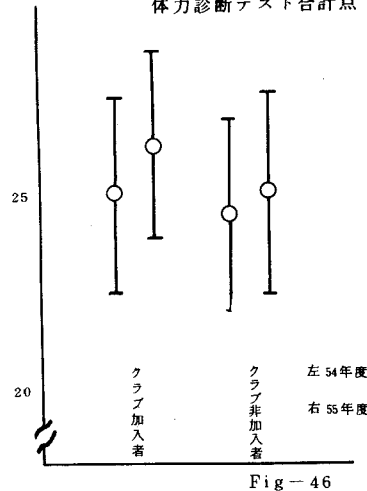


Fig-45 クラブ加入者・非加入者の
体力診断テスト合計点



表一35イ, ロ, ハ, ニ, ホは年齢別のクラブ加入者, 非加入者の体力診断テスト及び運動能力テスト種目別記録と合計点を対比させたものであり, 図45, 46はそれとグラフに表したものである。18歳では54年度55年度とも4～5項目に有意な差があり特に持久走と踏台昇降に明らかに認められる。このことから加入者の学生がより循環機能に優れているといえる。19歳では54年度で6項目55年度では10項目に差がある。差がないのは走幅とび, 垂直とび, 握力, 上体そらしの4項目で課外クラブ加入者の体力, 運動能力ともに優位は動かしがたい。20歳では54年度では差は認められず55年度では19歳同様10項目に差がある。21歳では3項目に差を認められるに至り22歳では両者に差はなくなる。このことから年齢が進むにつれクラブ活動の量が加入者でも減り, 非加入者も自分なりの運動を任意に行う機会をもつようになり, その結果両者に差がなくなるものようである。特に3年次になるとクラブ加入者の半分が現役から退くことが多く4年目では殆んど活動しなくなることも一因であろう。而し1年次2年次における両者の差は非常に顕著でトレーニング効果も大きいことから課外クラブの加入は積極的に行われるのが望ましいと同時に3, 4年次まで継続する

ことが体力の維持増進や能力の伸長ひいては健康の増進にも必要なことであろう。

VI 総 括

54年度55年度の両年度に別紙調査紙による調査結果と体力診断テスト及び運動能力テストを照合し健康に関する思考的側面と身体的側面が個人で又種々の集団においていかなる関連をもっているか又これに加えて文部省体育局における全国学生の平均値と比較してどのような位置にあるかを検討したものである。

次に1, 2, 3, 4と学年移行に伴って健康や体力, 運動能力が個々人で又集団でどのように推移し加えて意識もどのように変わるのかをも合せて検討したものである。即ち本学学生の健康に関する総括的プロフィールには次のように考えられる。本学学生の体格は全国平均に類似し特に差は認められない。長育が幅育, 量育を上廻って(やせぎみ)のタイプに属するが2, 3年次と学年移行に従ってややバランスを回復してくる。この傾向は54年55年度ともに変わらない。健康に関する知識は常識の範囲内にあり, それへの願望と意欲は充分認められる而し実施段階の具体的方策と対応の仕方に多々問題点がある。重要なことは若いという自負からくる体力, 健康の過信が積極的施策をとらない理由であろう。本学の保健管理センターも体育系クラブの学生と一部の学生が利用するにとどまっているが, 学生の積極的な利用とセンターの利用面における指導対策も又必要であろう。

運動に対する概念的な理解は充分にあるようであるが, それでも50%近い学生が運動の実施という面では消極的である。この意味では正課の体育実技はその参加への引金となり得ることは本学で20年来実施しているスキー実習が在学生のスキー意欲を喚起し盛んに行われていることで証明されている。このことから3, 4年次まで体育実技を延長開設して欲しいという学生の希望も充分考慮の余地はあろう。又もう1つの側面, 課外活動の抜本的見直し例えば学生会主導の体育局(会)を設置し一般学生の課外運動へ参加の促進やクラブ活動

の充実を図ることも一つの方法であろう。又これらを側面から補助する運動施設の拡充と整備、用具の充足等が検討されねばならない。

本学学生の体力は54年度55年度とも全国平均を多くの項目で下廻るが筋力は各年齢とも全国平均を上廻り合計点でも年齢が増すにつれ上廻るようになる。特に54年度より55年度は概して成績がよく高校から大学への移行期における受験期の体力落ち込みの時期を時間の経過が除々にカバーしてくるものようである。而し筋力主導型の体力は年度、年齢が異っても同様な傾向をみせている。

運動能力は、全国平均と比較すると殆んど全ての項目で劣り、特に持久走に著しい。又50 m 走、懸垂、1500 m 走等が劣るのが目立つ、而し年齢の上昇とともに全国平均を下廻ってもその差は除々に縮少する。本学学生の特徴は全体的に低位のレベルで各種目バランスがとれているといえる。運動について必要な知識は理解しているが実施面で消極的の学生が多いのも今後の指導上の重要な点である。一方運動の効果的な側面として、定期的に運動しているもの、不定期の実施者、していないものの学生の体力、運動能力を比較してみると、その差は明らかで運動を定期的に行っているものと他のグループとの間の差は大きく、運動を定期的にするほうが、これらの年代では特に必要だということは明らかである。又体育サークルに加入し活動しているものはどの年代でも、体力、運動能力共に優れ全国平均と比較しても、やや劣るがその差は少くない。正課体育は現行2年次で終了するが3、4年次まで延長開設を望むものも多く理由は種々であれ運動意欲を与え運動の慣習や理解を与えるためにも検討すべきであろう。いつの時代、いかなる社会にあっても健康は人間生存の根幹をなす重要な問題であって、学生も勿論例外ではない。直接的な目的即ち学問研究の場でも将来の社会生活の場でも、そのベースになるのはよりよい健康ということであろう。このことを考えるなら健康の自主管理を再検討する余地があると考え

(昭和56年5月20日受理)

参 考 文 献

- (1) 水野忠文：青少年体力標準表，東京大学出版会（1969）
- (2) 大石三四郎：体育統計学（Ⅰ），（Ⅱ），（1962）
- (3) 猪飼道夫：日本人の体力，からだの科学，逍遙書院 39, 54～59（1971）
- (4) 陣内富男：肥満と高血圧，保健の科学，19(5)（1977）
- (5) 加藤橘夫：青少年の体格と体力，杏林書院（1970）
- (6) 文部省体育局：昭和53年度，体力，運動能力調査報告書1977，pp. 78～79, pp. 104～107
- (7) 文部省体育局：昭和54年度，体力，運動能力調査1978，pp. 104～107, pp. 40
- (8) 小成英寿他：学生の健康に関する周辺領域における一考察，室蘭工業大学研究報告，1980，10(2)

学生の健康に関する周辺領域の基礎調査

室蘭工業大学・体育研究室

保健管理センター

皆さん方の健康・体力・運動に関する考え、およびいろいろな現状について、基礎的資料を集めたいと思います。

次の記入方法をお含みの上、調査にご協力をお願いいたします。

※ 記 入 方 法 ※

1. 調査にはもれなく記入して下さい。
2. 答の中であてはまる数字を○で囲んで下さい。

氏名					年令	才		科名	科		学年	年	
身長	cm	体重	kg	胸囲	cm	矯制	視力	右	()	左	()	眼鏡	有無
住居	自宅・下宿・寮・間借				通学	乗物約()分		徒歩約()分		自家用車	有無		
中学・高校で体育系サークル活動をした方は 種目名を記入して下さい													
大学で低学年に体育系サークル活動をした方は 種目名を記入して下さい								年目まで		部名			
やめた理由													
現在体育系サークル活動をしている方は 種目名を記入して下さい													

I 健康の認識

- (1) 健康についてどのように考えていますか。該当するものに1つだけ○をつけて下さい。
 - 1) 健康には関心があり、日常気をつけている
 - 2) 健康には関心があるが、具体的努力はしていない
 - 3) 健康には関心もなく、努力もしていない
 - 4) 健康教育の必要性を感じている

- (2) 自分の健康状態の評価はどのようなことで判断していますか。該当するものに○をつけて下さい。(重複回答可)
- 1) 朝起きた時、目覚めがさわやかで、活気が感ぜられるかどうか
 - 2) 勉学やスポーツ等で疲れても休息・睡眠で回復するかしないか
 - 3) 食欲が旺盛であるかどうか
 - 4) よく眠れるかどうか
 - 5) 風邪や消化器疾患等の病気になることが多いか、少いか
 - 6) 身体の酷使に耐えられるかどうか
 - 7) 特に慢性的特病的なものがないかどうか
 - 8) 気力が充実していると感じられるかどうか
- (3) 自分の健康状態をどう考えていますか。該当するものに1つだけ○をつけて下さい。
- 1) 現在の健康状態で良い
 - 2) 現在の健康状態をもっと増強したい
 - 3) 現在の不健康状態を改善したい
 - 4) 慢性的疾患があり始終悪い
- 4の場合、具体的疾患名を書いて下さい。()
- (4) 健康に関心や認識をもった動機はなんですか。該当するものに1つだけ○をつけて下さい。
- 1) 中学・高校・大学での健康に関する講義を聞いてから
 - 2) 健康に関する書物を読んでから
 - 3) ラジオ・テレビ・新聞等の機関で健康に関する記事・特集を見聞してから
 - 4) 自分が病気になったり、健康を害してから
 - 5) 家族や近親者・友人が病気などで健康を害してから
 - 6) 学校の定期健康診断を受けてから
 - 7) 日常の勉学や体育・スポーツ活動に際して、体力不足を感じてから
- (5) 身体不調のとき自分の健康管理はどうしていますか。該当するものに1つだけ○をつけて下さい。
- 1) 少しでも身体工合が悪いと感じたら、病院で診てもらう
 - 2) 保健管理センターで医師・看護婦に診てもらう
 - 3) 少々の身体の不調は我慢する
 - 4) 自己診断で薬局で買って飲む
 - 5) 自宅に電話・手紙などで、親に相談し処置する

II 体力の現状について

- (1) あなたは現在の体力の状態をどう考えていますか。
- 1) 満足
 - 2) あるほう
 - 3) 普通
 - 4) ないほう
 - 5) 不満足
- (2) あなたは現在の勉学や学校生活が今の体力でやっていけると思っていますか。

- 1) 充分である 2) どうかやれる 3) 不安である
- (3) 社会に出て現在の体力でやっていけると思いませんか。
 - 1) 充分である 2) どうかやれる 3) 不安である
- (4) あなたは、自分の体格や体力値(握力・背筋力・肺活量・視力等)を把握していますか。
(ほぼ正確に)知っているものに○をつけて下さい。(重複回答可)
 - 1) 身長 3) 胸囲 4) 視力 5) 肺活量
 - 6) 握力 7) 背筋力 8) 血圧値
- (5) 自分の体力をどのような点から評価しますか。該当するものに1つだけ○をつけて下さい。
 - 1) 日常の疲労感 2) 勉学・スポーツ・労働後の疲労回復感
 - 3) スポーツの試合をしたときの疲労感 4) 体力測定の結果
 - 5) 運動の継続時間の長短 6) 身体の柔軟性から
 - 7) 重い物がもてるかどうか 8) 長時間の肉体労働にこたえられるかどうか
 - 9) 徹夜の勉学に耐えられるかどうか
 - 10) 徹夜の麻雀をしてもすぐ回復するかどうか
- (6) あなたが健康・体力増進のために現在実行しているものに○をつけて下さい。
(重複回答可)
 - 1) 運動不足に気をつける 2) 食事の規則性や質・量に留意する
 - 3) 煙草の吸いすぎに注意する 4) 睡眠時間に気をつける
 - 5) 健康診断を定期的に受ける 6) 保健管理センターを積極的に利用する
 - 7) 過労を避け休息に留意する 8) 生活を規則的にする
 - 9) スポーツサークルに入部して身体を鍛える
 - 10) 心のもちかたに気をつけている
 - 11) 授業の空時間や課外時間に、友人や単独で運動をする
 - 12) 酒のみすぎに注意する
 - 13) 保健栄養剤をのんでいる

III 運動について

- (1) あかたは現在の学生生活の中で運動を継続する必要があると思いますか。
 - 1) おおいに必要 2) 少しは必要 3) 不要

◎不要と考える人は次の項目から一つ選んで下さい。

 - 1) 充分な体力をもっているから
 - 2) 運動より有意義なことがたくさんあるから
 - 3) 体力に自信がなく疲れるから
 - 4) 病弱だから
 - 5) 運動をしても将来役に立たないから
- (2) あなたは、運動・スポーツをすることによってどんな効果が生ずると思いますか。(重複

(回答可)

- 1) 運動後は、精神的・肉体的ストレスの解消に役立つ
 - 2) 筋力・持久力・敏捷性・柔軟性・平衡機能等を良くする
 - 3) 精神力・根性の鍛練に役立つ
 - 4) 協調性・リーダーシップ・社交性・積極性を涵養できる
 - 5) 高血圧・心臓病を予防する
 - 6) 肥満を解消し、バランスのとれた身体になる
- (3) あなたは自分の運動機能や体力測定値について知っていますか。
- 1) 知っている 2) 以前に計測したが忘れた 3) 知らない
- (4) 運動機能や体力測定値に関して考えていることに1つだけ○をつけて下さい。
- 1) 自分の体力測定値は知らなくともよい
 - 2) 自分の体力や機能が把握できるので知りたい
 - 3) 機能増進や体力増強のため必要なので知りたい
 - 4) スポーツをするために必要なので知りたい
 - 5) 測定値を把握しておくことは社会に出てから必要である
- (5) あなたは現在運動（正課体育を除く）をしていますか。
- 1) 定期的に行っている 週（ ）回位 1回平均（ ）分位
 - 2) 不定期だがしている 月（ ）回位 1回平均（ ）分位
 - 3) 機会があればする 年（ ）回位 1回平均（ ）分位
 - 4) 全くしていない
- (6) 運動をあまりやらない方や全くしていない方は次の項目から選んで○をつけて下さい。
(重複回答可)
- 1) 運動はしたいが、相手がいなくてできない
 - 2) 用具がないし、用具を貸してくれる所も知らない
 - 3) 体育施設（グラウンド・コート・体育館）が不十分で空いていない
 - 4) 運動はしたいが勉強や他の仕事（アルバイト）が忙しくてできない
 - 5) 運動はエネルギーの浪費で他に有用なことがあるから
 - 6) 貸出し用具が不十分で、借りづらいために敬遠する
 - 7) 指導者がいないため、どうして良いかわからない
 - 8) カリキュラムが密で時間がない
 - 9) 小さい時から運動が不得手で今も積極的になれない
- (7) 現在運動を継続している方(正課体育を除いて)、時々行っている方はその種目に○をつけて下さい。(重複回答可)
- | | | |
|-------------|--------------|-----------|
| 1) バレーボール | 2) バスケットボール | 3) サッカー |
| 4) 軟式テニス | 5) 硬式テニス | 6) アーチェリー |
| 7) スキー | 8) オリエンテーリング | 9) マラソン |
| 10) キャッチボール | 11) バドミントン | 12) 軟式野球 |

- | | | |
|------------|---------------|-----------------|
| 13) 硬式野球 | 14) ラグビー | 15) アメリカンフットボール |
| 16) なわとび | 17) ランニング | 18) ソフトボール |
| 19) サイクリング | 20) スピードスケート | 21) 和弓 |
| 22) フェンシング | 23) ボクシング | 24) フォークダンス |
| 25) 社交ダンス | 26) 徒手体操 | 27) ウェイトトレーニング |
| 28) ハイキング | 29) ワンダーフォーゲル | 30) 登山 |
| 31) 空手(巻法) | 32) 柔道 | 33) アイスホッケー |
| 34) ボーリング | 35) ゴルフ | 36) 散歩 |
| 37) 急歩 | 38) 相撲 | 39) 剣道 |
| 40) 鉄棒 | 41) 陸上(走・投・跳) | 42) 水泳 |
| 43) 卓球 | 44) ハンドボール | 45) ヨット |
| 46) ボート | 47) レスリング | |

IV 正課体育について

- (1) 体育実技に関して実施学年と単位(時間)について次の項目に1つだけ選んで答えて下さい。
 - 1) 現在実施している学年(1年次・2年次)でよい
 - 2) 3年次まで延長すべきである(1回の時間はそのまま)
 - 3) 4年次まで延長すべきである(〃)
 - 4) 2年次まででよいが, 1回の実施時間を長くしたほうがよい(2~3時間)
 - 5) 3年次まで延長し, 1回の実施時間を長くしたらよい(2~3時間)
 - 6) 1回当りの時間を短くして(1時間) 4年次まで延長した方がよい
 - 7) 実施学年及び時間をもっと減したほうがよい
- (2) 体育実技の内容(質的)について答えて下さい。(重複回答可)
 - 1) 授業は完全選択制(種目)にした方がよい
 - 2) 授業はシーズン制にして季節に合った種目を実施したほうがよい
 - 3) スポーツの基礎技術(種目毎)の練習に重点を置いたほうがよい
 - 4) 指導スタッフを増して, 実施種目をできるだけ多くしたほうがよい
 - 5) 1時間当りの人数が多くて, 実際に行う運動量が少い
- (3) 体育実技の実施について答えて下さい。
 - 1) 体育実技は正課として実施すべきである
 - 2) 体育実技は課外活動(任意)だけで, 正課としてやらなくともよい
- (4) 体育実技を必修正課として実施すべきであると答えた方は, その理由を次の項目から選んで下さい。(重複回答可)
 - 1) 最低限の運動を確保できるから
 - 2) スポーツの基礎技術やルール等の基礎的理解ができるから
 - 3) 交友関係がスムーズになり, 友達ができる

- 4) 運動習慣が身につく
- 5) 社会に出てから運動参加に役立つ
- 6) 規律正しくなり、集団行動がどんなものかわかる
- 7) 運動欲求を満たしてくれる
- 8) スポーツができるようになり、上手になる

V 課外活動について(体育サークル)

(1) 課外活動を現在していますか

- 1) 現在活動している
- 2) 入部しているが、実際に活動していない
- 3) 入部していない(過去も)
- 4) 過去に(中・高)部活動をしていたが、現在はしていない

a) 現在活動している方は次の中から選んで1つだけ○をつけて下さい。

- 1) 過去に(中・高)活動していたので、より高いレベルを目指している
- 2) 中・高時代は勉強で暇がなかったので、大学でやろうと思っていたから
- 3) 運動をすることで、身体の鍛練をしたいから
- 4) 自己の可能性を運動することで試してみたいから
- 5) 仲間が得られ、社交性や対人関係に得ることが多いから
- 6) 部活動で良い成績をあげると、就職に有利に働くと思うから
- 7) 運動そのものが好きだから

b) 入部しているが実際に活動していない方は次の中から選んで1つだけ①をつけて下さい。

- 1) 入部したが対人関係がうまくゆかず、活動から遠ざかっている
- 2) なんとなく誘われたが、あまりやる気がしない
- 3) 部のレベルが高く、トレーニングがハードでやってゆけそうもないから
- 4) 部の指導体制が悪く、やっても上達もしないし、面白くないから
- 5) 人数が多すぎる上、施設が狭くて活動ができないから
- 6) レギュラーの独断・専制で面白くないから
- 7) 経済的負担が多くて、やってゆけないから

c) 過去(中・高)に、部活動をしていたが、現在やめてしまった方、及び入部していない(過去も)方は、次の中から選んで1つだけ○をつけて下さい。

- 1) 部活動で他の仕事ができなかったから大学に入ったら体育系サークル以外のことをやりたいと考えたから
- 2) 過去の部活動はハードトレーニングだったので、今また、ハードトレーニングをしたいと思わない
- 3) 大学生活をのんびり、ゆったり楽しみたいから
- 4) 続けてやっても、良いプレーヤーになれないと思うし、大会にも出場できそうにな

いから

- 5) 講義・実験・実習の時間が多くて課外活動の暇がないから
- 6) 運動が面白くなり、活動する意義もなくなったから
- 7) 部活動は金銭的負担がおおきく、経済的に余裕がないため

VI

- (1) 体育施設・用具について考えていることがありましたら1つだけ○をつけて下さい。
 - 1) 体育施設には無関心である
 - 2) 学生数から考えて、現在の施設では少い(総合グラウンド1. 体育館1. テニスコート6. 武道場1.)
 - 3) 学生数、使用状況からみて施設は充分でないが、良いと思う
 - 4) サークル・部活動のため、一般学生は殆んど使えないし、使いにくい
 - 5) 施設が整備されたら、自分より運動する機会があるし、意欲もでてくる
 - 6) 体育施設を使用する手続きがわからないので、使わないことが多い
- (2) 体育用具について考えていることがあったら○をつけて下さい。(重複回答可)
 - 1) 体育用具を借りる場合どこで、どう借りるのか知らない
 - 2) 体育用具貸出し業務は、体育会などを作って学生組織にしたほうがよい
 - 3) 貸出し用具は質・量とも現状で充分である
 - 4) 貸出し用具は質量とも充分ではなく、種類も少い
 - 5) 貸出し用具は充分でないので、個人で買って持っている
 - 6) 体育用具は全然持っていない
 - 7) 貸出し用具窓口サービスが改善されたらもっと利用したい

VII 食事・嗜好飲料・飲酒・喫煙について答えて下さい

- (1) 該当する欄に○をつけて下さい。
- (2) 喫食方法について該当するものに○をつけて下さい。
- (3) 補食について平均日に一度以上補食している方は該当する欄に○をつけて下さい。
- (4) 嗜好・飲酒・喫煙について該当するものに○をつけて下さい。

《嗜 好》

《飲 酒》

《喫 煙》

- (5) 睡眠について該当するものに○をつけて下さい。
 - 1) 睡 眠 時 間
 - 2) 就 寝 時 刻
 - 3) 睡 眠

★調査にご協力誠にありがとうございました★

教官学術研究発表集録

文 科 編

(昭和55. 4 . 1 ～56. 3 .31)

保健管理センター

清水 信介 ある男子学生のエンカウンター・グループ体験 室蘭工業大学保健
管理業績報告No.9 1981. 3

外 国 語

谷村淳次郎 Faulkner の黒人観 北海道英語英文学
XXV 1980. 6 .30

CONTENTS

Nov., 1981

Vol. 10, No. 3

Whole No. 31

A Study on Liberty	Masao Shiraishi 3 (1)	225
On Determiners Attached to Nouns Preceding 'that' Clauses and the Form of Those Nouns	Takeshi Higashi 3 (29)	253
A Study of <i>Romeo and Juliet</i>	Rikyu Kono 3 (30)	331
A Study of Blake's <i>The Gates of Paradise</i>	Rikyu Kono 3 (39)	363
A Study of Relation between Matters Connected with Health and Physical Strength or Athletic Ability Including Changes according to Yearly Process —With Special Reference to the Students of Muroran Institute of Technology—	Ichiji Seino, Hidetoshi Konari, and Koji Taniguchi 3 (79)	403
Other Achievements Studien for 1980 by Professors in this Institute		3 (47)

昭和 56 年 11 月 20 日 印 刷
昭和 56 年 11 月 30 日 発 行 (非売品)

編 集 兼
発 行 者 室 蘭 工 業 大 学

印 刷 所 協業
組合 高速印刷センター

営業所／札幌市中央区北 4 条西 3 丁目
北洋相銀ビル 6 F
TEL 271-5101(代)
工 場／札幌市西区手稲稲穂 472
TEL 682-1325

